秋田県文化財調査報告書第355集

柴　内　館　跡

――主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書――

２００３・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

秋田県文化財調査報告書第355集

柴内館跡

２００３・３　秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂(しろざか)遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

柴内館跡
（しばないだてあと）

――主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書――

２００３・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に先立って、平成12年度と同13年度に鹿角市で実施した柴内館跡の調査成果をまとめたものであります。調査では、平安時代の竪穴住居跡や中世の建物跡などが見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになっております。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力をいただきました秋田県鹿角建設事務所、鹿角市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　　清

例　　言

1．本報告書は、主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本報告書は、平成12・13(2000・2001)年度に調査された鹿角市に所在する柴内館跡の調査成果を収めたものである。

3．調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4．本報告書の草稿執筆は、第１章、第２章、第３章第１節、第４章第３節、第６章を栗澤光男、第４章第２節１の(１)～(４)を小島朋夏、第４章第２節１の(５)～(９)を眞井田宏彰、第３章第２・３節、第４章第１節、第２節２・５を伊藤一彦、第４章第２節３・４を藤原有希が行った。また、編集は伊藤と眞井田の協力を得て栗澤が行った。

5．第５章「自然科学的分析」のうち第１節はパリノ・サーヴェイ株式会社、第２節は東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座、第３節は株式会社吉田生物研究所に分析を委託した成果報告である。

6．出土した江戸時代人骨８体分のクリーニングと固定・接合を東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座に委託した。

7．出土した金属製品の一部は、保存処理を株式会社東都文化財保存研究所に委託した。

8．出土した木製品の一部は、保存処理を株式会社吉田生物研究所に委託した。

9．遺構実測図の一部のトレースおよび遺構配置図については、有限会社アイテックスに委託した。

10．本報告書に掲載した遺物図版の一部は、金子写真館に撮影を委託した。

11．本報告書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。

12．本報告書に使用した地形図は、国土地理院発行の５万分の１『花輪』・『田山』、秋田県鹿角建設事務所提供の１千分の１工事計画図、株式会社シン技術コンサルに委託した空中写真測量図である。

13．遺跡基本層序と遺構土層中の土色、遺物の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2001年版によった。

14．本報告書を作成するにあたり、以下の方々から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。(順不同、敬称略)

安村二郎、秋元信夫、藤井安正、藤沼邦彦、関根達人、葛西勵、工藤清泰、佐々木浩一
佐藤智生、高島成侑、羽柴直人、八重樫忠郎、平澤毅

凡　　例

1．本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は国家座標第Ｘ系による座標北を示す。柴内館跡のグリッド杭座標原点ＭＡ50（Ｘ＝23320.284、Ｙ＝－2086.473）とした位置における座標北と磁北との偏角は西偏７°30′である。

2．遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＩ・・・竪穴住居跡	ＳＫＩ・・・竪穴状遺構	ＳＢ・・・掘立柱建物跡
ＳＡ・・・柱穴列	ＳＫＰ・・・柱穴様ピット	ＳＤ・・・溝跡
ＳＮ・・・焼土遺構	ＳＳ・・・製鉄遺構	ＳＫ・・・土坑
ＳＫＴ・・・陥し穴	ＳＫＦ・・・フラスコ状土坑	ＳＫＳ・・・土坑墓
ＳＸ・・・その他の遺構		

なお、遺構図面中に記したＰは竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、柱穴列に伴うピットを示しＲＰは土器片、Ｓは礫を示している。

3．掘立柱建物跡、柱穴列などの挿図中に（Ｐ１）などとカッコ書きとしたものは、現地で確認できなかった柱推定箇所である。

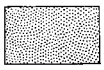
4．挿図中の須恵器断面は、土師器と区別するため黒く塗りつぶした。

5．各区の基本層序にはローマ数字を、各遺構の堆積土には算用数字を使用した。

6．挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず通し番号を付した。

7．挿図中に使用した主なスクリーントーンは以下のとおりであり、このほかについては個々に挿図中に示した。

焼土


柱痕

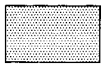
炭化物

遺物（煤状炭化物）

遺物（内黒）

遺物（釉）

遺物（敲打痕）


遺物（磨面）

遺物（割りピンに付いている薄い金属部分）

目　　次

序
例言・凡例
目次
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
第２章　遺跡の環境 …… 3
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３節　発掘調査の概要 …… 8
　第１節　遺跡の概観 …… 8
　第２節　調査の方法 …… 8
　第３節　調査の経過 …… 11
第４章　調査の記録 …… 16
　第１節　基本層序 …… 16
　第２節　検出遺構と遺物 …… 16
　　１．Ａ区の検出遺構と遺物 …… 18
　　２．Ｂ区の検出遺構と遺物 …… 73
　　３．Ｃ区の検出遺構と遺物 …… 88
　　４．Ｄ区の検出遺構と遺物 …… 101
　　５．Ｅ区について …… 126
　第３節　遺構外出土遺物 …… 126
　　１．Ａ区の遺構外出土遺物 …… 126
　　２．Ｂ区の遺構外出土遺物 …… 127
　　３．Ｃ区の遺構外出土遺物 …… 128
　　４．Ｄ区の遺構外出土遺物 …… 128
第５章　自然科学的分析 …… 132
　第１節　柴内館跡から出土した木材の樹種 …… 132
　第２節　秋田県鹿角市柴内館跡出土の近世人骨について …… 135
　第３節　秋田県柴内館跡出土木製品の樹種調査結果 …… 143
第６章　まとめ …… 145
図版
報告書抄録
付図

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

十二所花輪大湯線は、地域住民が利用する生活道路であるとともに、鹿角郡市北部の観光地(小坂町、大湯温泉、大湯環状列石など)と、南部の観光地(尾去沢、八幡平など)を結ぶ路線で、大館市沢尻を起点とし、鹿角市尾去沢を経由して鹿角市中心部を通り、同市大湯の国道103号に接続する全長29.504㎞の主要地方道である。

平成７年度の道路網計画では、十二所花輪大湯線は国道282号と国道103号の混雑時における交通渋滞の緩和を支援する路線であり、鹿角市花輪と大湯間を結ぶ地域の一体化を促進する上で重要な路線として取り上げられた。そのため秋田県鹿角建設事務所では、現道隘路の解消を図り、各路線との連絡強化、周遊ルートの確立を目的とした道路整備を計画した。この計画区間は、鹿角市中心部を通る国道282号より鹿角市大湯までの国道103号に向かう途中の区間で、鹿角市花輪乳牛地内の乳牛橋を起点とし、改良済みの市役所東町交差点までの約1.7㎞の区間である。

なお、計画路線内には、埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って秋田県鹿角建設事務所より、文化財保護法に基づいて、埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、計画路線内の分布調査を実施し、路線内に係る埋蔵文化財包蔵地および包蔵地と推定される地区については、今後確認調査が必要であることと、確認調査の結果記録保存の必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施すべきことを回答した。

平成12(2000)年度に柴内館跡の確認調査を行った結果、遺跡の一部が路線内に及んでいることが判明したため、事業計画の関連から同年度の10月25日～11月22日と、翌平成13(2001)年度５月17日～10月26日の２回にわたって発掘調査を実施した。

第２節　調査要項

遺　跡　名	柴内館跡(しばないだてあと)(遺跡番号　１ＳＮＤ)
遺跡所在地	秋田県鹿角市花輪字乳牛平100－２外
調査期間	平成12年10月25日～11月22日
	平成13年５月17日～10月26日
調査面積	15,000㎡(平成12年度：1,000㎡、平成13年度：14,000㎡)
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	
平成12年度	牧野　賢美(秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室　学芸主事)
	小林　稔幸(秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室　学芸主事)
	土田　　宏(秋田県埋蔵文化財センター調査課第三科　非常勤職員)

佐々木克也(秋田県埋蔵文化財センター調査課第三科　非常勤職員)
菅原　廣也(秋田県埋蔵文化財センター調査課第三科　非常勤職員)
平成13年度　栗澤　光男(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　文化財主査)
藤原　有希(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　文化財主事)
小島　朋夏(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　文化財主事)
伊藤　一彦(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　非常勤職員)
武田　　洋(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　非常勤職員)
三浦　　悟(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　非常勤職員)
伊藤　　譲(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査班　非常勤職員)

総務担当者
平成12年度　嶋田　敏輝(秋田県埋蔵文化財センター秋田北分室　主査)
平成13年度　佐藤　　悟(秋田県埋蔵文化財センター総務課　課長)
佐々木敬隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)
成田　　誠(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)
平成14年度　佐藤　　悟(秋田県埋蔵文化財センター総務課　課長)
高橋　　修(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任)
成田　　誠(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)

調査協力機関　秋田県鹿角建設事務所　鹿角市教育委員会

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

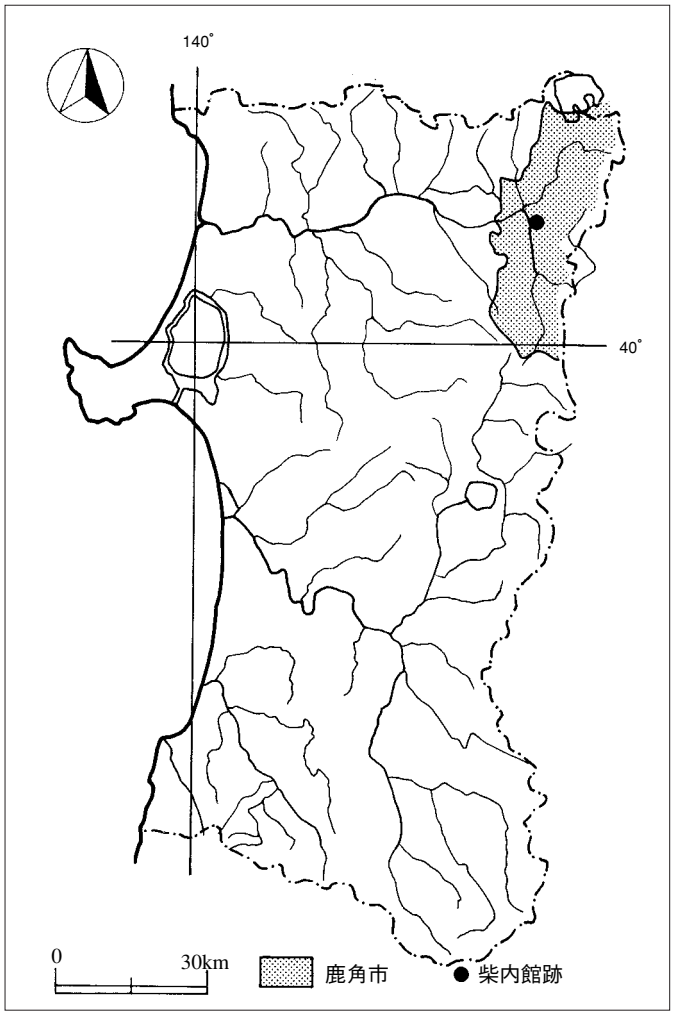
柴内館跡が所在する鹿角市は、秋田県の北東端にあたる。市域は、北を青森県上北郡十和田町、東を青森県三戸郡新郷村・三戸町・田子町と岩手県二戸郡安代町、南を秋田県仙北郡田沢湖町、西を秋田県鹿角郡小坂町・大館市・北秋田郡比内町と森吉町に接しており、その面積は707.12㎢で、秋田県内第１位の広さである。

柴内館跡は、鹿角市街地北東の柴平地区に所在し、ＪＲ東日本花輪線陸中花輪駅の北東約3.4㎞、北緯40度12分45秒、東経140度48分38秒に位置している(第１図)。

遺跡周辺の地形は、鹿角盆地を囲む山地、盆地内に分布する段丘(台地)、盆地を流れる河川沿いに広がる沖積低地からなっている。鹿角盆地は断層によって地盤が陥没した地溝盆地で、南北に細長い地形を成している。その東側には、諸助山(標高768.6m)、中岳(標高1,024.2m)、四角岳(標高1,003m)、二ツ森(標高739.9m)、独鈷森(標高836m)、五ノ宮嶽(標高1,115m)、鳥谷沢頭(標高869m)などの壮年期の急峻な山々が連なっている。西側は、茂谷山(標高361.9m)、土筆森(標高263m)、大森山(標高536m)、三ノ岳(標高618m)、鉄鉢森(標高581.1m)など東側の山地よりなだらかな山々である。

また、盆地の西側山地の裾に沿って北流する米代川は、奥羽山脈中の四角岳に源を発して、風光明媚な湯瀬渓谷を縫うように西流したあと、八幡平から流れてきた熊沢川や夜明島川、五ノ宮嶽から流れてきた歌内川、浦志内川と合流しながら北流し、花輪・柴平地区で福士川、乳牛川、不動川、間瀬川、草木川と、毛馬内地区で大湯川、小坂川と合流したのち、流れを再び西に方角を変えて、日本海に向かって流れ下る。

これらの水系および盆地周縁には、数段の段丘がつくられている。この段丘形成は、①隆起する脊梁山地からの莫大な砂礫の供給による段丘の形成。②十和田火山による大量の軽石流の流入。③現在の河川による浸食と砂礫の供給によるとされている。段丘面は、盆地の北部～中部で鳥越段



第１図　遺跡位置図

丘、関上段丘、中間段丘、毛馬内段丘の４段丘に区分され、盆地の南部で高位段丘、中位段丘、鳥越段丘、関上段丘、松館段丘、大里段丘の６段丘に区分される。

沖積層は、米代川、大湯川、小坂川とこれらの各支流沿いに、礫・砂・粘土などの堆積作用が現在も進行中である。特に盆地と脊梁部との接点にあたる菩提野付近では、扇状地堆積物が鳥越段丘を覆っており、脊梁部が現在も絶えず上昇を続けながら堆積物を供給していることを示している。

段丘と沖積低地との比高は20～40ｍで、断崖は軽石質火山礫・火山灰層特有の切り立った状況を呈する。軽石質火山礫・火山灰層の段丘は浸食を受けやすく、長期に亘り段丘上の雨水を集めた流水により、縁辺に小さな谷が多数出現する。谷と谷に挟まれた部分は、半島状あるいは、舌状台地状に低地に突き出している。

柴内館跡は、鹿角盆地の東側山地に源を発する不動川左岸に形成された、北西向きの舌状台地に立地している。この台地の標高は150ｍ～160ｍほどであり、その北および西側下方の沖積低地との比高は約20ｍである。また、遺跡が占地する台地は関上段丘面にあたる。

第２節　歴史的環境

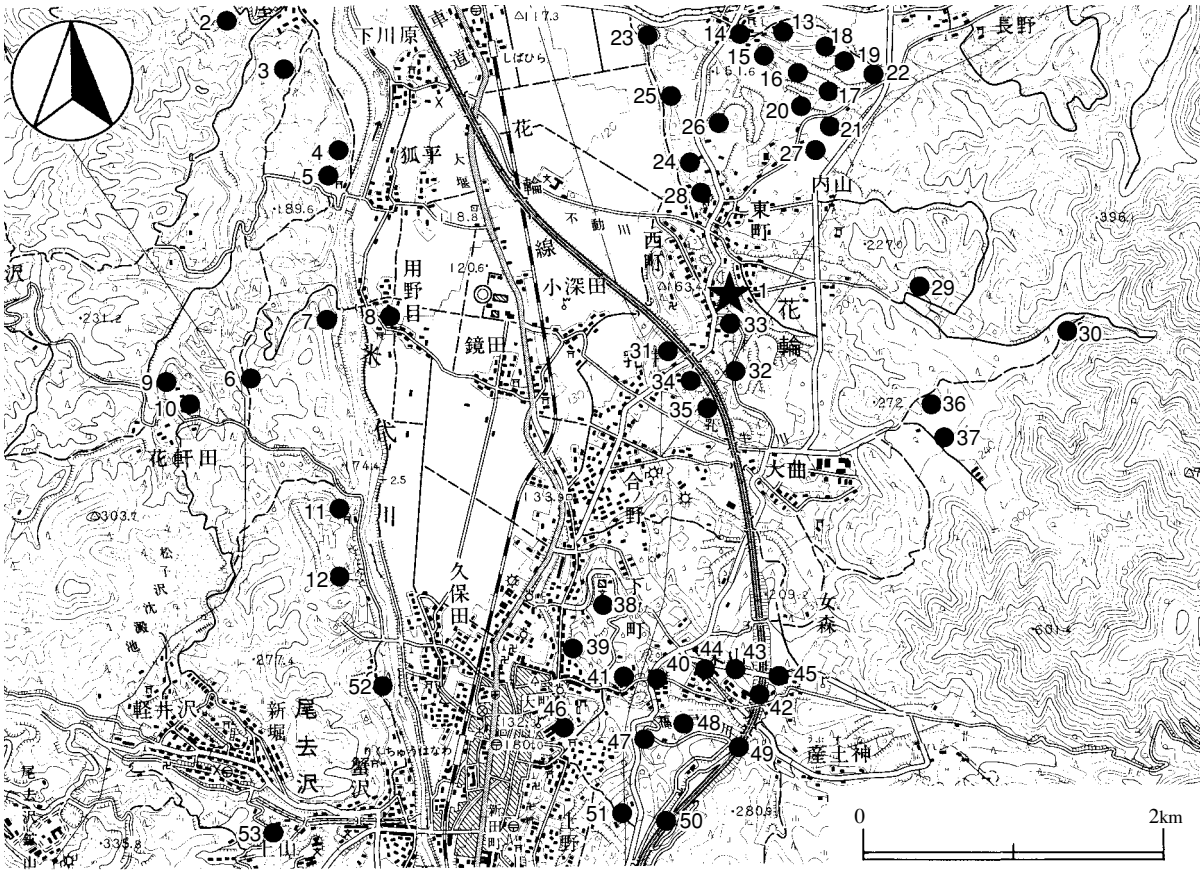
鹿角市は、奥羽の山懐に抱かれ、十和田八幡平国立公園、景勝地十和田湖と八幡平を有する、自然豊かな環境に恵まれたところであり、縄文時代早期から中・近世までの遺跡も416箇所で確認されている。これらの遺跡は、主に盆地周縁の段丘上に分布している。

第２図の柴内館跡と周辺遺跡位置図の図幅は、鹿角市のほぼ中心部に位置する南北5.75㎞・東西８㎞の地域である。ここでは、本地域の古代・中世に関連する遺跡を中心に歴史的環境を概観する。

米代川の上流域に開けた鹿角地方の行政区は、現在、鹿角市と鹿角郡小坂町の１市１町である。この鹿角が正史上に登場するのは、『日本三代実録』元慶２(878)年７月10日条に「屯秋田河南。拒賊於河北。又秋田城下賊地者。上津野。」と記されたのが初見である。元慶２年に夷俘が秋田城を焼き払い、中央政府に反旗を翻した、所謂元慶の乱に加わった12カ村のうち、米代川流域にその拠点をもつ５カ村の一つが上津野であり、鎮守将軍小野朝臣春風が秋田城救援のため陸奥国から赴いた際に、まず上津野に入って教喩し、乱を収束している。この頃から鹿角は、陸奥と出羽両地域を連絡する交通路として重要視されるようになったと思われる。

また、鹿角(上津野)地方は、狭布、紫根などの生産地として知られるが、安村二郎氏は、古代貴族たちがこの特殊所出物を所当官物として組織的に徴収できるように郡を立てて、郡司にその調達納入を担当させ、狭布『毛布の細布』の所当布指定郡として鹿角郡が建郡されたのではないかと推定している。そしてその時期については、『吾妻鏡』文治５年９月３日の条に、鹿角と隣り合う東の糠部郡と西の比内郡が記載されていることから、単一の生活ブロックである鹿角にも単一の郡が建てられていたであろうとして、12世紀の初め頃でなかったかと推定している。

こうした歴史背景のもとで営まれた古代(奈良・平安時代)の遺跡としては、古墳(墳丘墓)、集落跡などがある。古墳(墳丘墓)としては、県内で唯一墳丘が残っている尾去地区の三光塚古墳や、多くの勾玉などの玉類が出土した枯草坂古墳がある。なお、県内の古墳は、奈良時代になってから造られたものであり、現在のところ古墳時代(３世紀から７世紀)に築造された古墳は発見されていない。集落



第２図　柴内館跡と周辺遺跡位置図

番号	周知№	遺跡名	時代	番号	周知№	遺跡名	時代
1	285	柴内館	中世(館跡)	28	284	地羅野館	古代・中世(館跡)
2	205	太田谷地館	縄文・弥生・古代	29	286	宮ノ平Ⅰ	縄文(後～晩期)・古代
3	206	高屋館	縄文(後期)・古代(平安)・中世(館跡)	30	288	不動沢	縄文・古代
4	207	花輪茶臼館	中世(館跡)	31	293	下乳牛	縄文・古代
5	209	女平Ⅱ	縄文(前～中期)・古代	32	294	深沢Ⅰ	古代
6	214	用野目川向Ⅲ	縄文・古代	33	295	深沢Ⅱ	縄文・古代
7	215	用野目川向Ⅳ	縄文(後期)・古代	34	297	乳牛館	縄文(前～後期)・古代
8	216	用野目	古代	35	298	妻ノ神館	縄文・古代
9	217	下長根Ⅰ	古代	36	301	大曲Ｂ	古代
10	218	下長根Ⅱ	古代	37	302	苗畑Ⅰ	縄文・古代
11	219	高瀬館	中世(館跡)	38	305	天戸森	縄文(中～後期)・古代
12	220	堪忍沢	古代	39	306	黒土館	中世(館跡)
13	261	高市館	古代・中世(館跡)	40	307	花輪古館	中世(館跡)
14	262	高沢Ⅰ	縄文・古代	41	309	御休堂	縄文・古代
15	263	高沢Ⅱ	縄文・古代	42	313	案内Ⅰ	縄文(後期)・古代
16	264	高沢Ⅲ	縄文・古代	43	315	案内Ⅲ	縄文(後期)・弥生・古代
17	265	高沢Ⅳ	縄文・古代	44	316	案内Ⅳ	縄文(後～晩期)・古代
18	266	餅野Ⅰ	古代	45	317	案内Ⅴ	縄文(前～晩期)・弥生・古代
19	267	餅野Ⅱ	縄文(前～中期)・弥生・古代	46	327	花輪館	中世(館跡)
20	268	餅野Ⅲ	古代	47	328	下沢田	縄文(中～後期)・古代
21	270	餅野Ⅴ	弥生・古代	48	329	孫右ェ門館	中世(館跡)
22	271	餅野Ⅵ	古代	49	330	孫右ェ門館	縄文(後期)・古代
23	273	万谷野館	中世(館跡)	50	331	中の崎Ⅰ	縄文(前～後期)・弥生・古代
24	274	万谷野Ⅰ	古代	51	332	中の崎Ⅱ	縄文・古代
25	275	万谷野Ⅱ	縄文・古代	52	338	かいぬま館	中世(館跡)
26	279	観音平Ⅰ	古代	53	339	茶臼館	中世(館跡)
27	283	平中	縄文・古代				

第１表　柴内館跡周辺の遺跡一覧

跡は、竪穴住居跡が検出された平安時代の地羅野館(28)、下乳牛遺跡(31)、花輪古館(40)、御休堂遺跡(41)、案内Ⅰ遺跡(42)、案内Ⅲ遺跡(43)、下沢田遺跡(47)、孫右ェ衛門館(49)、中の崎Ⅰ遺跡(50)などがあり、柴内館が立地する鹿角盆地東縁の段丘に分布している。これらの他に、天戸森遺跡(38)などが調査されている。これに対峙する盆地西縁の太田谷地館(２)、用野目川向Ⅲ遺跡(６)、堪忍沢遺跡(12)などからも竪穴住居跡が検出されている。太田谷地館の調査では、この地方に顕著にみられる十和田火山(今の十和田湖)を噴出源とする十和田ａ火山灰(大湯浮石)や、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)と中華人民共和国との国境にある白頭山を噴出源とする白頭山・苫小牧火山灰を平安時代の竪穴住居跡の覆土下部から検出し、遺構の時期決定に大きな役割を果たした。同遺跡では、竪穴住居跡56軒、空堀３条などが検出され、平安時代末葉の「集落堡塞的」館と判明した。堪忍沢遺跡の調査では、製鉄操業に関連する遺構13基、竪穴住居跡６軒などが確認され、10世紀中葉から末葉のものと考えられている。

中世に至り、鹿角は文治５(1189)年の奥州合戦後、関東御家人の成田氏、安保氏、奈良氏、秋元氏ら所謂鹿角４氏の支配を受けることになる。彼らが鹿角に入部した時期は鎌倉時代後期とされる。しかし、彼らは所領地を決して安定支配することはできなかった。鎌倉時代末期になると北条得宗体制がほころびをみせ、鎌倉幕府が滅亡するに至る。建武元(1334)年の建武新政を経て、南北朝の争乱へと時代が激しく揺れ動いたことから、鹿角郡内においても大きな変化があったことであろう。室町時代には、本地域は南部氏、浅利氏、安東氏らが抗争を繰り返す舞台となり、戦国時代になると諸氏は事あるごとに争った。こうした中で鹿角４氏は分割譲渡を重ねながらも、地縁的関係を深め一族を通じてその支配地を維持したものと思われる。

中世の遺跡としては、南北に細長い鹿角盆地に密に分布する城館跡がある。 鹿角市内では鹿角４氏につながると思われる館跡がこれまで61箇所で確認されている。県内では今のところ最もその数が多く、それがそのまま当地域の抗争の激しさを物語る。今後の調査でさらにその数は増加すると思われる。これらの城館は、空堀、沢などで区切られた多郭式の平山地形式の館が大半を占め、山城・単郭式のものは少ないようである。第２図図幅内では館跡が16箇所に見られる。米代川右岸には柴内館(１)、地羅野館(28)、乳牛館(34)、妻ノ神館(35)、黒土館(39)、花輪古館(40)、花輪館(46)、孫右エ門館(48)、米代川左岸には太田谷地館(２)、高屋館(３)、花輪茶臼館(４)、高瀬館(11)、高市館(13)、万谷野館(23)、かいぬま館(52)、茶臼館(53)がある。『鹿角市史』によると、鹿角の館跡は、郷村を単位として、一村一館の形態をとり、領主的な権力の象徴というよりは、その郭内に集落を内包した日常生活的な機能をもつものが多かったとみられる、としている。また、近年の考古学的調査の成果からは、行政的要素をもつ館よりも集落堡塞的で軍事的要素を併せ持つ館が多いことが判明した。

引用・参考文献

秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ－猿ヶ平Ⅱ遺跡・室田遺跡・一本杉遺跡・案内Ⅲ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第99集 1983(昭和58)年

秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ－柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第105集 1984(昭和59)年

秋田県教育委員会　『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書－案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第

115集 1984(昭和59)年
秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書ＸＩ－孫右ェ門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡・西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第119集 1984(昭和59)年
秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－堪忍沢遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第152集 1987(昭和62)年
秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－高瀬館跡－』 秋田県文化財調査報告書第153集 1987(昭和62)年
秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－太田谷地館跡－』 秋田県文化財調査報告書第172集 1988(昭和63)年
秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－用野目川向Ⅲ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第182集 1989(平成元)年
秋田県教育委員会 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－太田谷地館跡第２次調査－』 秋田県文化財調査報告書第183集 1989(平成元)年
秋田県教育委員会 『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－天戸森遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第248集 1994(平成６)年
秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(鹿角地区版)』 2000(平成12)年
秋田県教育センター 『秋田県郷土教育資料歴史編　秋田のあゆみ』 1977(昭和52)年
鹿角市 『鹿角市史』 第一巻 1982(昭和57)年
鹿角市教育委員会 『御休堂遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料19 1981(昭和56)年
鹿角市教育委員会 『花輪館跡試掘調査報告書　下沢田遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料27 1984(昭和59)年
鹿角市教育委員会 『鹿角の館　館跡航空写真測量調査報告書(５)　小平館・万谷野館・高市館・地羅　野館・柴内館・黒土館・一ッ森館・花輪古館』 鹿角市文化財調査資料30 1986(昭和61)年
鹿角市教育委員会 『花輪館跡試掘調査報告書(２)』 鹿角市文化財調査資料34 1988(昭和63)年
鹿角市教育委員会 『地羅野館跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料47 1993(平成５)年
鹿角市教育委員会 『花輪古館跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料51 1994(平成６)年
鹿角市教育委員会 『黒土館跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料57 1996(平成８)年
鹿角市教育委員会 『黒土館跡発掘調査報告書(２)』 鹿角市文化財調査資料59 1997(平成９)年
鹿角市教育委員会 『黒土館跡発掘調査報告書(３)』 鹿角市文化財調査資料62 1998(平成10)年
鹿角市教育委員会 『黒土館跡発掘調査報告書(４)』 鹿角市文化財調査資料64 1999(平成11)年
黒板勝美・國史大系編集會 『日本三代実録 後編』 1974(昭和49)年 吉川弘文館

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

柴内館跡は、不動川左岸の舌状台地を利用して構築された中世館跡とされている。『鹿角の館』によると、台地先端の北側から空堀や沢により７つに区画(第Ⅰ～Ⅶ郭)されている。Ⅵ郭には２つの郭が付属しており、９つの郭(第３図)がほぼ北西－南東方向に並ぶ多郭連続式の館跡である。各郭は、県道66号(主要地方道十二所花輪大湯線)を挟んでその北側に第Ⅰ～Ⅲ郭、南側に第Ⅳ～Ⅶ郭が位置し、第Ⅰ～Ⅳ郭には旧名が残り、第Ⅰ郭から順に下モ館、北館、本館、南館と呼ばれている。柴内館跡の範囲は、北西－南東(長軸方向)1,800m、北東－南西(短軸方向)500mと推定されており、工事に伴い調査対象となった箇所は、第Ⅶ郭の東側および南側の台地部分であり、柴内館跡の南東～南西部にあたる。

調査区は北東から南西にかけて弧状を呈しており、遺跡西縁から入り込む開析谷などによって分断されている。このため調査区を地形や調査工程の関係から、北東部から南西部までをＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区、南部をＥ区として５区に分けた(第４図)。これらの現況はＡ区が畑地、Ｂ区～Ｄ区が杉林、Ｅ区が団体営農道西町大曲線(以下、団体営農道と記す)の道路部分で、ほぼ平坦な地形を呈している。Ａ区の北東側は急峻な斜面となって、下方の狭小な谷底平野に作られた水田面(標高151.6m)に繋がっており、南西側には団体営農道を挟んでＢ区が隣接する。このＢ区は第Ⅶ郭が立地する舌状台地の付け根部分にあり、さらにその南西にＣ区とＤ区が位置する。Ｂ区とＣ区の間には幅12～14m、深さ10.6mの開析谷があり、現在も調査区外南側からの湧水が流れている。Ｃ区は西側に突出した舌状台地で、Ｄ区とは解析谷で隔てられている。調査区の最南西部に位置するＤ区の南西側は、急斜面であり、その下方は県道66号の路肩に至る。Ｅ区はＡ区南側の現道路部分である。

また、Ａ区とＢ区および第Ⅶ郭は、団体営農道で分離しているが、本来は第Ⅶ郭と繋がっていた同一台地面である。

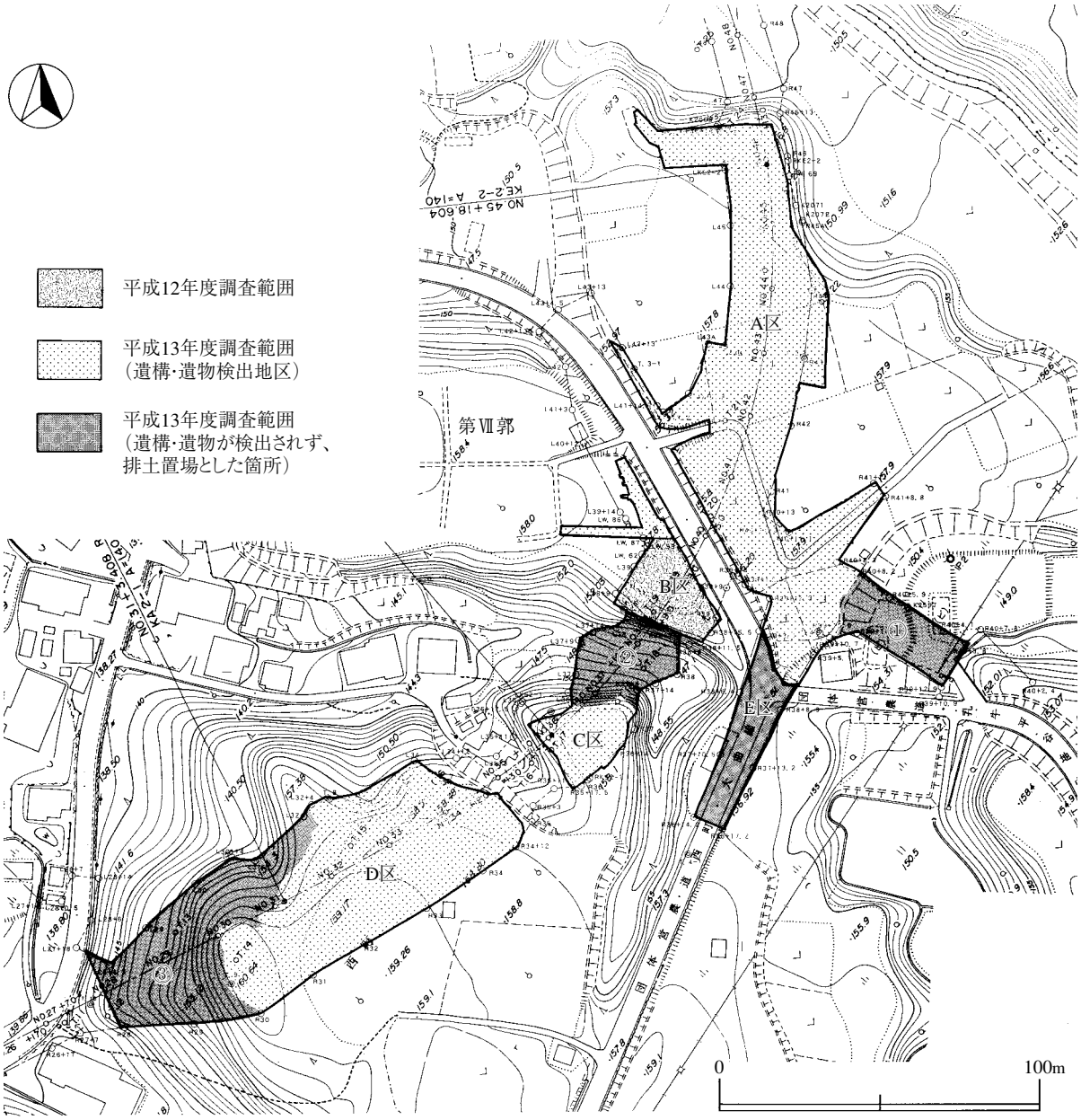
なお、遺跡北側の不動川を挟んで対岸の台地には地羅野館、南西には乳牛館・妻ノ神館が所在する。鹿角市の中心街である花輪地区から北の大湯方面に通じる県道66号沿いに鹿角の中世城館が密集しており、古来から主要な交通路であったことが推定される。柴内館跡も同様にこの沿線に立地している。

第２節　調査の方法

調査では、調査区外に排土場所を確保できず、調査区内にその場所を求めざるを得なかったため、遺構・遺物を確認できなかったＡ区南東斜面下の水田①、Ｂ区とＣ区を隔てる開析谷の部分②、Ｄ区南西斜面③を排土場所とした(第４図)。

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の１点(国家座標第Ｘ系：Ｘ＝23320.284、Ｙ＝－2086.473)を選定し、これをグリッド原点ＭＡ50とし、この原点から座標北方向に基準線を設けて、これに直交する４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。また、グリッド杭には東か

第３図　柴内館現況図

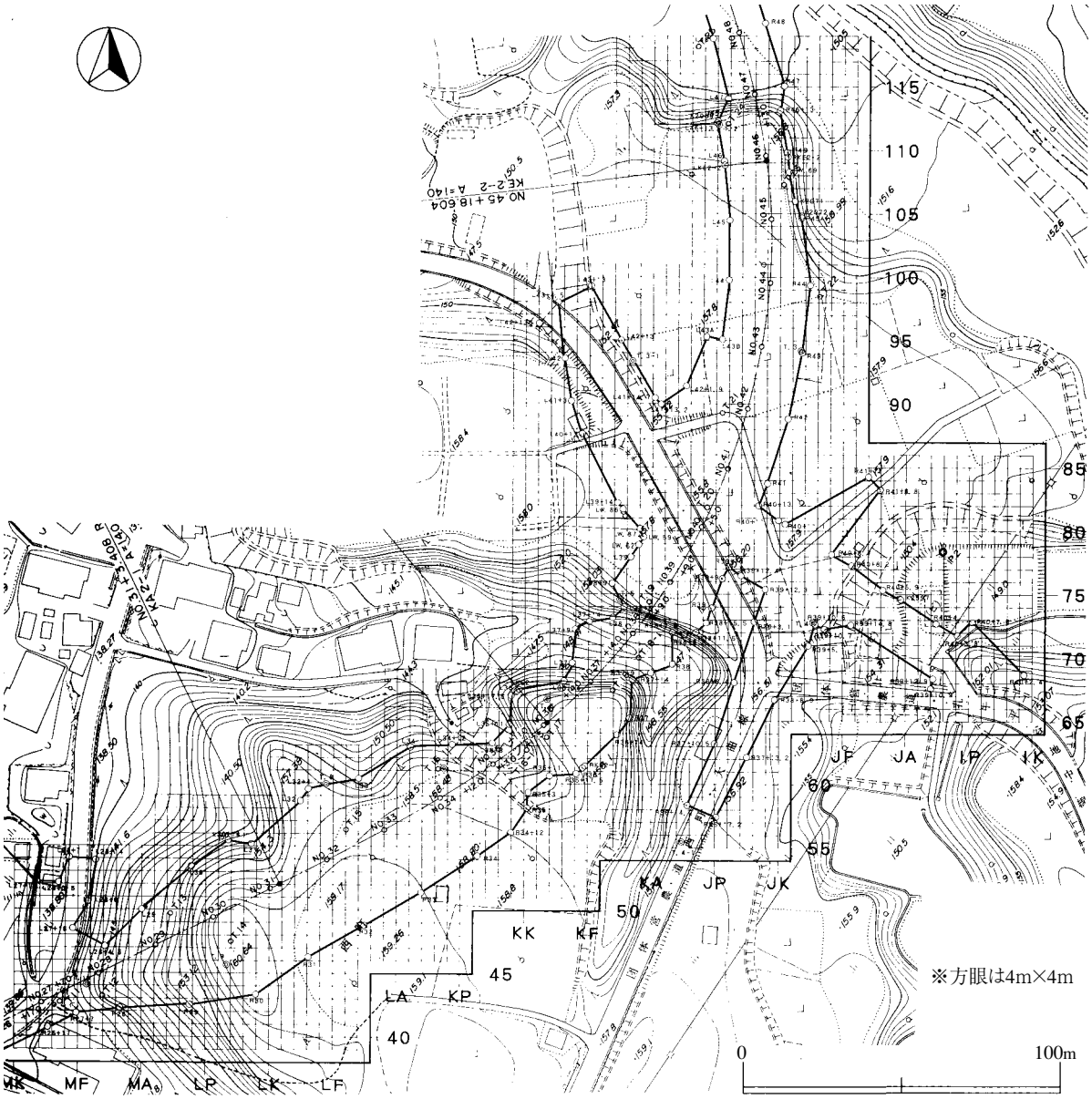


第４図　調査区及び周辺地形図

ら西に向かって東西方向を表すＪＡ・・・ＭＡ等のアルファベットと、南から北に向かって南北方向を表す40・41・・・110等の数字を組み合わせた記号を記入し、４ｍ×４ｍの南東端の方眼杭をグリッドの名称とした。

調査の記録は、平面図・断面図および写真によった。平面図・断面図の縮尺は１/20を原則としたが、遺構の細部図面を必要とする際には１/10で記録した。また、竪穴状遺構、堀跡、溝跡などの遺構配置図は、迅速化と省力化を図るためトータルステーションで記録した。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。写真撮影は、35㎜のモノクロとリバーサルおよびカラーフィルムを主に使用し、必要に応じて６×4.5㎜のモノクロ、リバーサルフィルムも使用した。



第５図　グリッドの設定図

第３節　調査の経過

発掘調査は、平成12年と平成13年の２箇年にわたって実施した。従って調査の経過の記述は、年度毎に行う。

平成12年度

【第１週】10月25日～10月27日

25日午前、作業員に作業の実際を説明し、器材の搬入・調査区東部の粗掘り・南西部の遺構確認作業を開始した。竪穴住居跡（ＳＩ03）・土坑等のプラン数カ所を確認し精査を行った。並行して、水準測量及び方眼杭打設作業が行われた。

【第２週】10月30日～11月２日

調査区の東・西側の粗堀り、調査区の南西部の遺構精査を行った。新たに竪穴状遺構・焼土遺構と思

われるプランを確認し、精査を行った。また２日からトータルステーションによる遺構計測作業を行った。寒さのため、体調を崩す作業員が多く見られた。

【第３週】11月６日～11月10日

先週に引き続き竪穴住居跡を中心に検出した土坑等の遺構の調査を進めた。８日には遺跡全体を精査し、全景写真撮影を行った。 また、ＳＫ14の北側に大きなプランを確認した。

【第４週】11月13日～11月17日

検出した遺構の精査を進めるとともに、重機によって排土の移動と調査区北側の表土除去を行い、粗堀り・遺構確認作業を行った。先週検出した大きなプランには、竪穴状遺構を含む複数の遺構が重複していることを確認した。17日、南側調査区曲輪部分のトレンチの土留め、確認調査時のトレンチの埋め戻し作業を行った。

【第５週】11月20日～11月22日

ＳＫＩ15・24、ＳＳ09の調査を中心に行い、並行して撤収のための準備作業を開始した。20日は東側調査区の溝跡(農道)の掘り下げを重機によって行い、また北側調査区の全景写真撮影を行った。22日、全検出遺構の精査を終え、午後には発掘器材をセンターに輸送し、この日で平成12年度の調査の全工程を終了した。

平成13年度

【第１週】５月17日～５月18日

17日午前、防除組合に挨拶。午後、器材の搬入。18日、トイレ・コンテナハウスの整備、昨年度南側調査区、北側調査区北端・東端の遺構確認作業を開始した。

【第２週】５月21日～５月25日

昨年度南側調査区・空堀跡で遺構確認作業、北側調査区・プレハブ東側を重機と人力により表土除去し、また粗堀り・遺構確認作業を行った。昨年度南側調査区では焼土遺構、北側調査区では竪穴住居跡・溝状遺構・土坑、プレハブ東側では竪穴住居跡・土坑・柱穴様ピットを確認し、精査を開始した。

【第３週】５月28日～６月１日

昨年度調査区空堀跡トレンチの精査、北側調査区の重機による表土除去・粗堀り・遺構確認作業を行い、遺構検出後、随時精査を行った。昨年度調査で版築とされたものは、トレンチ調査により自然堆積であって遺構ではないことを確認した。28日、重機・ダンプによる排土搬出を開始した。ベルトコンベアーは29日に搬入、30日に設置、31日に配線を行い、１日には初動確認を行った。

【第４週】６月４日～６月８日

調査の便宜上、今週から北側調査区をＡ区、昨年度南側調査区をＢ区、独立丘陵部をＣ区、今年度南側調査区をＤ区と呼称することとした。Ａ区は検出した遺構の精査、Ｂ区では農道沿いの土手を除去後、遺構確認作業・精査を行った。Ｃ区では遺構確認作業を行い、銭貨１点が出土した。７日、鈴木タキ文化財保護室長、大野憲司副主幹が来跡。また７日からトータルステーションを導入して遺構計測作業を開始した。

【第５週】６月11日～６月14日

先週に引き続き、Ａ・Ｂ・Ｃ区の遺構確認作業・精査を進めた。工事に伴い、Ｄ区の東側の民家と

接する調査区外に防風柵が設置されることとなり、この部分の調査を来週20日から３週間の予定で開始することとなった。

【第６週】６月18日～６月22日

Ａ区は検出した遺構の精査、西側取付道路の粗堀り・遺構確認作業、Ｄ区は昨年度確認調査トレンチの精査を行った。遺構内遺物の取り上げはトータルステーションにより行った。

【第７週】６月25日～６月29日

竪穴住居跡を中心に、Ａ区北側で検出した遺構の精査、Ｄ区防風柵部分は重機による表土除去後、遺構確認作業・精査を行った。Ａ区北側のリンゴ園農道部分以西では遺構の確認がなかったため、26日には同地区の調査を終了し、切り回しの農道を造成した。

【第８週】７月２日～７月６日

先週に引き続き、Ａ区北側とＤ区防風柵の調査を進めるとともに、遺構確認作業を行い、Ｄ区防風柵№９から新たにフラスコ状土坑を確認した。２日、Ａ区東側斜面のトレンチ調査を重機によって行ったが、著しい湧水が確認され、崩落の可能性があったため調査を中止した。掘削部分には安全対策を施した。この斜面からは遺構・遺物が確認されなかったため、写真撮影をし調査を終了した。

【第９週】７月９日～７月13日

Ａ区・Ｄ区の遺構確認作業・精査を行った。Ａ区プレハブ東側では鉄板下にのびていた竪穴住居跡を確認した。10日、Ａ区リンゴ園への農道部分の調査を終了し、この部分を排土置き場として使用。今週、リンゴ園での農薬散布が行われた。人体に有害であるため散布中は休憩棟内で待機することとした。

【第10週】７月16日～７月19日

今週は竪穴住居跡のカマド精査、Ａ区北側西端農道部分とコンテナハウス東側の精査を行った。しかし、週の大半は豪雨と雷のため作業中断を余儀なくされ、調査が滞った。18日、Ａ区北側西端農道部分は精査を終了。

【第11週】７月23日～７月27日

Ａ区の竪穴住居跡、Ｄ区は防風柵№21～29の精査を行った。先々週から続く豪雨のため調査が滞った。27日、遺跡の空中写真撮影を行った。

【第12週】７月30日～８月３日

Ａ区は北側の竪穴住居跡の精査・柱穴様ピットの最終確認作業を行い、ＳＩ450の北側に柱穴列らしきピット群を確認した。Ｃ区は粗堀りと遺構確認作業を行い、粗堀りをほぼ終了。多数の柱穴様ピットの他、方形のプラン３基を確認した。Ｄ区は防風柵№21～29の遺構精査を行った。

【第13週】８月６日～８月10日

Ａ区の竪穴住居跡カマドの精査、Ｃ区の遺構確認作業・精査、Ｄ区防風柵の遺構の精査を行った。９日、盆休みに向けて調査区内の安全対策を行った。Ｄ区防風柵№21～29は精査を終了。

【第14週】８月13日～８月17日

盆のため現場休み。

【第15週】８月20日～８月24日

Ａ区コンテナハウス東側とＣ区で検出した遺構の精査、Ｄ区は重機により表土除去を行った。Ｄ区

の東側ではⅡ層上面での遺構がないことを確認、Ⅱ・Ⅲ層を除去し、Ⅳ層上面での遺構確認作業を行った。22日、Ｄ区防風柵№30・31の掘削を行った。同日、Ａ区東側取付道路の調査を終了。22日午後・23日は台風の影響のため調査を中止した。22・23日に第２回目のコンテナハウスが設置され、23・24日に器材の移動を行った。

【第16週】８月27日～８月31日

Ａ区竪穴住居跡の精査、Ｂ区取付道路の粗堀り、Ｃ区遺構精査、Ｄ区Ⅳ層上面での遺構確認作業・防風柵№30・31の遺構精査を行った。栗澤文化財主査は研修のため天王町へ。30日、午後４時頃から激しい雷雨となったため現場作業を中止した。また、翌31日も朝からの降雨のため作業を中止。31日、調査員のみが現場に出勤し、Ｄ区Ⅳ層上面と防風柵の調査を終了。

【第17週】９月３日～９月７日

Ａ区南側の表土除去・遺構確認作業を行う。地山まで達する攪乱が多く作業は困難であった。竪穴住居跡10数軒、またその周辺には土坑、多数の柱穴様ピットを確認した。Ｂ区取付道路・Ｃ区の遺構精査、Ｄ区東側のⅣ層除去を行った。６日、米代新報の菊池氏が職場体験中の花輪二中の生徒１名を連れて来跡。

【第18週】９月10日～９月14日

Ａ～Ｄ区で検出した遺構の精査を行った。また農道部分を新たにＥ区と呼称することとした。Ｄ区で土坑墓が５基、土坑墓と推定されるものを１基確認した。小島文化財主事は研修のため天王町へ。12日、前日からの台風の影響で作業を中止し、Ａ・Ｄ区の図面作成を行った。14日、Ｄ区東側西半分の調査をすべて終了。

【第19週】９月17日～９月20日

Ａ・Ｃ・Ｄ区で検出した遺構の精査を行った。また、重機とキャリーにより、Ｄ区の排土移動とＤ区西側の表土除去を行った。18日、Ｅ区の現地協議を行った。

【第20週】９月25日～９月28日

Ａ～Ｄ区の遺構確認作業・精査、Ｅ区団体営農道はアスファルト・砂利除去後に精査を行った。Ｄ区東側半分はすべての調査を終了。Ｅ区では遺構・遺物がないことを確認した。また、サブトレンチを設定し調査したところ、谷地の埋没地形であることを確認したため、今後のＥ区における調査は不要とした。28日、鹿角警察署相原和彦警部補が来跡、出土した人骨の確認を行った。

【第21週】10月１日～10月５日

Ａ～Ｄ区で検出した遺構の精査を行った。１日午後と２日は暴風雨のため、現場作業を中止した。３日、重機とキャリーによりＤ区の排土移動。４日、重機でＣ・Ｄ区間の排土転圧を行った。同日、Ｅ区深堀り部分の埋め戻し。４・５日に東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座の瀧川氏と川久保氏が来跡し、Ｄ区の人骨取り上げを行った。５日、Ｂ区取付道路部分はすべての調査を終了。

【第22週】10月９日～10月12日

Ａ・Ｃ・Ｄ区で検出した遺構の精査、Ｂ区取付道路の埋め戻しを行った。

【第23週】10月15日～10月19日

Ａ・Ｃ・Ｄ区で検出した遺構の精査・遺構確認作業、Ｂ区取付道路の埋め戻しを行った。17日、Ｃ区のすべての精査を終了した。Ｄ区、新たに陥し穴４基を確認した。

【第24週】10月22日～10月27日

Ａ区とＤ区で検出した遺構精査を行い、並行して遺跡見学会に向けての準備、また撤収のための準備作業をした。Ａ区では新たに掘立柱建物跡を３軒確認した。26日、発掘器材をセンターに輸送し、この日で作業員の雇用を終え、調査の全行程を終了した。27日、遺跡見学会を開催し、70名が参加した。

引用・参考文献

秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年

鹿角市教育委員会 『鹿角の館　館跡航空写真測量調査報告書(５) 小平館・万谷野館・高市館・地羅野館・柴内館・黒土館・一ッ森館・花輪古館』 鹿角市文化財調査資料30 1986(昭和61)年

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

遺跡の基本層序は、Ａ区についてはＪＣ83グリッドからＪＮ78グリッドまでの調査区中央部の東西ライン、ＪＪ89グリッドからＪＪ90グリッドまでの調査区南部の南北ラインの２ヵ所で確認した。Ｂ区についてはＫＢ81グリッドからＫＢ82グリッドまでの南北ライン、Ｃ区についてはＫＦ64グリッドからＫＦ65グリッドまでの南北ライン、Ｄ区についてはＫＫ56グリッドからＬＣ48グリッドまでの東西ライン、Ｅ区についてはＪＯ63グリッドからＪＱ58グリッドまでの南北ラインで確認した。

各区での層序は以下の通りである(第６図)。

Ａ区……　Ⅰ層：表土、黒色土(10YR2/1)、Ⅱ層：大湯浮石層
Ⅲ層：黒色土(10YR1.7/1)、Ⅳ層：黒褐色土(10YR3/1)
Ⅴ層：地山、黄褐色土(10YR5/8)
以上のうち、遺構確認面はⅢ～Ⅴ層である。
Ⅱ層は部分的にわずかに認められる程度である。

Ｂ区……　Ⅰ層：表土、灰黄褐色土(10YR4/2)、Ⅱ層：黒色土(10YR2/1)
Ⅲ層：黒色土(10YR1.7/1)、Ⅳ層：黒褐色土(10YR2/2)
Ⅴ層：地山、褐色土(10YR4/6)
以上のうち、遺構確認面はⅤ層である。

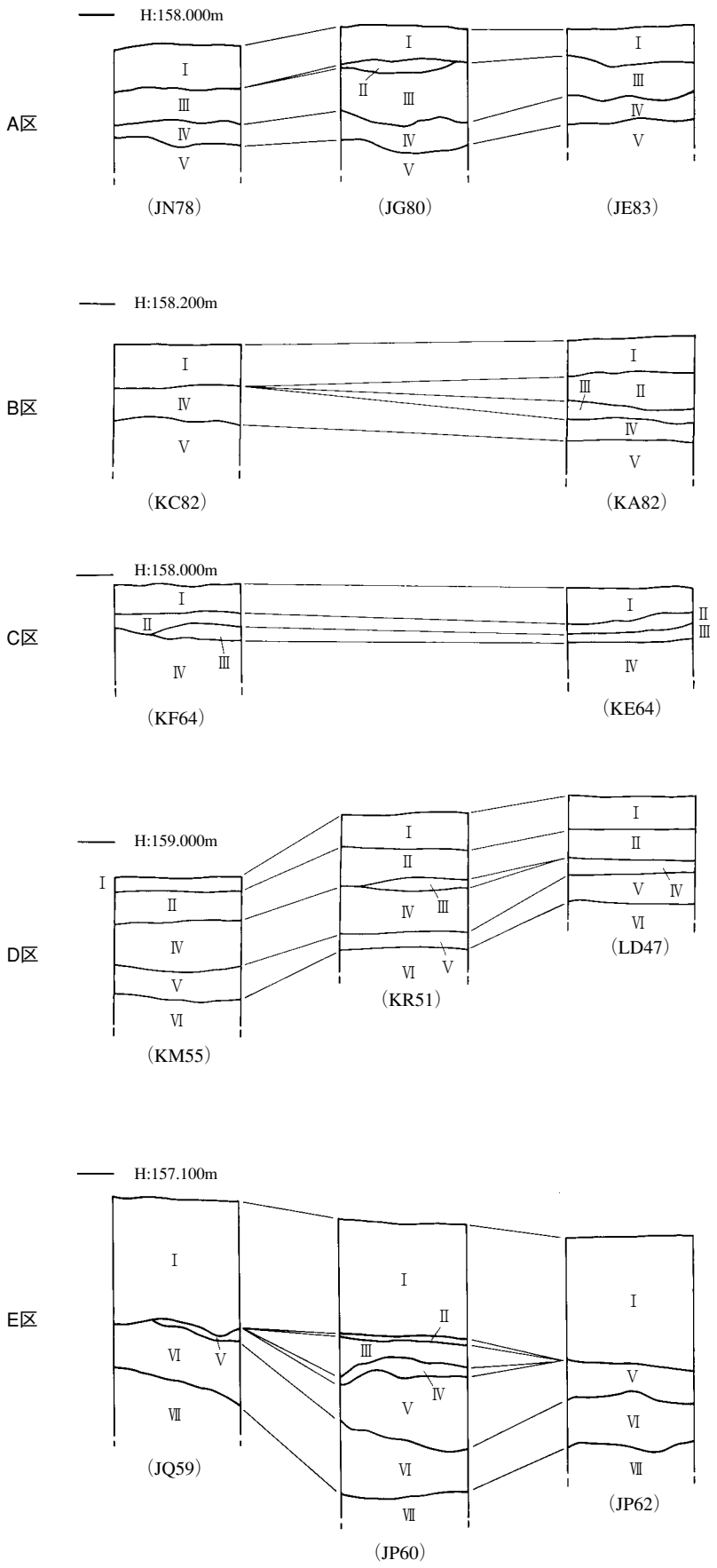
Ｃ区……　Ⅰ層：表土、黒色土(10YR1.7/1)、Ⅱ層：黒色土(10YR2/1)
Ⅲ層：暗褐色土(10YR3/3)、Ⅳ層：地山、黄褐色土(10YR5/6)
以上のうち、遺構確認面はⅣ層である。

Ｄ区……　Ⅰ層：表土、黒色土(10YR2/1)、Ⅱ層：黒色土(7.5YR2/1)
Ⅲ層：大湯浮石層、Ⅳ層：黒色土(7.5YR1.7/1)
Ⅴ層：暗褐色土(10YR3/3)、Ⅵ層：地山、黄褐色土(10YR5/6)
以上のうち、遺構確認面はⅣ～Ⅵ層である。

Ｅ区……　Ⅰ層：表土(現道路基盤)、Ⅱ層：大湯浮石層
Ⅲ層：黒色土(10YR2/1)、Ⅳ層：褐色土(7.5YR4/6)
Ⅴ層：黒色土(10YR1.7/1)、Ⅵ層：黒褐色土(10YR2/3)
Ⅶ層：地山、明黄褐色土(10YR6/8)

第２節　検出遺構と遺物

発掘調査の結果、柴内館跡で検出した遺構は、竪穴住居跡を中心に総数2,321遺構である。また、出土した遺物は、縄文土器、土師器、鉄製品など整理用コンテナで31箱分である。各調査区で検出した遺構の内訳は以下の通りである。



第６図　調査区の基本層序

【Ａ区】　竪穴住居跡・・・・・・・15軒　竪穴状遺構・・・・・・・16軒
掘立柱建物跡・・・・・22棟　柱穴列・・・・・・・・・・・９条
柱穴様ピット・・・・・1,204基　溝跡・・・・・・・・・・・・・４条
焼土遺構・・・・・・・・・１基　土坑・・・・・・・・・・・・・25基
その他の遺構・・・・・１基

【Ｂ区】　竪穴住居跡・・・・・・・１軒　竪穴状遺構・・・・・・・４軒
掘立柱建物跡・・・・・５棟　柱穴様ピット・・・・・172基
溝跡・・・・・・・・・・・・・２条　焼土遺構・・・・・・・・・１基
製鉄遺構・・・・・・・・・１基　土坑・・・・・・・・・・・・・15基
陥し穴・・・・・・・・・・・３基

【Ｃ区】　竪穴状遺構・・・・・・・２軒　掘立柱建物跡・・・・・５棟
柱穴列・・・・・・・・・・・３条　柱穴様ピット・・・・・366基
土坑・・・・・・・・・・・・・５基　陥し穴・・・・・・・・・・・７基

【Ｄ区】　竪穴住居跡・・・・・・・２軒　竪穴状遺構・・・・・・・１軒
掘立柱建物跡・・・・・２棟　柱穴様ピット・・・・・385基
溝跡・・・・・・・・・・・・・２条　土坑・・・・・・・・・・・・・11基
陥し穴・・・・・・・・・・・６基　フラスコ状土坑・・・８基
土坑墓・・・・・・・・・・・14基　その他の遺構・・・・・１基

１．Ａ区の検出遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

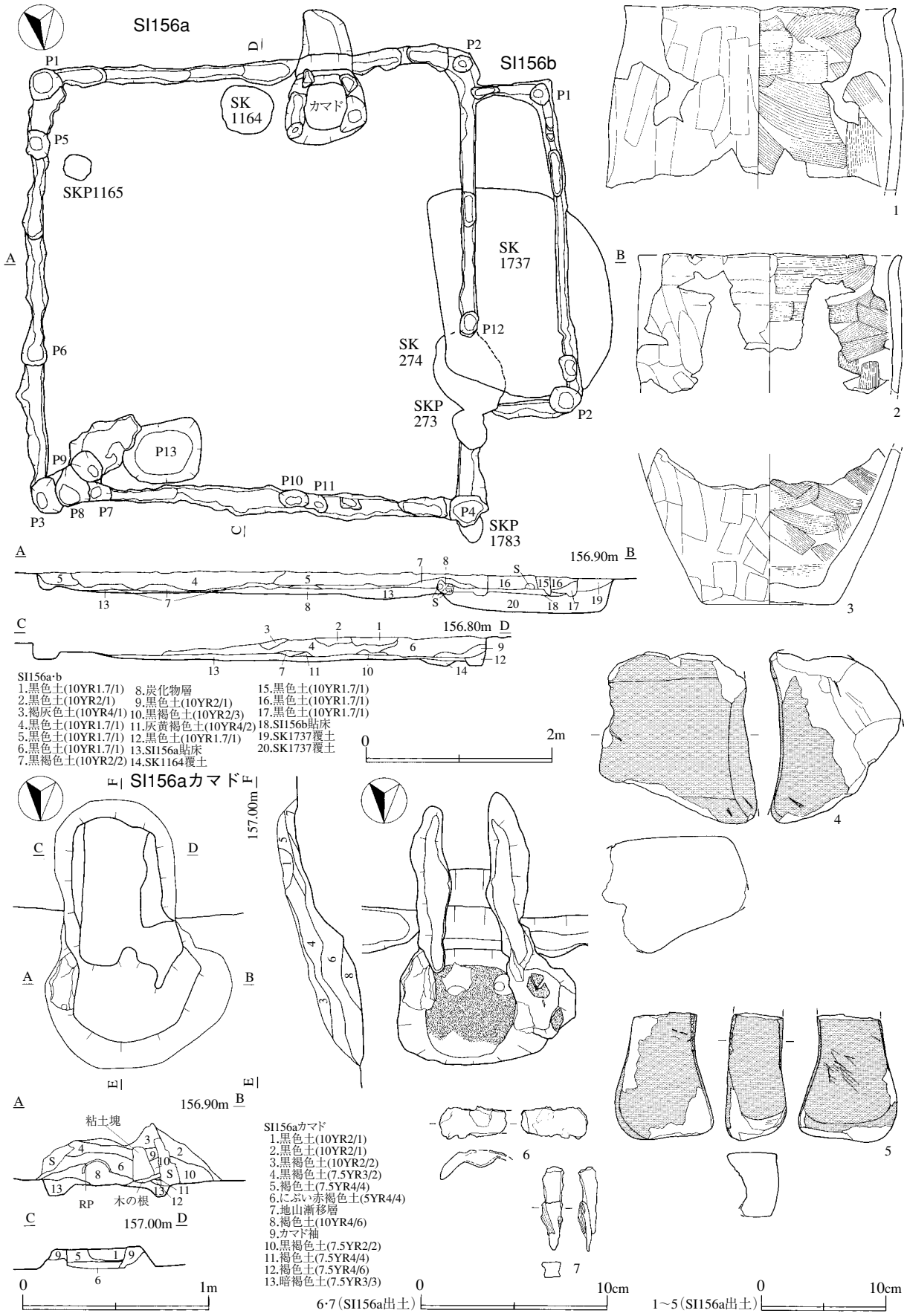
ＳＩ156ａ・ｂ（第７図、図版３）

〈位置・確認状況〉ＪＬ110・111、ＪＭ110・111、ＪＮ110・111グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。攪乱や確認調査トレンチによって、覆土の一部を失っていたが、住居跡の壁は残存していた。当初、張り出しを持つ１軒の住居跡として調査を進めたが、住居床面に達した時点で２軒の住居跡の切り合いを確認した。そのため、新しい方をＳＩ156ａ、古い方をＳＩ156ｂとした。

〈重複関係〉ＳＩ156ａはＳＩ156ｂ、ＳＫ274・1164・1737、ＳＫＰ273・1165・1783と重複する。ＳＩ156ｂ、ＳＫ1164・1737、ＳＫＰ1783より新しく、ＳＫ274、ＳＫＰ273・1165より古い。ＳＩ156ｂはＳＩ156ａ、ＳＫ274・1737と重複する。ＳＫ1737より新しく、ＳＩ156ａ、ＳＫ274より古い。

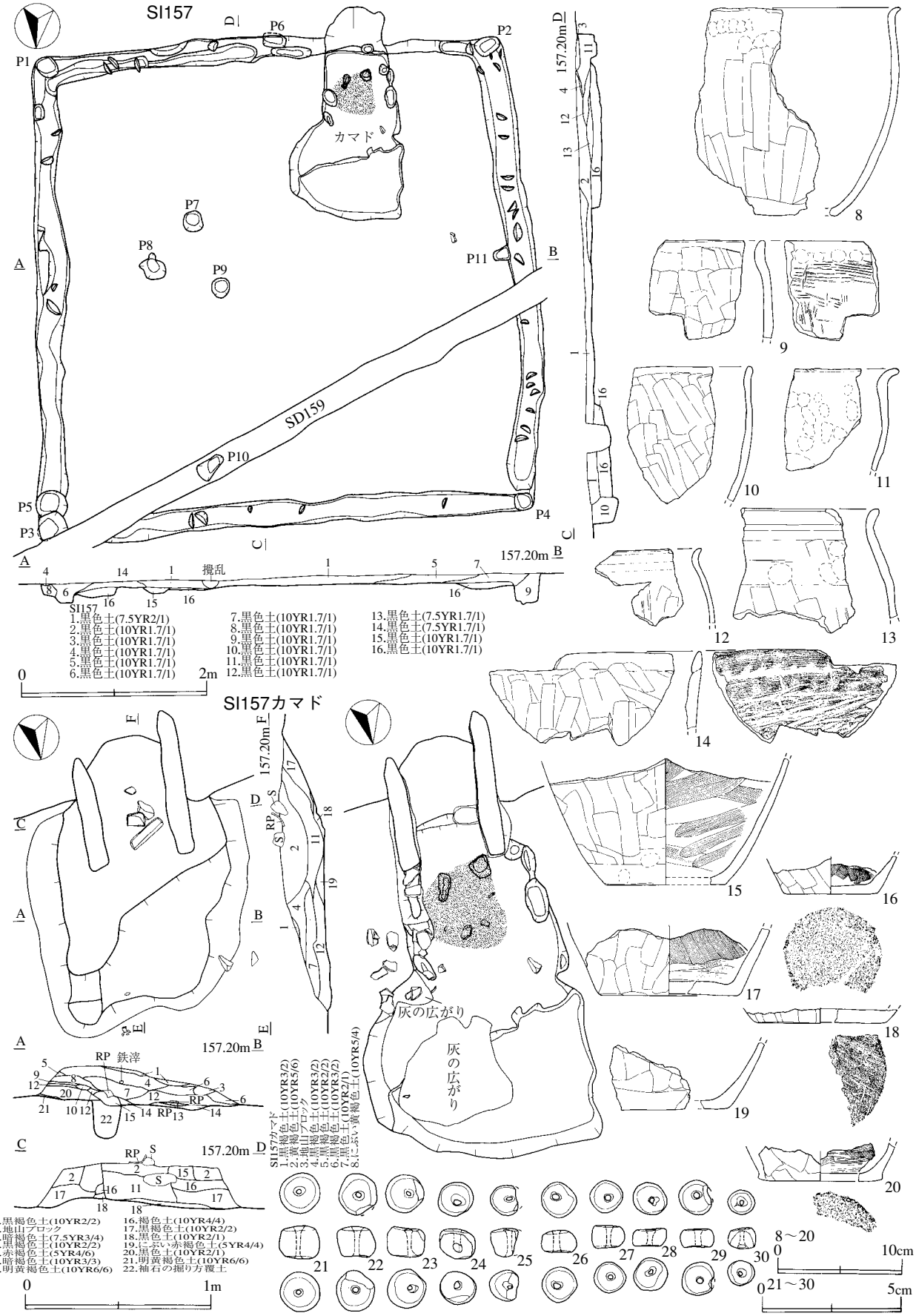
〈堆積土〉18層に分層した。１～13層がＳＩ156ａ覆土で、13層は貼床である。15～18層がＳＩ156ｂ覆土で、18層は貼床である。覆土には大湯浮石のブロックが多く含まれていた。

〈平面形・規模〉ＳＩ156ａは長軸4.86ｍ、短軸4.82ｍの方形を呈する。床面までの深さは0.17ｍである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ＳＩ156ｂは長軸3.66ｍ、残存部短軸1.00ｍの方形を呈するものと推察される。床面までの深さは0.22ｍである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面や床直上層から炭化物



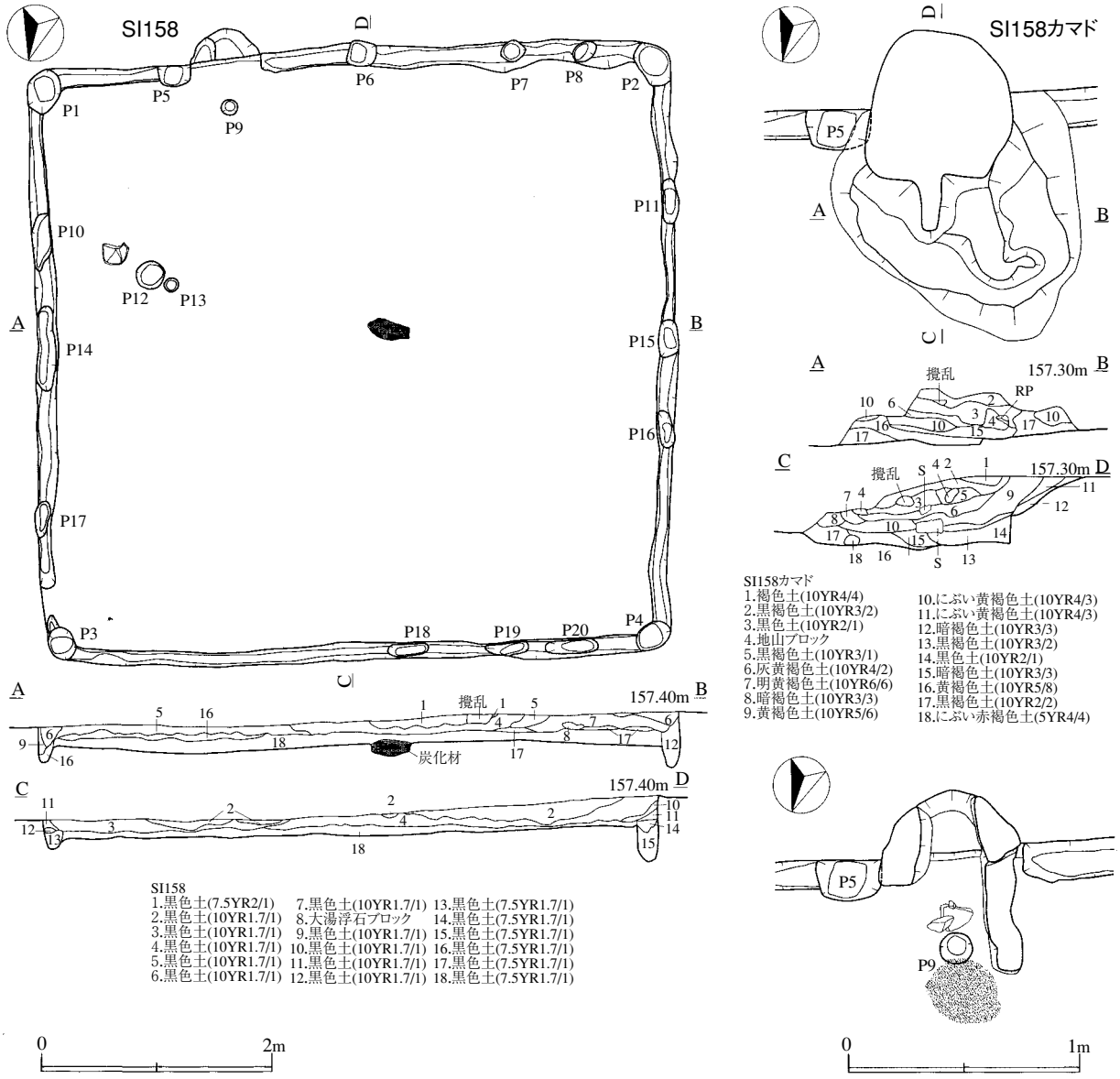
第７図　ＳＩ156ａ・ｂ竪穴住居跡とＳＩ156ａ竪穴住居跡出土遺物

が出土しており、ＳＩ156ａ・ｂはともに焼失家屋と考えられる。
〈床面〉ＳＩ156ａ・ｂともに床面は貼床でほぼ平坦である。床面や床直上層から炭化材が出土した。特にＳＩ156ａの壁際には板状炭化材が目立つ。
〈柱穴〉ＳＩ156ａから13個検出した。深さは0.12～0.57ｍである。ＳＩ156ｂから２個検出した。深さはＰ２が0.47ｍである。
〈カマド〉ＳＩ156ａでは南壁西側に付く。土層は13層に分層した。このうち９～12層は袖部である。両袖部から礫を検出した。芯材として使用していたものと考えられる。２層から炭化した栗が出土した。燃焼部は火床面として確認した。火床面から、土師器の底部が伏せられた状態で出土した。支脚として使用されていたものと考えられる。その西側から焼けた粘土塊が出土した。ＳＩ156ｂではカマドは検出されなかった。
〈その他の付属施設〉ＳＩ156ａでは、カマド周辺と西壁の一部を除いて、幅0.10～0.30ｍ、深さ0.04～0.41ｍの壁溝が巡る。ＳＩ156ｂでは、確認できた範囲内で、幅0.12～0.18ｍ、深さ0.06～0.15ｍの壁溝が巡る。
〈出土遺物〉ＳＩ156ａの覆土中から土師器片67点、縄文土器片１点、床面から土師器片12点、カマド周辺から土師器片17点が出土した。他に砥石２点、鉄製品３点が出土した。ＳＩ156ｂの覆土中から土師器片３点が出土した。また、ＳＩ156ａ・ｂどちらのものかは明確にできなかったが、鉄滓１点が出土した。
ＳＩ157（第８図、図版４）
〈位置・確認状況〉ＪＪ102･103、ＪＫ102･103グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＤ159と重複する。本住居跡が古い。
〈堆積土〉16層に分層した。15層はＰ７覆土、16層は貼床である。覆土には大湯浮石のブロックが多く含まれていた。
〈平面形・規模〉長軸6.00ｍ、短軸5.28ｍの方形を呈する。床面までの深さは0.16ｍである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
〈床面〉住居跡周縁部から貼床を検出した。床面はほぼ平坦である。
〈柱穴〉11個検出した。深さは0.02～0.48ｍである。Ｐ１～４はやや内傾し、Ｐ３は特に顕著である。柱痕は確認されなかった。
〈カマド〉南壁西側に付く。確認面において袖部の粘土が明確に確認された。土層は22層に分層した。このうち15層は袖部である。袖部には土器片が多く含まれていた。東側袖部で礫を検出した。芯材として使用していたものと考えられる。袖部には、芯材を固定するためと考えられる掘り込みがあった。煙道部から、被熱した礫２点と土師器片が出土した。被熱した礫はカマド袖部の構築材であったと考えられる。燃焼部は火床面として確認した。焚口前の床面直上で灰の広がりを確認した。
〈その他の付属施設〉カマド周辺と住居跡北西隅の一部を除いて、幅0.22～0.36ｍ、深さ0.10～0.18ｍの壁溝が巡る。壁溝は住居跡南東隅ではＰ１より内側を巡る。壁溝内で、幅0.16ｍほどの半月状の工具痕を確認した。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片42点、縄文土器片３点、床面から土師器片14点、土玉９点、カマド周辺から土師器22点、土玉１点が出土した。



第８図　ＳＩ157竪穴住居跡と出土遺物

ＳＩ158(第９図、図版４)
〈位置・確認状況〉ＪＫ100～102、ＪＬ100～102グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉18層に分層した。18層は貼床である。覆土には大湯浮石のブロックが多く含まれていた。
〈平面形・規模〉長軸5.32m、短軸5.06mの方形を呈する。床面までの深さは0.20mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
〈床面〉住居跡全面から貼床を検出した。床面はほぼ平坦である。住居跡ほぼ中央の貼床の下から、長さ約38㎝・幅約16㎝・厚さ約13㎝の炭化材が出土した。この炭化材は地山に食い込むようにして検出されている。加工痕は確認できなかった。
〈柱穴〉20個検出した。深さは0.06～57.1mである。
〈カマド〉南壁東側に付く。土層は18層に分層した。燃焼部は火床面として確認した。火床面の南側ではＰ９を確認した。
〈その他の付属施設〉カマド周辺と住居跡北東隅の一部を除いて、幅0.10～0.25m、深さ0.03～0.19mの壁溝が巡る。壁溝は部分的に深くなる箇所もみられる。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片１点が出土した。
ＳＩ450ａ・ｂ(第10～12図、図版５)
〈位置・確認状況〉ＪＨ92～94、ＪＩ92～94、ＪＪ92～94グリッドに位置する。確認調査トレンチ覆土を除去して確認した。本住居跡の西側は上部に攪乱を受けていたため、Ⅳ層上面で確認した。東側は遺存状態が良かったため、Ⅲ層中で掘り込みを確認した。当初、１軒の住居跡として調査を進めたが、貼床を２枚確認したことと、カマドをそれぞれの床面で確認したことから、本住居跡には少なくとも２時期存在したことがわかった。そのため、新しい時期をＳＩ450ａ、古い時期をＳＩ450ｂとした。本住居跡の南側で、主軸が本住居跡と一致する付属施設(Ｐ14～17)を検出した。
〈重複関係〉ＳＫＰ1168と重複する。本住居跡が古い。
〈堆積土〉23層に分層した。第10図の１～14・27～35層である。27～29層はＳＩ450ａの貼床である。33～35層はＳＩ450ｂの貼床である。覆土には大湯浮石のブロックが多く含まれていた。
〈平面形・規模〉長軸9.33m、短軸9.30mの方形を呈する。ＳＩ450ａの床面までの深さは0.28mである。ＳＩ450ｂの床面までの深さは0.50mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、部分的にやや内傾する。
〈床面〉ＳＩ450ａでは硬く締まった面を検出したが、調査時はその面を貼床と認識せずに掘り下げてしまった。そのため、確認した柱穴や壁溝がＳＩ450ａ・ｂどちらに伴うものかは明確にできなかった。ＳＩ450ｂでは全面から地山ブロックを主体とする貼床を検出した。床面は硬く締まっており、多くの扁平な礫が埋め込まれた状態で出土した。また、被熱し焼土が付いたままの礫も出土した。カマド構築材であったものと考えられる。床面直上には大湯浮石を含み硬く締まった土が５㎜程度堆積していた。ＳＩ450ａ・ｂともに床面はほぼ平坦である。
〈柱穴〉44個検出した。深さは0.06～0.72mである。Ｐ30～36は貼床除去後に確認した。Ｐ１・３・４から柱痕を２つずつ確認した。床を貼り替えた際に柱も建て直したものと考えられる。Ｐ２は確認調査トレンチによってほとんどが削平されていた。Ｐ41内からは礫５点が出土し、そのうち１点は被



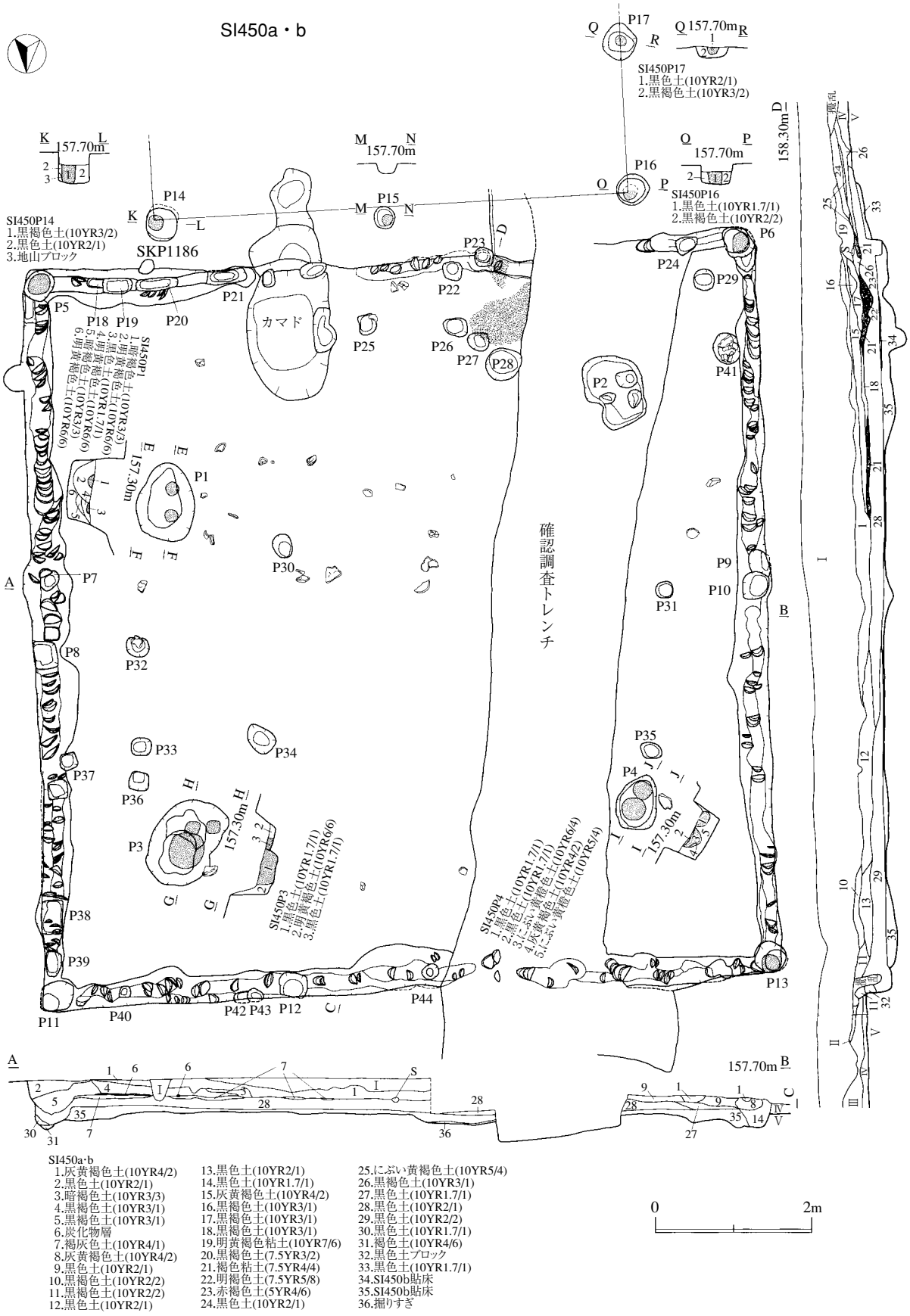
第９図　ＳＩ158竪穴住居跡

熱していた。Ｐ５、６、８～13は、やや内傾していた。

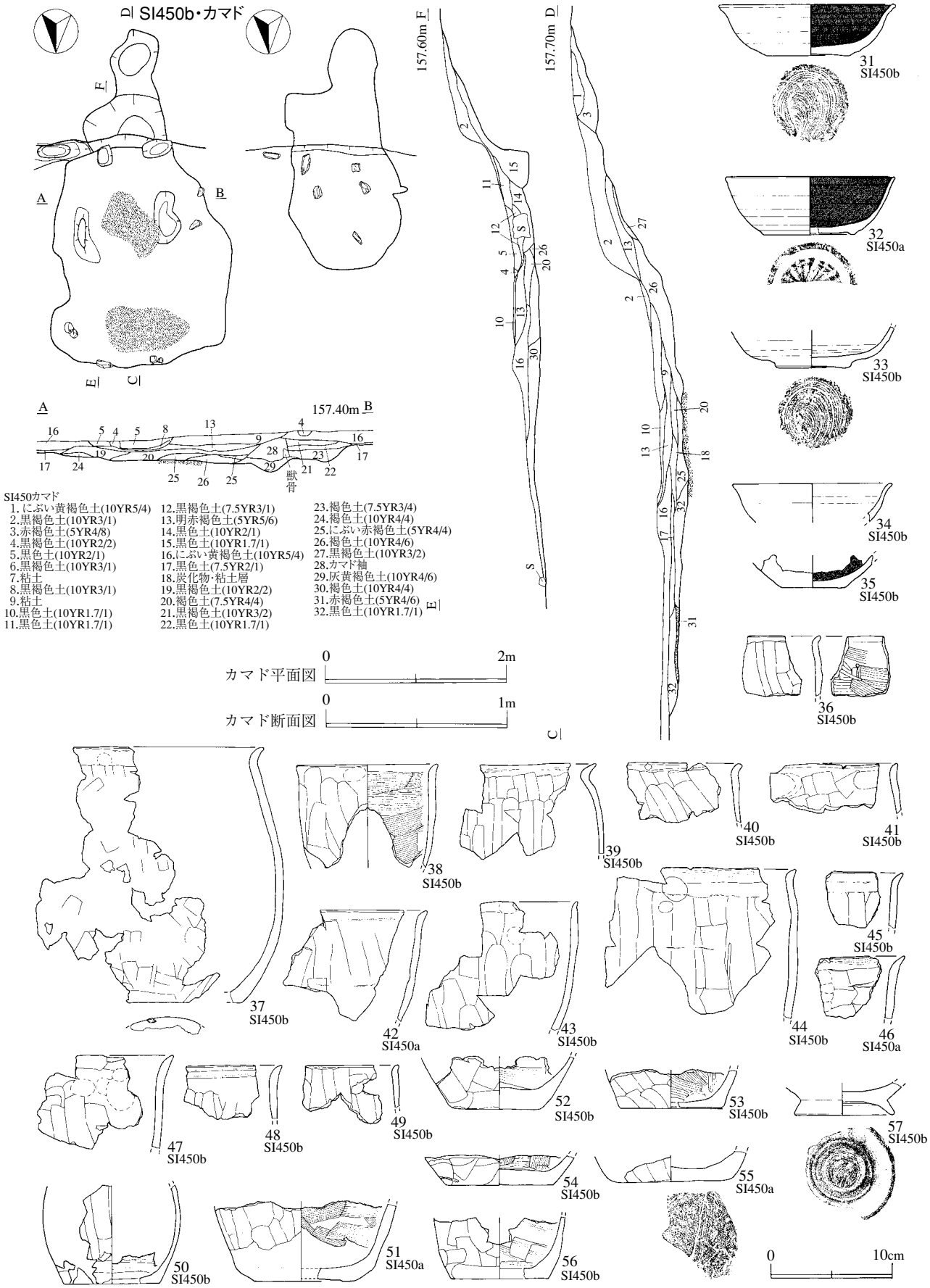
〈カマド〉ＳＩ450ａでは南壁西側に付く。当初、本住居跡覆土中の焼土遺構として調査を進めたが、後にカマドであることが判明した。土層は12層に分層した。第10図の15～26層である。ＳＩ450ｂでは南壁東側に付く。土層は32層に分層した(第11図)。このうち28層は袖部である。ＳＩ450ｂでは、火床面を３枚確認したことから、カマドの造り替えを数回行ったと判断できる。

〈その他の付属施設〉カマド周辺を除いて、幅0.16～0.55m、深さ0.05～0.21mの壁溝が巡る。北壁・南壁の一部で壁溝の認められない箇所は、確認調査トレンチによって削平された可能性もある。壁溝内および壁で、幅0.20mほどの半月状の工具痕を確認した。作業方向は一定ではない。Ｐ14～17は本住居跡の付属施設である。この付属施設の南側は調査区外にかかる。確認できた範囲では、桁行２間×梁行１間で、桁行(Ｐ14～Ｐ16)6.00m、梁行(Ｐ16～Ｐ17)0.94mを測る。それぞれから柱痕を確認した。

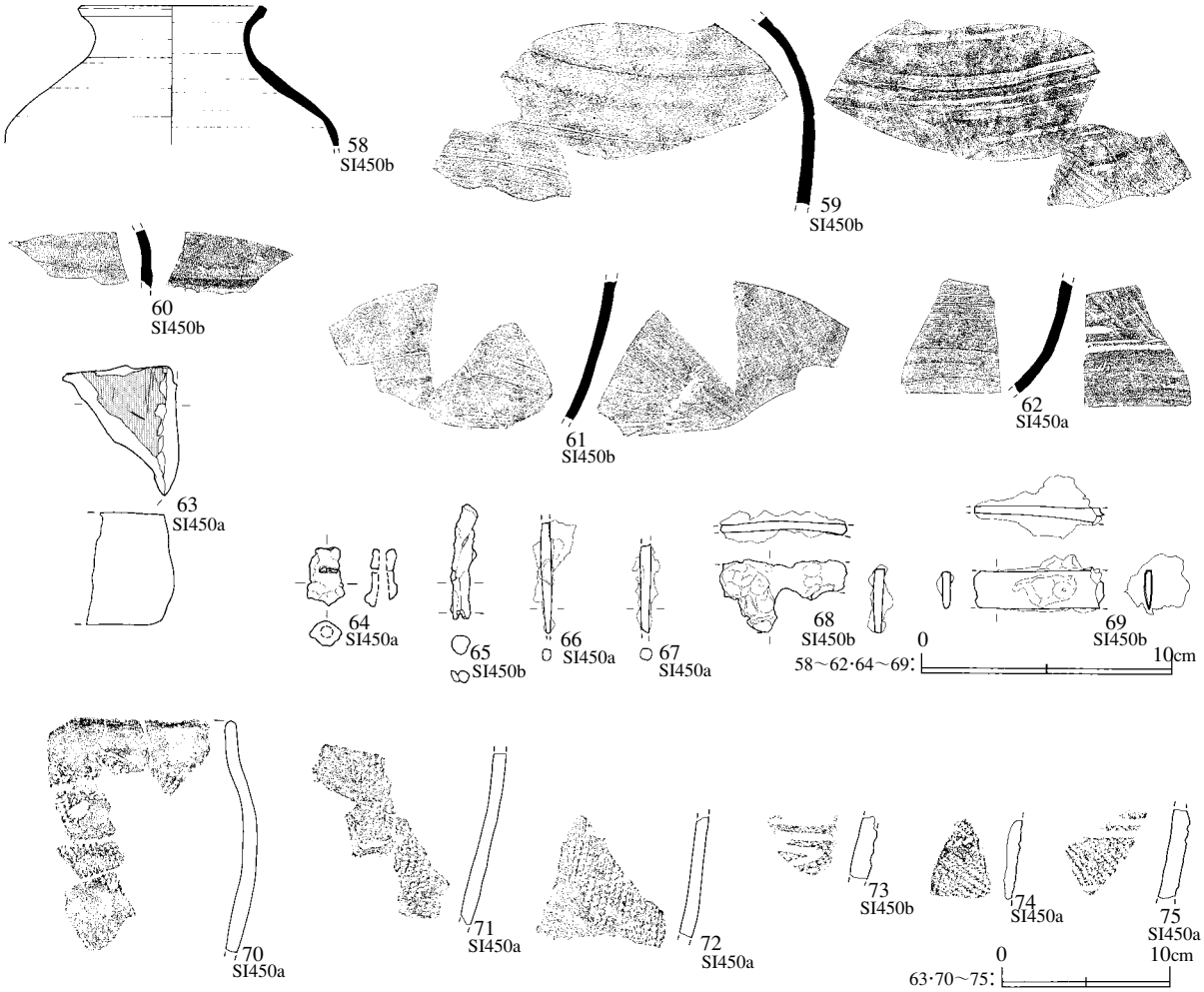
〈出土遺物〉ＳＩ450ａの覆土中から土師器片13点、縄文土器片26点、床面から土師器片13点、須恵器



第10図　ＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡



第11図　ＳＩ450ｂカマド、ＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡出土遺物



第12図　ＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡出土遺物

片１点、カマド周辺から土師器片27点、砥石１点、縄文土器片１点が出土した。他に鉄製品３点、鉄滓４点が出土した。ＳＩ450ｂの覆土中から土師器片22点、縄文土器片19点、床面および床中から土師器片43点、須恵器片３点、縄文土器片１点、カマド周辺から土師器片55点、須恵器片２点、縄文土器片２点が出土した。このうち、ＳＩ450ｂの床面からは内黒土師器(第11図31)が貼り付くようにして出土した。他に鉄製品３点、鉄滓７点が出土した。また、ＳＩ450ａ・ｂどちらのものかは明確にできなかったが、鉄滓１点が出土した。

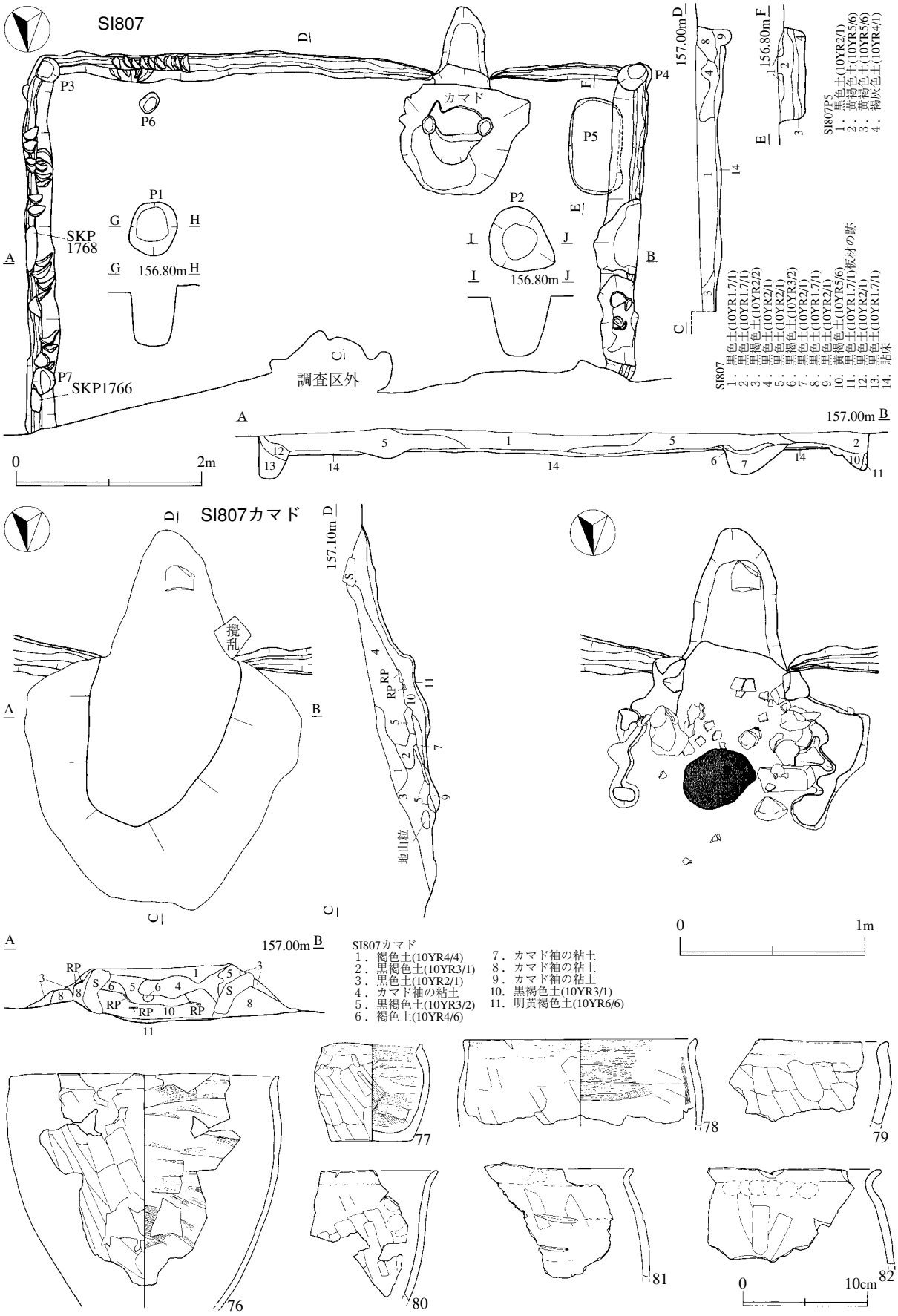
ＳＩ807(第13・14図、図版６)

〈位置・確認状況〉ＪＲ110～111、ＪＳ110～111グリッドに位置する。Ⅳ層中で確認した。Ａ区を設定した台地の北側縁辺にあたる。台地縁辺の崩落、あるいは土取りにより、住居の北側半分は失われている。

〈重複関係〉ＳＫＰ1766、1768と重複する。新旧関係は不明である。

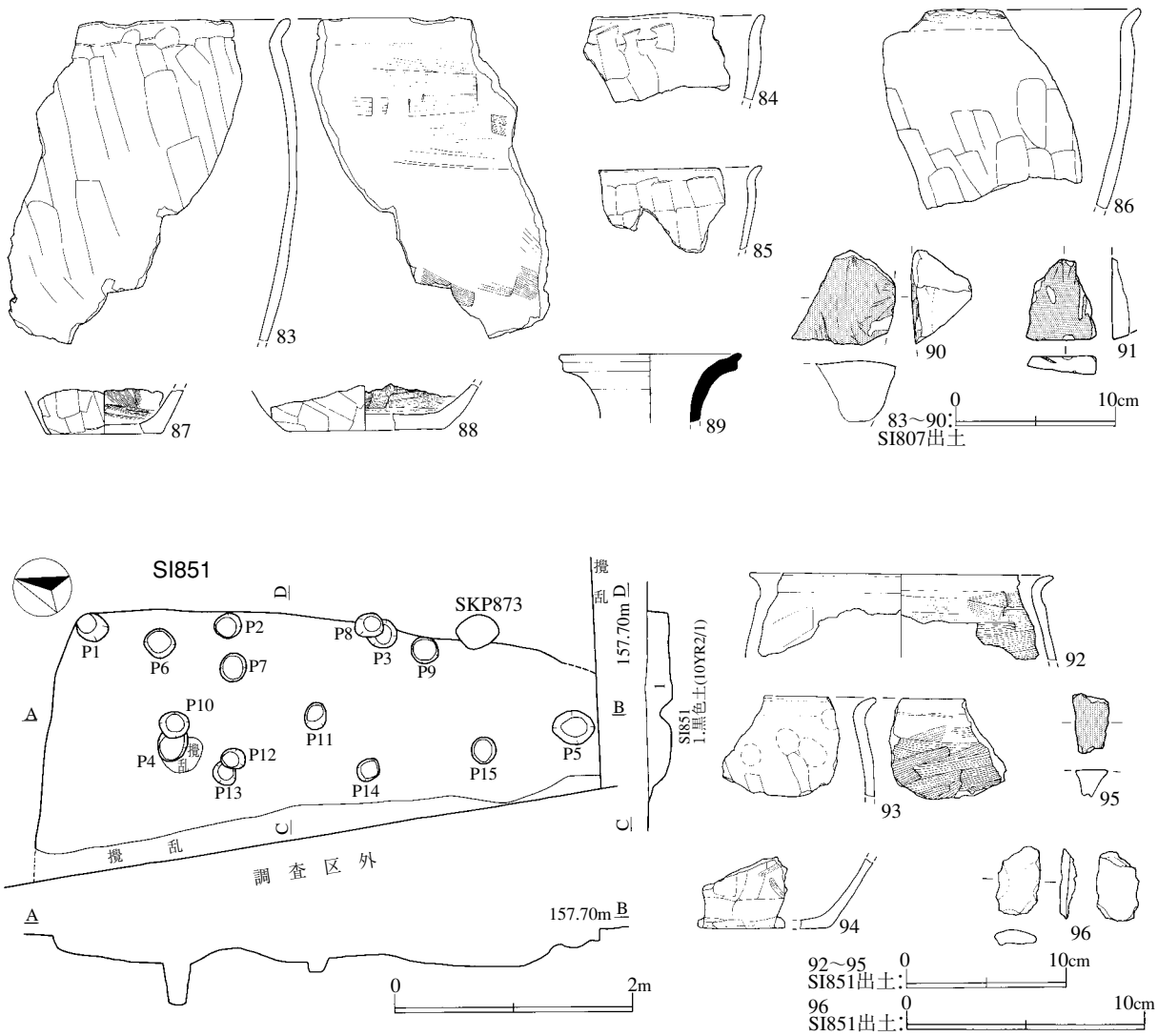
〈堆積土〉14層に分層した。樹木の根による攪乱をかなり受けており、堆積土は締まりが弱くぼそぼそしていた。６・７層はＰ２覆土、14層は貼床である。また、Ｐ５は４層に分層した。覆土には大湯浮石のブロックが多く含まれていた。

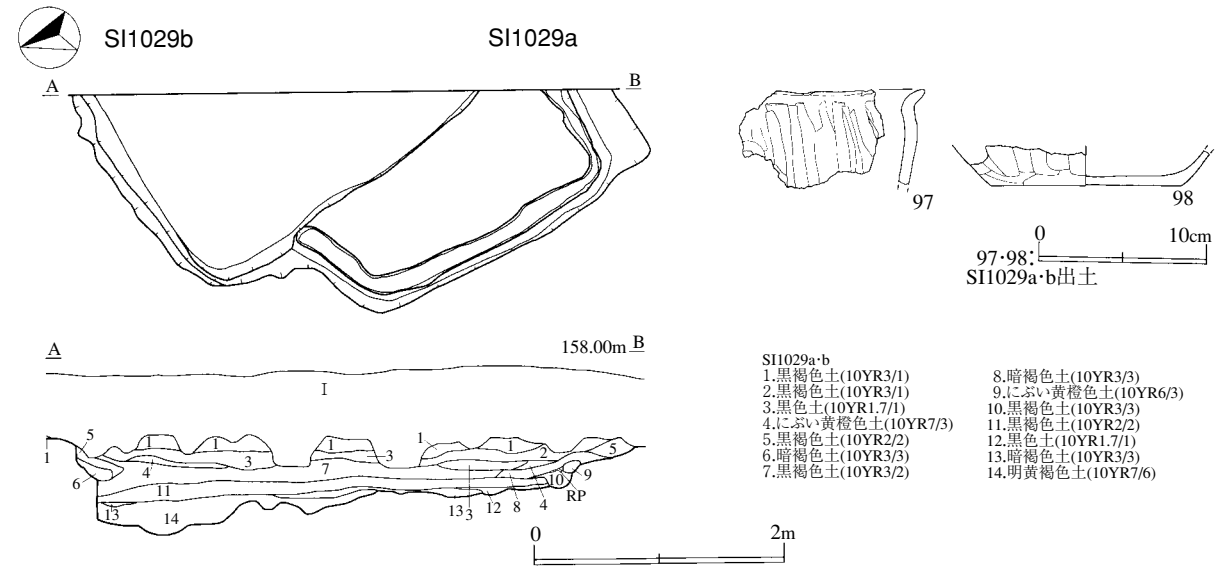
〈平面形・規模〉長軸6.62m、残存部短軸4.12mで、方形を呈するものと推察される。床面までの深さは0.18mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡のほぼ半分は失われていたが、残存していた



第13図　ＳＩ807竪穴住居跡と出土遺物

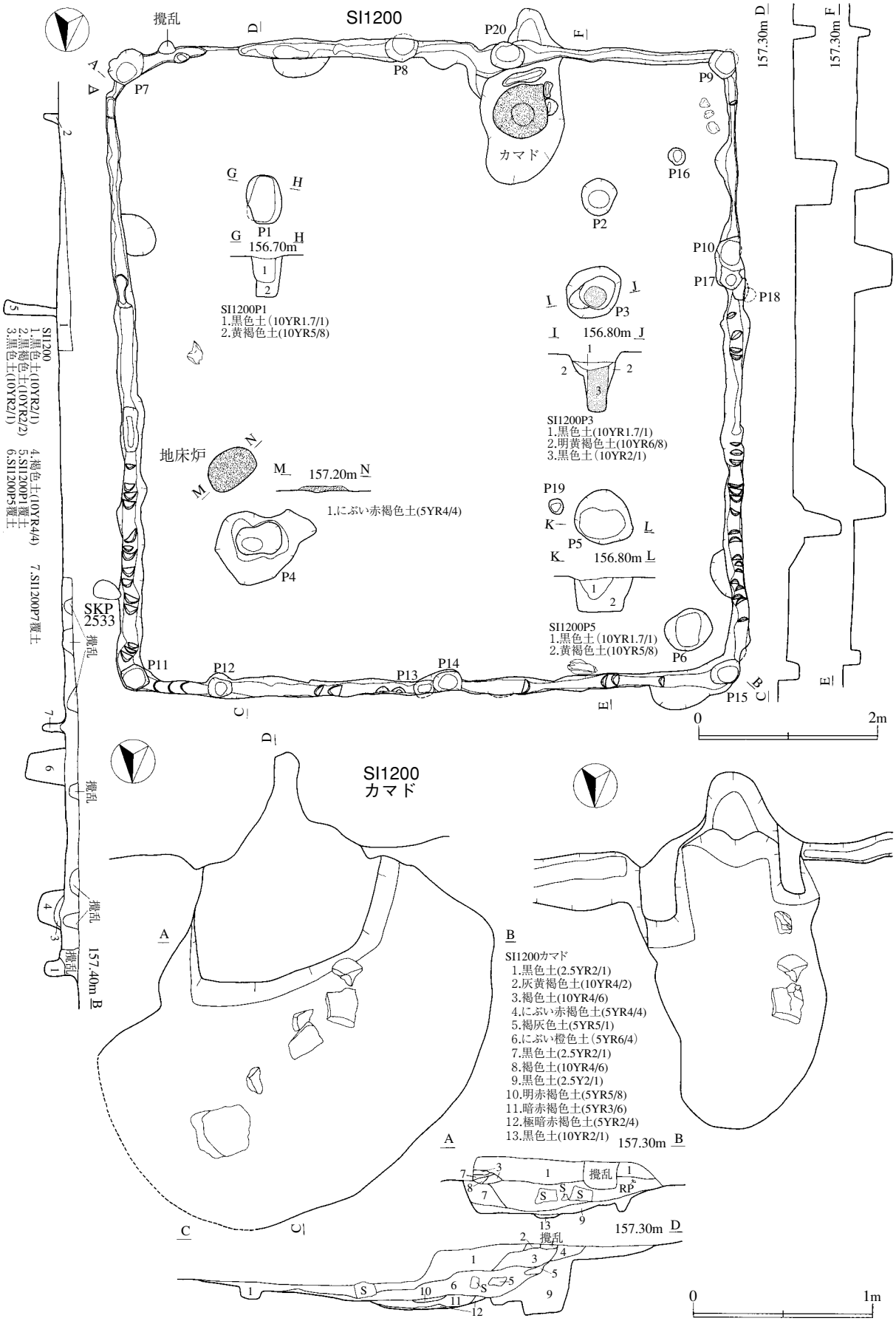
ならば１辺が約７ｍと推察され、本遺跡内では比較的規模の大きな住居跡であったと思われる。
〈床面〉住居跡全面から貼床を検出した。床面はほぼ平坦である。
〈柱穴〉７個検出した。深さは0.12～0.64ｍである。Ｐ５・６は貼床を除去した後に確認した。
〈カマド〉南壁西側に付く。土層は11層に分層した。このうち８層は袖部である。両袖部から礫を検出した。芯材として使用していたものと考えられる。
〈その他の付属施設〉確認できた範囲内では、カマド周辺を除いて幅0.10～0.33ｍ、深さ0.01～0.25ｍの壁溝が巡る。壁溝内で、幅0.20ｍほどの半月状の工具痕を確認した。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片77点、床面・床中から土師器片８点、カマド周辺から土師器片34点が出土した。他に砥石２点、鉄滓２点が出土した。樹木の根による攪乱により、遺物の多くは原位置から動いていると思われる。Ｐ５からは土師器片がまとまって出土した。Ｐ６からは小型の土師器甕(第13図77、図版14・25)が伏せられた状態で出土した。
ＳＩ851(第14図)
〈位置・確認状況〉ＫＡ89・90グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。現在の団体営農道をつくる際の切り通しのため、本住居跡は大きく削平され、壁も失われていた。
〈重複関係〉ＳＫＰ875と重複する。新旧関係は不明である。
〈堆積土〉１層で、貼床のみが確認された。
〈平面形・規模〉残存部長軸4.60ｍ、残存部短軸1.61ｍで、方形を呈するものと推察される。
〈床面〉床上面は削平された可能性がある。
〈柱穴〉15個検出した。深さは0.11～0.14ｍである。
〈カマド〉検出されなかった。
〈その他の付属施設〉壁溝等は検出されなかった。
〈出土遺物〉土師器片39点が出土した。他に砥石１点、鉄製品１点が出土した。
ＳＩ1029ａ・ｂ(第14図、図版７)
〈位置・確認状況〉ＪＫ83・84、ＪＬ83・84グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。ＳＩ1029ａ・ｂともに東側が調査区外にかかる。当初、張り出しを持つ１軒の住居跡として調査を進めたが、貼床を２枚確認したことから、本住居跡には少なくとも２時期存在したことがわかった。そのため、新しい時期をＳＩ1029ａ、古い時期をＳＩ1029ｂとした。ＳＩ1029ａは、方形を呈すると推察されるＳＩ1029ｂに張り出し部を取り付けた住居跡である。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉14層に分層した。11層はＳＩ1029ａの貼床、12～14層はＳＩ1029ｂの貼床である。覆土には大湯浮石のブロックが含まれていた。
〈平面形・規模〉ＳＩ1029ａの竪穴部は、残存部長軸2.67ｍ、残存部短軸1.92ｍの方形を呈するものと推察される。床面までの深さは0.36ｍである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。張り出し部は、長軸2.78ｍ、短軸1.26ｍの長方形を呈する。床面までの深さは0.52ｍである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。ＳＩ1029ｂの平面形・規模は、ＳＩ1029ａ竪穴部と同じである。
〈床面〉ＳＩ1029ａ・ｂともに硬く締まった貼床を検出した。床面はほぼ平坦である。
〈柱穴〉検出されなかった。



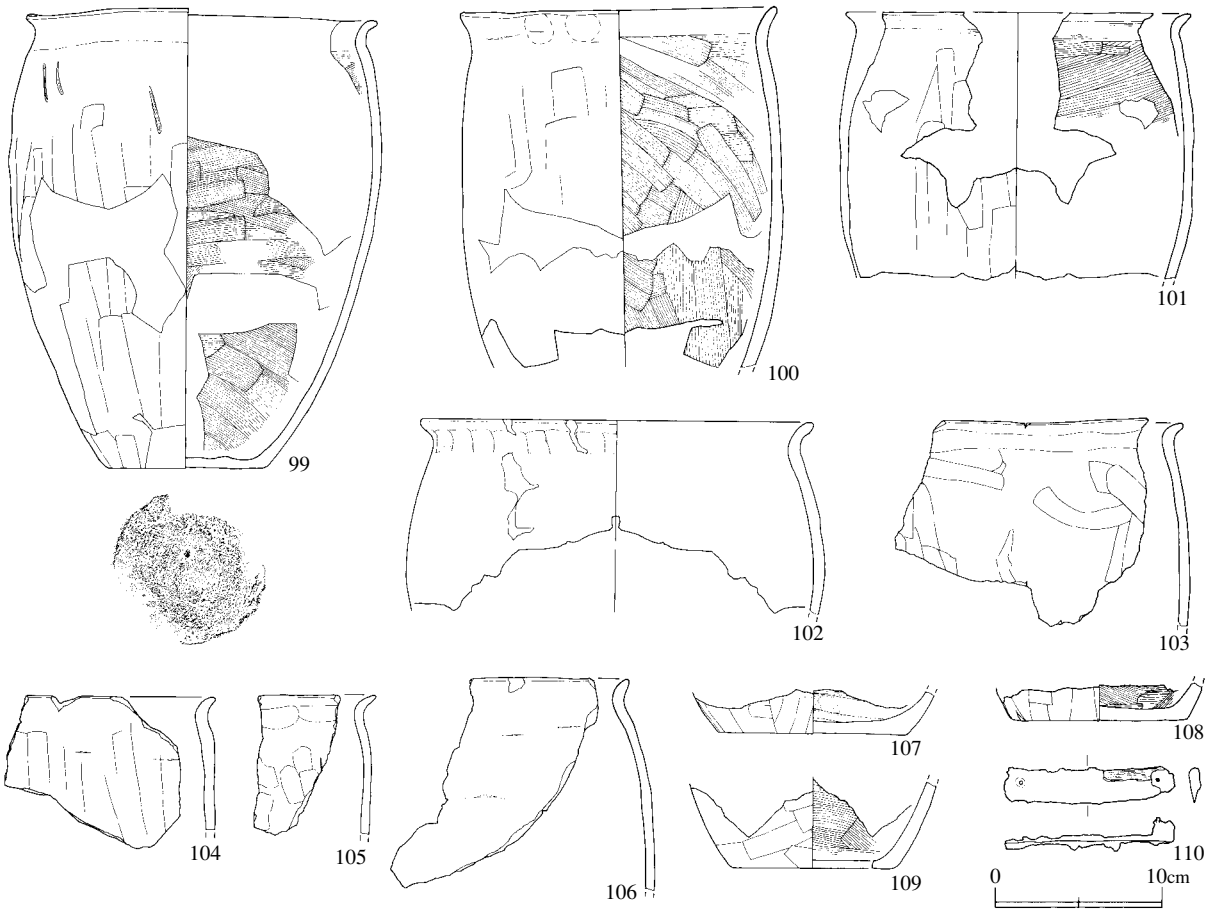


第14図　ＳＩ807竪穴住居跡出土遺物、ＳＩ851・1029ａ・ｂ竪穴住居跡と出土遺物

〈カマド〉検出されなかった。
〈その他の付属施設〉ＳＩ1029ａの張り出し部で、幅0.10～0.24m、深さ0.01～0.04mの壁溝が巡る。また、本住居跡の北壁側は床面がやや低くなることから、壁溝があった可能性も考えられる。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片５点、砥石１点、床面から土師器片５点が出土した。ＳＩ1029ａ・ｂどちらのものかは明確にできなかった。
ＳＩ1200（第15・16図、図版７）
〈位置・確認状況〉ＪＧ74～76、ＪＨ74～76、ＪＩ74～76グリッドに位置する。Ⅳ層上面で確認した。住居南壁は攪乱により削平されていた。
〈重複関係〉ＳＫＰ2533と重複する。本住居跡が古い。
〈堆積土〉７層に分層した。３・４層はＰ６覆土、５層はＰ１覆土、６層はＰ５覆土である。覆土には大湯浮石のブロックが含まれていた。
〈平面形・規模〉長軸7.40m、短軸7.04mの方形を呈する。床面までの深さは0.16mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
〈床面〉ほぼ全面に貼床を検出した。平坦であり、硬く締まっていた。
〈柱穴〉20個検出した。深さは0.30～0.68mである。Ｐ20はカマド完掘後に確認した。
〈カマド〉南壁西側に付く。土層は13層に分層した。西側袖部の北側で礫を検出した。芯材として使用していたものと考えられる。火床面を２枚確認した。10層は新段階の火床面である。少なくとも一度はカマドの造り替えを行ったと判断できる。
〈その他の付属施設〉南壁の一部を除いて、幅0.09～0.26m、深さ0.05～0.33mの壁溝が巡る。本住居跡中央やや北東よりの床面で地床炉を確認した。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片27点、須恵器片２点、鉄滓２点、弥生時代の土器片３点、床面・床中から土師器片36点、鉄製品（穂摘み具）１点、カマド周辺から土師器片42点、カマド袖内部から鉄滓２点が出土した。出土した土師器片には、須恵器壺を模倣したようなものもあった。
ＳＩ1264（第17図、図版８）
〈位置・確認状況〉ＪＭ77・78、ＪＮ77・78グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＩ1265、ＳＫＩ1263、ＳＢ1746（Ｐ１）と重複する。本住居跡はＳＩ1265より新しく、ＳＫＩ1263・ＳＢ1746より古い。
〈堆積土〉４層に分層した。５～８層が本住居跡覆土で、７・８層は貼床である。覆土には大湯浮石のブロックが含まれていた。
〈平面形・規模〉長軸4.34m、短軸3.40mの長方形を呈する。床面までの深さは0.18mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
〈床面〉貼床を検出した。床面はほぼ平坦である。
〈柱穴〉15個検出した。深さは0.02～0.35mである。
〈カマド〉南壁西側に付く。土層は８層に分層した。このうち６層は袖部である。燃焼部は火床面として確認した。
〈その他の付属施設〉壁溝等は検出されなかった。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片９点、縄文土器片２点、床面・床中から土師器片11点、カマド周辺



第15図　ＳＩ1200竪穴住居跡



第16図　ＳＩ1200竪穴住居跡出土遺物

から土師器片10点、須恵器片１点が出土した。他に鉄滓１点が出土した。

ＳＩ1265（第17図、図版８）

〈位置・確認状況〉ＪＮ77・78、ＪＯ78グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。南西側が調査区外にかかる。

〈重複関係〉ＳＩ1264、ＳＫＩ1263と重複する。本住居跡が古い。

〈堆積土〉10層に分層した。９～18層が本住居跡覆土で、18層は貼床である。覆土には大湯浮石のブロックが含まれていた。

〈平面形・規模〉長軸4.83m、残存部短軸1.50mで、方形を呈するものと推察される。床面までの深さは0.21mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

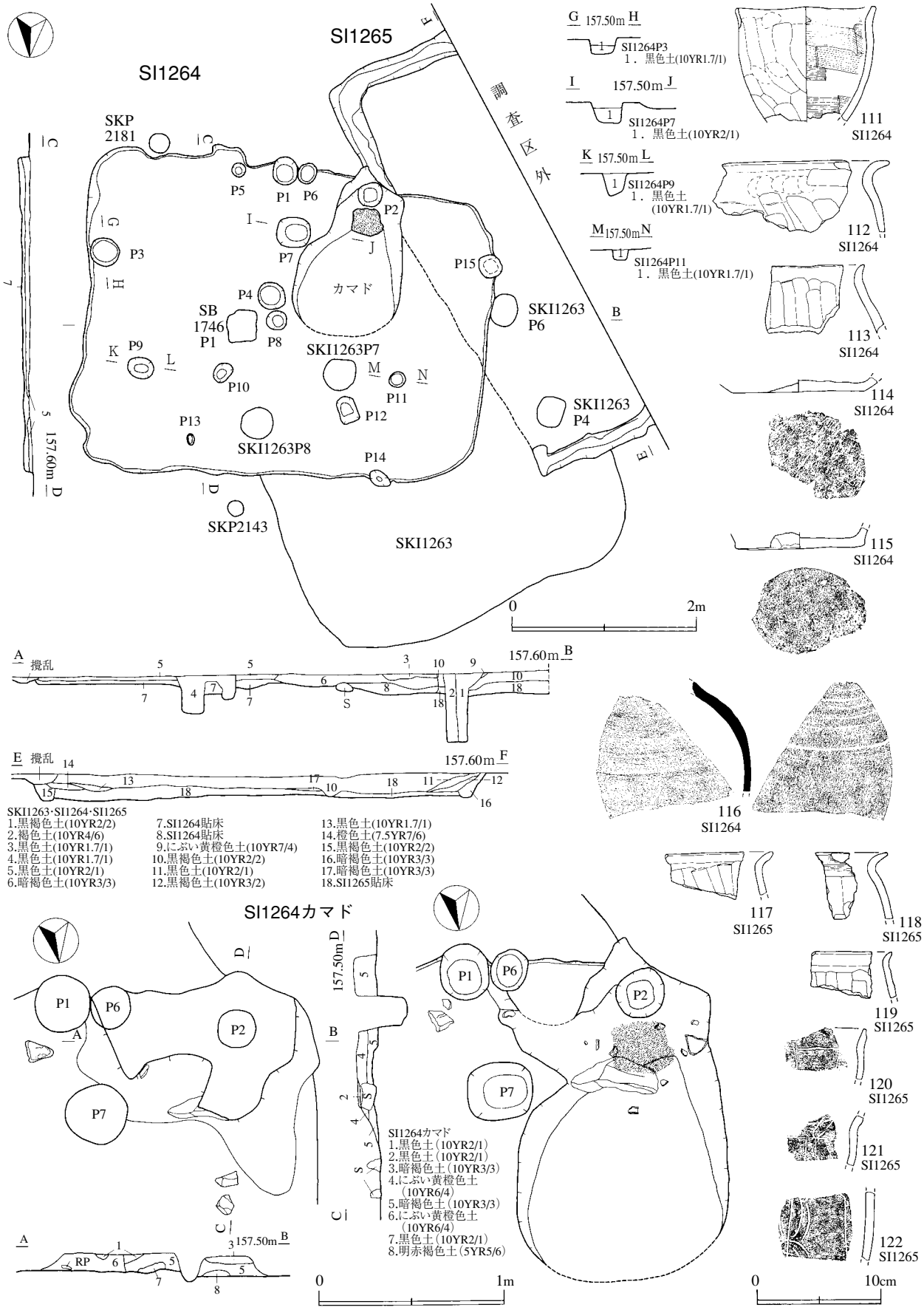
〈床面〉貼床を検出した。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉検出されなかった。

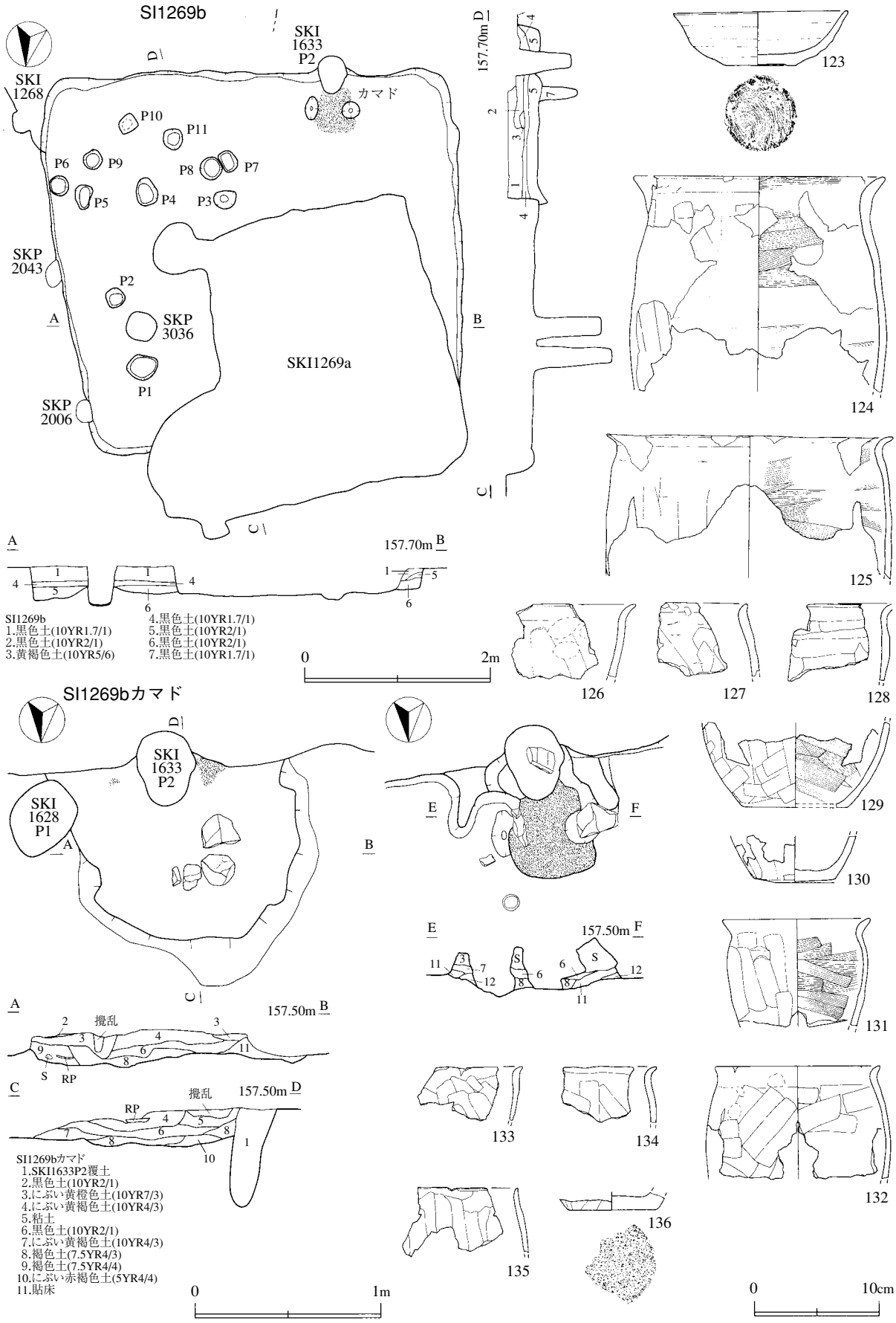
〈カマド〉検出されなかった。

〈その他の付属施設〉確認できた範囲内では、北東壁の一部を除いて、幅0.20～0.28m、深さ0.02～0.30mの壁溝が巡る。壁溝が巡らない部分は、ＳＩ1264の掘り方によって削平されていた。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片９点、縄文土器片３点、床面から土師器片５点が出土した。他に鉄滓５点が出土した。



第17図　ＳＩ1264・1265竪穴住居跡と出土遺物



第18図　ＳＩ1269ｂ竪穴住居跡と出土遺物

ＳＩ1269ｂ（第18図、図版８）

〈位置・確認状況〉ＪＮ83、ＪＯ83・84、ＪＰ83グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。当初、１軒の住居跡として調査を進めたが、土層断面の観察から、２軒であることがわかった。新しい方をＳＫＩ1269ａ、古い方をＳＩ1269ｂとした。

〈重複関係〉ＳＫＩ1268・1269ａ・1633、ＳＢ1726（Ｐ４・５・７・８）、ＳＫＰ2006・2043・3036と重複する。本住居跡はＳＫＩ1268・1269ａ・1633、ＳＢ1726、ＳＫＰ3036より古い。ＳＫＰ2006・2043との新旧関係は不明である。

〈堆積土〉７層に分層した。４～６層は貼床である。覆土に大湯浮石のブロックが多く含まれていた。

〈平面形・規模〉長軸4.40ｍ、短軸4.05ｍの方形を呈する。床面までの深さは0.16ｍである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〈床面〉貼床を検出した。床面はほぼ平坦である。貼床をはがしたところ、カマド西側が深くなっており土師器片が多数出土した。

〈柱穴〉11個検出した。深さは0.09～0.41ｍである。

〈カマド〉南壁西側に付く。土層は11層に分層した。８層中の火床面付近には焼土粒が混入する。燃焼部は火床面として確認した。

〈その他の付属施設〉壁溝等は検出されなかった。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片50点、土師器坏完形品１点、床面から土師器片４点、窯壁の破片（図版26－３）数点、カマド周辺から土師器片31点が出土した。他に鉄滓６点が出土した。窯壁の破片は、須恵器窯の存在を示唆するものとして重要である。

ＳＩ1623（第19図、図版９）

〈位置・確認状況〉ＪＥ81・82、ＪＦ82グリッドに位置する。当初、本住居跡南側の溝状部分をⅣ層で確認した。北側に調査を進めた結果、Ⅲ層上で大湯浮石の堆積した円形の落ち込みを確認した。浮石層を半截後除去し土層観察用ベルトを残して掘り進めたところ、Ⅳ層上面で方形プランを確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉11層に分層した。４層は大湯浮石の自然堆積層で基本層序のⅡ層に相当する。３層（４ａ・４ｂ・４ｃ）に細分した。

〈平面形・規模〉長軸2.25ｍ、短軸2.15ｍの方形を呈する。床面までの深さは0.56ｍである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

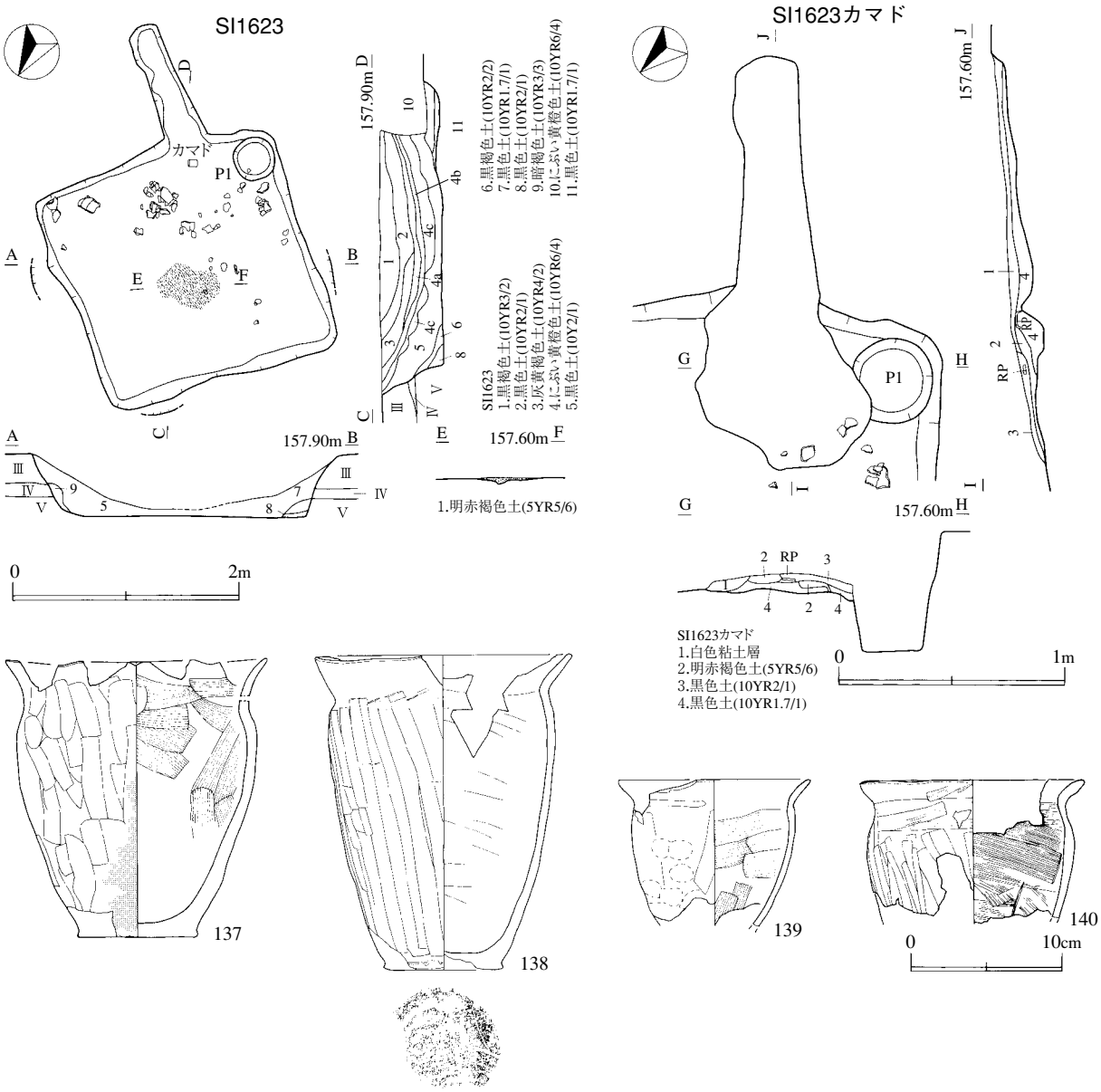
〈床面〉中心部がやや高く、壁に向かって緩やかに傾斜をする貼床を検出した。締まりは弱く、やわらかい。

〈柱穴〉床面南西隅にピットを１個検出した。ピットは円形で、30㎝の深さがある。柱穴と断定できないが、他にピットは検出されなかった。

〈カマド〉長さ1.09ｍ、幅0.32ｍ、深さ0.52ｍを測る溝状の張り出しとして、南東壁やや南西寄りに付く。土層は４層に分層した。

〈その他の付属施設〉住居跡ほぼ中央で地床炉と思われる焼土の範囲を確認した。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片４点、陶磁器片１点、カマド周辺から土師器片１点が出土した。床面から土師器片がまとまって出土し、４個体に復元できた。



第19図　ＳＩ1623竪穴住居跡と出土遺物

（２）竪穴状遺構

ＳＫＩ217（第20図）

〈位置・確認状況〉ＪＮ93・94、ＪＯ93・94グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＢ244（Ｐ９）、ＳＫＰ216・299と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉壁が削平されていたため、確認できなかった。

〈平面形・規模〉検出された柱穴８個の位置関係（Ｐ１～８）から、方形を呈し、長軸2.80m、短軸2.62mと推察される。壁は確認できなかった。

〈底面〉削平されていたため、確認できなかった。

〈柱穴〉８個検出した。深さは0.53～0.73mである。

〈その他の付属施設〉なし。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫＩ1262（第20図）

〈位置・確認状況〉ＪＪ76・77、ＪＫ76・77グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＢ1649（Ｐ13・20・21）、ＳＢ1650（Ｐ２・３・６）、ＳＫＰ2230と重複する。本遺構はＳＢ1649・1650より古い。ＳＫＰ2230との新旧関係は不明である。

〈堆積土〉３層に分層した。３～５層が本遺構の覆土で、４・５層はＰ３・５・７覆土である。４層は柱痕である。

〈平面形・規模〉長軸3.45m、短軸3.41mの方形を呈する。深さは0.14mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈底面〉ほぼ平坦である。白い粘土混じりの土が、土層断面にあらわれないほど薄く堆積していた。

〈柱穴〉13個検出した。深さは0.12～0.85mである。

〈その他の付属施設〉Ｐ13内で焼土を確認した。地床炉の可能性がある。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片１点、床面から土師器片１点、鉄滓１点が出土した。他に砥石１点が出土した。

ＳＫＩ1263（第20図）

〈位置・確認状況〉ＪＮ78・79、ＪＯ78グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＩ1264・1265と重複する。本遺構が新しい。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉長軸3.68m、短軸3.18mの長方形を呈する。深さは0.09mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈柱穴〉10個検出した。深さは0.28～0.83mである。

〈その他の付属施設〉なし。

〈出土遺物〉鉄滓７点が出土した。

ＳＫＩ1266（第21図、図版10）

〈位置・確認状況〉ＪＬ78・79、ＪＭ79グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ1731、ＳＫＰ2158・2159・2161と重複する。本遺構はＳＫＩ1731より古い。ＳＫＰ2158・2159・2161との新旧関係は不明である。

〈堆積土〉３層に分層した。３～５層が本遺構覆土で、４・５層はＰ７・９・14覆土である。

〈平面形・規模〉長軸4.78m、短軸3.75mの長方形を呈する。深さは0.09mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。北東隅の壁は確認できなかった。

〈底面〉ほぼ平坦である。

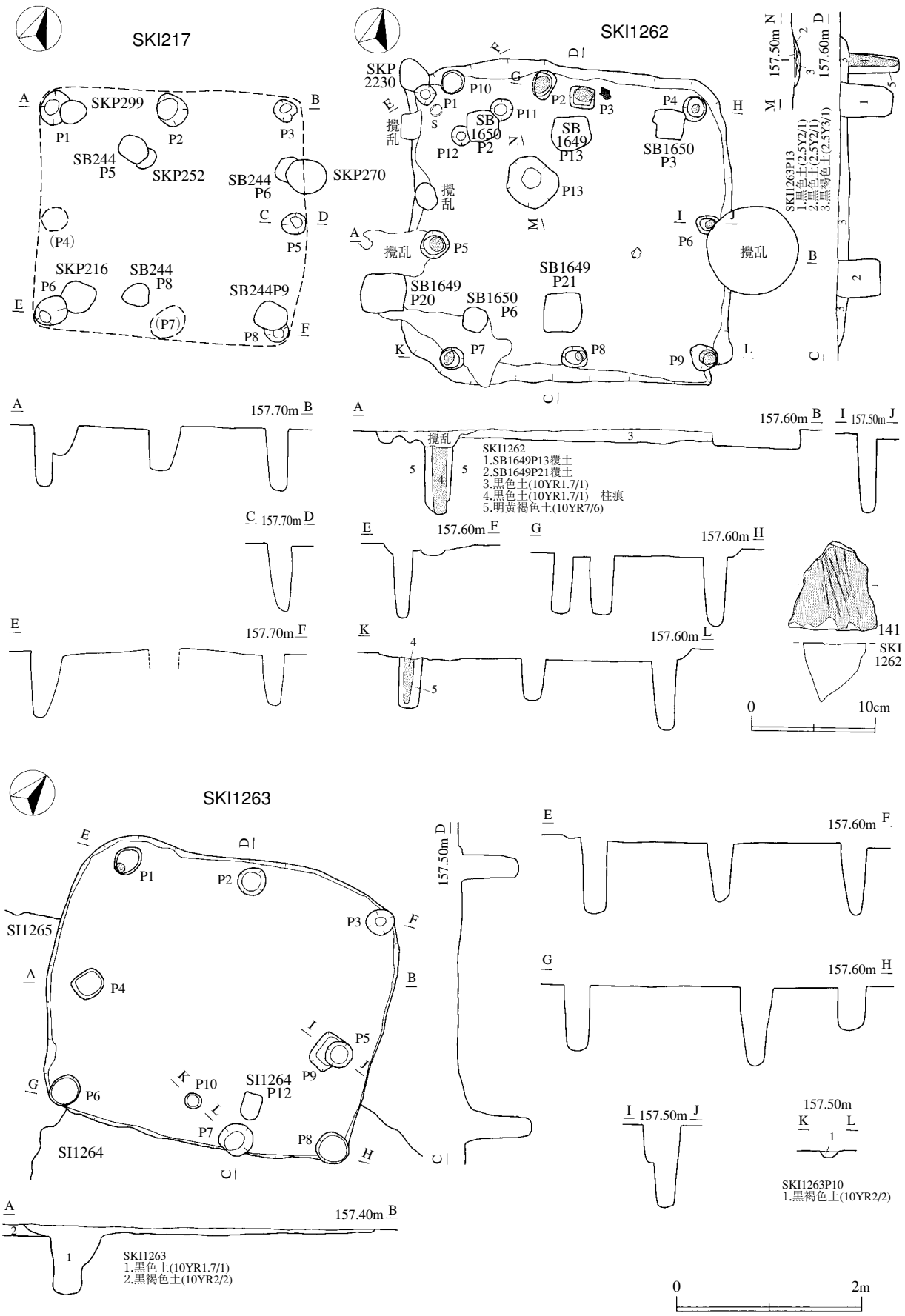
〈柱穴〉16個検出した。深さは0.19～0.85mである。

〈その他の付属施設〉なし。

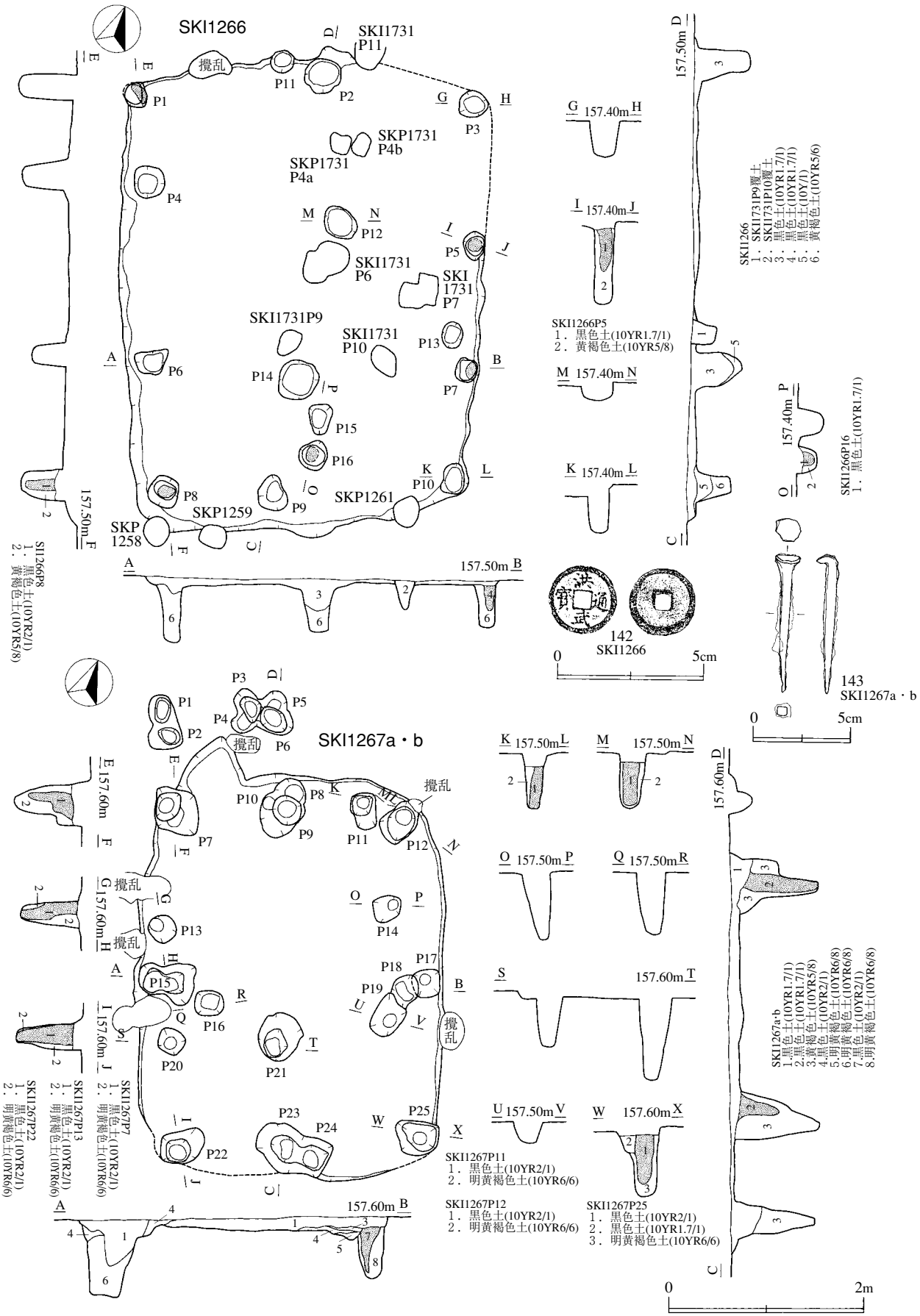
〈出土遺物〉本遺構確認面から土師器片１点、床面から銭貨（洪武通寶）１点が出土した。他に鉄滓２点が出土した。

ＳＫＩ1267ａ・ｂ（第21図）

〈位置・確認状況〉ＪＮ80・81、ＪＯ80・81グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。



第20図　ＳＫＩ217・1262・1263竪穴状遺構とＳＫＩ1262竪穴状遺構出土遺物

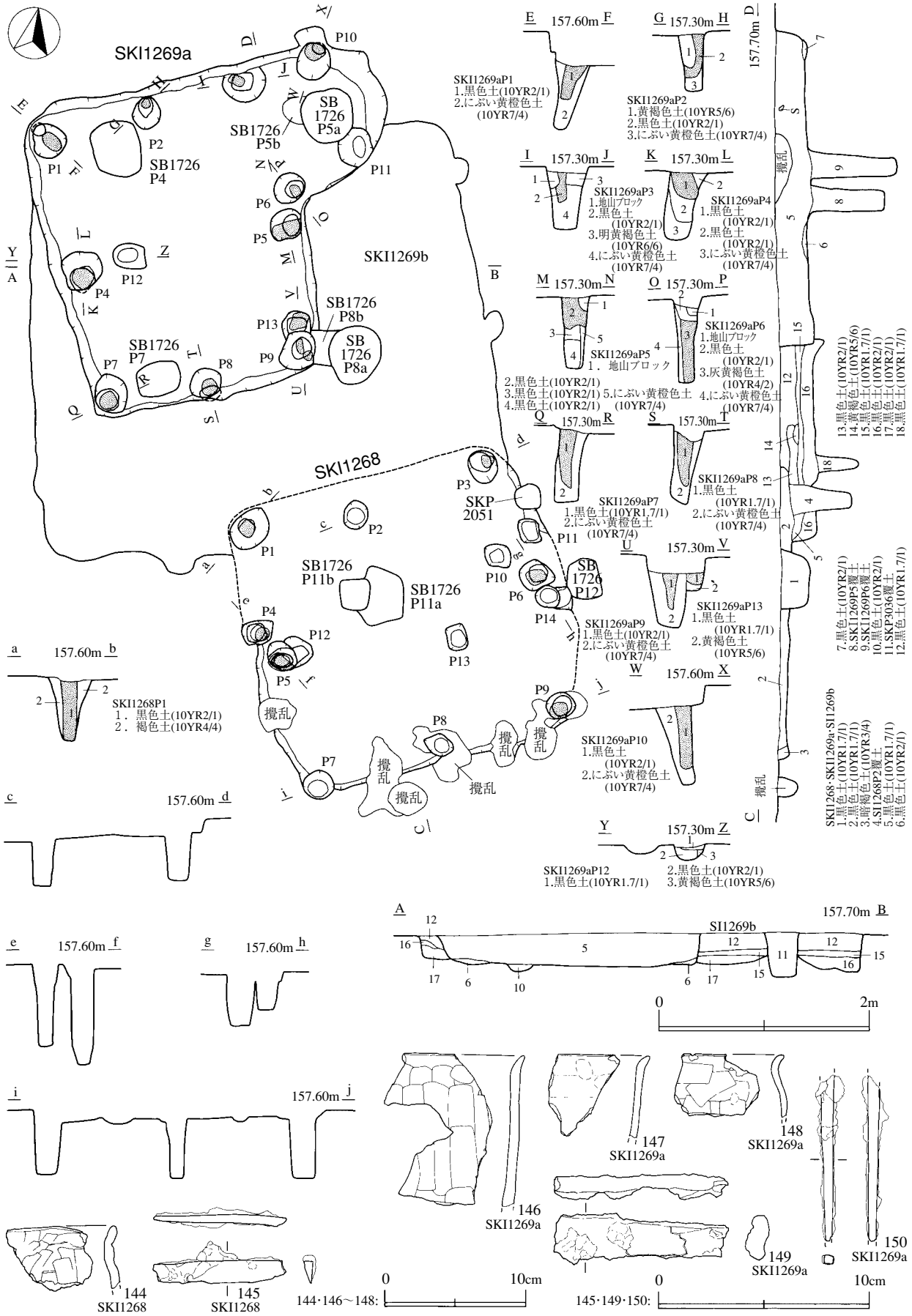


第21図　ＳＫＩ1266・1267ａ・ｂ竪穴状遺構とＳＫＩ1266竪穴状遺構出土遺物

〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉７層に分層した。４層はＰ18の覆土、５層はＰ15の覆土、６・７層はＰ17の覆土である。
〈平面形・規模〉長軸4.08m、短軸3.18mの隅丸長方形を呈する。深さは0.16mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。南壁の一部は確認できなかった。柱穴の多くが２～３個重複していることから、建て替えが行われたと考えられる。新しい時期をＳＫＩ1267ａ、古い時期をＳＫＩ1267ｂとした。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈柱穴〉25個検出した。深さは0.23～0.90mである。ＳＫＩ1267ａにはＰ１・３・７・９・12・15・17・22・23・25、ＳＫＩ1267ｂにはＰ７・８・11・13・14・19～21が伴う可能性がある。
〈その他の付属施設〉北壁西端には長軸0.67m、短軸0.44mの不整形の張り出しをもつ。スロープ状に構築されており、出入り口と考えられる。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片５点、床面から鉄釘１点、鉄滓１点が出土した。他に鉄滓11点が出土した。

ＳＫＩ1268（第22図、図版10）
〈位置・確認状況〉ＪＮ82・83、ＪＯ82・83グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＩ1269ｂ、ＳＢ1726（Ｐ11ａ・11ｂ・12）、ＳＫＰ2051と重複する。本遺構はＳＩ1269ｂより新しく、ＳＢ1726より古い。ＳＫＰ2051との新旧関係は不明である。
〈堆積土〉３層に分層した。２～４層が本遺構覆土で、４層はＰ２覆土である。
〈平面形・規模〉長軸3.02m、短軸2.66mの方形を呈する。深さは0.14mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。東壁の一部と西壁の一部、北壁を確認できなかった。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈柱穴〉14個検出した。深さは0.37～0.94mである。Ｐ１・３～６・９から柱痕を確認した。
〈その他の付属施設〉なし。
〈出土遺物〉覆土中から土師器片５点が出土した。他に土師器片６点、鉄製品１点、鉄滓３点が出土した。

ＳＫＩ1269ａ（第22図、図版８）
〈位置・確認状況〉ＪＯ83・84、ＪＰ84グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。当初、１軒の住居跡として調査を進めたが、土層断面の観察から２軒であることがわかった。新しい方をＳＫＩ1269ａ、古い方をＳＩ1269ｂとした。
〈重複関係〉ＳＩ1269ｂ、ＳＢ1726（Ｐ４・５ａ・５ｂ・７・８）と重複する。本遺構はＳＩ1269ｂより新しく、ＳＢ1726より古い。
〈堆積土〉６層に分層した。５～10層が本遺構覆土で、７層はＰ３覆土、８層はＰ５覆土、９層はＰ６覆土、10層はＰ12覆土である。
〈平面形・規模〉長軸3.48m、短軸3.04mの長方形を呈する。深さは0.33mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈柱穴〉13個検出した。深さは0.14～0.78mである。非常に深く、やや内傾する柱穴が多い。Ｐ１～



第22図　ＳＫＩ1268・1269ａ竪穴状遺構と出土遺物

10・13から柱痕を確認した。

〈その他の付属施設〉東壁北端には長軸1.39m、短軸1.02mの隅丸方形の張り出しをもつ。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片10点、鉄製品２点、鉄滓３点が出土した。

ＳＫＩ1270(第23図、図版10)

〈位置・確認状況〉ＪＰ82・83グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ1633、ＳＢ1629(Ｐ13・16)と重複する。本遺構はＳＢ1629より古い。ＳＫＩ1633との新旧関係は不明である。

〈堆積土〉７層に分層した。１～７層が本遺構覆土である。

〈平面形・規模〉長軸3.00m、短軸2.75mの方形を呈する。深さは0.10mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。北西隅の壁は確認できなかった。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈柱穴〉15個検出した。深さは0.12～0.94mである。

〈その他の付属施設〉なし。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片２点、Ｐ10から鉄滓１点が出土した。他に石器１点が出土した。

ＳＫＩ1632(第23図)

〈位置・確認状況〉ＪＱ84・85、ＪＲ84・85グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＢ1736、ＳＫＰ1973・1974と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉壁が削平されていたため、確認できなかった。

〈平面形・規模〉検出された柱穴10個の位置関係(Ｐ１～10)から、長方形を呈し、長軸3.50m、短軸2.76mと推察される。壁は確認できなかった。

〈底面〉削平されていたため、確認できなかった。

〈柱穴〉10個検出した。深さは0.41～0.70mである。

〈その他の付属施設〉なし。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫＩ1633(第23図、図版10)

〈位置・確認状況〉ＪＯ82・83、ＪＰ82・83グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＩ1269ｂ、ＳＫＩ1270、ＳＢ1629(Ｐ14・17)、ＳＢ1726(Ｐ10・13)、ＳＫＰ1729・2042と重複する。本遺構はＳＩ1269ｂより新しく、ＳＢ1629・1726より古い。ＳＫＩ1270、ＳＫＰ1729・2042との新旧関係は不明である。

〈堆積土〉３層に分層した。８～10層が本遺構覆土で、９・10層はＰ４・５覆土である。

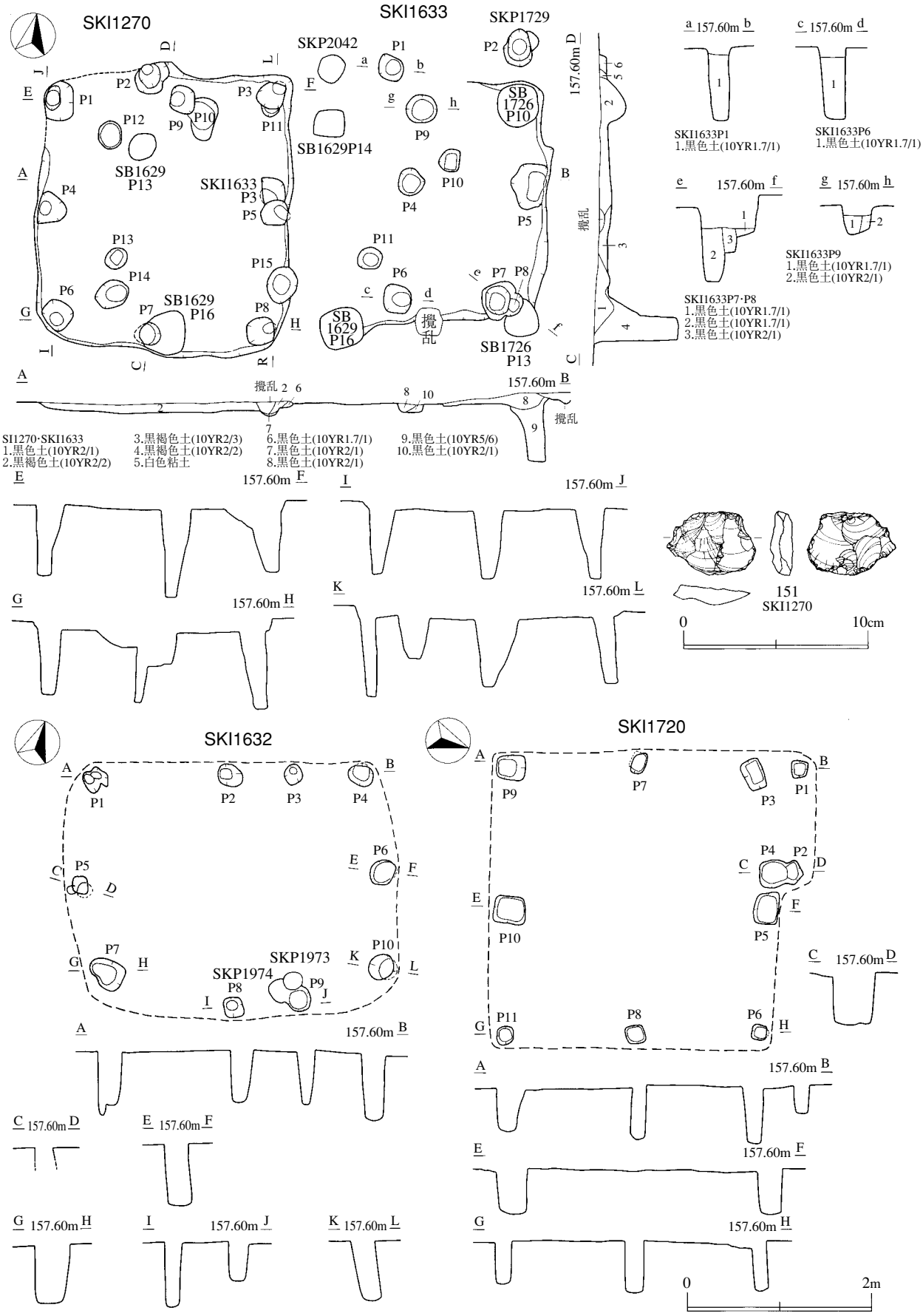
〈平面形・規模〉検出された柱穴11個の位置関係(Ｐ１～11)から、方形を呈し、長軸3.12m、短軸2.98mと推察される。壁は東壁の一部・南壁の一部を確認した。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈柱穴〉11個検出した。深さは0.10～0.84mである。

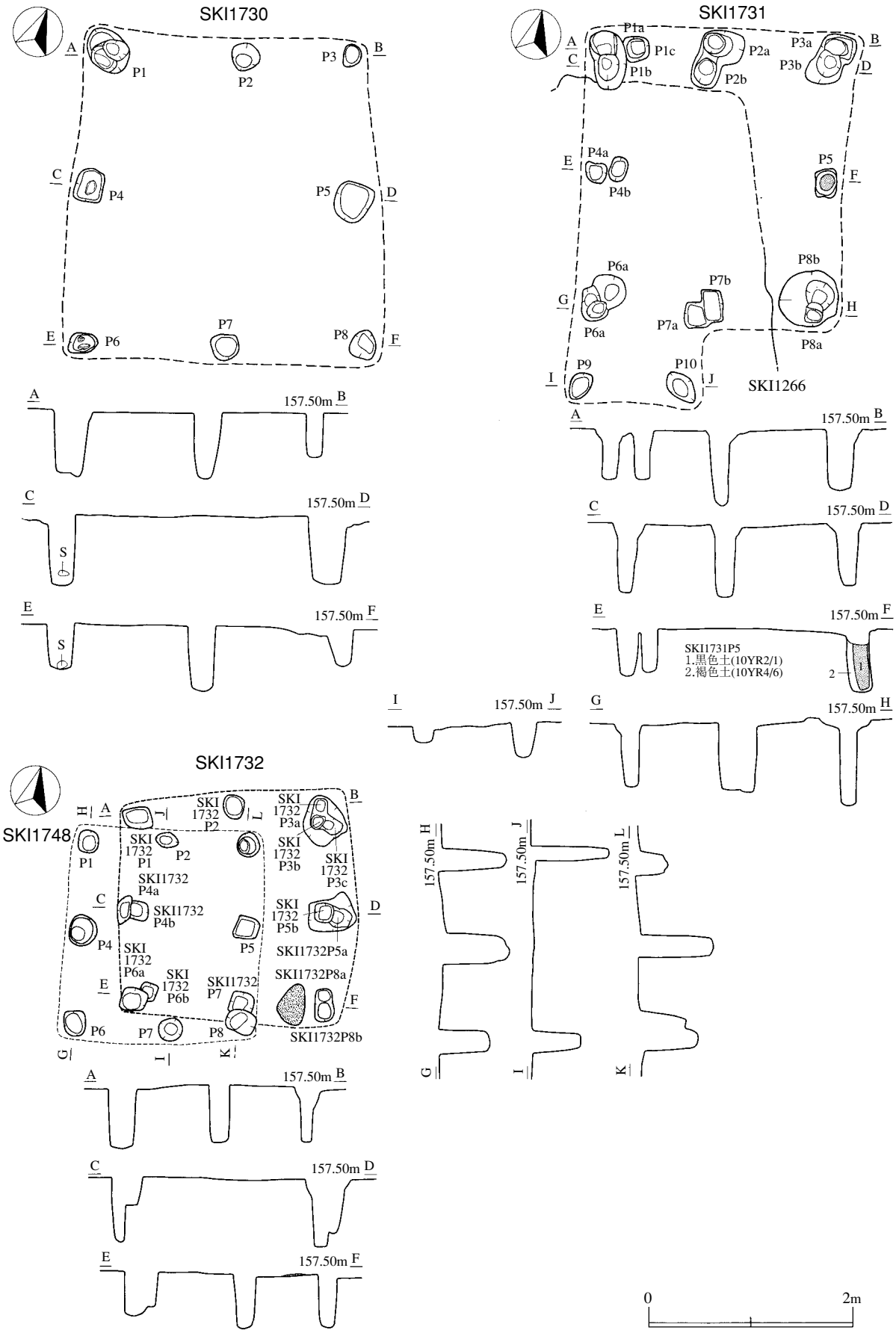
〈その他の付属施設〉なし。

〈出土遺物〉Ｐ16から土師器片３点が出土した。他に鉄滓２点が出土した。



第23図　ＳＫＩ1270・1632・1633・1720竪穴状遺構とＳＫＩ1270竪穴状遺構出土遺物

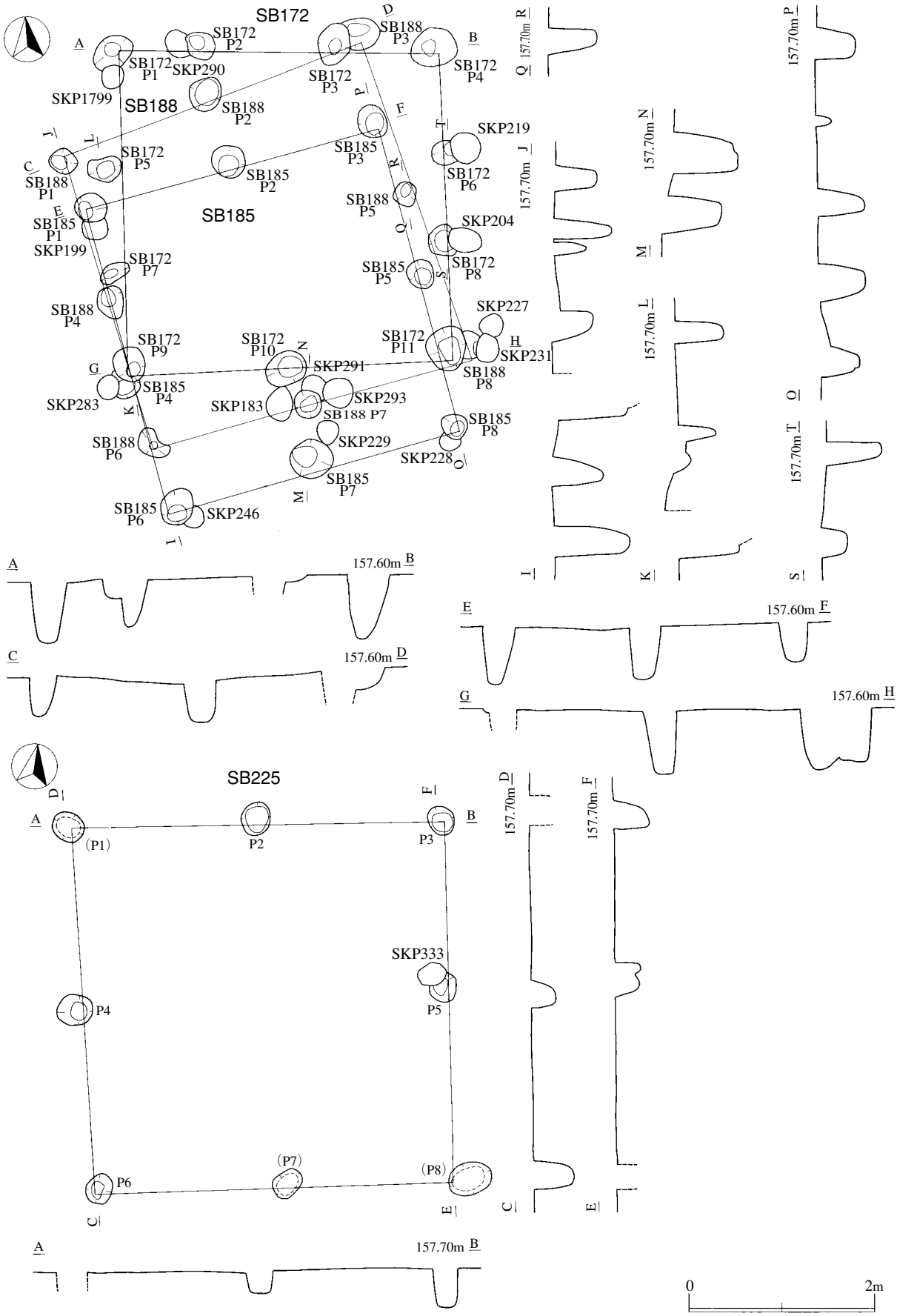
ＳＫＩ1720（第23図）
〈位置・確認状況〉ＪＯ85・86、ＪＰ85・86グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉壁が削平されていたため、確認できなかった。
〈平面形・規模〉検出された柱穴11個の位置関係（Ｐ１～11）から、方形を呈し、長軸3.48m、短軸3.22mと推察される。壁は確認できなかった。
〈底面〉削平されていたため、確認できなかった。
〈柱穴〉11個検出した。深さは0.31～0.62mである。
〈その他の付属施設〉北壁西端には長軸1.12m、短軸0.24mの張り出しをもつ。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＩ1730（第24図）
〈位置・確認状況〉ＪＪ78・79、ＪＫ79グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉壁が削平されていたため、確認できなかった。
〈平面形・規模〉検出された柱穴８個の位置関係（Ｐ１～８）から、方形を呈し、長軸3.08m、短軸2.96mと推察される。壁は確認できなかった。
〈底面〉削平されていたため、確認できなかった。
〈柱穴〉８個検出した。深さは0.35～0.72mである。
〈その他の付属施設〉なし。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＩ1731（第24図）
〈位置・確認状況〉ＪＬ79・80グリッドに位置する。Ｐ１～３・５・８はＶ層で、それ以外の柱穴はＳＫＩ1266の底面精査時に確認した。
〈重複関係〉ＳＫＩ1266と重複する。本遺構が新しい。
〈堆積土〉壁が削平されていたため、確認できなかった。
〈平面形・規模〉検出された柱穴10個の位置関係（Ｐ１～10）から、方形を呈し、長軸3.68m、短軸2.46mと推察される。壁は確認できなかった。各柱穴とも、２～３個重複していることから、数回の建て替えが行われたと考えられる。Ｐ５で柱痕を確認した。
〈底面〉削平されていたため、確認できなかった。
〈柱穴〉10個検出した。深さは0.17～0.84mである。
〈その他の付属施設〉南壁西端には長軸0.96m、短軸0.73mの張り出しをもつ。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＩ1732（第24図）
〈位置・確認状況〉ＪＭ79グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＩ1748と重複する。新旧関係は不明である。
〈堆積土〉壁が削平されていたため、確認できなかった。
〈平面形・規模〉検出された柱穴８個の位置関係（Ｐ１～８）から、方形を呈し、長軸2.44m、短軸2.36



第24図　ＳＫＩ1730・1731・1732・1748竪穴状遺構

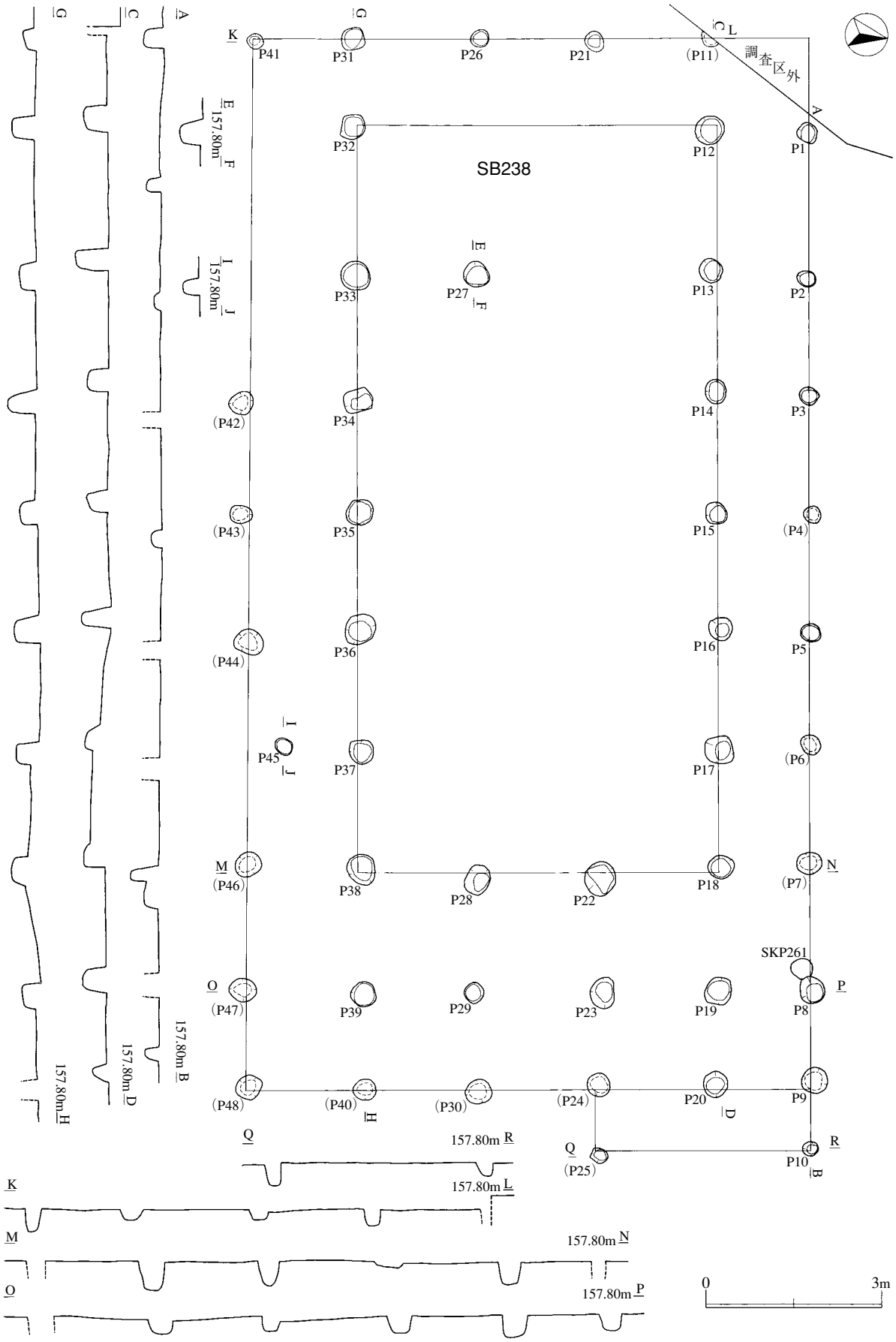
ｍと推察される。壁は確認できなかった。各柱穴とも、２～３個重複していることから、数回の建て替えが行われたと考えられる。
〈底面〉削平されていたため、確認できなかった。
〈柱穴〉８個検出した。深さは0.27～0.65ｍである。
〈その他の付属施設〉本遺構南東隅、Ｐ７とＰ８の間で焼土の広がりを確認した。本遺構に伴うものと考えたい。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＩ1748(第24図)
〈位置・確認状況〉ＪM78・79グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＩ1732と重複する。新旧関係は不明である。
〈堆積土〉壁が削平されていたため、確認できなかった。
〈平面形・規模〉検出された柱穴８個の位置関係(Ｐ１～８)から、方形を呈し、長軸2.12ｍ、短軸1.94ｍと推察される。壁は確認できなかった。
〈底面〉削平されていたため、確認できなかった。
〈柱穴〉８個検出した。深さは0.33～0.86ｍである。
〈その他の付属施設〉なし。
〈出土遺物〉なし。

(３)掘立柱建物跡
ＳＢ172(第25図)
〈位置・確認状況〉ＪM94・95、ＪＮ94・95グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ185(Ｐ４)、ＳＢ188(Ｐ３・８)、ＳＫＰ204・219・290・292・1799と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行３間×北側梁行３間・南側梁行２間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ９)3.50ｍ、北側梁行(Ｐ１～Ｐ４)3.42ｍ、南側梁行(Ｐ９～Ｐ11)3.50ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ185(第25図)
〈位置・確認状況〉ＪM94・95、ＪＮ94・95グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ172(Ｐ９)、ＳＢ188、ＳＫＰ199・228・229・246・283と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行２間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ３～Ｐ８)3.60ｍ、梁行(Ｐ１～Ｐ３)3.48ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ188(第25図)
〈位置・確認状況〉ＪM94・95、ＪＮ94・95グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ172(Ｐ３・Ｐ11)、ＳＢ185、ＳＫＰ231・291と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行２間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ６)3.40ｍ、梁行(Ｐ１～Ｐ３)3.30ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。

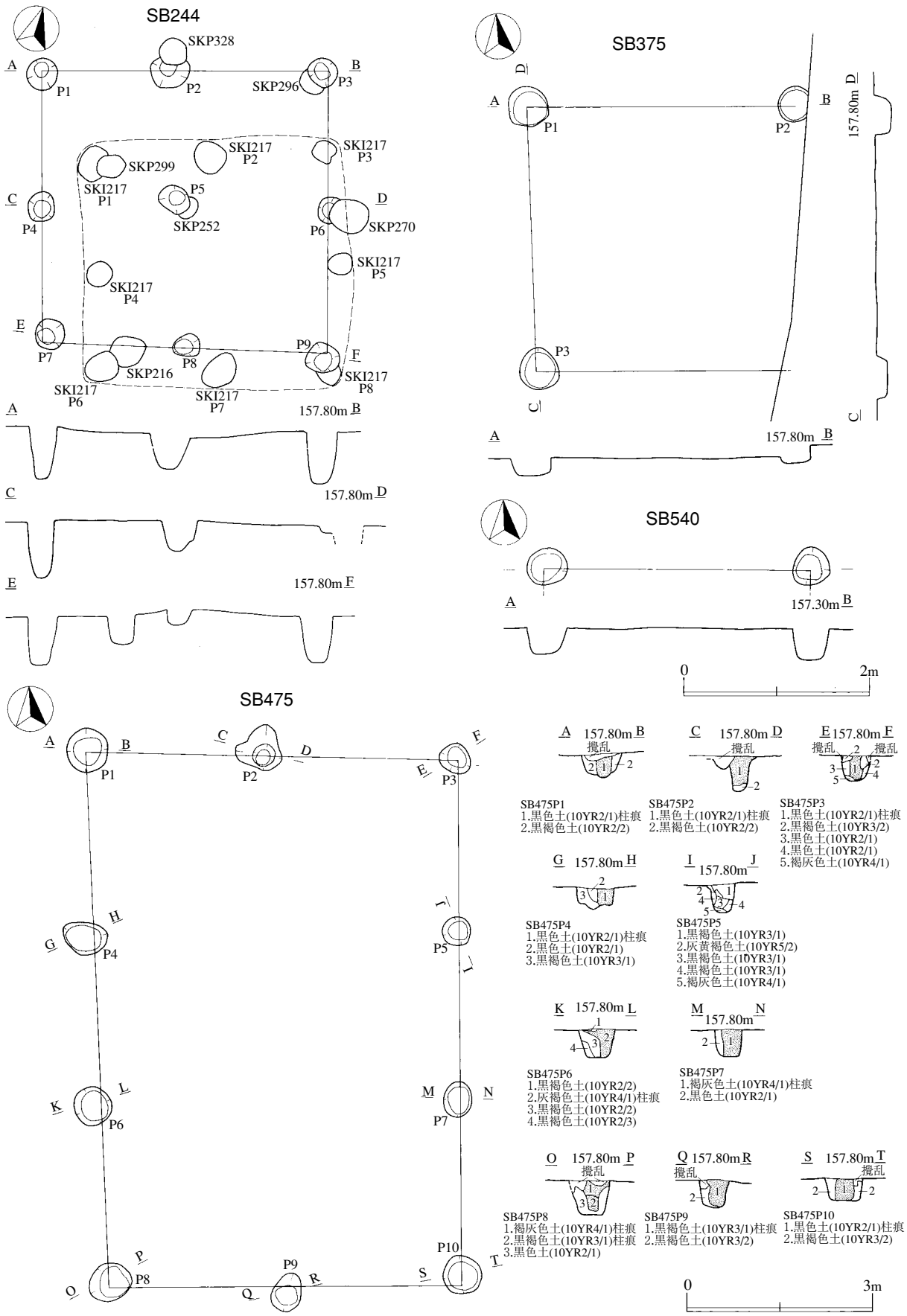


第25図　ＳＢ172・185・188・225掘立柱建物跡

ＳＢ225(第25図)
〈位置・確認状況〉ＪＮ92・93、ＪＯ92・93グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ238、ＳＫＰ333と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行２間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ３)4.00m、梁行(Ｐ１～Ｐ６)3.95mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ238(第26図)
〈位置・確認状況〉ＪＬ91～93、ＪＭ91～94、ＪＮ91～93、ＪＯ90～93、ＪＰ91～93、ＪＱ90～92グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ225、ＳＡ248、ＳＫＰ261と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉四面に庇が付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行６間×梁行３間の規模で、桁行(Ｐ12～Ｐ18)12.60m、梁行(Ｐ12～Ｐ32)6.10mを測る。東側に２間幅、そのほかの三面に１間幅の庇が付く。さらに北東側に１間×１間の張り出しが付く。総間は桁行(Ｐ１～Ｐ10)17.40m、梁行(Ｐ３～Ｐ42)9.75mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ244(第27図、図版12)
〈位置・確認状況〉ＪＮ93、ＪＯ93・94グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＩ217(Ｐ８)、ＳＫＰ252・270・296・328と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行２間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ３～Ｐ９)3.10m、梁行(Ｐ１～Ｐ３)3.00mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ375(第27図)
〈位置・確認状況〉ＪＪ89、ＪＫ88・89グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。南東側は調査区外にかかり、柱穴の有無を確認できなかったが、柱穴の配置から掘立柱建物跡とした。
〈重複関係〉なし。
〈規模〉確認できた範囲では、桁行１間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ２)2.90m、梁行(Ｐ１～Ｐ３)2.85mを測る。各柱穴とも、覆土には大湯浮石のブロックが含まれていた。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ475(第27図、図版11)
〈位置・確認状況〉ＪＬ88～90、ＪＭ88・90、ＪＮ88～90グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈規模〉桁行３間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ８)5.25m、梁行(Ｐ１～Ｐ３)4.00mを測る。Ｐ５を除くすべての柱穴で、柱痕を確認した。各柱穴とも、覆土には大湯浮石のブロックが多く含まれていた。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ527(第28図、図版12)
〈位置・確認状況〉ＪＬ87・88、ＪＭ87・88グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈規模〉桁行２間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ６)3.53m、梁行(Ｐ１～Ｐ３)3.50mを測る。Ｐ１



第26図　ＳＢ238掘立柱建物跡



第27図　ＳＢ244・375・475・540掘立柱建物跡

～４、６の覆土には大湯浮石のブロックが含まれていた。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ540(第27図)

〈位置・確認状況〉ＪＳ109グリッドに位置する。Ⅳ層上面で確認した。南側は調査区外にかかり、柱穴の有無を確認できなかったが、柱穴の規模と配置から掘立柱建物跡とした。

〈重複関係〉なし。

〈規模〉確認できた範囲では、１間の規模で、Ｐ１～Ｐ２の長さは2.82mを測る。覆土には大湯浮石のブロックを含んでいた。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ682(第28図)

〈位置・確認状況〉ＪＱ109・110、ＪＲ109・110グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈規模〉桁行２間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ３)2.52m、梁行(Ｐ１～Ｐ４)2.35mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1152(第28図)

〈位置・確認状況〉ＪＮ97・98、ＪＯ97・98グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。西側は調査区外にかかる可能性も考えられる。

〈重複関係〉ＳＫ1150、ＳＫＰ1154と重複する。本遺構はＳＫ1150より新しい。ＳＫＰ1154との新旧関係は不明。

〈規模〉桁行２間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ５)2.40m、梁行(Ｐ１～Ｐ２)1.86mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1629(第29図)

〈位置・確認状況〉ＪＯ82、ＪＰ81～84、ＪＱ82～84グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ1270・1633、ＳＫＰ1980・2019・2023・2025・2026・2030・2060と重複する。本遺構はＳＫＩ1270・1633より新しい。ＳＫＰ1980・2019・2023・2025・2026・2030・2060との新旧関係は不明である。

〈規模〉庇と張り出しが付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行４間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ２～Ｐ15)8.26m、梁行(Ｐ２～Ｐ４)4.00mを測る。南東側に１間幅の庇が付く。北西側に１間×１間の張り出し部が付く。総間は桁行(Ｐ２～Ｐ18)10.41m、梁行(Ｐ１～Ｐ４)5.98mを測る。Ｐ２・４からは、根石と思われる礫が出土した。

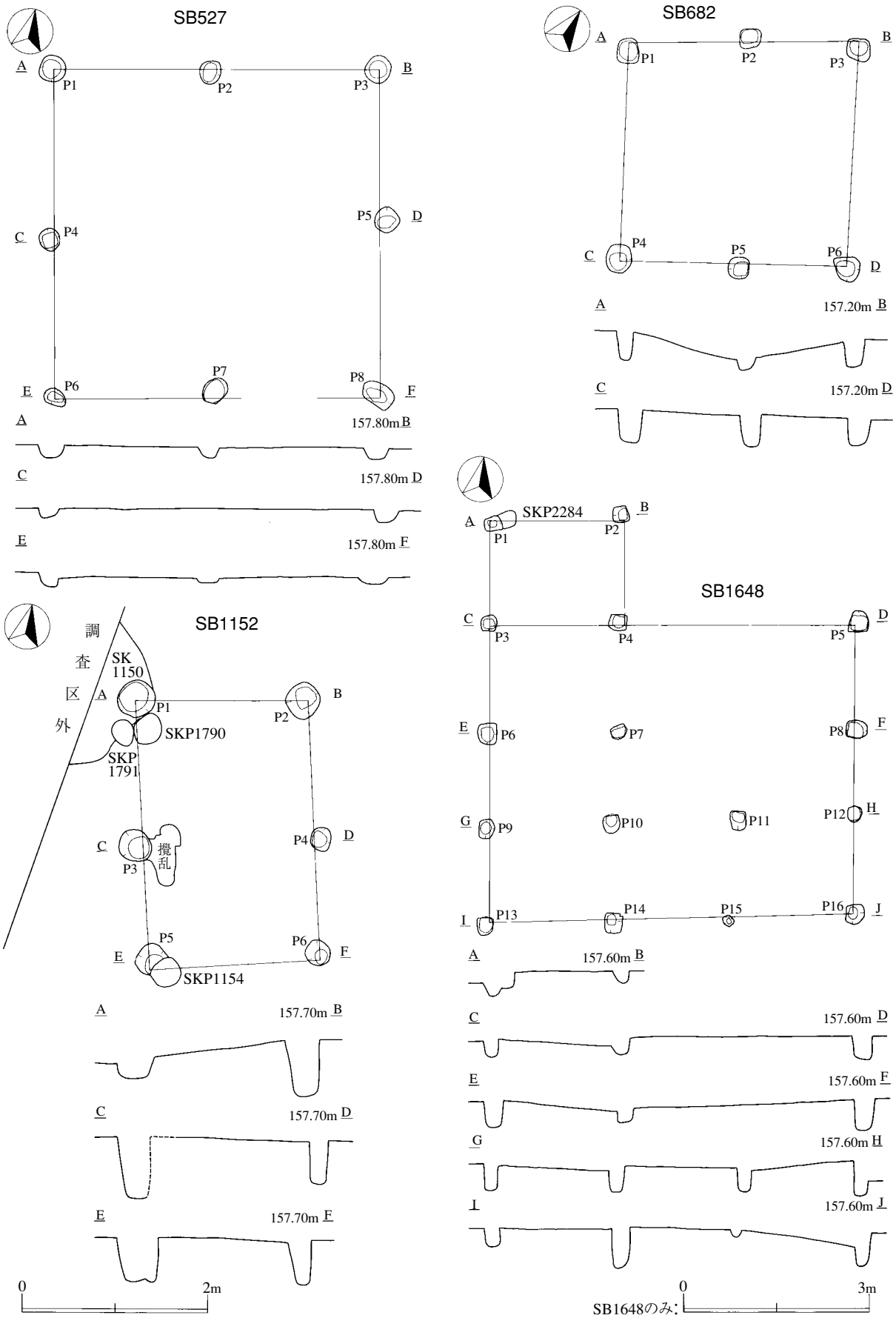
〈出土遺物〉Ｐ４から土師器片が１点、Ｐ17から鉄滓が１点出土した。

ＳＢ1648(第28図)

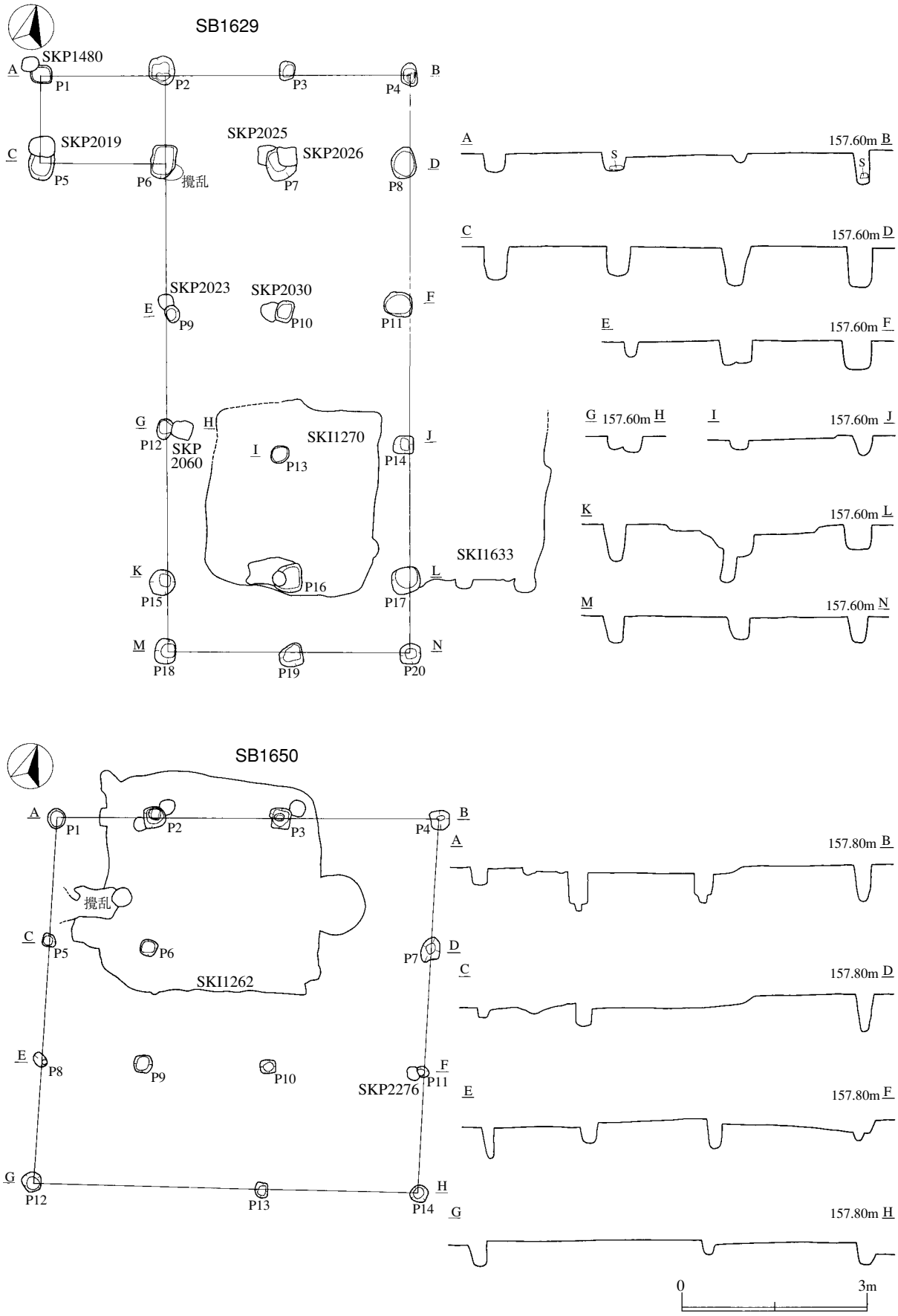
〈位置・確認状況〉ＪＪ73～75、ＪＫ73～75、ＪＬ75グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ2284と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉張り出しが付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行３間×梁行３間の規模で、桁行(Ｐ３～Ｐ５)5.92m、梁行(Ｐ３～Ｐ13)4.84mを測る。北西側に１間×１間の張り出しが付く。総間は桁行(Ｐ１～Ｐ13)6.45mを測る。



第28図　ＳＢ527・682・1152・1648掘立柱建物跡



第29図　ＳＢ1629・1650掘立柱建物跡

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1649（第30図）

〈位置・確認状況〉ＪＩ76、ＪＪ75～77、ＪＫ75～77、ＪＬ75～77、ＪＭ76グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ1262、ＳＢ1650、ＳＡ1747（Ｐ８）・1805、ＳＫＰ2247と重複する。本遺構はＳＫＩ1262より新しい。ＳＢ1650、ＳＡ1747・1805、ＳＫＰ2247との新旧関係は不明である。

〈規模〉張り出しが付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行５間×梁行３間の規模で、桁行（Ｐ３～Ｐ８）9.75m、梁行（Ｐ３～Ｐ24）5.10mを測る。北西側、南東側ともに２間×２間の張り出しが付く。総間は桁行（Ｐ１～Ｐ８）13.72m、梁行（Ｐ５～Ｐ31）8.06mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1650（第29図）

〈位置・確認状況〉ＪＩ75・76、ＪＪ75～77、ＪＫ75～77グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ1262、ＳＢ1649、ＳＫＰ2776と重複する。本遺構はＳＫＩ1262より新しい。ＳＢ1649との新旧関係は不明である。

〈規模〉桁行３間×梁行３間の規模で、桁行（Ｐ１～Ｐ４）6.17m、梁行（Ｐ１～Ｐ12）5.85mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1719（第30図）

〈位置・確認状況〉ＪＰ86・87、ＪＱ85～87、ＪＲ85・86グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ1826・1854・1865・1894と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉張り出しが付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行４間×梁行２間の規模で、桁行（Ｐ１～Ｐ５）6.96m、梁行（Ｐ１～Ｐ12）4.10mを測る。北東側に１間×１間の張り出しが付く。総間は桁行（Ｐ１～Ｐ６）8.73mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1726（第31図）

〈位置・確認状況〉ＪＮ82～84、ＪＯ82～84グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＩ1269ｂ、ＳＫＩ1268・1269ａ・1633、ＳＫＰ2001・2004・2044・2065・2067と重複する。本遺構はＳＩ1269ｂ、ＳＫＩ1268・1269ａ・1633より新しく、ＳＫＰ2001より古い。ＳＫＰ2004・2044・2065・2067との新旧関係は不明である。

〈規模〉庇が付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行４間×梁行２間の規模で、桁行（Ｐ１～Ｐ13）8.35m、梁行（Ｐ１～Ｐ３）3.60mを測る。南側に１間幅の庇が付く。総間は桁行（Ｐ１～Ｐ16）9.50mを測る。Ｐ５ａからは、根石と思われる礫が出土した。

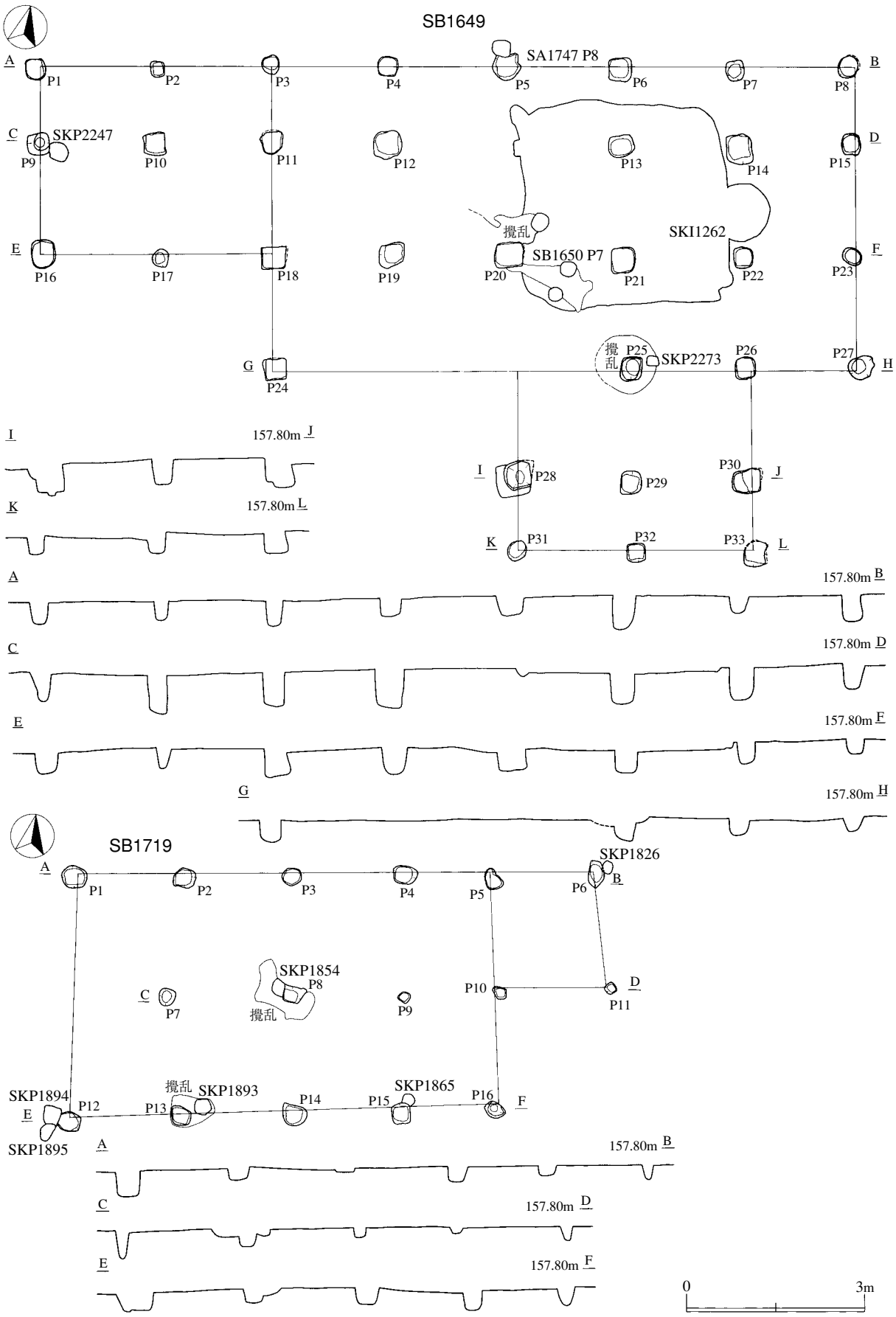
〈出土遺物〉Ｐ13から鉄滓１点が出土した。

ＳＢ1736（第31図）

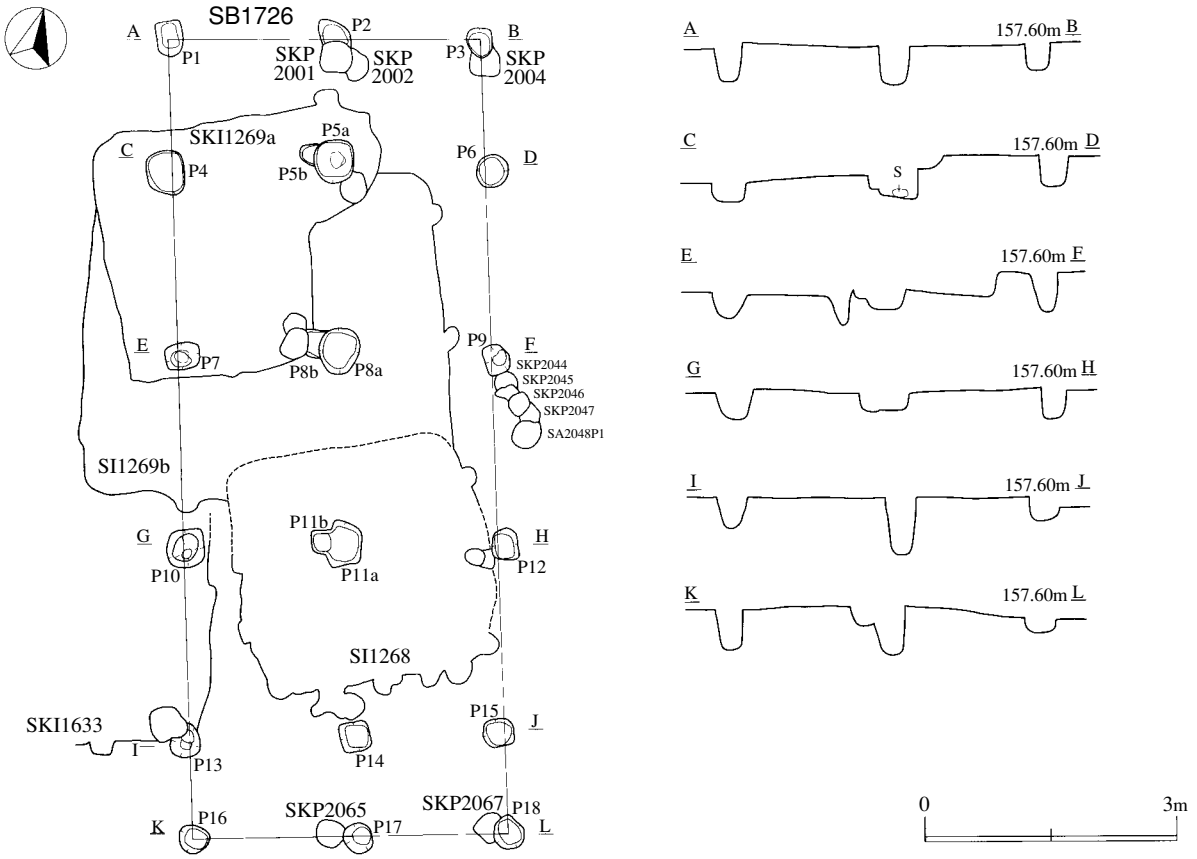
〈位置・確認状況〉ＪＰ85、ＪＱ85、ＪＲ84・85グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

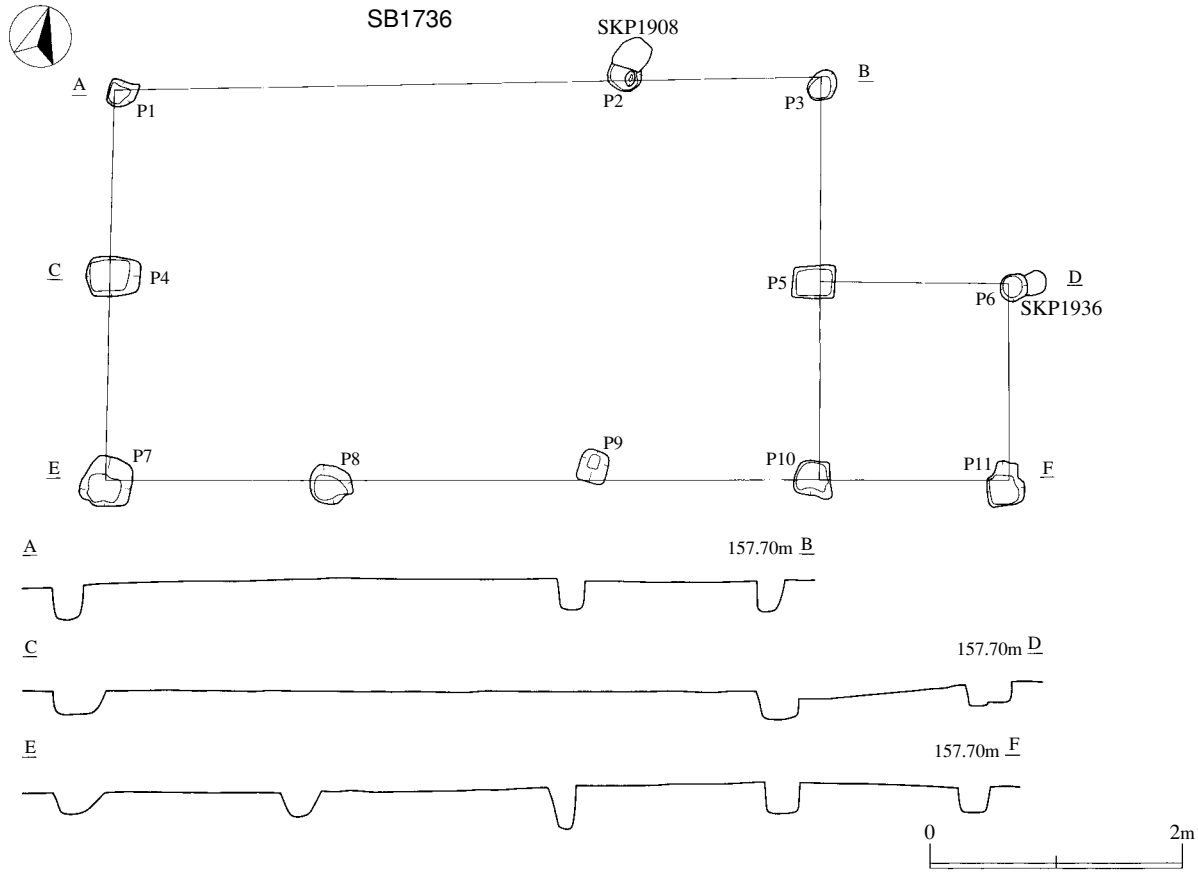
〈重複関係〉ＳＫＩ1632、ＳＫＰ1908・1936と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉張り出しが付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行３間×梁行２間の規模で、桁行（Ｐ１～Ｐ３）5.62m、梁行（Ｐ１～Ｐ７）3.10mを測る。南東側に１間×１間の張り出し部が付く。総間は桁行

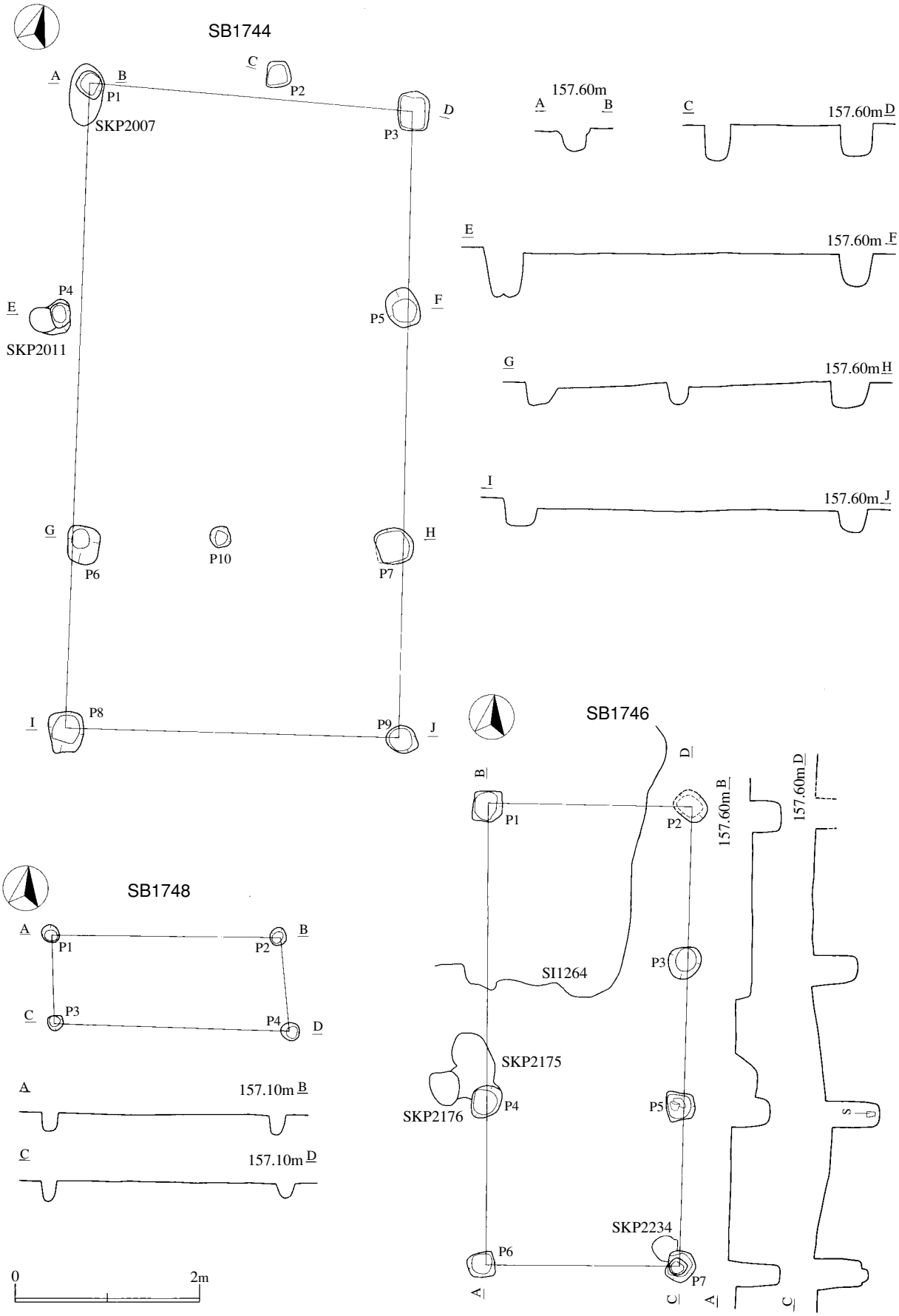


第30図　ＳＢ1649・1719掘立柱建物跡





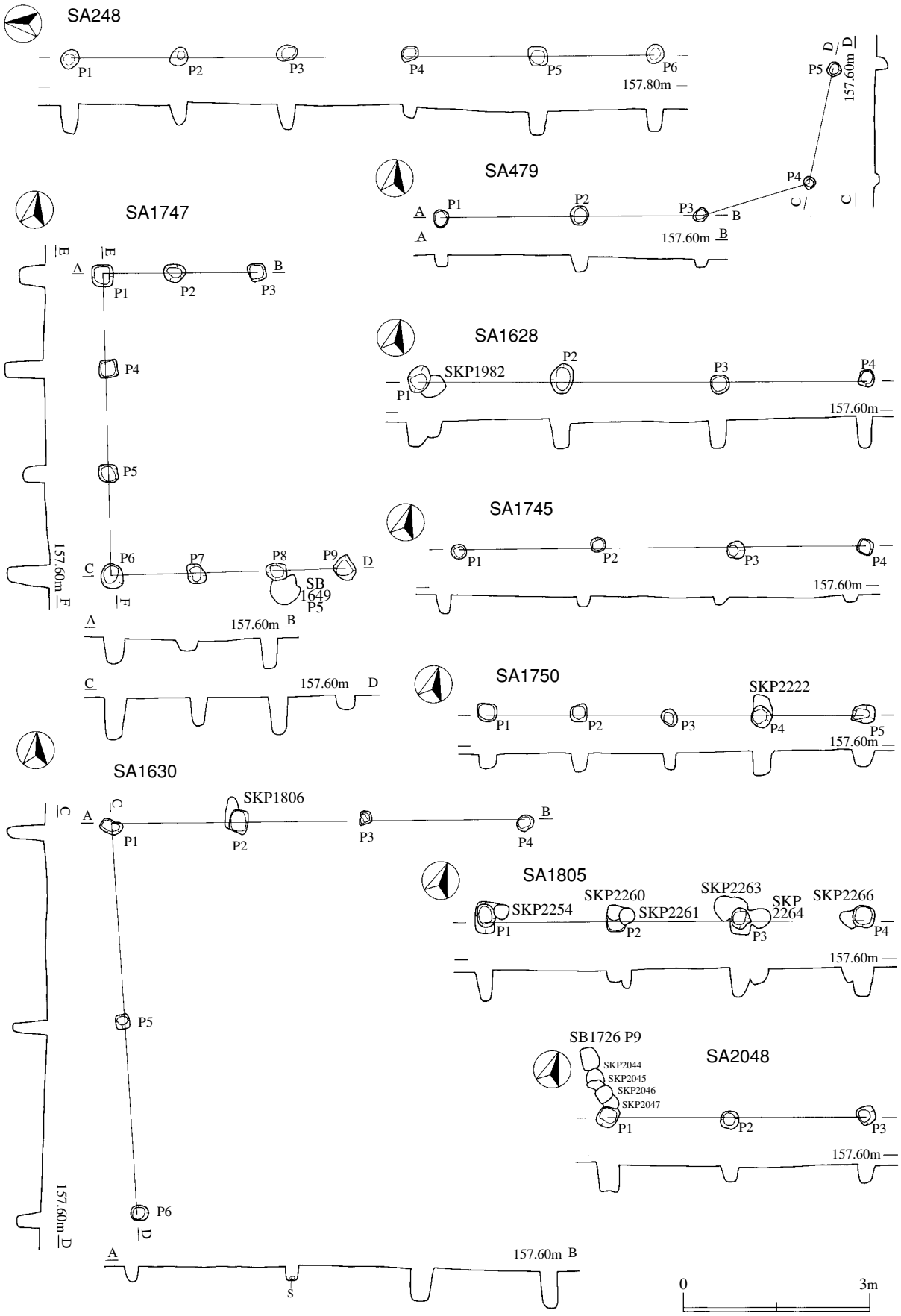
第31図　ＳＢ1726・1736掘立柱建物跡



第32図　ＳＢ1744・1746・1784掘立柱建物跡

(Ｐ７～Ｐ11)7.17ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ1744(第32図)
〈位置・確認状況〉ＪＭ83・84、ＪＮ82～84グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＡ2048、ＳＫＰ2007・2011と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行３間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ８)7.00ｍ、梁行(Ｐ１～Ｐ３)3.51ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ1746(第32図)
〈位置・確認状況〉ＪＭ77・78、ＪＮ77・78グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＩ1264、ＳＫＰ2177・2234と重複する。本遺構はＳＩ1264より新しい。ＳＫＰ2177・2234との新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行２間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ６)5.00ｍ、梁行(Ｐ１～Ｐ２)は2.20ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ1784(第32図)
〈位置・確認状況〉ＪＬ107、ＪＭ107グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈規模〉桁行１間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ２)2.45ｍ、梁行(Ｐ１～Ｐ３)0.96ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。

(４)柱穴列
ＳＡ248(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＰ92～94グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ238と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さ9.44ｍを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ479(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＪ100、ＪＫ99・100、ＪＬ99グリッドに位置する。ＳＩ158の南側のＶ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈規模〉長さは、Ｐ１からＰ３までが4.16ｍ、Ｐ３からＰ４までが1.84ｍ、Ｐ４からＰ５までが1.86ｍを測る。Ｐ５を除く各柱穴の覆土には、大湯浮石のブロックが含まれていた。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ1628(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＯ85、ＪＰ84・85、ＪＱ84グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ1982と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さ7.18ｍを測る。
〈出土遺物〉Ｐ３から鉄滓１点が出土した。



第33図　ＳＡ248・479・1628・1630・1745・1747・1750・1805・2048柱穴列

ＳＡ1630(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＱ87、ＪＲ87、ＪＳ85～87グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ1806と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さは、Ｐ１からＰ４までが6.61m、Ｐ１からＰ６までが6.21mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ1745(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＫ80、ＪＬ80、ＪＭ80グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈規模〉長さ6.52mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ1747(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＫ77・78、ＪＬ77・78グリッドに位置する。Ⅳ～Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ1649(Ｐ５)、ＳＡ1750と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さは、Ｐ１からＰ３までが2.49m、Ｐ１からＰ６までが4.81m、Ｐ６から９までが3.75mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ1750(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＫ77、ＪＬ77グリッドに位置する。Ⅳ～Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＡ1747、ＳＫＰ2222と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さ6.00mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ1805(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＫ76、ＪＬ76、ＪＭ76グリッドに位置する。Ⅳ～Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ1649、ＳＫＰ2254・2260・2261・2263・2264・2266と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さ6.06mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ2048(第33図)
〈位置・確認状況〉ＪＭ83・84、ＪＮ83グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ1744、ＳＫＰ2047と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さ4.10mを測る。
〈出土遺物〉なし。

(５)柱穴様ピット

柱穴様ピットは、調査区全体で1204基を検出した。その分布状態は、調査区全体に散在し、南側、中央西寄りでは密集している。これらの平面形は径0.08～0.80mで、多くは方形や楕円形を呈する。覆土は黒色土(10YR1.7/1)～黒褐色(10YR2/3)で、ほとんどが硬く締まっている。確認面からの深さ及

び断面形は一様ではない。調査区北隅、南側、中央西寄り・南寄りで22棟の掘立柱建物跡、調査区南側、中央西寄り・北寄りで９条の柱穴列を検出したが、それ以外の柱穴様ピットについては規則的な配列は認めらなかった。そのうち、数十基の柱穴様ピットで柱痕を確認したが、掘立柱建物跡の柱穴かどうかは不明である。覆土中から遺物が出土した柱穴様ピットは1204基中11基ある。その内訳は、ＳＫＰ811から土師器片２点、ＳＫＰ1165から土師器片５点、ＳＫＰ1636から土師器片１点、鉄滓１点、ＳＫＰ1637から鉄滓２点、ＳＫＰ1639・1722から砥石各１点、ＳＫＰ1640・1727から土師器片各１点、ＳＫＰ1642から青磁片１点、ＳＫＰ1643から土師器片１点、鉄製品１点、ＳＫＰ1721から土師器片３点が出土した。ＳＫＰ1643出土の土師器片は、ＳＢ1629（Ｐ４）から出土した土師器片と接合する。出土した遺物から、ＳＫＰ811・1165・1636・1640・1643・1721・1727は平安時代、ＳＫＰ1642は中世に属すると考えられるが、他の柱穴様ピットは遺物を出土しなかったため、その時期を明確にできなかった。

（６）溝跡

ＳＤ159（第34図、図版14）

〈位置・確認状況〉ＪＪ103、ＪＫ102・103、ＪＬ102、ＪＭ102、ＪＮ101・102グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。西端は調査区外にのび、東端は斜面に開口する。

〈重複関係〉ＳＩ157と重複する。本遺構が新しい。

〈堆積土〉１層である。

〈規模〉確認長21.55m、幅0.25～0.46m、深さ0.08～0.19mであり、西側に向かって緩やかに傾斜する。断面はＵ字状を呈する。

〈出土遺物〉なし。

ＳＤ160（第35図、図版13）

〈位置・確認状況〉ＪＧ98・99、ＪＨ98・99、ＪＩ97・98、ＪＪ97・98、ＪＫ97、ＪＬ96・97、ＪＭ96・97、ＪＮ96、ＪＯ95・96グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。西端は調査区外にのび、東端は斜面に開口する。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉23層に分層した。堆積状況から自然堆積と判断した。

〈規模〉確認長33.85m、幅1.18～3.16mであり、西端から東へ約6.00mの地点で一段段差を生じ、東に向かって徐々に深くなる。深さは東端で2.24m、西端で0.45mである。断面は東側でＶ字状、西側でＵ字状を呈する。西側の底面で工具痕を確認した。ＳＤ3039と同じ溝の可能性もある。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片６点、砥石１点、縄文土器片１点が出土した。

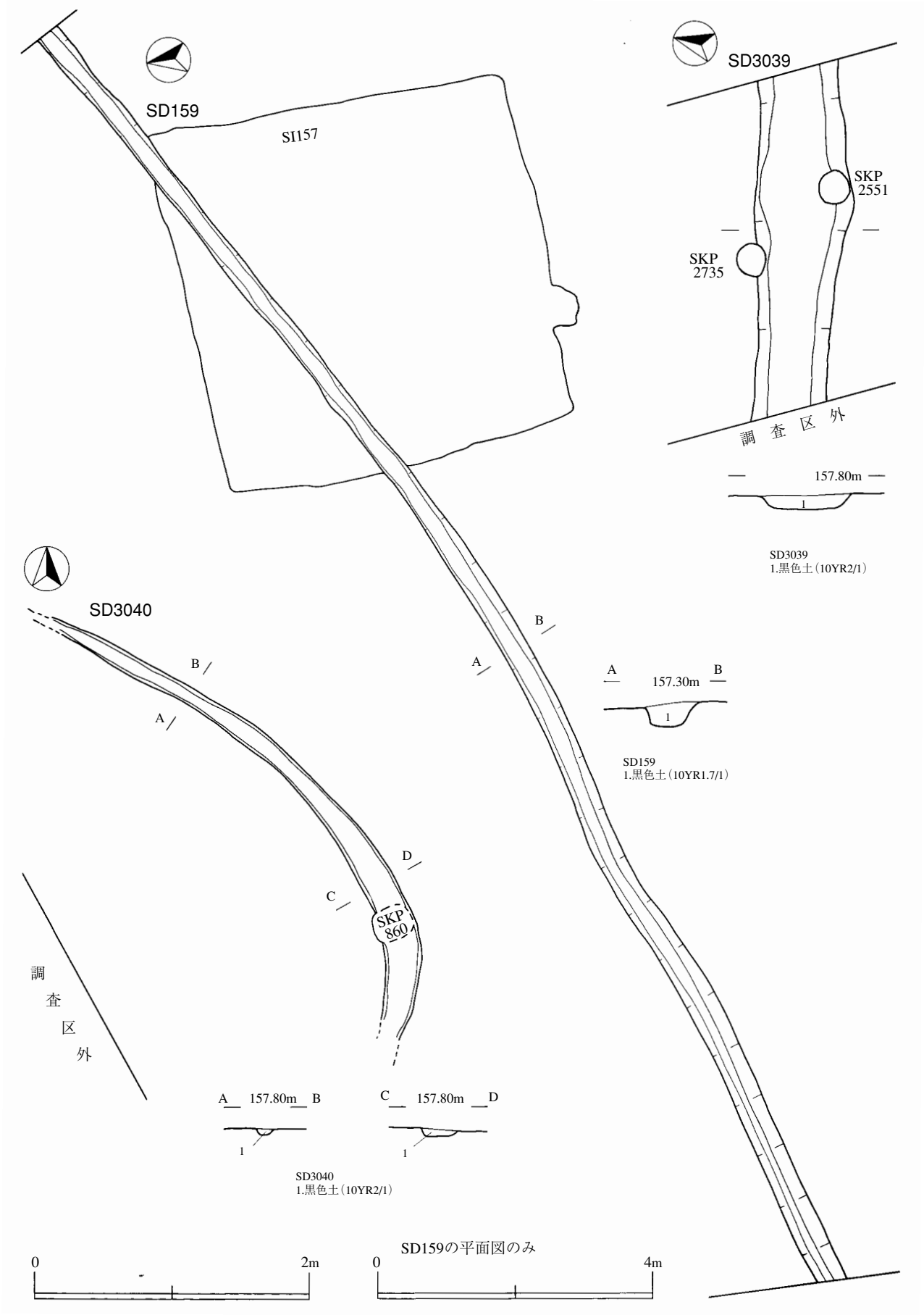
ＳＤ3039（第34図）

〈位置・確認状況〉ＫＣ93・94グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。両端は調査区外にのびる。

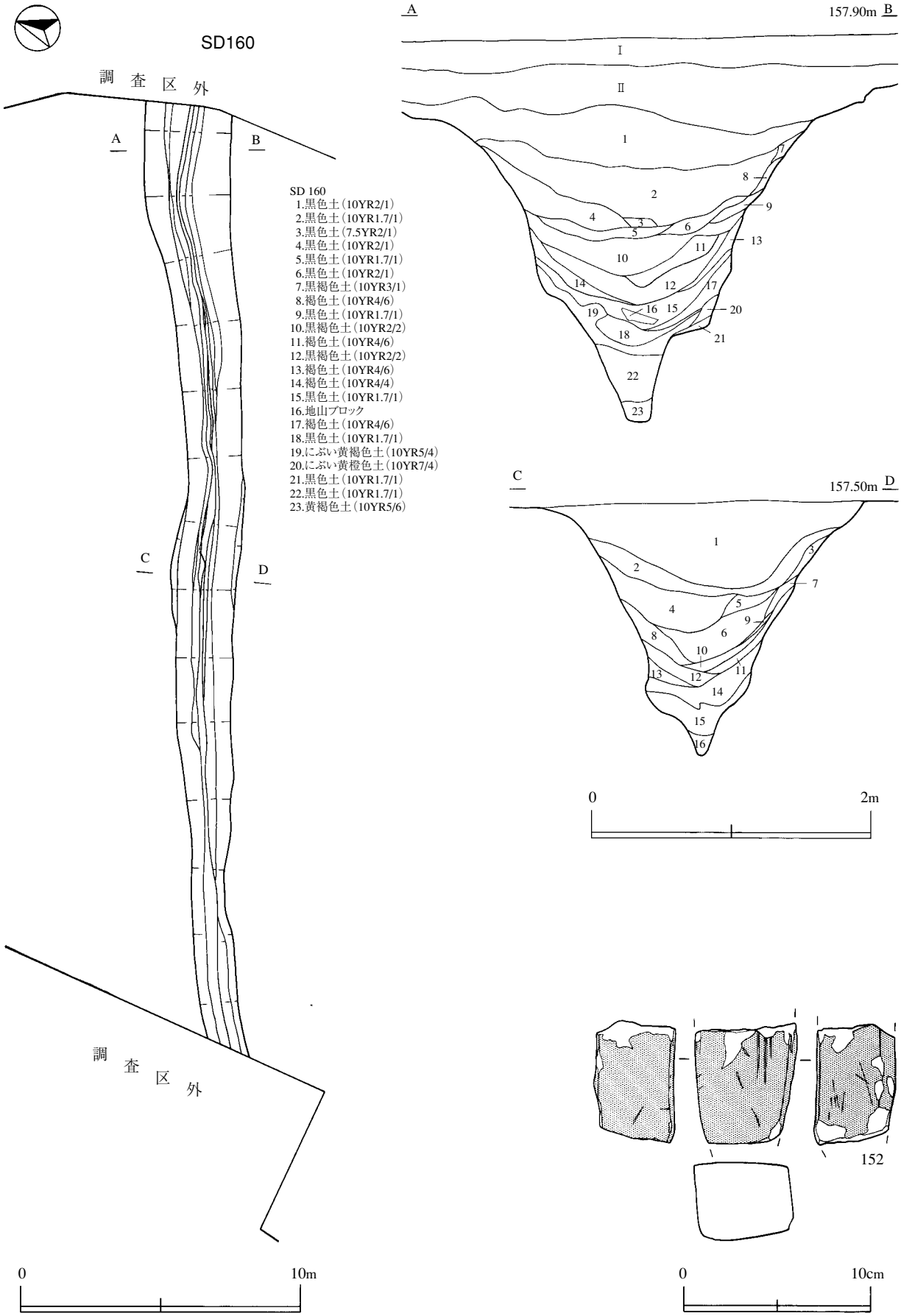
〈重複関係〉ＳＫＰ2551・2735と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉確認された範囲で平面はＩ字状を呈する。確認長2.43m、幅0.52～0.72m、深さ0.10～0.13mである。断面はＵ字状を呈する。ＳＤ160と同じ溝の可能性もある。



第34図　ＳＤ159・3039・3040溝跡



第35図　ＳＤ160溝跡と出土遺物

〈出土遺物〉なし。

ＳＤ3040（第34図）

〈位置・確認状況〉ＫＡ91、ＫＢ91グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。両端は削平されており確認できなかった。

〈重複関係〉ＳＫＰ860と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉１層である。

〈規模〉確認された範囲で平面は弓状を呈する。確認長4.27m、幅0.09～0.37m、深さ0.03～0.09mである。断面はＵ字状を呈する。

〈出土遺物〉なし。

（７）焼土遺構

ＳＮ471（第36図）

〈位置・確認状況〉ＪＩ91グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。東側は調査区外にかかる。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉７層に分層した。６層は藁状と思われる炭化物層である。

〈平面形・規模〉確認できた範囲では、長軸0.75m、短軸0.44m、深さは0.33mを測る。西側にやや傾斜する溝状の遺構である。

〈底面〉被熱し硬化している。

〈出土遺物〉なし。

（８）土坑

ＳＫ151（第37図）

〈位置・確認状況〉ＪＦ75グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉２層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸1.52m、短軸1.03mの楕円形を呈する。深さは0.13mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ152（第37図）

〈位置・確認状況〉ＪＦ75・ＪＧ75グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

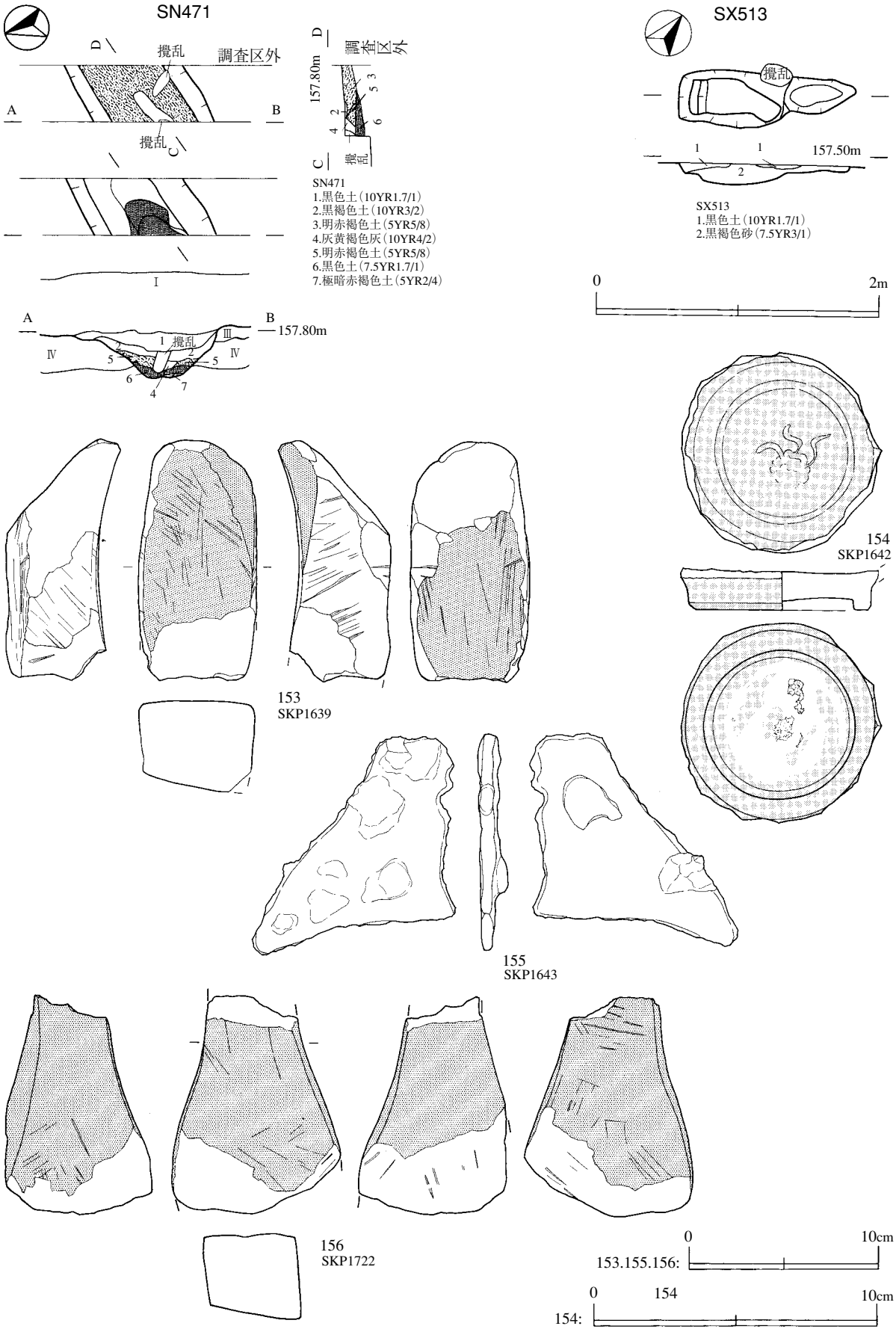
〈重複関係〉ＳＫＰ153・154と重複する。本遺構が古い。

〈堆積土〉５層に分層した。２～６層が本遺構覆土である。堆積状況から自然堆積と判断した。

〈平面形・規模〉長軸1.24m、短軸1.18mの隅丸方形を呈する。深さは0.20mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。



第36図　ＳＮ471焼土遺構、ＳＸ513その他の遺構、ＳＫＰ1639・1642・1643・1722柱穴様ピット出土遺物

ＳＫ161（第37図）
〈位置・確認状況〉ＪＮ100・101グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉５層に分層した。
〈平面形・規模〉長軸1.09m、短軸1.02mの円形を呈する。深さは0.36mである。断面は袋状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ162（第37図）
〈位置・確認状況〉ＪＮ100グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉７層に分層した。堆積状況から自然堆積と判断した。
〈平面形・規模〉長軸1.45m、短軸1.39mの円形を呈する。深さは0.50mである。断面は袋状を呈する。
〈底面〉凹凸がある。
〈出土遺物〉覆土中から縄文土器片１点が出土した。
ＳＫ163（第37図）
〈位置・確認状況〉ＪＭ98グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉１層である。
〈平面形・規模〉長軸1.25m、短軸1.00mの楕円形を呈する。深さは0.10mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。底面の中央やや東寄りに、本遺構に伴うと考えられる柱穴状の窪みを確認した。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ164（第37図）
〈位置・確認状況〉ＪＬ109グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉２層に分層した。
〈平面形・規模〉長軸0.85m、短軸0.84mの円形を呈する。深さは0.26mである。断面は袋状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。底面の中央やや北寄りに、本遺構に伴うと考えられる柱穴状の窪みを確認した。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ170（第37図）
〈位置・確認状況〉ＪＯ110グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉１層である。堆積状況から人為堆積と判断した。
〈平面形・規模〉長軸1.12m、短軸1.08mの円形を呈する。深さは0.22mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉砥石１点が出土した。

ＳＫ171（第37図）

〈位置・確認状況〉ＪＯ109グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。堆積状況から自然堆積と判断した。

〈平面形・規模〉長軸0.99ｍ、短軸0.75ｍの円形を呈する。深さは0.15ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ274（第37図）

〈位置・確認状況〉ＪＭ110・111グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＩ156ａ・ｂ、ＳＫＰ273と重複する。本遺構はＳＩ156ａ・ｂより新しく、ＳＫＰ273より古い。

〈堆積土〉２層に分層した。堆積状況から自然堆積と判断した。

〈平面形・規模〉長軸1.28ｍ、短軸0.72ｍの楕円形を呈する。深さは0.08ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ564（第37図）

〈位置・確認状況〉ＪＫ110、ＪＬ110グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉３層に分層した。堆積状況から自然堆積と判断した。

〈平面形・規模〉長軸0.84ｍ、短軸0.73ｍの円形を呈する。深さは0.24ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ565（第37図）

〈位置・確認状況〉ＪＭ108グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉２層に分層した。堆積状況から自然堆積と判断した。

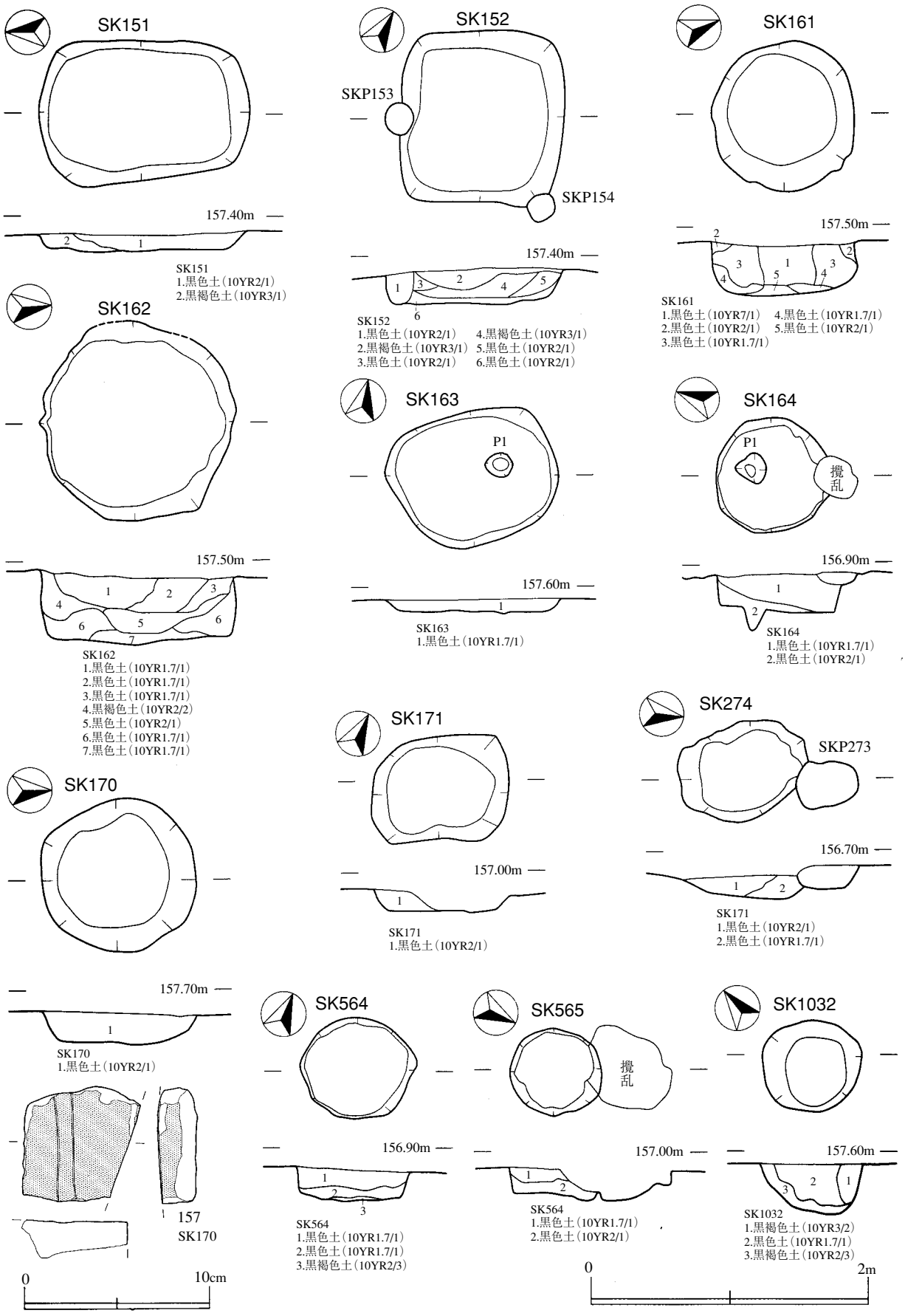
〈平面形・規模〉本遺構北側は攪乱により削平されている。長軸0.68ｍ、短軸0.62ｍの円形を呈する。深さは0.14ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ960（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＰ93・94グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。



第37図　ＳＫ151・152・161・162・163・164・170・171・274・564・565・1032土坑と
ＳＫ170土坑出土遺物

〈重複関係〉ＳＫＰ998と重複する。新旧関係は不明である。
〈堆積土〉１層である。
〈平面形・規模〉長軸1.16m、短軸1.05mの楕円形を呈する。深さは0.12mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1032（第37図）
〈位置・確認状況〉ＫＢ92グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉３層に分層した。
〈平面形・規模〉長軸0.71m、短軸0.66mの円形を呈する。深さは0.36mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉中華鍋底状である。
〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1150（第38図）
〈位置・確認状況〉ＪＯ97・98グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。西側が調査区外にある。
〈重複関係〉ＳＢ1152、ＳＫＰ1790・1791と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉土層観察用ベルトが崩落したため、観察できなかった。
〈平面形・規模〉長軸1.64m、残存部短軸0.64mの円形を呈するものと推察される。深さは0.30mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1164（第38図）
〈位置・確認状況〉ＪＭ110グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＩ156ａと重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉２層に分層した。
〈平面形・規模〉長軸0.56m、短軸0.52mの円形を呈する。深さは0.09mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1601（第38図）
〈位置・確認状況〉ＪＭ84・ＪＮ84グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉１層である。
〈平面形・規模〉長軸1.12m、短軸1.10mの円形を呈する。深さは0.18mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉覆土中から土師器片３点が出土した。

ＳＫ1622（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＱ86・87グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸1.72m、短軸1.25mの方形を呈する。深さは0.29mである。断面は袋状を呈する。

〈底面〉平坦である。南側に段をもつ。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1641（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＯ81・82グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ2550・3022と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉長軸1.98m、短軸1.16mの不整形を呈する。深さは0.25mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1737（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＭ110・111、ＪＮ110・111グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＩ156ａ・ｂと重複する。本遺構が古い。

〈堆積土〉２層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸2.28m、短軸1.84mの楕円形を呈する。深さは0.31mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1834（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＯ87、ＪＰ87グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ1833と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉土層観察用ベルトが崩落したため、観察できなかった。

〈平面形・規模〉長軸1.28m、短軸1.06mの円形を呈する。深さは0.23mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ2082（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＯ81・82、ＪＰ81グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ1637・2083と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉長軸1.68m、短軸1.44mの不整形を呈する。深さは0.16mである。断面は緩やかな

Ｕ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。東側に段をもつ。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ2461（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＧ80グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉土層観察用ベルトが崩落したため、観察できなかった。

〈平面形・規模〉長軸0.61ｍ、残存部短軸0.38ｍの楕円形を呈するものと推察される。深さは0.29ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ2473（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＤ82グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉長軸0.72ｍ、短軸0.71ｍの円形を呈する。深さは0.17ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ2476（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＣ82グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。南東側が調査区外にある。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉長軸0.78ｍ、残存部短軸0.43ｍの不整形を呈するものと推察される。深さは0.24ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ2477（第38図）

〈位置・確認状況〉ＪＣ83グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

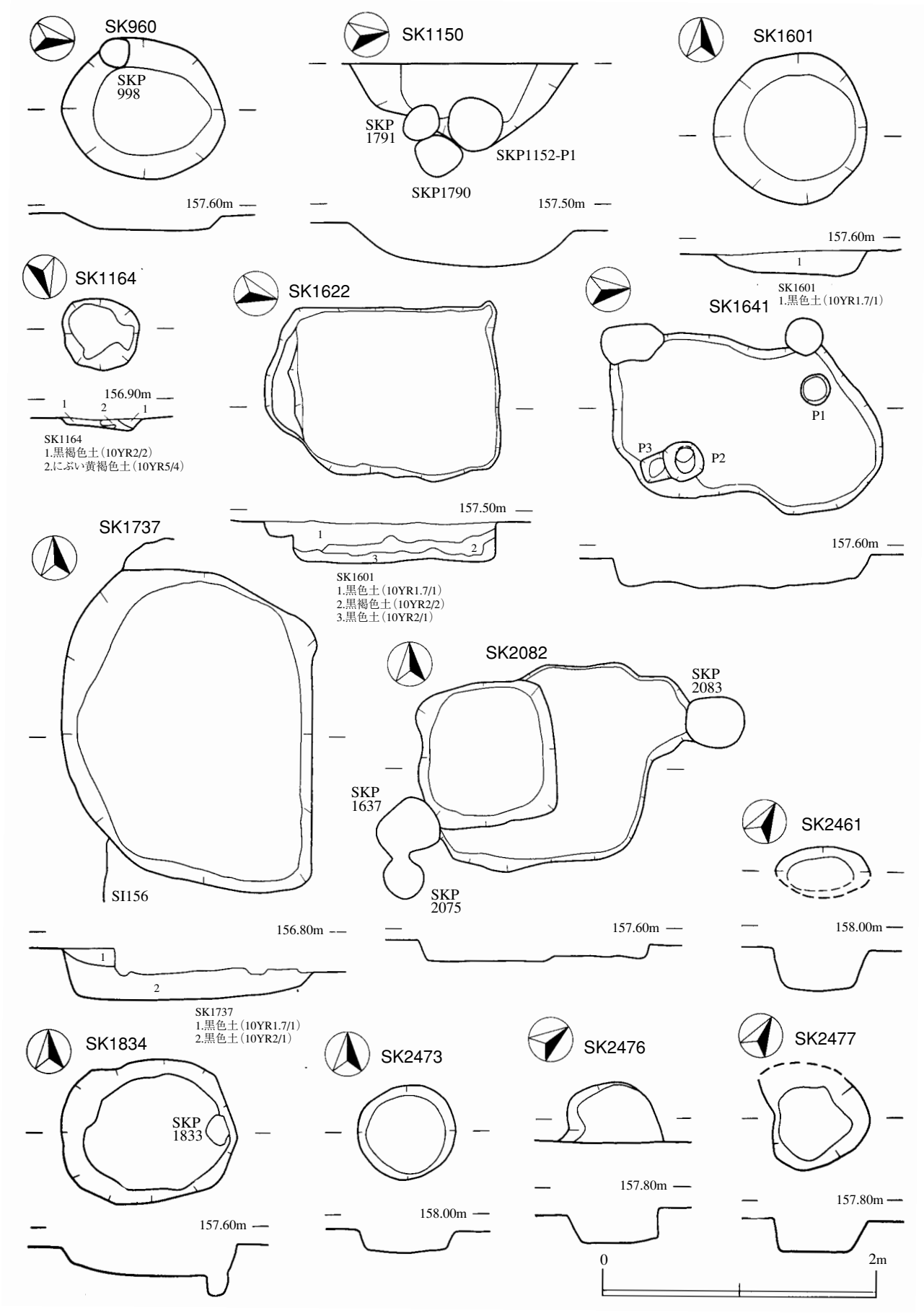
〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉土層観察用ベルトが崩落したため、観察できなかった。

〈平面形・規模〉長軸0.84ｍ、短軸0.77ｍの不整形を呈するものと推察される。深さは0.24ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉なし。



第38図　ＳＫ960・1150・1164・1601・1622・1641・1737・1834・
2082・2461・2473・2476・2477土坑

（９）その他の遺構

ＳＸ513（第36図）

〈位置・確認状況〉ＪＧ95グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉２層に分層した。２層には比較的粒子の細かい砂が充填している。この砂は本遺跡内では確認されないため、他から持ち込んだ可能性も考えられる。

〈平面形・規模〉長軸1.25m、短軸0.40mの不整形を呈する。深さは0.15mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉凹凸がある。北東側・南西側に段をもつ。

〈出土遺物〉なし。

２．Ｂ区の検出遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

ＳＩ03（第39図、図版15）

〈位置・確認状況〉ＫＢ74、ＫＣ74・75グリッドに位置する。確認調査トレンチ精査中にＶ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫ26と重複する。本遺構が古い。

〈堆積土〉５層に分層した。１～４・８層が本住居跡覆土で、２層は貼床、８層はＰ１覆土である。覆土には大湯浮石のブロックが含まれていた。

〈平面形・規模〉長軸3.36m、短軸2.92mの隅丸方形を呈する。床面までの深さは0.08mである。

〈床面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。

〈柱穴〉床面から３個検出した。Ｐ１はＳＫ26と重複する。

〈カマド〉カマドは南東壁南寄りに付く。礫が集中して出土しており、芯材として使用されてたものと考えられるが、袖部等は残存していなかった。火床面は焼土の広がりとして確認した。

〈その他の付属施設〉なし。

〈出土遺物〉火床面の周辺から土師器片が多数出土した。第39図158、図版27の土師器甕は火床面南側から出土した。底部が正立の状態で出土したことから、立てた状態で廃棄されたものと推察される。内外面とも被熱の痕跡はなく、体部上半には内面からの打ち欠きが見られる。また、底部も中央が欠損しているが、故意に破損させたものか不明である。

（２）竪穴状遺構

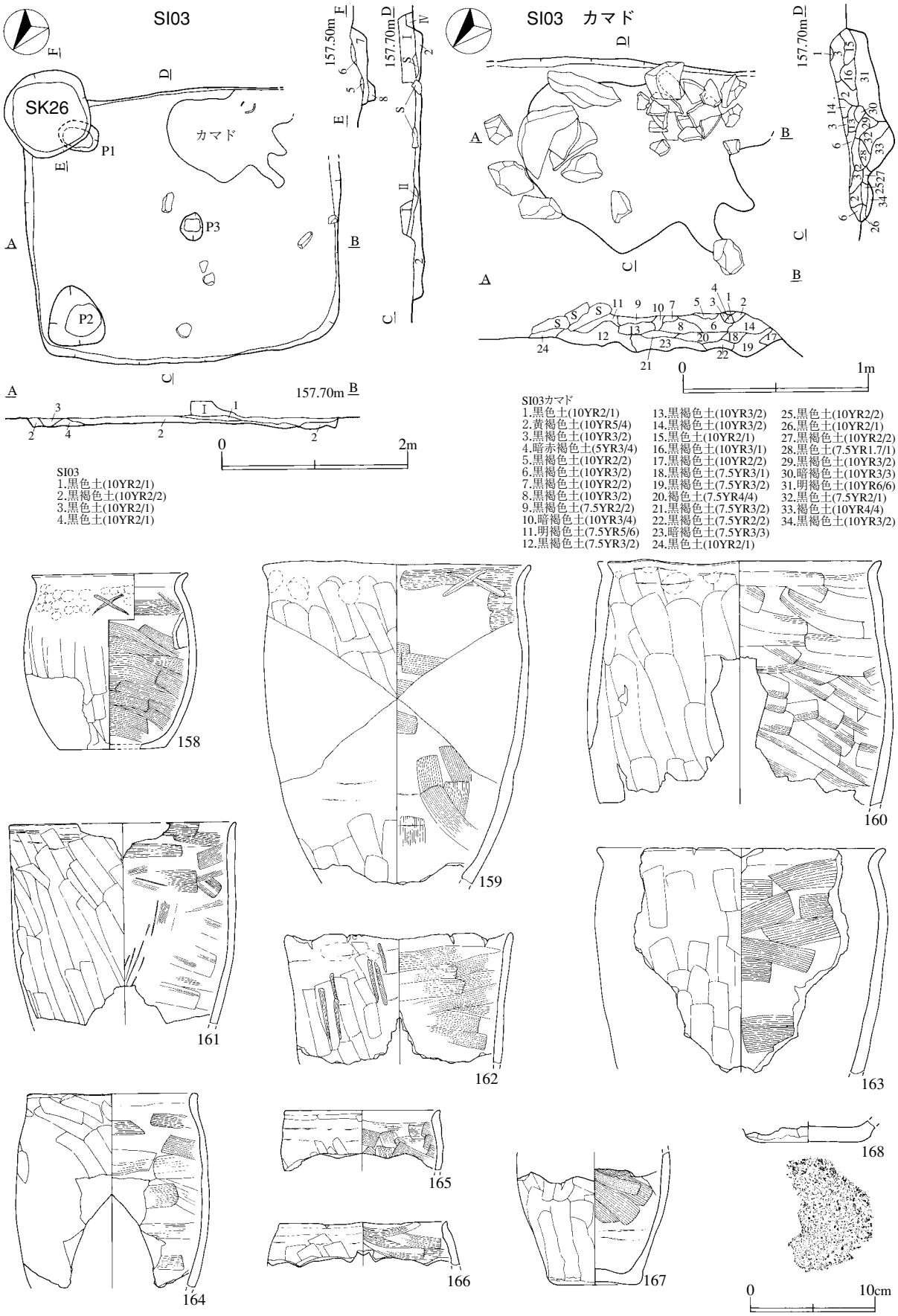
ＳＫＩ13（第40図、図版15）

〈位置・確認状況〉ＪＲ77・78、ＪＳ77・78グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＢ95（Ｐ２・３）と重複する。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉６層に分層した。

〈平面形・規模〉南側壁長2.98m、南西側壁長1.71mである。北壁・東壁は攪乱等により削平され残存していなかった。確認プランから隅丸方形を呈するものと推察される。



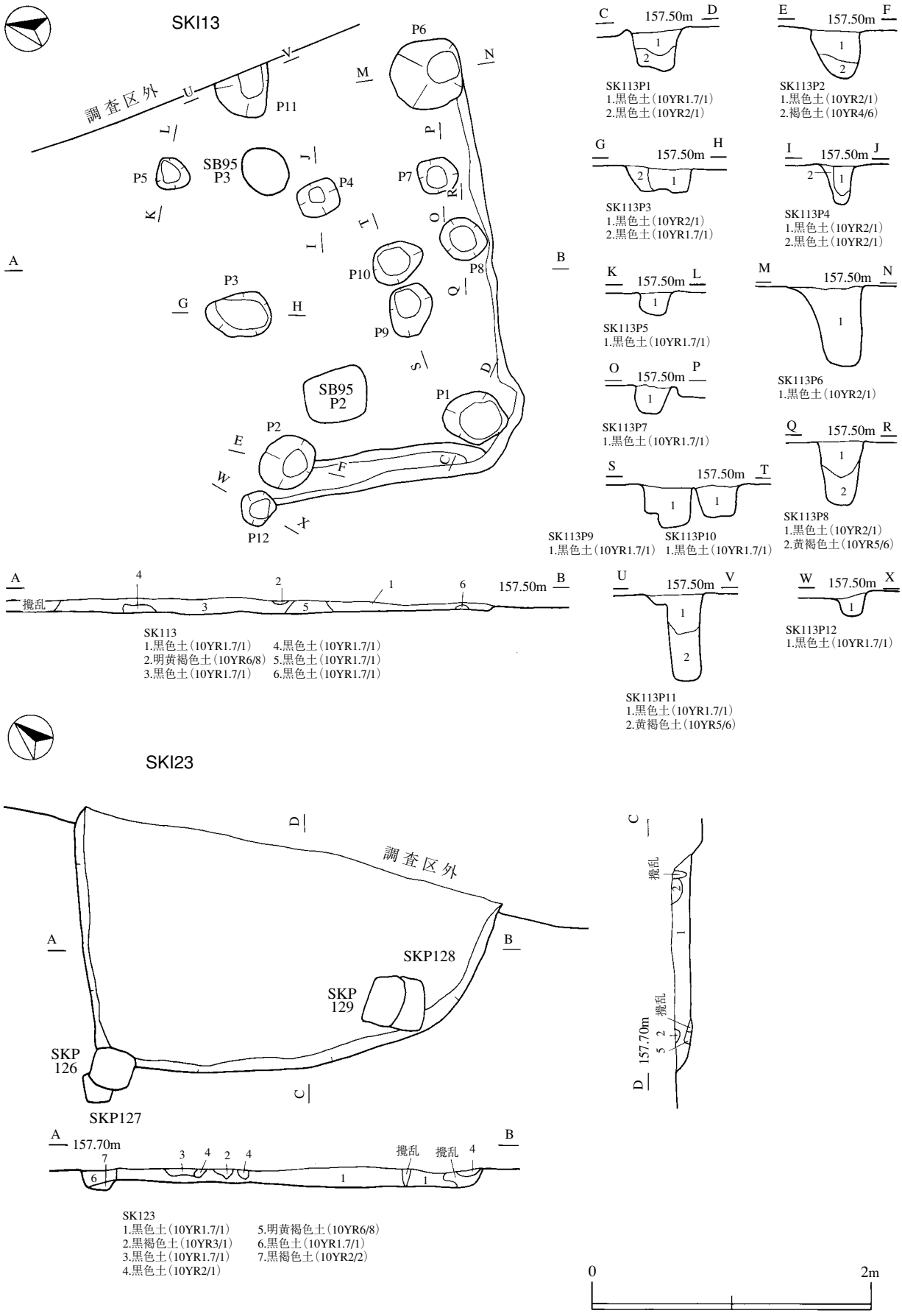
第39図　ＳＩ03竪穴住居跡、ＳＫ26土坑とＳＩ03竪穴住居跡出土遺物

〈底面〉南壁、南西壁にかけて検出した。ほぼ平坦である。
〈柱穴〉12個検出した。深さは0.17～0.62mである。Ｐ１・Ｐ７が隅柱と考えられる。
〈その他の付属施設〉南西部に壁溝を検出した。
〈出土遺物〉なし。

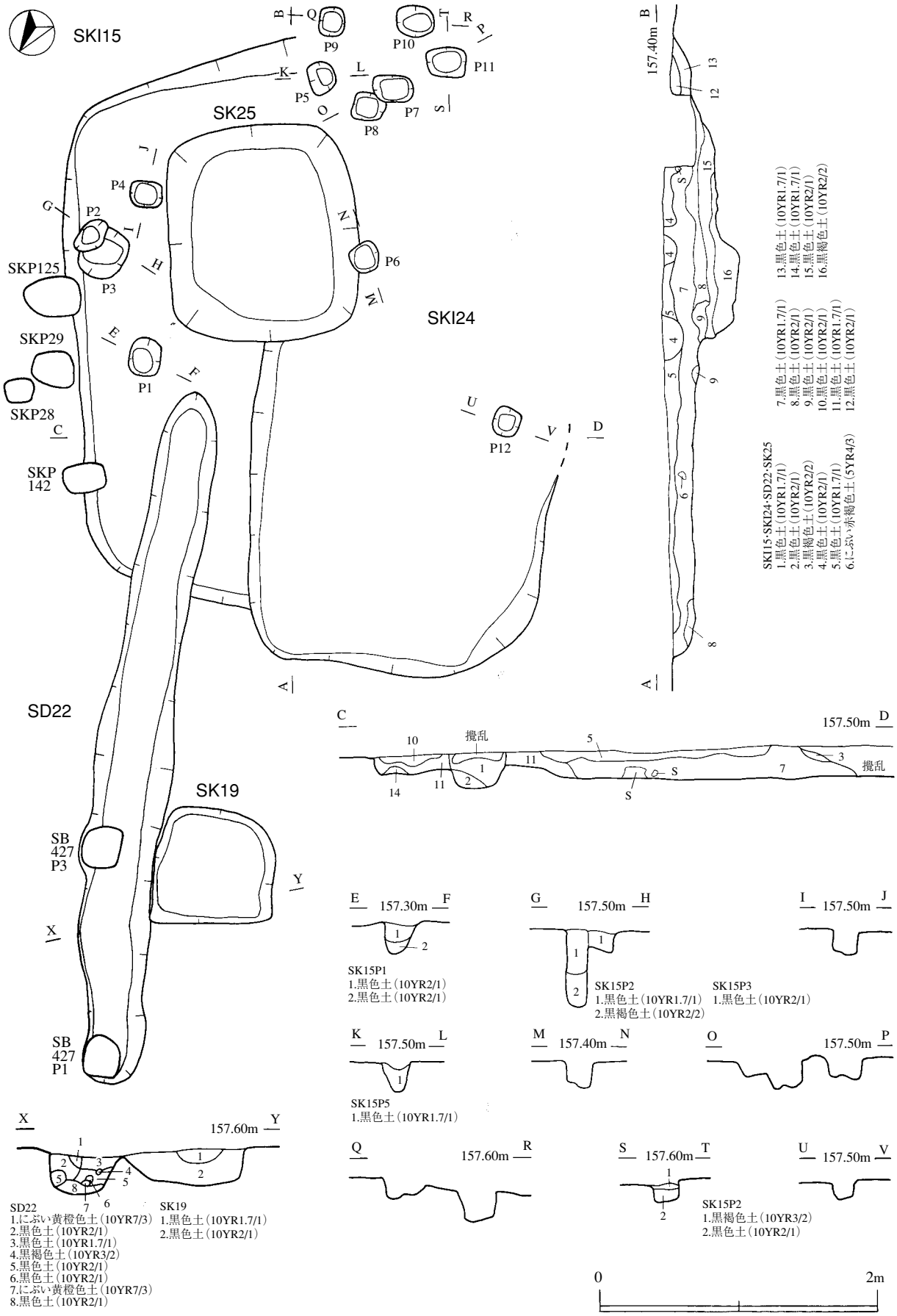
ＳＫＩ15(第41図)
〈位置・確認状況〉ＪＳ78、ＪＴ78・79グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＤ22、ＳＫＩ24、ＳＫ25、ＳＫＰ124・125と重複する。本遺構はＳＫ25より新しく、ＳＤ22、ＳＫＩ24、ＳＫＰ124・125より古い。
〈堆積土〉５層に分層した。10～14層が本遺構覆土である。堆積状況から自然堆積と判断した。
〈平面形・規模〉ＳＤ22、ＳＫＩ24と重複するため、南部～西部にかけてプランを確認できなかった。確認プランから、長軸4.09m、短軸1.32mの方形を呈するものと推察される。
〈床面〉残存する床面は凹凸がある。
〈柱穴〉12個検出した。深さは0.10～0.53mである。
〈その他の付属施設〉なし。
〈出土遺物〉多数の鉄滓が出土した。

ＳＫＩ23(第40図)
〈位置・確認状況〉ＪＱ76グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ126～129と重複する。本遺構が最も古い。
〈堆積土〉７層に分層した。
〈平面形・規模〉東部のプランは道路のり面であるため確認できなかった。確認プランから、長軸3.04m、短軸1.60mの隅丸方形を呈するものと推察される。深さは0.14mである。
〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。
〈柱穴〉検出されなかった。
〈その他の付属施設〉なし。
〈出土遺物〉鉄滓１点が出土した。

ＳＫＩ24(第41図)
〈位置・確認状況〉ＪＴ79グリッドに位置する。ＳＫＩ15の調査中に確認した。
〈重複関係〉ＳＫＩ15、ＳＫ25と重複する。本遺構が最も新しい。
〈堆積土〉７層に分層した。３～９層が本遺構覆土である。
〈平面形・規模〉南部のプランはＳＫ25との重複や攪乱等により削平され残存していなかった。確認プランから長軸2.26m、短軸1.98mの隅丸方形を呈するものと推察される。深さは0.24mである。
〈底面〉わずかに凹凸がある。
〈柱穴〉検出されなかった。
〈その他の付属施設〉なし。
〈出土遺物〉鉄滓１点が出土した。



第40図　ＳＫＩ13・23竪穴状遺構



第41図　ＳＫＩ15・24竪穴状遺構、ＳＤ22溝跡、ＳＫ19・25土坑

（３）掘立柱建物跡

ＳＢ18（第42図）

〈位置・確認状況〉ＫＢ75、ＫＣ75・76グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。南西側は調査区外にかかり、柱穴の有無を確認できなかったが、柱穴の配置から掘立柱建物跡とした。

〈重複関係〉なし。

〈規模〉桁行２間×梁行１間の規模で、桁行（Ｐ２～Ｐ４）3.92m、梁行（Ｐ１～Ｐ４）2.48mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ95（第42図）

〈位置・確認状況〉ＪＲ77・78、ＪＳ77・78グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ13と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉桁行３間×梁行１間の規模で、桁行（Ｐ５～Ｐ８）5.62m、梁行（Ｐ１～Ｐ５）1.80mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ427（第42図）

〈位置・確認状況〉ＪＳ79・80、ＪＴ79・80グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＤ22と重複する。本遺構が古い。

〈規模〉桁行２間×梁行１間の規模で、桁行（Ｐ２～Ｐ６）3.16m、梁行（Ｐ１～Ｐ２）2.98mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ499（第42図）

〈位置・確認状況〉ＪＴ80・81、ＫＡ80～82グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。北東側は調査区外にかかり、柱穴の有無を確認できなかったが、柱穴の配置から掘立柱建物跡とした。

〈重複関係〉ＳＫ1619、ＳＢ1602、ＳＫＰ2574と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉桁行３間×梁行１間の規模で、桁行（Ｐ１～Ｐ５）5.06m、梁行（Ｐ３～Ｐ４）2.08mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1602（第42図）

〈位置・確認状況〉ＫＡ80～82、ＫＢ82グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

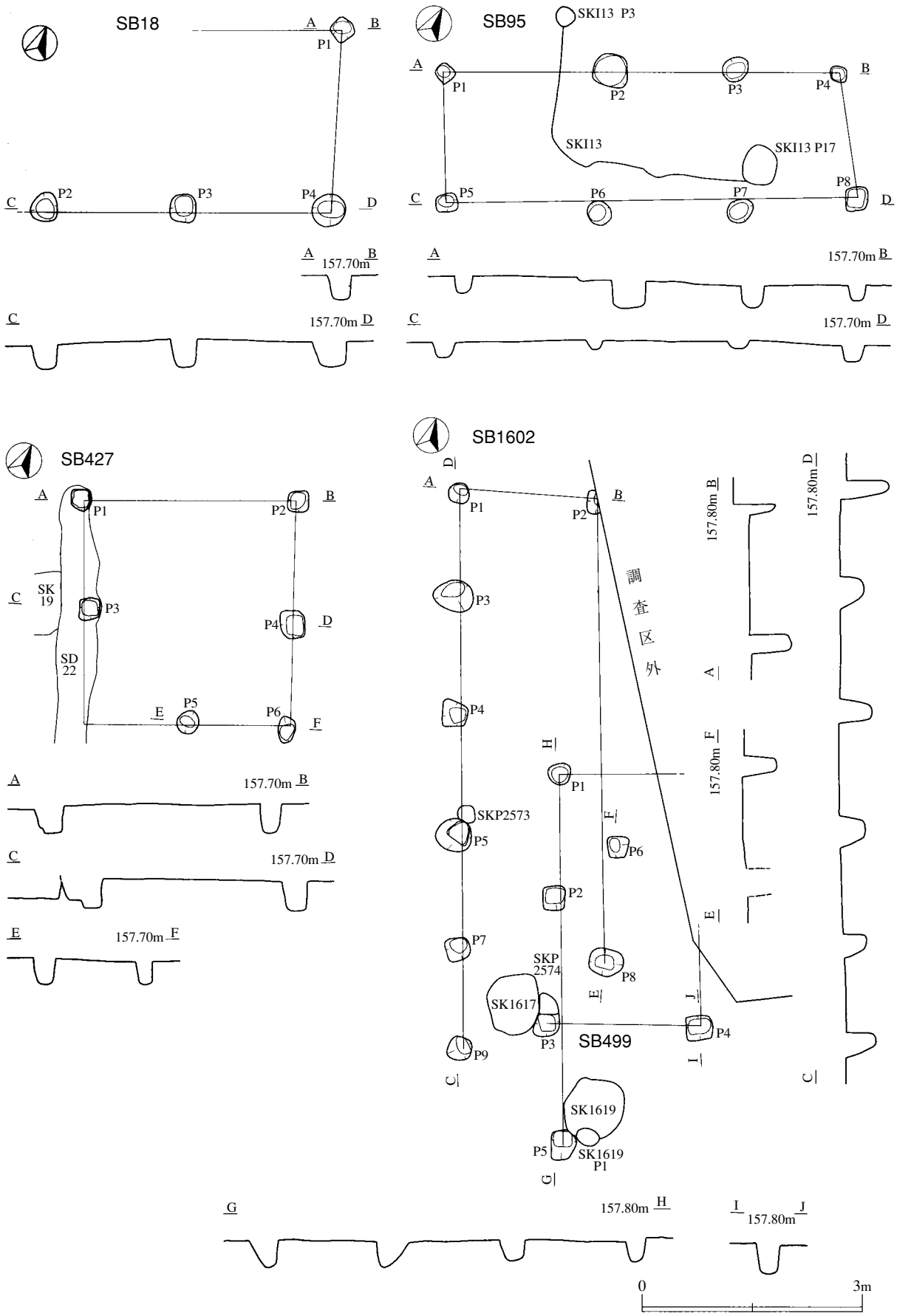
〈重複関係〉ＳＢ499、ＳＫＰ2573と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉桁行５間×梁行１間の規模で、桁行（Ｐ１～Ｐ９）7.63m、梁行（Ｐ１～Ｐ２）1.88mを測る。

〈出土遺物〉なし。

（４）柱穴様ピット

柱穴様ピットは、調査区全体で172基を検出した。その分布状態は、調査区全体に散在し、南西側では密集している。これらの平面形は径0.16m～0.58mで、多くは方形や楕円形を呈する。覆土は黒色土（10YR２／１）の単一層で、ほとんどが硬く締まっている。確認面からの深さ及び断面形は一様ではない。中央付近、東側、南西側で５棟の掘立柱建物跡を検出したが、それ以外の柱穴様ピットについては規則的な配列は認められず、柱痕も確認されなかった。掘立柱建物跡の柱穴かどうかは不明である。覆土中から遺物が出土した柱穴様ピットは172基中７基ある。その内訳は、ＳＫＰ436・460・495・499・501から鉄滓各１点、ＳＫＰ443から鉄滓２点、ＳＫＰ453から根固めの礫１点が出土したが、遺



第42図　ＳＢ18・95・427・499・1602掘立柱建物跡

物からはその時期を明確にできなかった。他の柱穴様ピットは遺物を出土しなかったため、その時期を明確にできなかった。

（５）溝跡

ＳＤ22（第41図）

〈位置・確認状況〉ＪＴ79・80グリッドに位置する。ＳＫＩ15の調査中に確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ15、ＳＫ19、ＳＢ427（Ｐ１・３）と重複する。本遺構はＳＫＩ15より新しく、ＳＢ427より古い。ＳＫ19との新旧関係は不明である。。

〈堆積土〉８層に分層した。

〈規模〉長軸4.99m、短軸0.43mで、深さは0.28mである。

〈出土遺物〉多数の鉄滓が出土した。

ＳＤ1255（第43図、図版16）

〈位置・確認状況〉ＫＢ81～85、ＫＣ85グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。

〈規模〉北端・南端は調査区外にのびる。確認長約9.60m、幅0.48～0.72mである。

〈出土遺物〉なし。

（６）焼土遺構

ＳＮ150（第44図、図版16）

〈位置・確認状況〉ＪＴ80に位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ2584と重複する。本遺構が古い。

〈堆積土〉８層に分層した。３・４層は焼土である。堆積状況から自然堆積と判断した。

〈平面形・規模〉長軸2.86m、短軸1.02mの不整形を呈する。床面までの深さは0.32mである。柱穴を１個検出した。

〈底面〉わずかに凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

（７）製鉄遺構

ＳＳ09（第46図）

〈位置・確認状況〉ＪＳ78グリッドに位置する。確認調査トレンチ精査中にＶ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

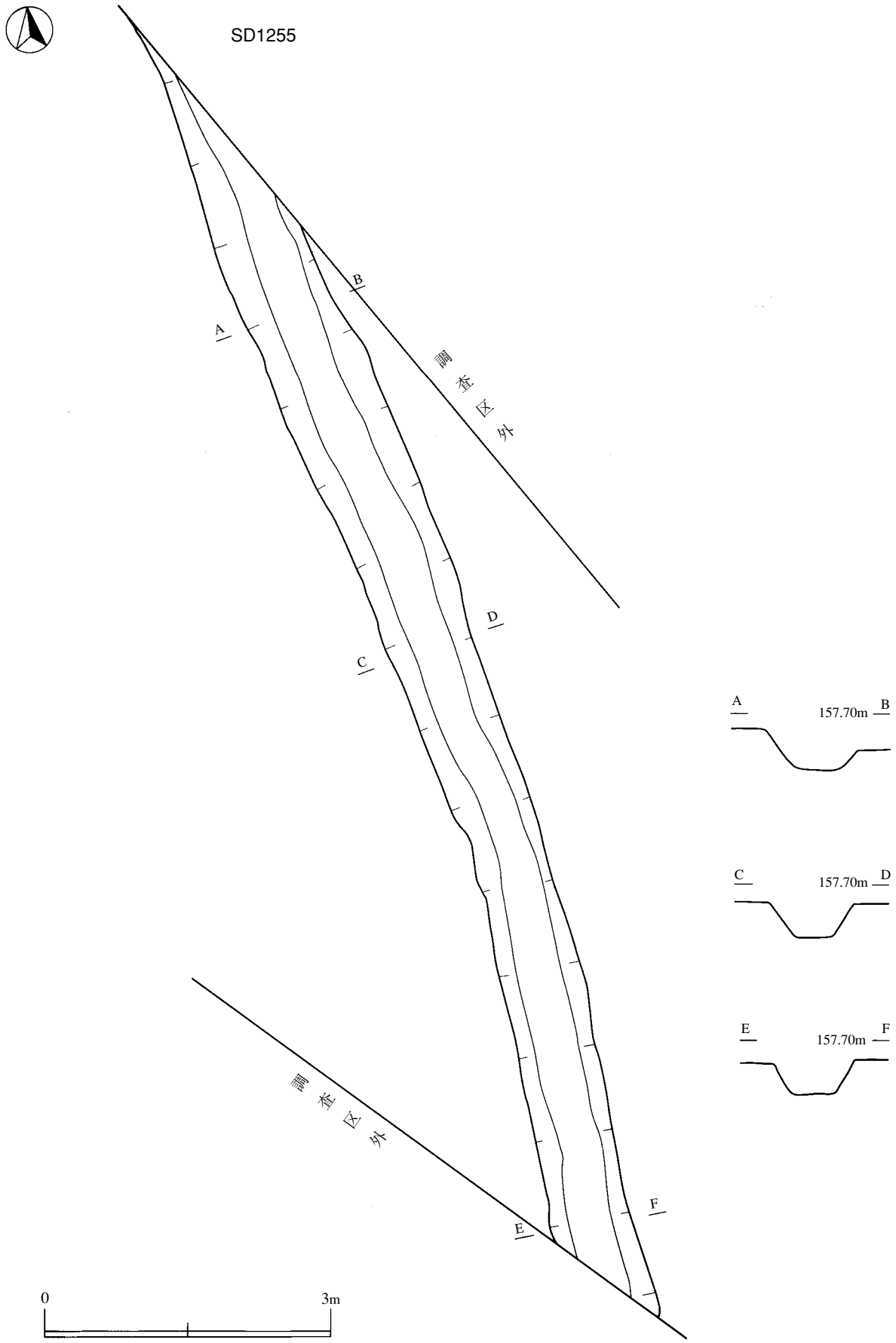
〈堆積土〉３層に分層した。３層には赤褐色土が広がり、鉄滓がぎっしりと詰まっていた。

〈平面形・規模〉長軸0.46m、短軸0.42mの略円形を呈する。深さは0.09mである。

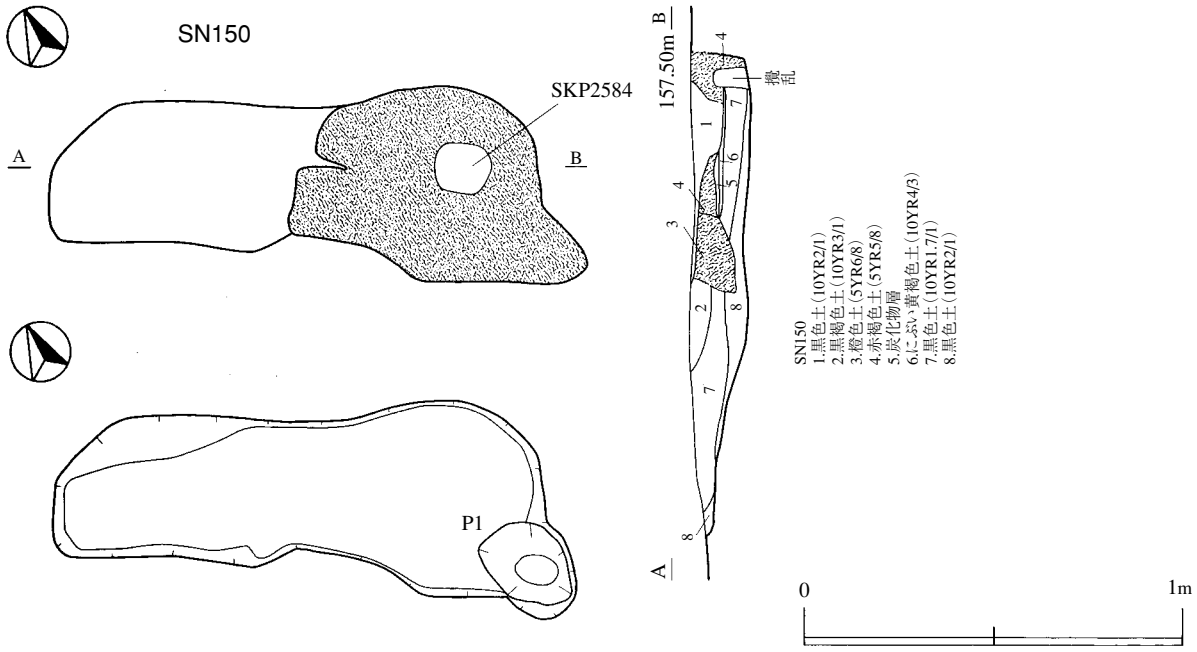
〈底面〉凹凸がある。

〈柱穴〉周辺から４個検出した。

〈出土遺物〉３層から多数の鉄滓が出土した。



第43図　ＳＤ1255溝跡



第44図　ＳＮ150焼土遺構

（８）土坑

ＳＫ01（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＢ75グリッドに位置する。確認調査トレンチ精査中にＶ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉２層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸1.30m、短軸1.10mの略円形を呈する。深さは0.26mである。断面は逆台形状を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉鉄製品の破片１点が出土した。

ＳＫ02（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＣ75・76グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸1.20m、短軸1.00mの略円形を呈する。深さは0.24mである。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉鉄滓１点が出土した。

ＳＫ04（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＡ74～75グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉15層に分層した。８層は火山灰、13～15層は焼土である。

〈平面形・規模〉長軸2.42m、短軸2.20mの略円形を呈する。深さは0.32mである。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉縄文土器片１点が出土した。

ＳＫ05（第45図）

〈位置・確認状況〉ＪＴ74グリッドに位置する。確認調査トレンチ精査中にＶ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉５層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸1.00m、短軸0.90mの略円形を呈する。深さは0.56mである。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ06（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＡ76グリッドに位置する。確認調査トレンチ精査中にＶ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形・規模〉南西部は確認調査トレンチにより削平され残存していなかった。確認プランから、長軸0.88m、短軸0.26mの円形を呈するものと推察される。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ10（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＢ76グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉長軸1.30m、短軸1.18mの略円形を呈する。深さは0.38mである。

〈底面〉凹凸がある。本遺構に伴うと考えられるピットを１個確認した。

〈出土遺物〉鉄滓１点が出土した。

ＳＫ12（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＢ77グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形・規模〉西部は調査区外のため確認できなかった。確認プランから、長軸1.08m、短軸0.32mの楕円形を呈するものと推察される。深さ0.36mである。

〈底面〉わずかに凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ14（第45図）

〈位置・確認状況〉ＪＴ77・78グリッドに位置する。ＳＫＩ13の調査中に確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形・規模〉径1.30m×1.20mの略円形を呈する。深さは0.23mである。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉鉄滓１点が出土した。

ＳＫ19（第41図）

〈位置・確認状況〉ＪＴ78グリッドに位置する。ＳＫＩ15の調査中に確認した。

〈重複関係〉ＳＤ22と重複する。本遺構が古い。新旧関係は不明である。

〈堆積土〉２層に分層した。

〈平面形・規模〉径0.88m×0.87mの隅丸方形を呈する。床面までの深さは0.26mである。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉多数の鉄滓が出土した。

ＳＫ25（第41図）

〈位置・確認状況〉ＪＴ78グリッドに位置する。ＳＫＩ15の調査中に確認した。

〈重複関係〉ＳＫＩ15・24と重複する。本遺構が最も古い。

〈堆積土〉２層に分層した。15・16層が本遺構覆土で、15層は炭化物の層である。

〈平面形・規模〉長軸1.90m、短軸1.38mの隅丸方形を呈する。深さは0.31mである。

〈底面〉凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ26（第39図）

〈位置・確認状況〉ＫＢ74グリッドに位置する。ＳＩ03の調査中に確認した。

〈重複関係〉ＳＩ03と重複する。本遺構が新しい。

〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸0.89m、短軸0.86mの隅丸方形を呈する。深さは0.17mである。

〈底面〉わずかに凹凸がある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1259（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＡ80グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形〉長軸1.42m、短軸0.78mの不整形を呈する。深さは0.22mである。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈柱穴〉なし。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1616（第45図）

〈位置・確認状況〉ＫＡ81グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。

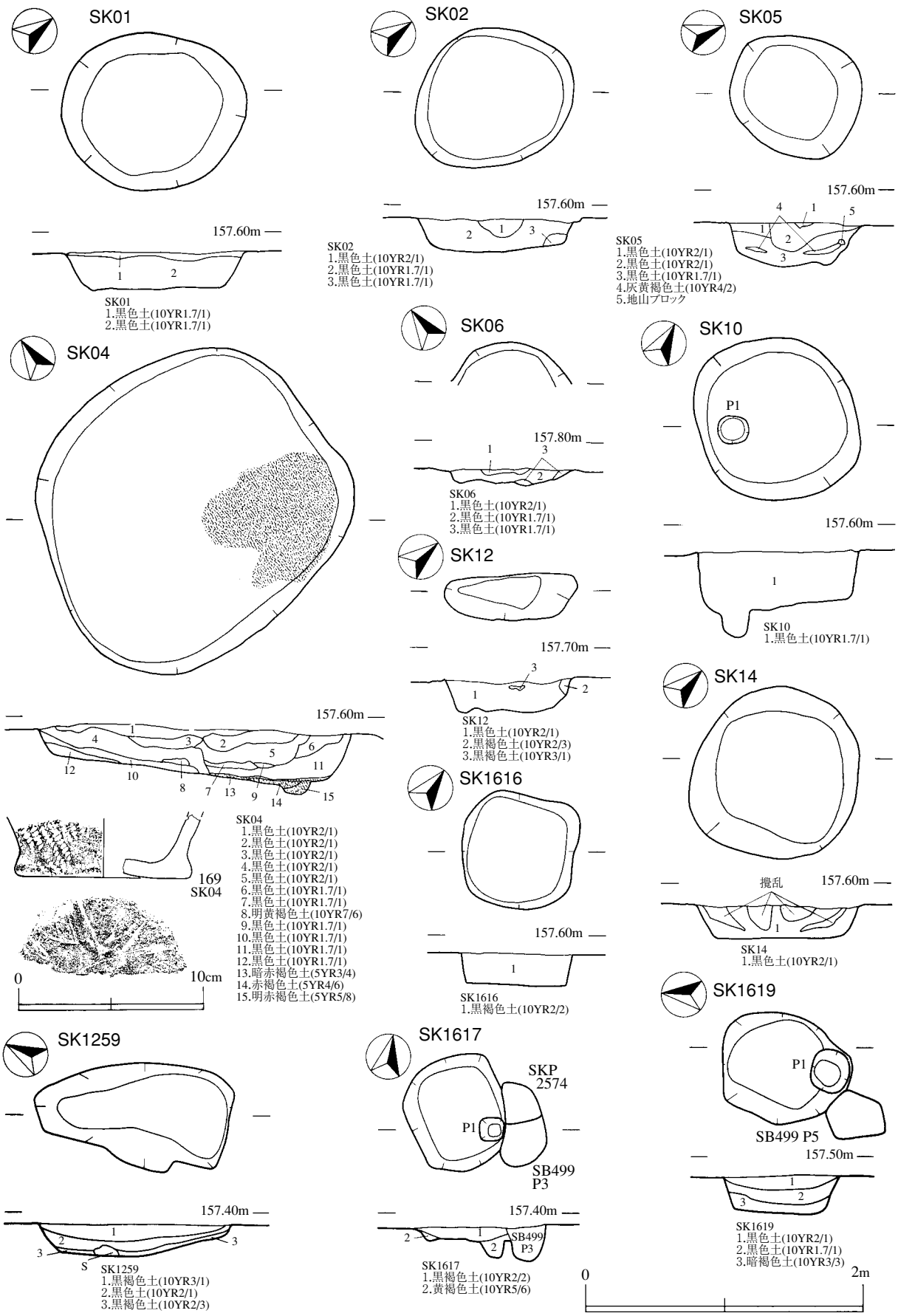
〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。

〈平面形〉長軸0.82m、短軸0.80mの隅丸方形を呈する。深さは0.24mである。

〈底面〉平坦である。

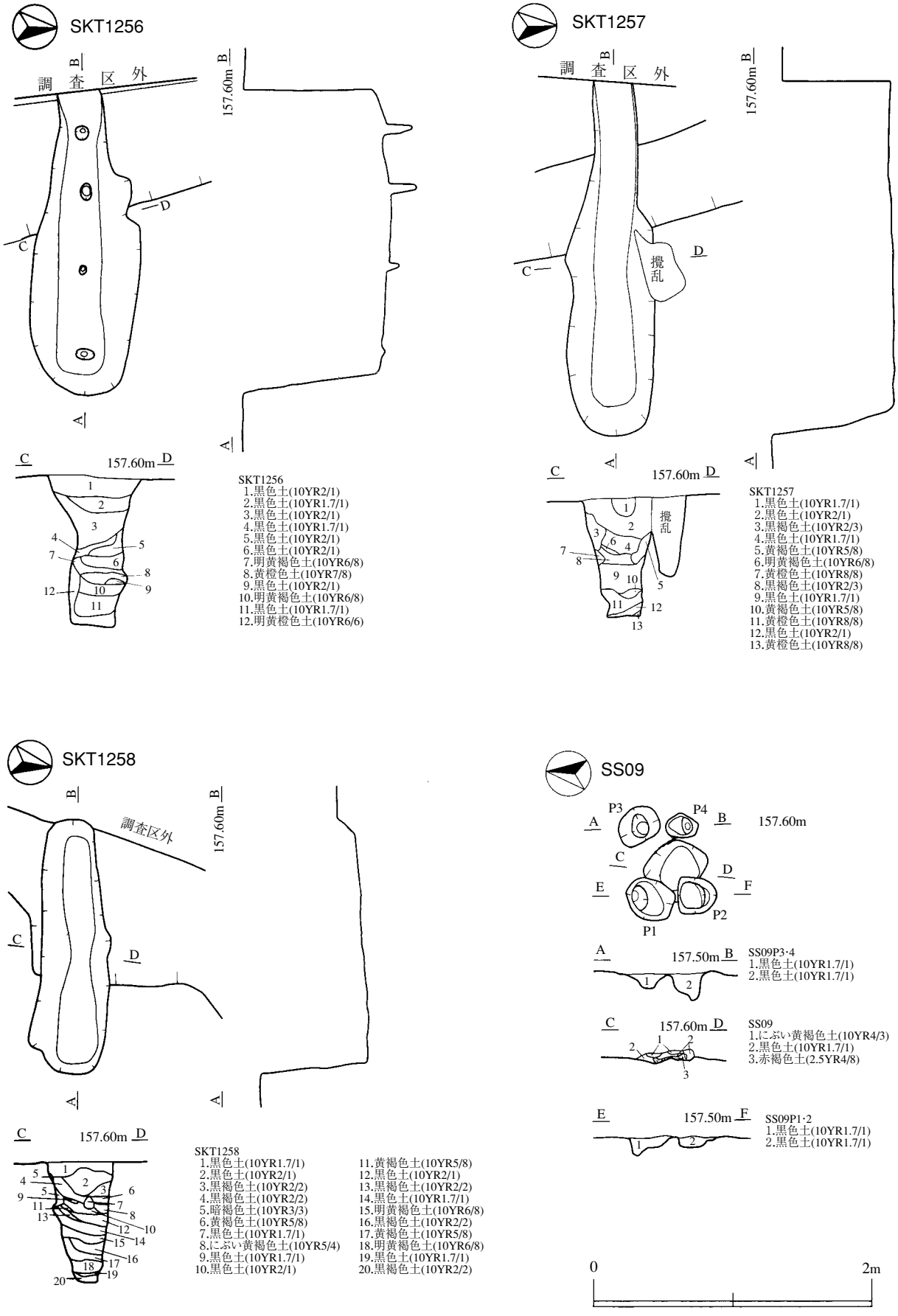
〈出土遺物〉なし。



第45図　ＳＫ01・02・04・05・06・10・12・14・1259・1616・1617・1619土坑と
ＳＫ04土坑出土遺物

ＳＫ1617(第45図)
〈位置・確認状況〉ＫＡ81グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ499(Ｐ３)、ＳＫＰ2574と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉２層に分層した。
〈平面形〉東側プランはＳＢ499(Ｐ３)と重複しており確認できなかった。確認プランから、長軸0.82m、短軸0.72mの隅丸方形を呈するものと推察される。深さは0.10mである。
〈底面〉凹凸がある。本遺構に伴うと考えられるピットを１個確認した。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ1619(第45図)
〈位置・確認状況〉ＪＴ80・81、ＫＡ80・81グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ499(Ｐ５)と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉３層に分層した。
〈平面形〉長軸0.96m、短軸0.78mの不整方形を呈する。深さは0.28mである。
〈底面〉平坦である。本遺構に伴うと考えられるピットを１個確認した。
〈出土遺物〉なし。

(９)陥し穴
ＳＫＴ1256(第46図、図版16)
〈位置・確認状況〉ＫＢ83、ＫＣ83グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉12層に分層した。自然堆積である。
〈平面形・規模〉西部のプランは昭和初期の道路のため攪乱されており、確認できなかった。確認プランから、開口部長軸2.19m、短軸0.77m、底部長軸2.04m、短軸0.34mの溝状を呈するものと推察される。深さは1.10mである。
〈底面〉わずかに凹凸しており、ピットが４個掘られていた。大きさは径0.07～0.14mで、底面からの深さは0.02～0.22mである。これらは逆茂木を立てた穴の可能性が考えられる。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1257(第46図、図版16)
〈位置・確認状況〉ＫＢ84、ＫＣ84グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉13層に分層した。自然堆積で、３～８層は崩落土である。
〈平面形・規模〉西部のプランは昭和初期の道路のため攪乱されており、確認できなかった。確認プランから、開口部長軸2.54m、短軸0.63m、底部長軸2.33m、短軸0.32mの溝状を呈するものと推察される。深さは0.86mである。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。



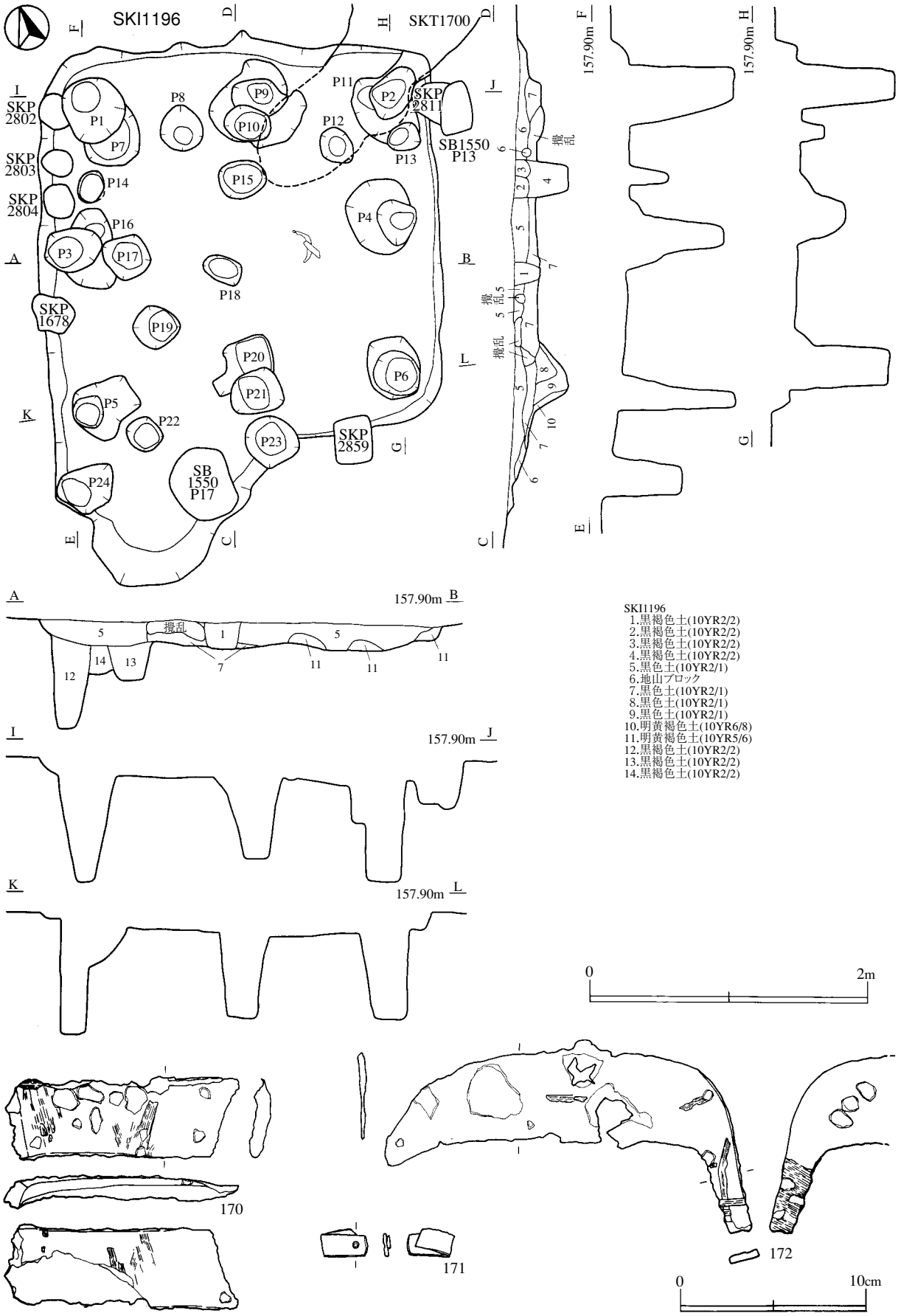
第46図　ＳＫＴ1256・1257・1258陥し穴、ＳＳ09製鉄遺構

ＳＫＴ1258(第46図、図版16)
〈位置・確認状況〉ＫＣ85グリッドに位置する。Ｖ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉20層に分層した。自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸1.82m、短軸0.55m、底部長軸1.63m、短軸0.29mの溝状を呈する。深さは0.86mである。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。

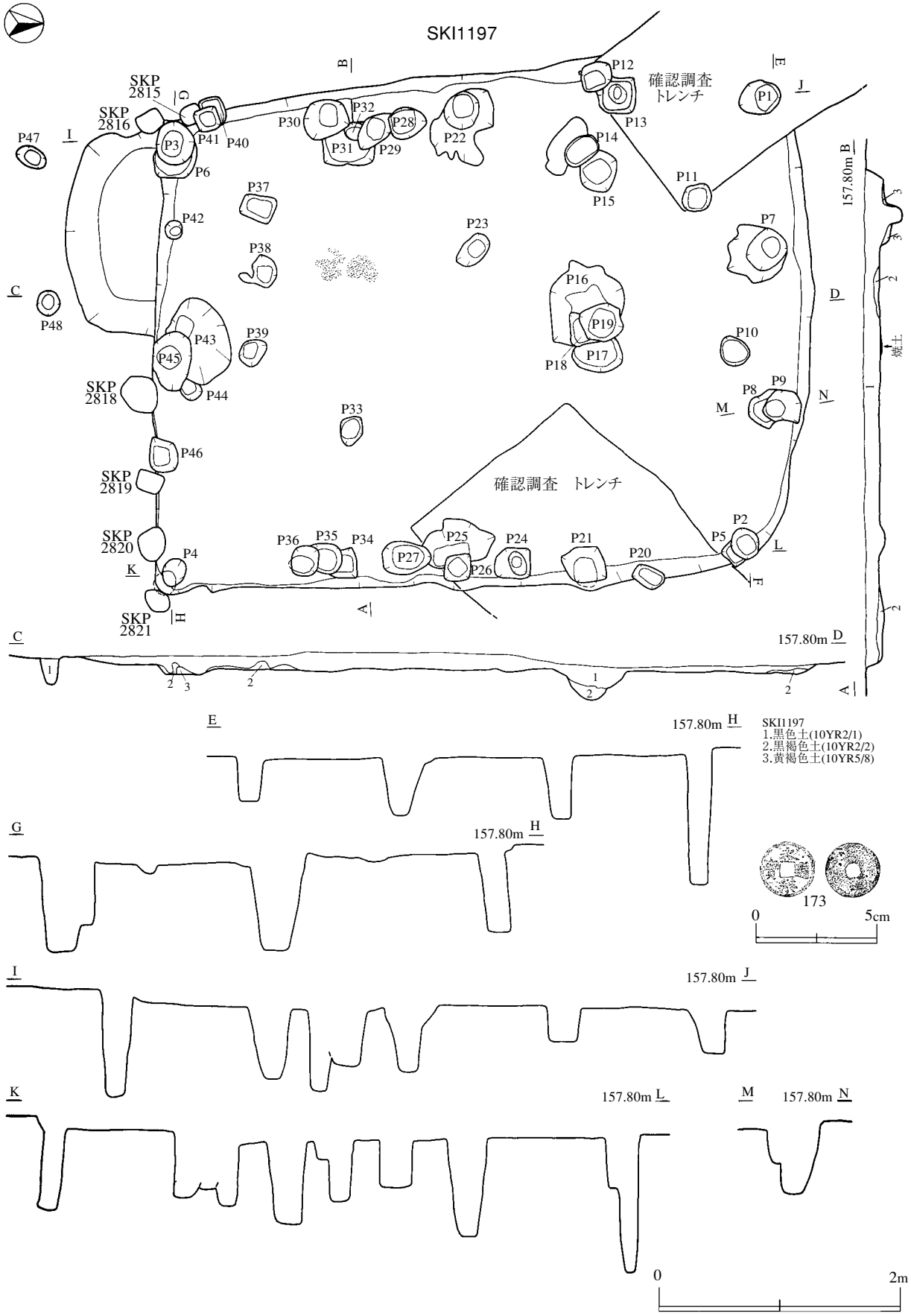
３．Ｃ区の検出遺構と遺物

(１)竪穴状遺構

ＳＫＩ1196(第47図、図版17)
〈位置・確認状況〉ＫＤ62・63、ＫＥ62・63グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の方形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＢ1550(Ｐ16)、ＳＫＴ1700、ＳＫＰ1678・2802～2804・2811・2859と重複する。本遺構はＳＫＴ1700より新しく、ＳＢ1550、ＳＫＰ1678・2802～2804・2811・2859より古い。
〈堆積土〉14層に分層した。１層はＰ18覆土、２～４層はＰ15覆土、12層はＰ３覆土、13層はＰ17覆土、14層はＰ16覆土である。
〈平面形・規模〉長軸2.90m、短軸2.83mの隅丸方形を呈する。深さは0.24mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。
〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。
〈柱穴〉周辺や床面から24個検出した。Ｐ15・18は上面からの掘り込みであり、本遺構に付随するものではない。
〈その他の付属施設〉南壁西端に幅0.86m～1.50m、長さ1.00m、深さ0.13m～0.15mの張り出しをもつ。竪穴部と張り出し部の境に２個の柱穴が検出されている(Ｐ23・24)。Ｐ23・24から外に向かって張り出しの幅が狭くなる。形態・柱穴配置及び土層の状況から、竪穴部から張り出し部上部にかけて上屋があり、張り出し部は出入り口として機能していた可能性が考えられる。
〈出土遺物〉鉄製の鎌１点、鉄製品１点、銅製の小柄の柄１点、砥石１点が出土した。
ＳＫＩ1197(第48図、図版18)
〈位置・確認状況〉ＫＧ62～64、ＫＨ62～64グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の方形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉３層に分層した。１層は貼床である。
〈平面形・規模〉長軸5.44m、短軸4.12mの隅丸方形を呈する。深さは0.12mである。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。
〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。
〈柱穴〉周辺や床面から48個検出した。竪穴部内部はＰ13－19－21をつなぐ間仕切りにより仕切られ



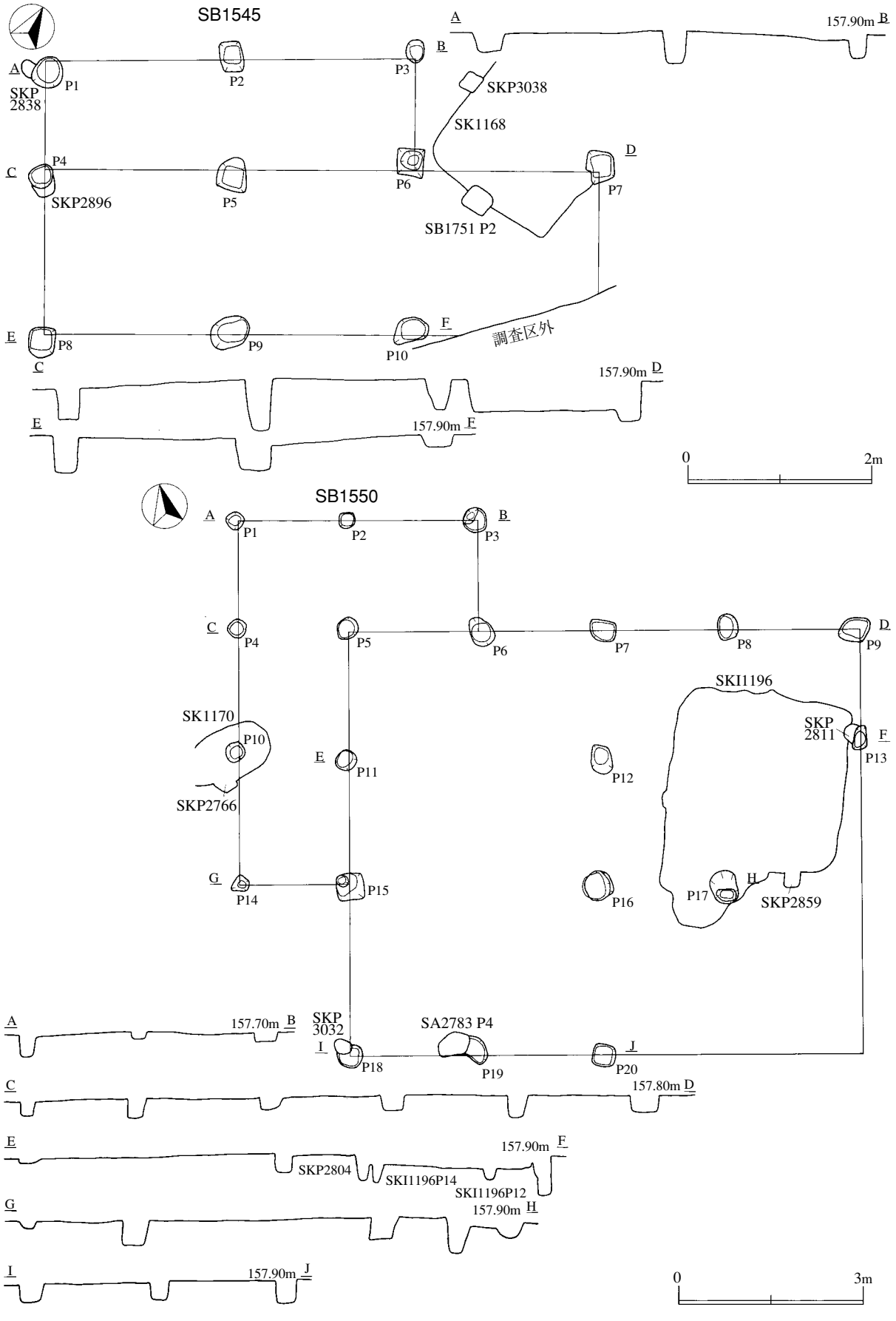
第47図　ＳＫＩ1196竪穴状遺構と出土遺物



第48図　ＳＫＩ1197竪穴状遺構と出土遺物

る。
〈その他の付属施設〉南壁西端に長軸1.62m、短軸0.76mの半楕円形の張り出しがつく。深さは0.13mである。張り出しの外には、竪穴部南西隅と南壁中央のＰ３・45に対応するＰ47・48を検出した。形態・柱穴配置及び土層の状況から、竪穴部から張り出し部上部にかけて上屋構造があり、張り出し部は出入り口として機能していた可能性が考えられる。竪穴部中央南側の床面から0.28m×0.22m、また0.26m×0.24mの範囲に焼土を検出した。
〈出土遺物〉銭貨(永楽通寶)１点、鉄滓１点が出土した。

(２)掘立柱建物跡
ＳＢ1545(第49図)
〈位置・確認状況〉ＫＥ61・62、ＫＦ61・62、ＫＧ62グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫ1168、ＳＢ1550・1674・1751、ＳＫＰ2838・2896と重複する。本遺構はＳＫ1168、ＳＫＰ2838・2896より新しい。その他の新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行３間×梁行２間の規模で、桁行(Ｐ４～Ｐ７)6.00m、梁行(Ｐ１～Ｐ８)2.96mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ1550(第49図)
〈位置・確認状況〉ＫＤ63、ＫＥ62～64、ＫＦ62～64、ＫＧ63グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＩ1196、ＳＢ1545・1674・1739・1751、ＳＡ2783(Ｐ４)、ＳＫ1168・1169・1170、ＳＫＰ2811・3032と重複する。本遺構はＳＫＩ1196、ＳＫ1170より新しく、ＳＫＰ1586より古い。その他については不明である。
〈規模〉庇が付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行４間×梁行３間の規模で、桁行(Ｐ５～Ｐ９)8.26m、梁行(Ｐ５～Ｐ18)6.84mを測る。北西側に３間×２間のＬ字型の庇が付く。総間は桁行(Ｐ４～Ｐ９)10.00m、梁行(Ｐ２～Ｐ18)8.60mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ1674(第50図)
〈位置・確認状況〉ＫＥ62・63、ＫＦ62グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫ1168、ＳＢ1545・1550・1751と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行２間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ５)3.36m、梁行(Ｐ５～Ｐ６)1.71mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ1739(第50図)
〈位置・確認状況〉ＫＦ63グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ1550と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉桁行１間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ３～Ｐ４)1.55m、梁行(Ｐ１～Ｐ３)1.23mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＢ1751(第50図)
〈位置・確認状況〉ＫＦ61・62、ＫＧ61・62グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫ1168、ＳＢ1545・1550・1674と重複する。新旧関係は不明である。



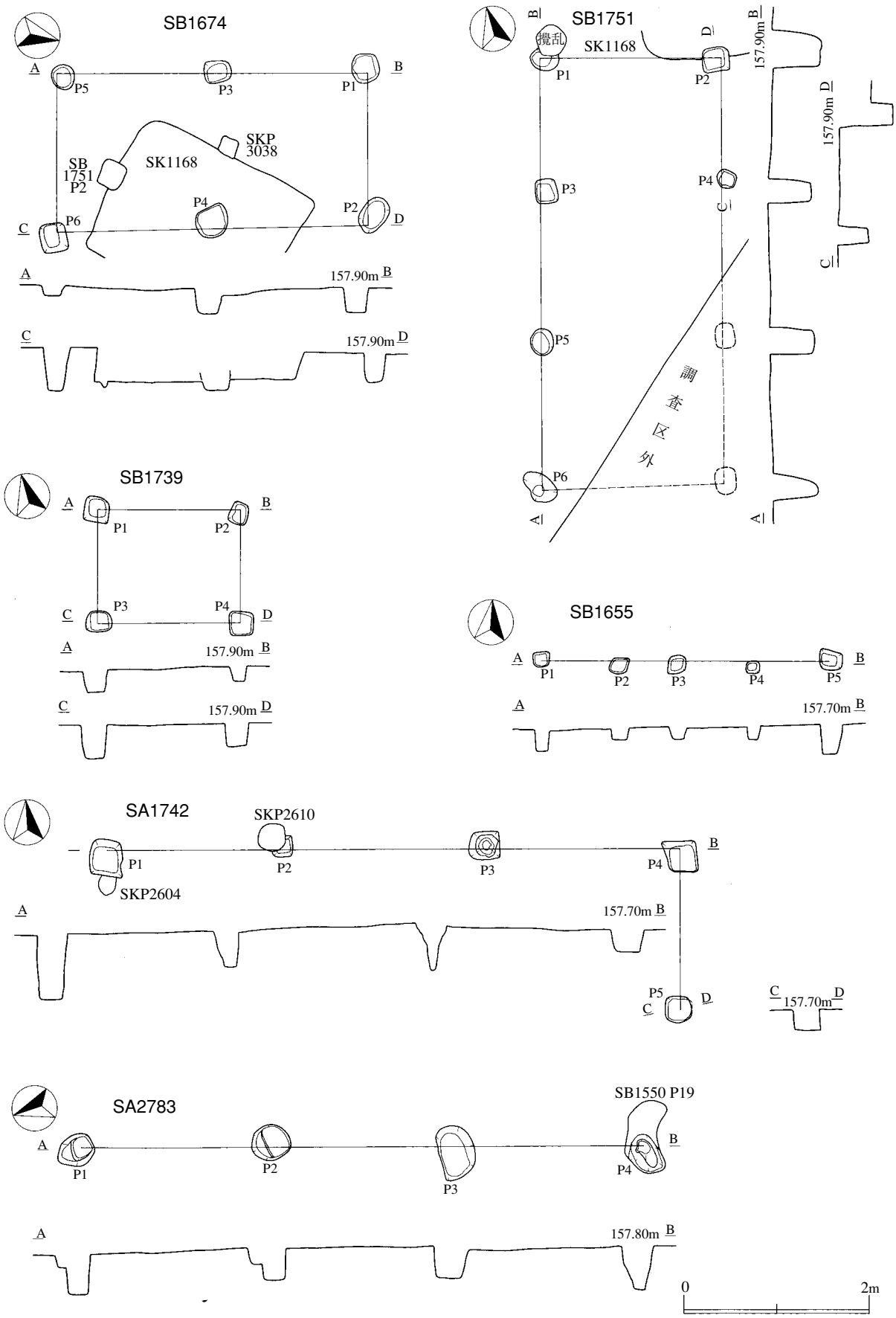
第49図　ＳＢ1545・1550掘立柱建物跡

〈規模〉桁行３間×梁行１間の規模で、桁行(Ｐ１～Ｐ６)4.65m、梁行(Ｐ５～Ｐ６)1.71mを測る。
〈出土遺物〉なし。

(３)柱穴列
ＳＡ1655(第50図)
〈位置・確認状況〉ＫＨ64、ＫＩ64グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈規模〉長さ3.11mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ1742(第50図)
〈位置・確認状況〉ＫＣ64、ＫＤ64グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ2604・2610と重複する。本遺構が新しい。
〈規模〉長さはＰ１からＰ４までが6.18m、Ｐ４からＰ５までが1.75mを測る。
〈出土遺物〉なし。
ＳＡ2783(第50図)
〈位置・確認状況〉ＫＥ63、ＫＦ61～63グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〈重複関係〉ＳＢ1545(Ｐ19)・1550・1674・1751と重複する。新旧関係は不明である。
〈規模〉長さは6.05mを測る。
〈出土遺物〉なし。

(４)柱穴様ピット
柱穴様ピットは、調査区全体で366基を検出した。その分布状態は、調査区の中央付近と南側で密集し、ＫＧライン以西・65ライン以北では散在している。これらの平面形は径0.14～0.56mで、多くは方形を呈する。覆土は黒色土(10YR２/１)～黒褐色土(10YR３/２)の単一層で、ほとんどが硬く締まっている。確認面からの深さ及び断面形は一様ではない。南側では５棟の掘立柱建物跡、北東・西・南側で計３条の柱穴列を検出したが、それ以外の柱穴様ピットについては規則的な配列は認められず、柱痕も確認されなかった。掘立柱建物跡の柱穴かどうかは不明である。覆土中から遺物が出土した柱穴様ピットは366基中８基である。その内訳は、ＳＫＰ1545・1549・1573・1669・1689・1690から根固めの礫各１点、ＳＫＰ1307から土師器片１点、ＳＫＰ1555から砥石１点が出土した。出土した遺物から、ＳＫＰ1307は平安時代に属するものと考えられるが、他の柱穴様ピットは遺物を出土しなかったため、その時期を明確にすることができなかった。

(５)土坑
ＳＫ1168(第51図、図版18)
〈位置・確認状況〉ＫＥ62グリッドに位置する。Ⅳ層上面で地山を多量に含む黒褐色土の方形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＢ1545(Ｐ７)・1674(Ｐ４)・1751(Ｐ２)、ＳＫＰ2849・3038と重複する。本遺構が最



第50図　ＳＢ1674・1739・1751掘立柱建物跡、ＳＡ1655・1742・2783柱穴列

も古い。

〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸2.03m、短軸1.60mの隅丸方形を呈する。深さは0.35mである。断面はビーカー形を呈する。Ｐ１～４に0.04～0.06mの角材をたてた簡単な上屋構造をもつ土坑の可能性もある。

〈床面〉平坦である。ピットを５個検出した。Ｐ１～４が四隅につく。Ｐ１～４には一辺が0.04m～0.06mの方形の柱痕と考えられる孔が検出された。深さは0.10～0.17mである。Ｐ１の中にはこの孔が２ヶ所から検出された。

〈出土遺物〉底面から鉄釘１点が出土した。

ＳＫ1169（第51図、図版18）

〈位置・確認状況〉ＫＦ62・63、ＫＧ62・63グリッドに位置する。Ⅳ層上面で地山ブロックを多量に含む黒褐色土の方形プランとして確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ2823・2839・2840と重複する。本遺構が最も古い。

〈堆積土〉４層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸2.10m、短軸1.29mの隅丸方形を呈する。深さ0.20mのところから長軸1.69m、短軸0.98m、深さ0.24mの隅丸方形の掘り込みを検出した。Ｐ１～４に0.04～0.08mの角材をたてた簡単な上屋構造をもつ土坑の可能性もある。

〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。ピットを10個検出した。Ｐ１～４はそれぞれ四隅に位置し、一辺0.04～0.08mの方形あるいは三角形の孔である。Ｐ５～８の底面は、下の掘り込みの底面レベルとほぼ同じかあるいは高い位置にある。

〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1170（第51図、図版18）

〈位置・確認状況〉ＫＦ・ＫＧ63グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

〈重複関係〉ＳＢ1550（Ｐ10）、ＳＫＰ2766と重複する。本遺構が古い。

〈堆積土〉３層に分層した。３層は地山由来の黄褐色土層である。１・２層中には浮石が含まれており、大湯浮石降下後に土坑の窪みに流れ込んだものと考えられる。

〈平面形・規模〉長軸1.53m、短軸0.82mの楕円形を呈する。深さは0.70mである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦であるが、東西方向に幅0.37～0.54mの溝状に窪む。

〈出土遺物〉なし。

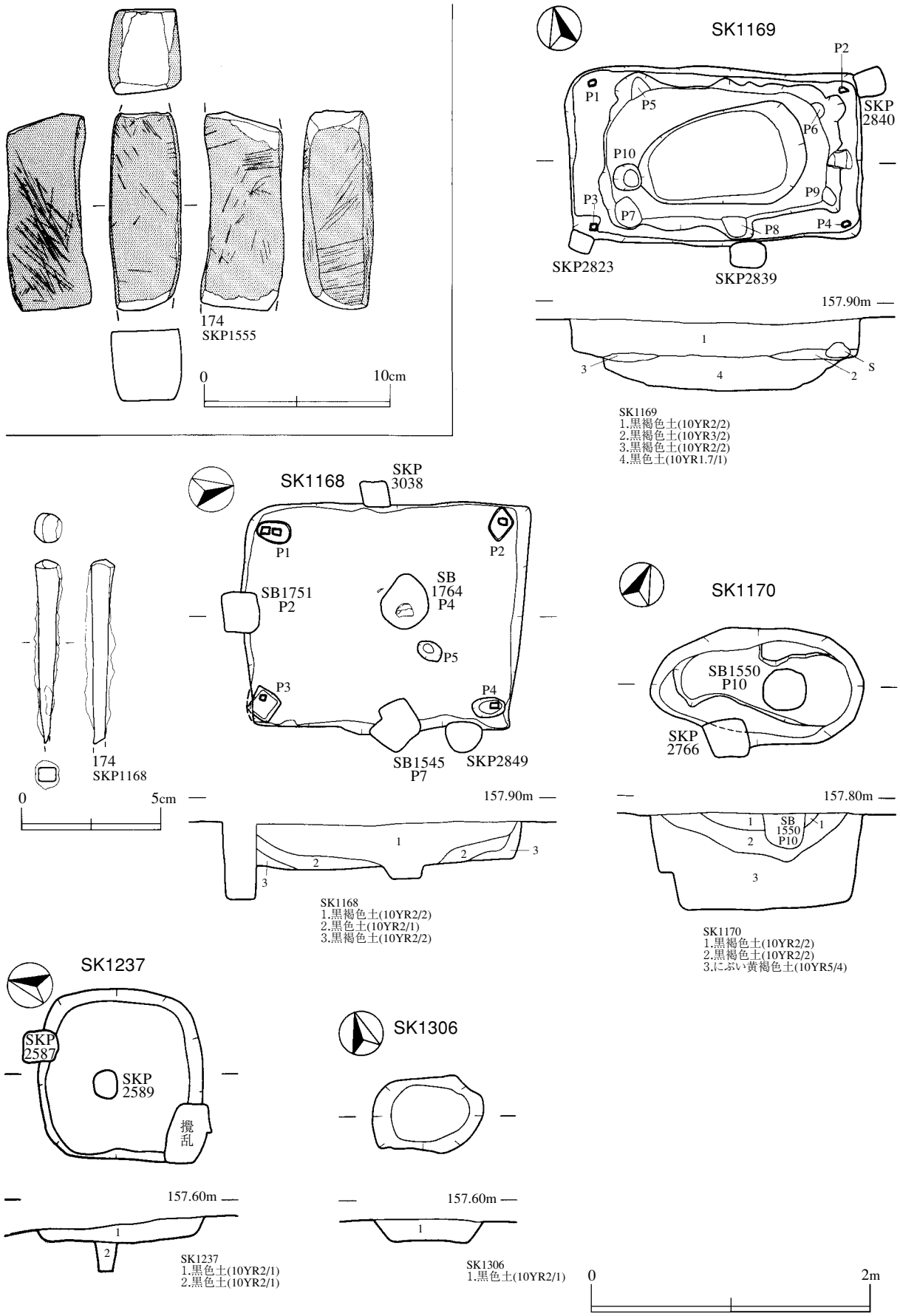
ＳＫ1237（第51図、図版18）

〈位置・確認状況〉ＫＥ65・66、ＫＦ65・66グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の方形プランとして確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ2587・2589と重複する。本遺構はＳＫＰ2589より新しく、ＳＫＰ2587より古い。

〈堆積土〉１層である。１層が本遺構覆土である。

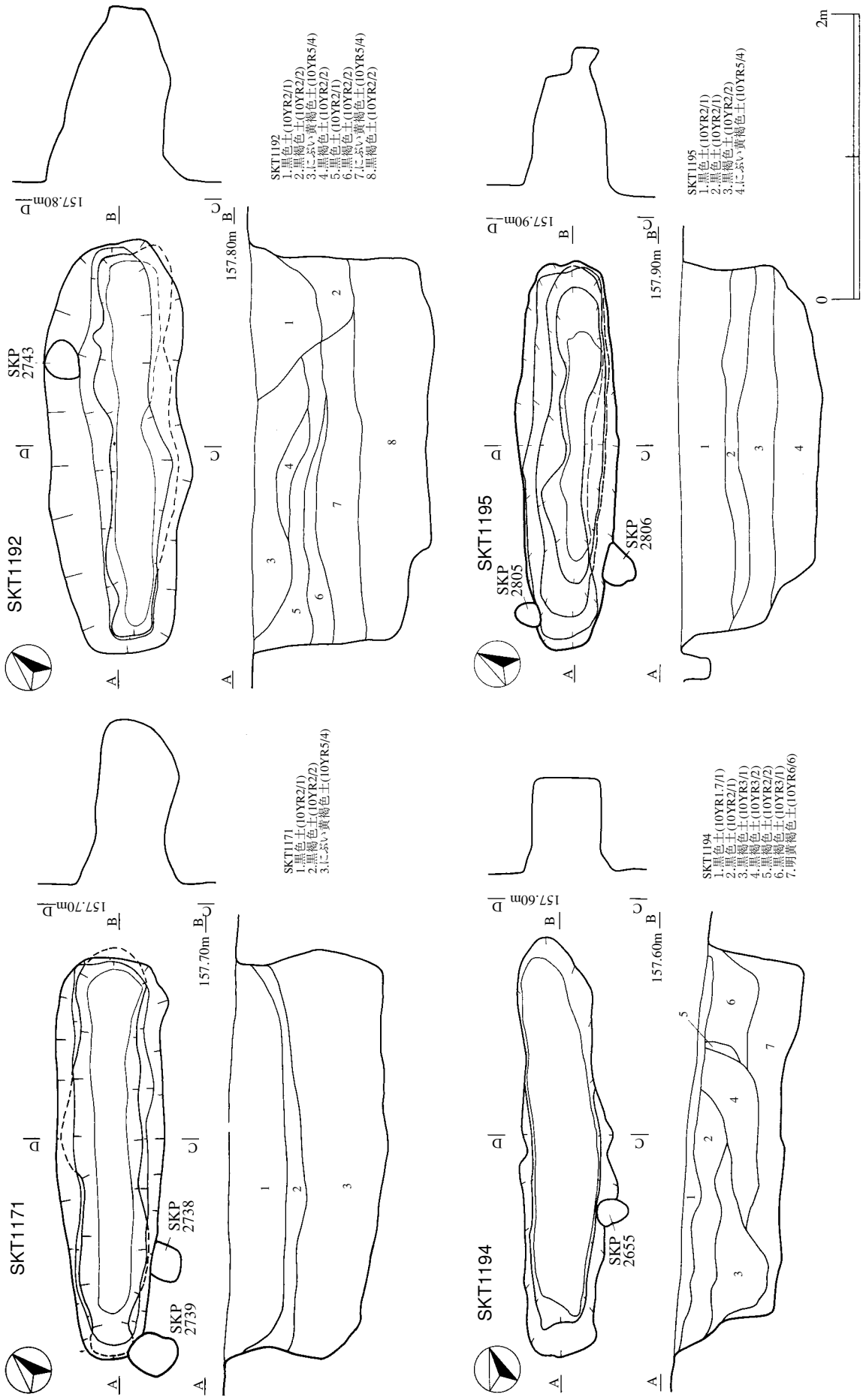
〈平面形・規模〉長軸1.22m、短軸1.18mの隅丸方形を呈する。深さは0.18mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。



第51図　ＳＫ1168・1169・1170・1237・1306土坑と出土遺物、ＳＫＰ1555柱穴様ピット出土遺物

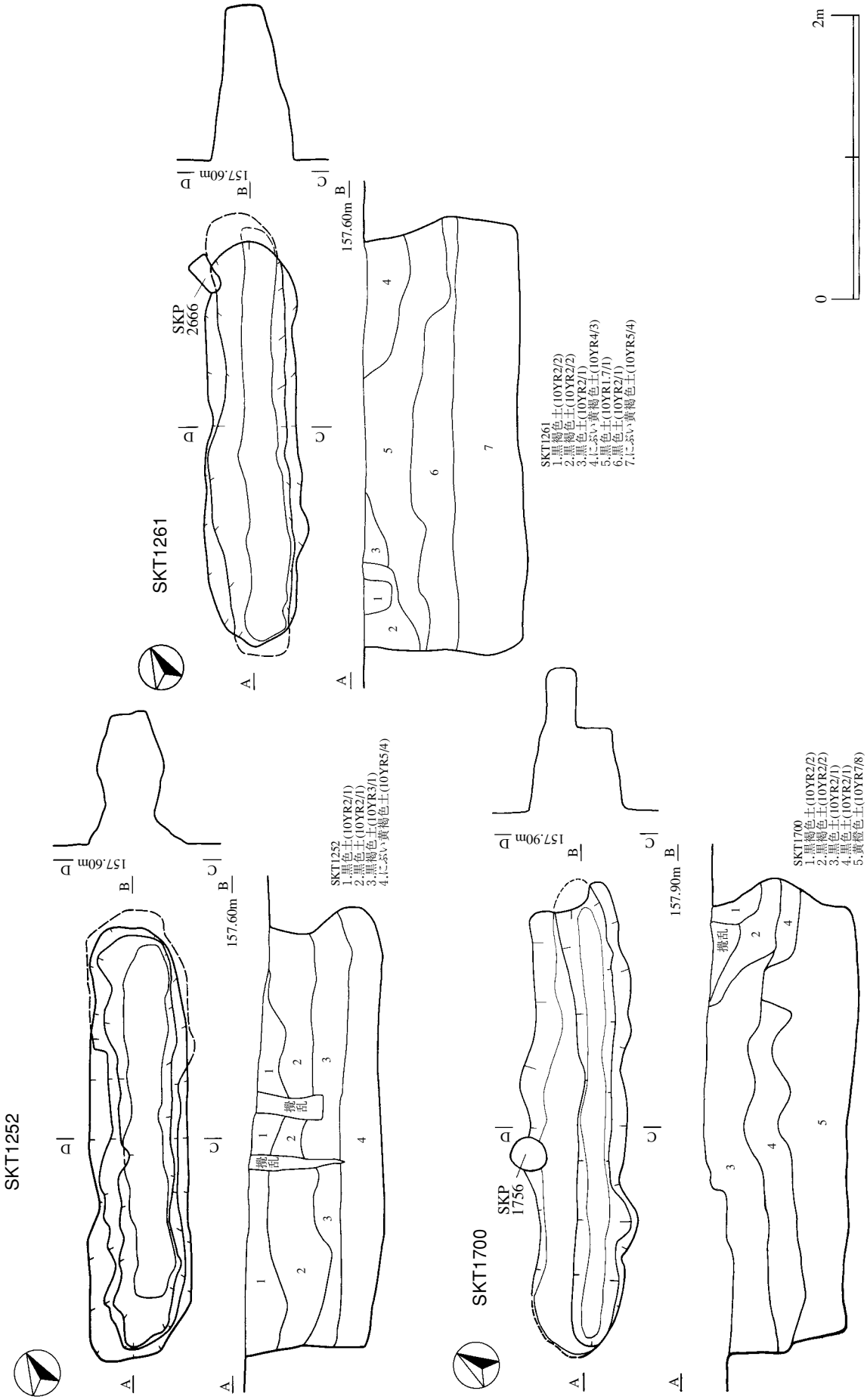
〈底面〉ほぼ平坦である。底面から径0.20ｍ×0.17ｍの略円形を呈するピットを１個検出した。深さは0.21ｍである。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ1306（第51図）
〈位置・確認状況〉ＫＤ66グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の不整形プランとし確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉１層である。
〈平面形・規模〉長軸0.80ｍ、短軸0.50ｍの不整形を呈する。深さは0.16ｍである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。

（６）陥し穴
ＳＫＴ1171（第52図、図版19）
〈位置・確認状況〉ＫＥ64・65グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ2738・2739と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉３層に分層した。３層は崩落土層である。シラス由来のにぶい黄褐色土層と黒褐色土層とが互層をなす自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸2.80ｍ、短軸0.76ｍ、底面長軸2.40ｍ、短軸0.24ｍの溝状を呈する。深さは1.11ｍである。断面はわずかに袋状を呈する。
〈底面〉わずかに凹凸があり、北東に向かって緩やかに低く傾斜する。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1192（第52図、図版19）
〈位置・確認状況〉ＫＥ64グリッドに位置する。Ⅳ層上面で地山を含む黒褐色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ2743と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉８層に分層した。１・２層は埋没後の攪乱層である。３～８層はにぶい黄褐色土層と黒褐色土とが互層をなす自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸2.92ｍ、短軸0.98ｍ、底面長軸2.56ｍ、短軸0.18～0.37ｍの溝状を呈する。深さは1.28ｍである。
〈底面〉長軸方向北東側が溝状に窪む。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1194（第52図、図版19）
〈位置・確認状況〉ＫＨ64・65グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ2655と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉７層に分層した。自然堆積である。３・４・７層は崩落土層、５層は攪乱層である。
〈平面形・規模〉開口部長軸2.96ｍ、短軸0.56ｍ、底面長軸2.41ｍ、短軸0.43ｍの溝状を呈する。深



第52図　ＳＫＴ1171・1192・1194・1195陥し穴

さは0.76ｍである。断面はビーカー形を呈する。南側には１段の段がある。
〈底面〉わずかに凹凸があり、北側に向かってやや低く傾斜する。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1195(第52図、図版19)
〈位置・確認状況〉ＫＤ63・64グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ2805・2806と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉４層に分層した。３・４層は崩落土層である。４層はシラス由来の黄褐色土と黒褐色土とが互層をなす自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸2.73ｍ、短軸0.64ｍ、の溝状を呈する。深さは1.01ｍである。断面は東側がわずかに袋状を呈する。
〈底面〉長軸2.08ｍ、短軸0.13～0.29ｍの溝状に窪む。
〈出土遺物〉１層中から礫２点が出土した。
ＳＫＴ1252(第53図、図版19)
〈位置・確認状況〉ＫＦ65グリッドに位置する。Ⅳ層上面で浮石を含む黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉４層に分層した。３・４層は崩落土層である。４層はシラス由来の黄褐色土と黒褐色土とが互層をなす自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸3.02ｍ、短軸0.68ｍ、底面長軸2.48ｍ、短軸0.31ｍの溝状プランを呈する。深さは0.97ｍである。断面は袋状を呈する。
〈底面〉わずかに凹凸がある。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1261(第53図、図版19)
〈位置・確認状況〉ＫＥ65、ＫＦ65グリッドに位置する。Ⅳ層上面で黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ2666と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉７層に分層した。４層は攪乱層、７層は崩落土層である。７層はシラス由来の黄褐色土層と黒褐色土とが互層をなす自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸2.86ｍ、短軸0.63ｍ、底面長軸2.91ｍ、短軸0.25ｍの溝状を呈する。深さは1.16ｍである。長軸方向両端がオーバーハングする形態である。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1700(第53図、図版19)
〈位置・確認状況〉ＫＤ63グリッドに位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〈重複関係〉ＳＫＩ1196、ＳＫＰ1756と重複する。本遺構が最も古い。
〈堆積土〉５層に分層した。自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸3.38ｍ、短軸0.73ｍ、底面長軸3.04ｍ、短軸0.14ｍの溝状を呈する。深



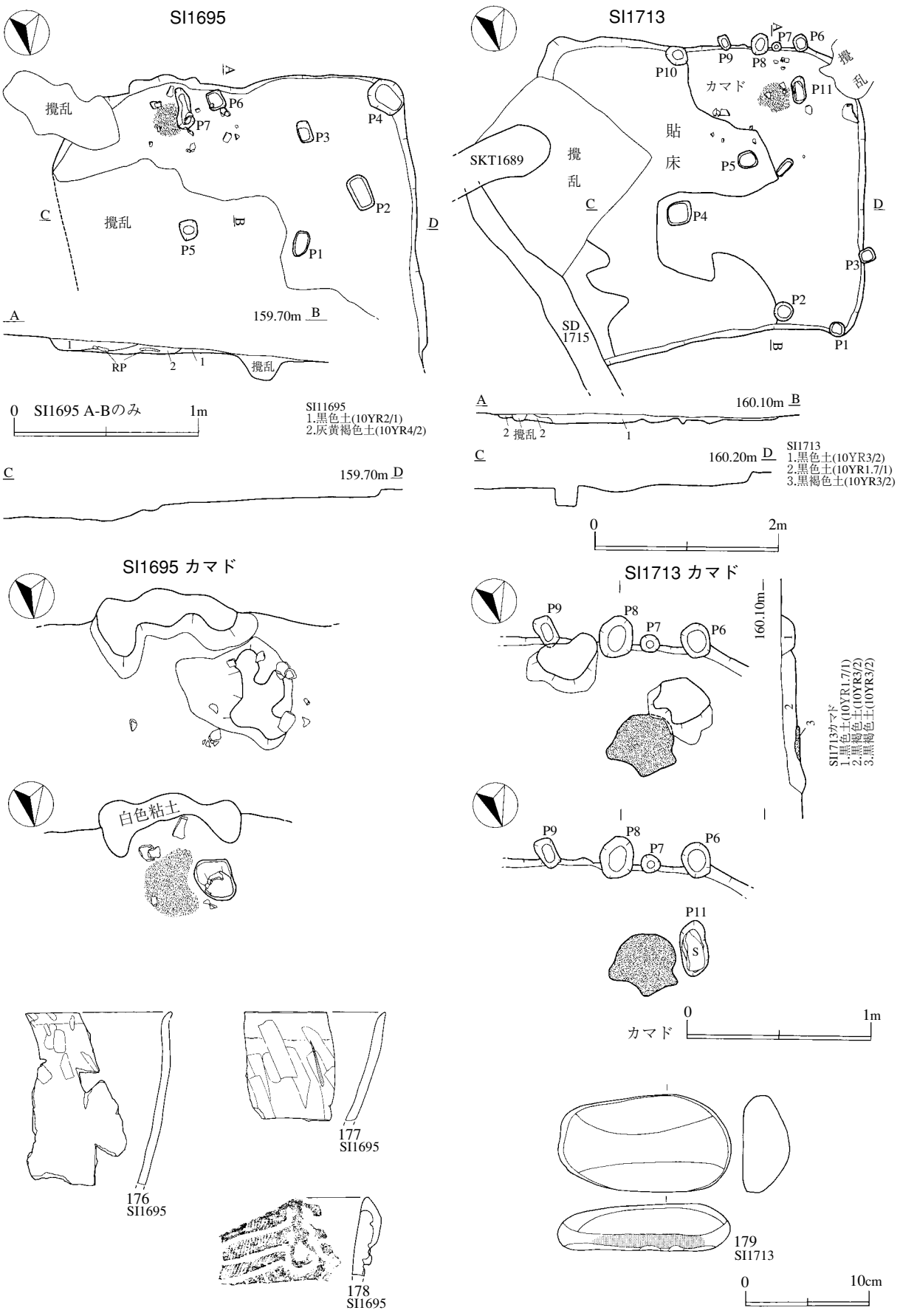
第53図　ＳＫＴ1252・1261・1700陥し穴

さは1.08ｍである。長軸方向両端がわずかにオーバーハングする形態である。
〈底面〉溝状に低く窪む。窪みの深さは0.41ｍである。
〈出土遺物〉なし。

４．Ｄ区の検出遺構と遺物

(１)竪穴住居跡

ＳＩ1695(第54図)
〈位置・確認状況〉ＬＫ48、ＬＬ48グリッドに位置する。Ｖ層上面から黒色土の方形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉２層に分層した。２層はカマドの覆土である。
〈平面形・規模〉北壁・東壁は攪乱等により削平され残存していなかった。確認プランから、長軸3.84ｍ、残存部短軸3.14ｍの隅丸方形を呈するものと推定される。
〈床面〉貼床が西壁から南壁にかけて検出された。床面はほぼ平坦である。
〈柱穴〉７個検出した。深さは0.12～0.23ｍである。
〈カマド〉南壁東側に付く。南壁側と西袖部から粘土を検出した。西袖部粘土の下には長楕円形の掘り込みがあった(Ｐ７)。カマド構築の際に、一度掘り込んだものと考えられる。芯材を固定するためのものか。燃焼部は硬く締まった火床面として確認した。火床面の西側からは土師器甕が逆位の状態で出土した。支脚として使用されていたものか。
〈その他の付属施設〉壁溝等は検出されなかった。
〈出土遺物〉カマドの周辺から土師器片が出土した。第54図178は縄文時代後期初頭の深鉢の口縁部である。口縁は大波状を呈し、波頂部から垂下する隆帯が貼り付けられる。口縁部文様帯には縄文施文後、口縁に沿って３条の沈線が施文される。口唇部は平坦になるようにミガキが施されている。内面は丁寧に磨かれる。
ＳＩ1713(第54図)
〈位置・確認状況〉ＬＬ46グリッドに位置する。Ｖ層上面から黒色土の方形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＴ1689、ＳＤ1715と重複する。本遺構はＳＫＴ1689より新しく、ＳＤ1715より古い。
〈堆積土〉２層に分層した。２層はカマド覆土である。
〈平面形・規模〉長軸3.33ｍ、短軸3.05ｍの隅丸方形を呈する。深さは0.21ｍである。
〈床面〉東側から貼床を検出した。床面はやや凹凸がある。
〈柱穴〉11個検出した。
〈カマド〉南壁西側に付く。両袖部とも粘土の一部が遺存する。西袖部の下からは礫(自然石)が出土し(Ｓ３・４)、芯材として使用していたものと考えられる。燃焼部は硬く締まった火床面として確認した。
〈その他の付属施設〉壁溝等は検出されなかった。
〈出土遺物〉カマドの周辺から土師器片、すり石１点が出土した。



第54図　ＳＩ1695・1713竪穴住居跡と出土遺物

（２）竪穴状遺構

ＳＫＩ1254（第55図、図版21）

〈位置・確認状況〉ＫＱ53・54グリッドに位置する。Ⅳ層上面から浮石を含む黒色土の方形プランとして確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉５層に分層した。１・２層は竪穴部覆土、３～５層は張り出し部の覆土である。張り出し部は木の根等により攪乱を多く受けている。

〈平面形・規模〉長軸2.46m、短軸2.27mの隅丸方形を呈する。深さは0.26mである。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈柱穴〉12個検出した。Ｐ１～３はⅡ層で、Ｐ４～12は床面で検出した。深さは0.04～0.50mである。

〈その他の付属施設〉南壁東端には長軸0.62m、短軸0.61mの隅丸方形の張り出しをもつ。張り出し部の下層には、地山を多く含むしまり・粘性の強い層（４・５層）が確認されたことから、出入り口であると考えられる。

〈出土遺物〉張り出し部の確認面から円礫１点が出土した。

（３）掘立柱建物跡

ＳＢ1217（第56図）

〈位置・確認状況〉ＫＱ57～59、ＫＲ57～59、ＫＳ57～59グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

〈重複関係〉ＳＫＰ1349と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模〉庇が付く掘立柱建物跡である。母屋部分は桁行４間×梁行２間の規模で、桁行（Ｐ６～10）9.90m、梁行（Ｐ６～14）4.00mを測る。南北に１間幅の庇が付く。総間は桁行（Ｐ１～Ｐ５）10.16m、梁行（Ｐ１～Ｐ18）7.08mを測る。

〈出土遺物〉なし。

ＳＢ1468（第56図）

〈位置・確認状況〉ＫＫ57、ＫＬ57・58グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。北東側は調査区外にかかり、柱穴の有無を確認できなかったが、柱穴の配置から１間幅の両庇が付く掘立柱建物跡とした。

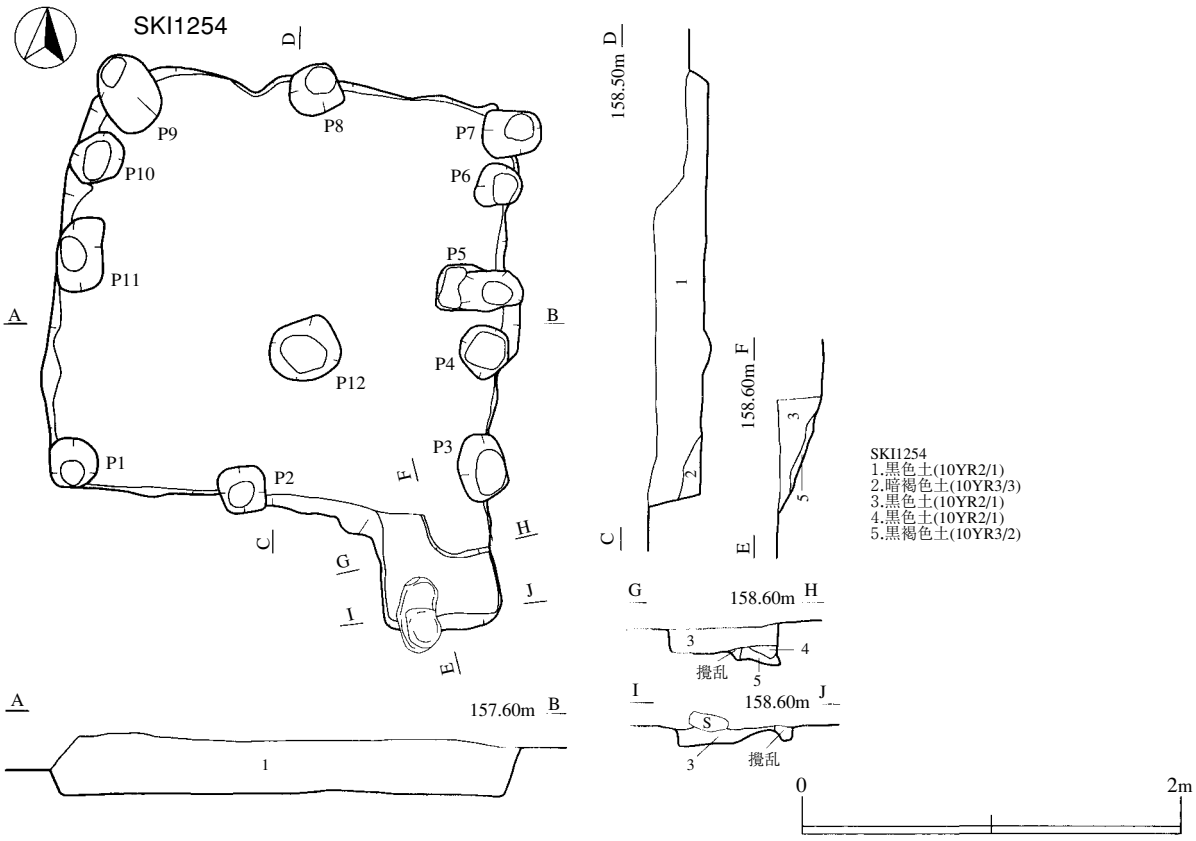
〈重複関係〉ＳＫＰ2928・2930と重複する。本遺構が最も古い。

〈規模〉母屋部分は桁行２間×梁行２間の規模で、桁行（Ｐ６～Ｐ８）4.06m、梁行（Ｐ２～Ｐ６）3.80mを測る。総間は桁行（Ｐ１～９）5.80mを測る。

〈出土遺物〉なし。

（４）柱穴様ピット

柱穴様ピットは、調査区全体で385基を検出した。その分布状態は、北東側で密集し、ＫＬライン以東・55ライン以南では散在している。これらの平面形は径0.10～0.45mで、多くは方形や楕円形を呈する。覆土は黒色土（10YR２／１）の単一層で、ほとんどが硬く締まっている。確認面からの深さ及び断面形は一様ではない。北東側で２棟の掘立柱建物跡を検出したが、それ以外の柱穴様ピットについては規則的な配列は認められず、柱痕も確認されなかった。掘立柱建物跡の柱穴かどうかは不明である。



第55図　ＳＫＩ1254竪穴状遺構

覆土中から遺物が出土した柱穴様ピットは385基中１基である。ＳＫＰ1488から土師器片１点が出土した。出土した遺物から、ＳＫＰ1488は平安時代に属するものと考えられるが、他の柱穴様ピットは遺物を出土しなかったため、その時期を明確にすることができなかった。

（５）溝跡

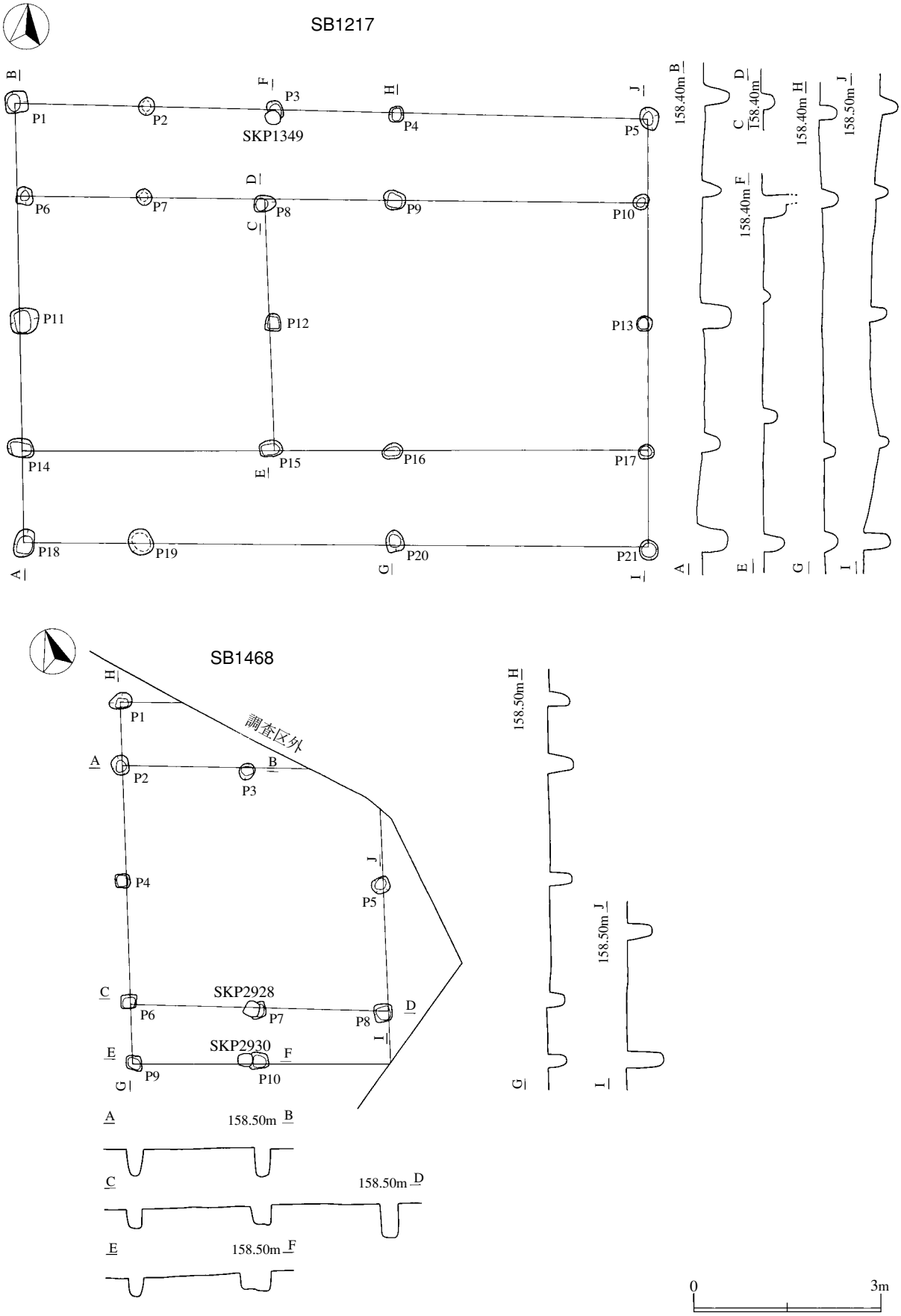
ＳＤ1709（第57図）

〈位置・確認状況〉ＬＥ47・48、ＬＦ46～51、ＬＧ46～51、ＬＨ50・51、ＬＩ50・51、ＬＪ50・51、ＬＫ50・51、ＬＬ50・51グリッドに位置する。Ⅳ層上面から浮石の混じる黒色土の落ち込みとして確認した。

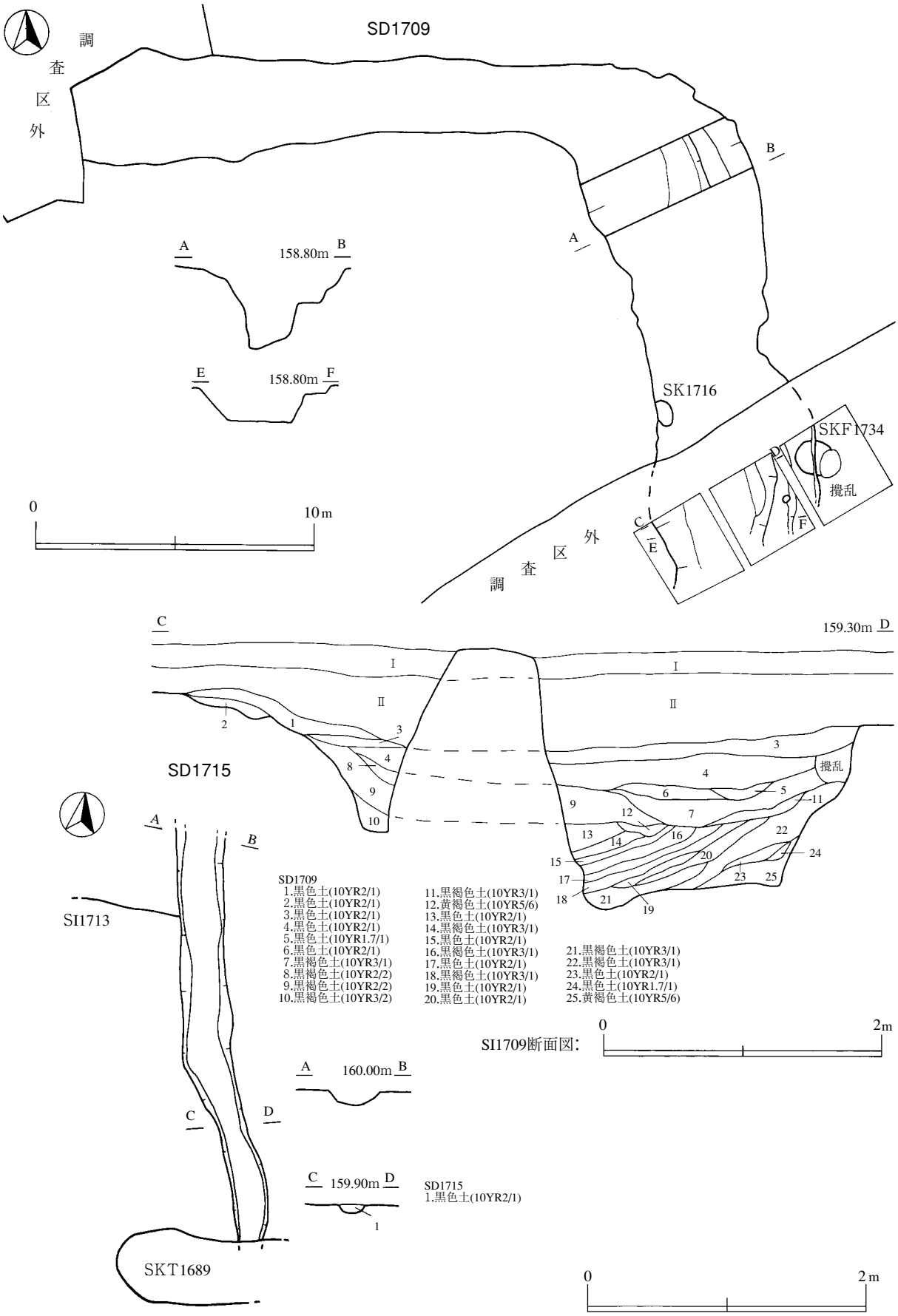
〈重複関係〉ＳＫ1716、確認部南端の防風柵№25でＳＫＦ1734と重複する。本遺構はＳＫＦ1734より新しく、ＳＫ1716より古い。ＳＫＦ1734は溝が構築された際に削平されており、下端の一部のみを確認した。

〈堆積土〉25層に分層した。自然堆積である。22～25層は壁崩落土である。13～21層は砂礫が多量に入る砂質土層と、砂礫が入る土層とが互層をなしている。水成堆積である可能性が考えられる。土層の堆積状況から、２時期の変遷があった可能性が考えられる。新段階は１～11層、古段階は13～25層である。

〈規模〉確認された範囲ではＬ字状を呈する。南端は調査区外にのび、西端は台地の段丘面に吸収される。幅は南北軸で4.16～5.90m、東西軸で2.40～4.01mである。断面からは、南北軸の東側には１



第56図　ＳＢ1217・1468掘立柱建物跡

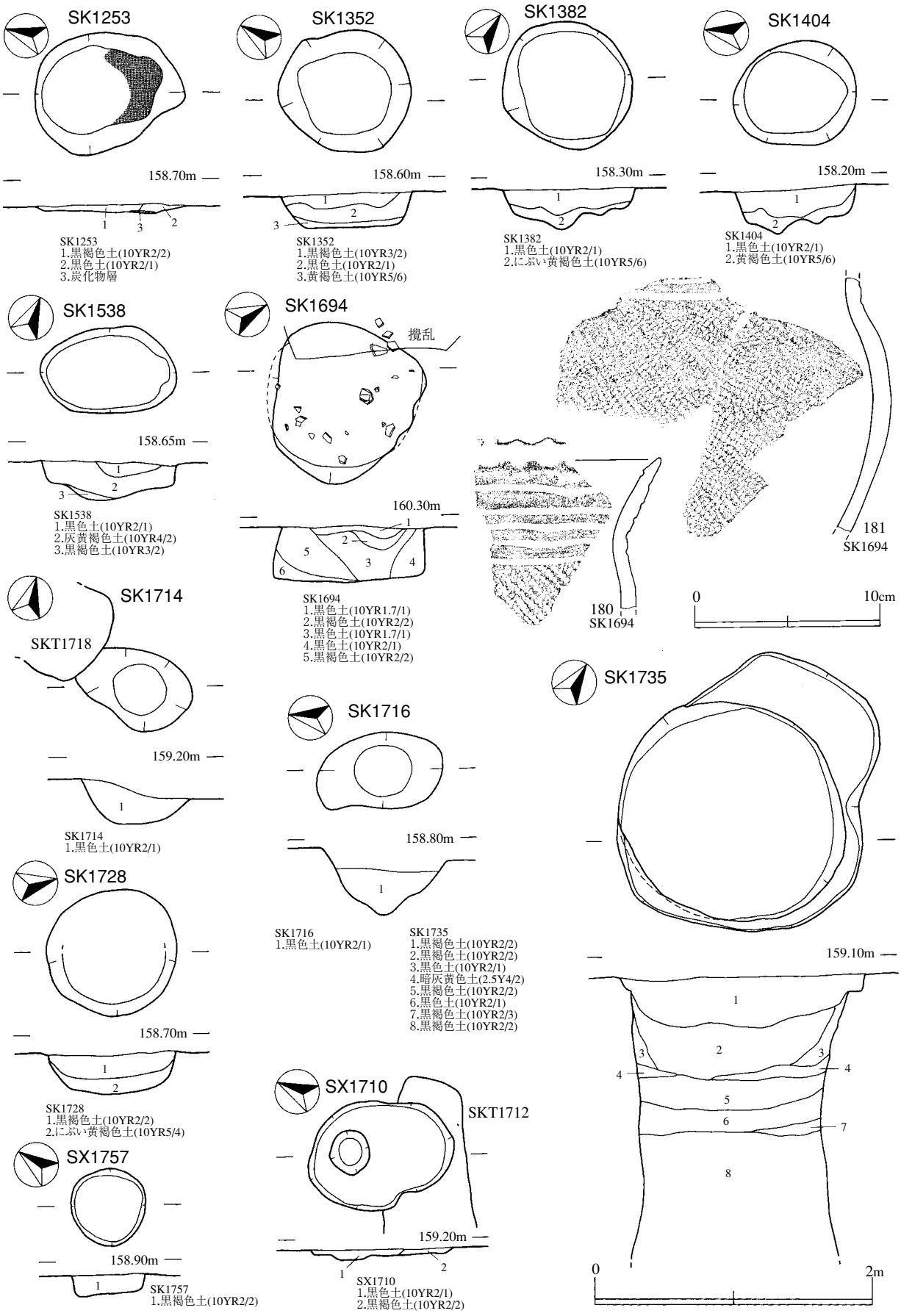


第57図　ＳＤ1709・1715溝跡

段の段(平場)があったものと推察される。深さは最深部で2.82m、南端部では1.34mである。
〈出土遺物〉なし。
ＳＤ1715(第57図)
〈位置・確認状況〉ＬＫ46、ＬＬ46グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＩ1713・ＳＫＴ1689と重複する。本遺構が最も新しい。
〈堆積土〉１層である。
〈規模〉確認長2.94m、幅0.21～0.36m、深さは0.06～0.11mである。南北端は削平あるいは攪乱されており、南北にさらにのびていたものと推察される。
〈出土遺物〉なし。

(６)土坑
ＳＫ1253(第58図)
〈位置・確認状況〉ＫＰ54グリッドに位置する。Ⅳ層上面で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉３層に分層した。１層の下面に炭化物の広がりを確認した。
〈平面形・規模〉長軸1.08m、短軸0.83mの楕円形を呈する。深さは0.06mである。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉鉄製品１点が出土した。
ＳＫ1352(第58図)
〈位置・確認状況〉ＫＳ56、ＫＴ56グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒褐色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉３層に分層した。
〈平面形・規模〉径0.95m×0.88mの略円形を呈する。深さは0.26mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ1382(第58図)
〈位置・確認状況〉ＫＳ57グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉２層に分層した。
〈平面形・規模〉径0.95m×0.94mの略円形を呈する。深さは0.31mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉凹凸がある。
〈出土遺物〉なし。

ＳＫ1404（第58図）
〈位置・確認状況〉ＫＱ58グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉２層に分層した。自然堆積である。
〈平面形・規模〉径0.88m×0.69mの略円形を呈する。深さは0.36mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉凹凸がある。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ1538（第58図）
〈位置・確認状況〉ＫＱ53グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉３層に分層した。
〈平面形・規模〉長軸0.99m、短軸0.62mの楕円形を呈する。深さは0.28mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉中央が中華鍋底状に緩やかに窪む。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ1694（第58図）
〈位置・確認状況〉ＬＭ45グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の不整円形プランとして確認した。
〈重複関係〉西側が攪乱により削平される。
〈堆積土〉６層に分層した。自然堆積である。４～６層は崩落土である。
〈平面形・規模〉長軸1.12m、短軸1.08mの不整形を呈する。深さは0.40mである。断面は袋状を呈する。
〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉縄文土器が１個体出土した。深鉢で口縁部から体部上半まで残存する。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は緩やかに外傾する。口縁部は小波状を呈する。口縁部文様帯には横位に５条の平行沈線が施文され、体部にはＲＬ縄文が施される。外面には炭化物が付着する。内面は丁寧に磨かれる。
ＳＫ1714（第58図）
〈位置・確認状況〉ＬＩ48グリッドに位置する。
〈重複関係〉ＳＫＴ1708と重複する。新旧関係は不明である。
〈堆積土〉１層である。
〈平面形・規模〉径0.85m×0.41mの略円形を呈する。深さは0.32mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉なし。

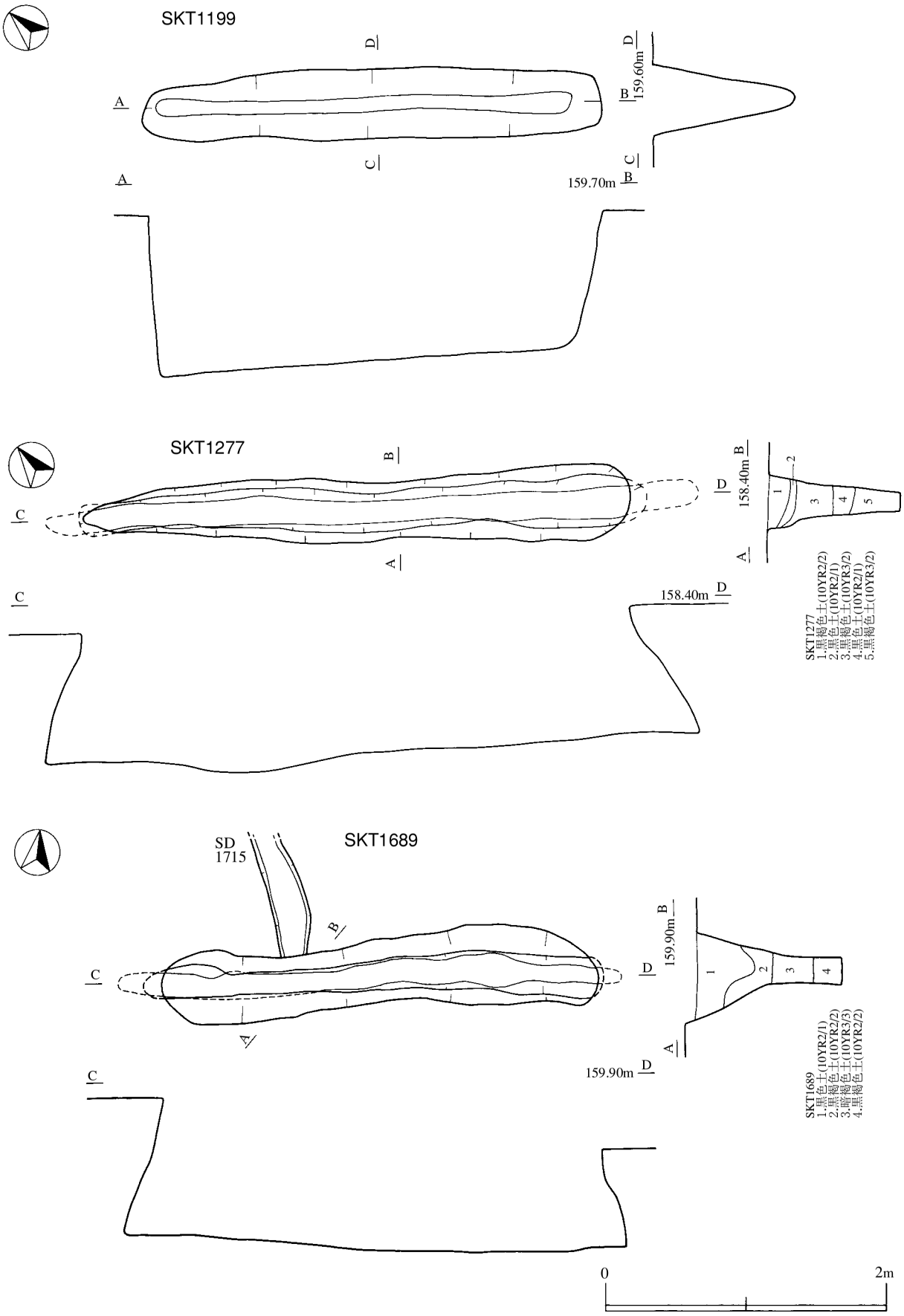


第58図　ＳＫ1253・1352・1382・1404・1538・1694・1714・1716・1728・1735・1757土坑とＳＫ1694土坑出土遺物、ＳＸ1710その他の遺構

ＳＫ1716(第58図)
〈位置・確認状況〉ＬＦ47・48、ＬＧ47・48グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の楕円形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＤ1709と重複する。本遺構が新しい。
〈堆積土〉１層である。
〈平面形・規模〉長軸0.93m、短軸0.57mの楕円形を呈する。深さは0.49mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉中華鍋底状である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ1728(第58図)
〈位置・確認状況〉ＬＨ50グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒褐色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉２層に分層した。
〈平面形・規模〉径0.96m×0.92mの略円形を呈する。深さは0.30mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉中華鍋底状に中央がわずかに窪む。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫ1735(第58図)
〈位置・確認状況〉ＬＣ48・49グリッド(防風柵Ｎｏ.21)に位置する。防風柵Ｎｏ.21Ⅱ層上面の北壁から半円形のプランを検出し、拡張したところ不整形プランの下から円形の掘り込みを確認した。本土坑は井戸跡の可能性がある。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉８層に分層した。１～３、５～８層は人為堆積である。４層はシラス層である。５～８層には多少の差はあるもののシラスが含まれる。
〈平面形・規模〉径1.69m×1.54mの略円形を呈する。深さは２mに達したところで作業上の安全が確保できなくなったため、掘り下げを中止した。
〈底面〉底面には到達していないため、底面の形状は不明である。
〈出土遺物〉１～３層(どの層かは不明)からはレンガ片が出土した。４層から陶磁器片、８層上面から陶器片・銭貨が出土した。陶磁器片は人形の脚部と考えられる。表面には赤色顔料で縦位に連続するラインが施文される。８層上面から出土した陶器片は底部で、器種は不明である。底面を上に向けて出土した。内外面には漆が付着する。陶器片を取り上げた後、１cm程下のほぼ同地点から銭貨が出土した。出土状況から、埋め戻しの際に銭貨の上に陶器底部をかぶせて埋納した可能性がある。陶器片は唐津で、銭貨は模鋳銭であった。
ＳＫ1757(第58図)
〈位置・確認状況〉ＬＥ47(防風柵Ｎｏ.24)グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。
〈平面形・規模〉径0.56m×0.53mの円形を呈する。深さは0.16mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉凹凸がある。
〈出土遺物〉なし。

（７）陥し穴
ＳＫＴ1199（第59図）
〈位置・確認状況〉ＬＩ44・45、ＬＪ44・45グリッド（防風柵Ｎｏ.31）に位置する。Ⅴ層上面から黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉土層観察用ベルトが崩落したため、観察できなかった。
〈平面形・規模〉開口部長軸3.25m、短軸0.49m、底部長軸2.95m、短軸0.09mの溝状を呈する。深さは1.18mである。
〈底面〉平坦であるが、西に向かって緩やかに低く傾斜する。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1277（第59図）
〈位置・確認状況〉ＬＡ56グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒褐色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉５層に分層した。自然堆積である。４・５層中には地山が多く堆積しており、崩落土と考えられる。
〈平面形・規模〉開口部長軸4.00m、短軸0.21m、底部長軸4.66m、短軸0.61mの溝状を呈する。深さは1.15mである。長軸方向両端がオーバーハングする形態である。
〈底面〉底面はわずかに凹凸があり、西に向かってやや低く傾斜する。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1689（第59図、図版21）
〈位置・確認状況〉ＬＫ46、ＬＬ46グリッドに位置する。攪乱の底面から黒色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＤ1715と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉４層に分層した。自然堆積である。
〈平面形・規模〉開口部長軸3.12m、短軸0.42m、底部長軸3.58m、短軸0.11mの溝状を呈する。深さは1.06mである。
〈底面〉ほぼ平坦である。東に向かって緩やかに低く傾斜する。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1708（第60図、図版21）
〈位置・確認状況〉ＬＩ48グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の楕円形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫ1714と重複する。新旧関係は不明である。

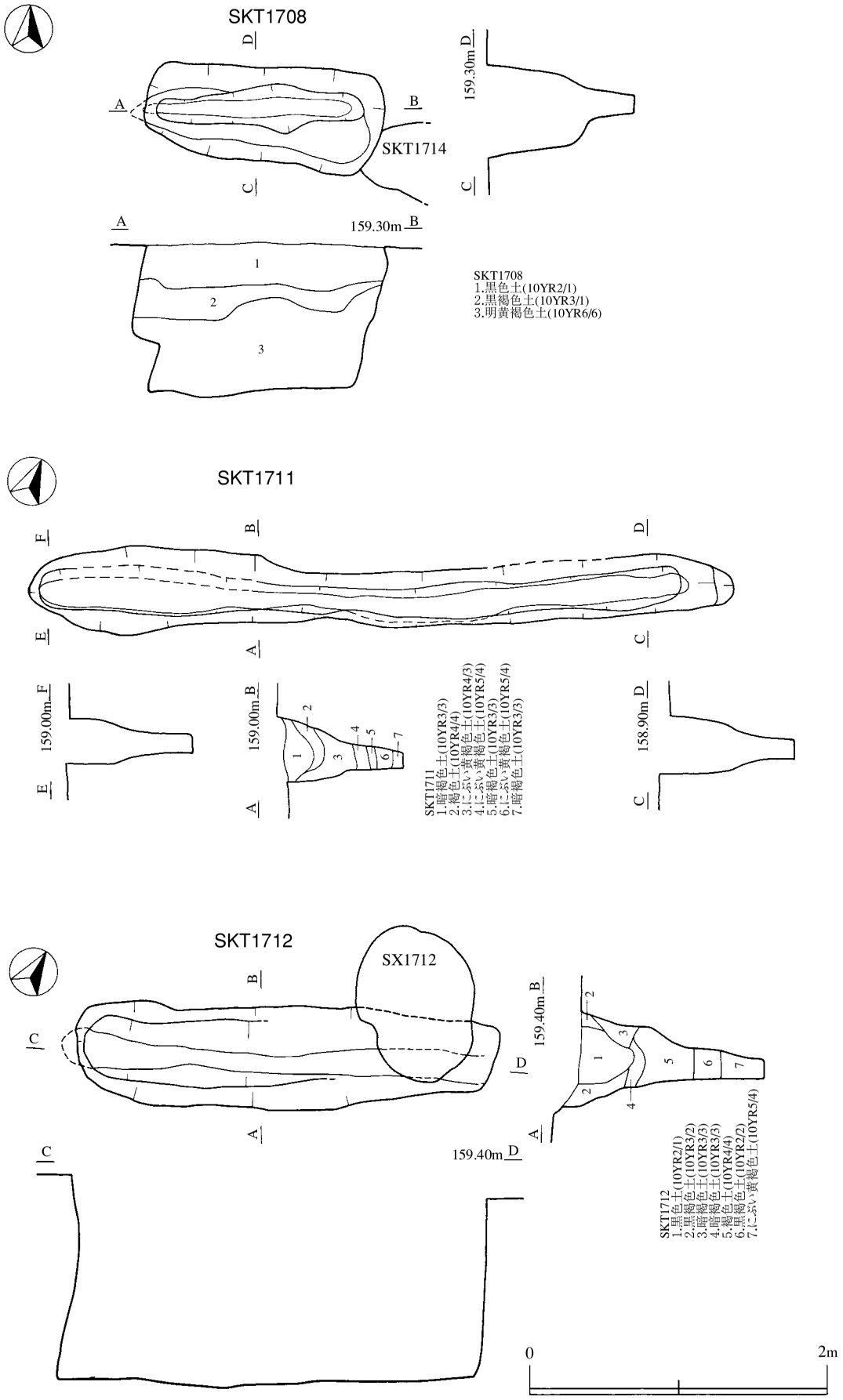


第59図　ＳＫＴ1199・1277・1689陥し穴

〈堆積土〉３層に分層した。自然堆積である。２層中には地山が多量に含まれており、崩落土と考えられる。
〈平面形・規模〉開口部長軸1.60m、短軸0.64m、底部長軸1.41m、短軸0.10mの楕円形を呈する。深さは1.03mである。
〈底面〉わずかに凹凸があるが、ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1711(第60図)
〈位置・確認状況〉ＬＨ49、ＬＩ49グリッドに位置する。Ⅵ層上面から地山を多量に含む暗褐色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉７層に分層した。自然堆積である。２～４・６層は崩落土である。
〈平面形・規模〉開口部長軸4.73m、短軸0.30m、底部長軸4.36m、短軸0.08mの溝状を呈する。深さは0.82mである。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＴ1712(第60図)
〈位置・確認状況〉ＬＨ47、ＬＩ47グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒褐色土の溝状プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＸ1710と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉７層に分層した。自然堆積である。５層は崩落土である。
〈平面形・規模〉開口部長軸2.85m、短軸0.47mの溝状を呈する。深さは1.36mである。底部は東側を掘りすぎてしまったが、残存部の長軸2.82m、短軸0.11mで、長軸の両端がオーバーハングする形態と考えられる。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉なし。

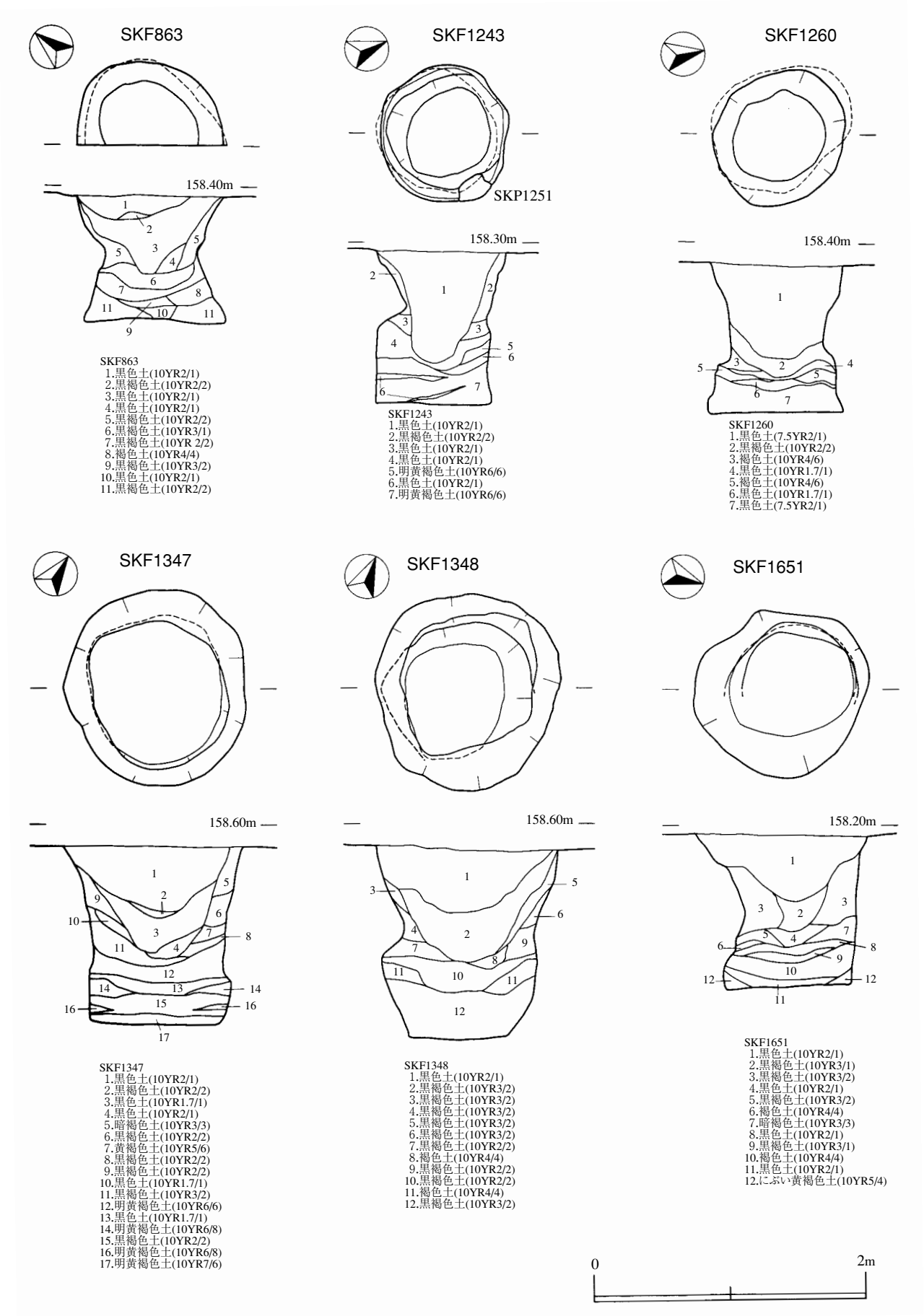
(８)フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は廃絶後、自然堆積で半分ほど埋没した後、人為的に埋め戻されている。埋没途中のフラスコ状土坑を再利用した可能性が考えられる。埋め戻し土には浮石を含まない黒色土が使用されていた。
ＳＫＦ863(第61図)
〈位置・確認状況〉ＫＯ53、ＫＰ53グリッド(防風柵Ｎｏ．９)に位置する。Ⅴ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉11層に分層した。自然堆積である。６・８層は壁崩落土である。11層には地山が筋状に入り込んでいた。
〈平面形・規模〉西半分が調査区外に広がるが、確認部分から径1.08mの略円形を呈するものと考え



第60図　ＳＫＴ1708・1711・1712陥し穴

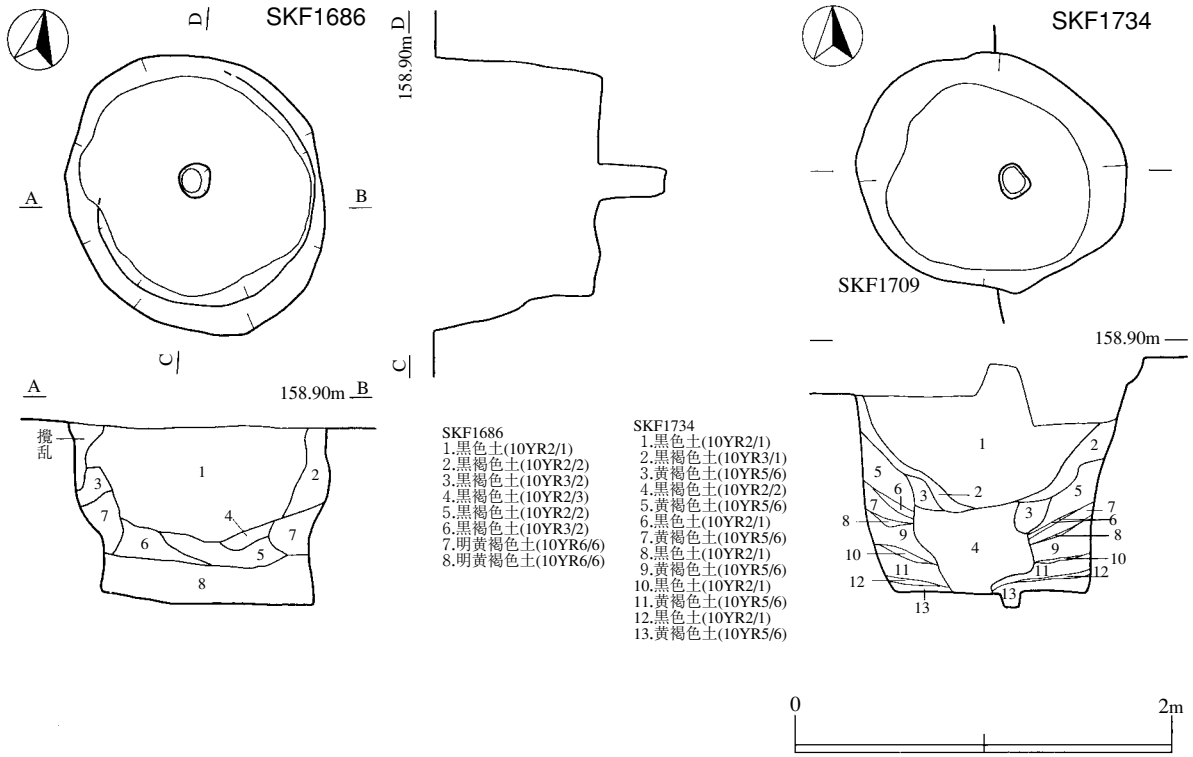
られる。深さは0.93mである。断面はフラスコ状を呈する。
〈底面〉やや凹凸があるが、ほぼ平坦である。シラス層に達したところを底面として使用していた。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＦ1243(第61図)
〈位置・確認状況〉ＫＯ56グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＰ1251と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉７層に分層した。１層は人為堆積、２～７層は自然堆積である。５・７層は壁崩落土で、間に黒色の流入土(６層)が筋状に入り込む。
〈平面形・規模〉開口部長径1.02m×短径0.94m、坑底部径0.88mの略円形を呈する。深さは1.15mである。断面は三角フラスコ状を呈する。
〈底面〉平坦である。シラス層に達したところを底面として使用していた。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＦ1260(第61図)
〈位置・確認状況〉ＫＯ54グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉７層に分層した。１層は人為堆積、２～７層は自然堆積である。３・５層は壁崩落土で、７層には褐色土が筋状に入り込む。
〈平面形・規模〉開口部径1.06m×0.93m、坑底部長軸1.10m、短軸0.76mの略円形を呈する。深さは1.12mである。断面形は三角フラスコ状を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＦ1347(第61図、図版21)
〈位置・確認状況〉ＬＡ52、ＬＢ52グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉17層に分層した。１～４層は人為堆積、５～17層は自然堆積である。12・14・16・17層は壁崩落土である。
〈平面形・規模〉開口部径1.44m×1.29m、坑底部径1.06m×0.99mの略円形を呈する。深さは1.32mである。断面は三角フラスコ状を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＦ1348(第61図、図版21)
〈位置・確認状況〉ＫＴ51・52、ＬＡ51・52グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉12層に分層した。１・２層は人為堆積、３～12層は自然堆積である。８・11層は壁崩落土である。12層には地山が多量に混入する。



第61図　ＳＫＦ863・1243・1260・1347・1348・1651フラスコ状土坑

〈平面形・規模〉開口部径1.45ｍ×1.26ｍ、坑底部径0.82ｍ×0.73ｍの略円形を呈する。深さは1.43ｍである。断面は三角フラスコ状を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＦ1651(第61図)
〈位置・確認状況〉ＫＮ58・59グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉12層に分層した。１層は人為堆積、２～12層は自然堆積である。６・10・12層は壁崩落土である。
〈平面形・規模〉開口部径1.32ｍ×1.25ｍ、坑底部径0.94ｍ×0.79ｍの略円形を呈する。深さは1.14ｍである。断面は三角フラスコ状を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＦ1686(第62図)
〈位置・確認状況〉ＬＪ49グリッドに位置する。Ⅵ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉８層に分層した。１層は人為堆積、２～８層は自然堆積である。７層は壁崩落土で、８層は崩落土と黒色の流入土が互層をなす。
〈平面形・規模〉開口部径1.56ｍ×1.34ｍ、坑底部径1.16ｍ×1.09ｍの円形を呈する。深さは0.94ｍである。断面は袋状を呈する。
〈底面〉平坦であるが、中央に径0.18ｍ、深さ0.36ｍの略円形を呈するピット１個を検出した。
〈出土遺物〉なし。
ＳＫＦ1734(第62図)
〈位置・確認状況〉ＬＥ47グリッドに位置する。ＳＤ1709を掘り下げたところ、Ⅴ層上面から黒色土の円形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＤ1709と重複する。本遺構が古い。
〈堆積土〉13層に分層した。１・２層は人為堆積、３～13層は自然堆積である。４層は木の根等により攪乱を受けている。
〈平面形・規模〉開口部径1.44ｍ×1.18ｍ、坑底部1.11ｍ×0.96ｍの略円形を呈する。深さは1.04ｍである。断面は袋状を呈する。
〈底面〉平坦であるが、中央に径0.17ｍ×0.15ｍ、深さ0.09ｍの略円形を呈するピット１個を検出した。
〈出土遺物〉なし。

(９)土坑墓
ＳＫＳ1198(第63図、図版22)
〈位置・確認状況〉ＫＯ54、ＫＰ54グリッドに位置する。Ⅳ層上面から浮石を含む黒色土の円形プラ



第62図　ＳＫＦ1686・1734フラスコ状土坑

ンとして確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉２層に分層した。人為堆積である。

〈平面形・規模〉長軸1.74m、短軸1.35mの楕円形を呈する。深さは0.28mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉底面から人骨片、銭貨８枚、漆の被膜が出土した。遺存状態が悪く、北側に頭骨がかろうじて残るほか、頭骨の南西に骨片が出土したのみである。頭骨の周辺には粘性の強いベタベタした暗褐色土が分布していた。銭貨は頭骨の南側から３ヶ所に分かれて出土した。寛永通寶である。漆は木地が腐食し遺存しておらず、被膜片のみが出土した。

〈棺の有無〉棺の痕跡は確認できなかった。

ＳＫＳ1344(第63図、図版22)

〈位置・確認状況〉ＫＴ56グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。人為堆積である。

〈平面形・規模〉径1.03m×0.99mの略円形を呈する。深さは0.56mである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉底面から人骨片、銭貨、漆の被膜が出土した。人骨は土坑内の西側にまとまって出土し、歯等が確認できた。人骨の東側からは切羽４枚と寛永通寶２枚(一文銭と四文銭)が出土した。うち１

枚の寛永通寶(一文銭)の中央の孔には両端を細く尖らせた断面四角形の木片が差し込まれていた。漆は木地が腐食し遺存しておらず、赤色の被膜片のみが人骨の南側から出土した。

〈棺の有無〉棺の痕跡は確認できなかった。

ＳＫＳ1353(第63図、図版22)

〈位置・確認状況〉ＫＴ57グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。人為堆積である。

〈平面形・規模〉径1.02m×0.98mの略円形を呈する。深さは0.77mである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉人骨、銭貨６枚、漆の被膜が出土した。人骨は背面を南に、正面を北に向けて膝を立てて座位で埋葬された(座位屈葬)ものが、埋没過程において、下半身が東に、上半身が左肩を下に倒れたものと考えられる。銭貨は顎関節の上から出土した。寛永通寶である。漆は木地が腐食し遺存しておらず、赤色の被膜片のみが出土した。

〈棺の有無〉人骨の出土状況から、棺や桶等に入れられて埋葬されたものと考えられる。

ＳＫＳ1378(第63図、図版23)

〈位置・確認状況〉ＫＴ58グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉３層に分層した。２・３層は人為堆積である。１層は埋没後の窪みに流れ込んだ自然堆積土である。

〈平面形・規模〉長軸1.13m、短軸0.89mに楕円形を呈する。深さは0.69mである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉底面から人骨、銭貨が出土した。人骨の遺存状態は良好で、背面を下にし、両腕・両脚を折り曲げた屈葬である。頭部は南を向く。銭貨は人骨の西側から出土した。寛永通寶である。

〈棺の有無〉棺の痕跡は確認できなかった。

ＳＫＳ1530(第63図、図版23)

〈位置・確認状況〉ＫＴ58、ＬＡ58グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。人為堆積である。

〈平面形・規模〉長軸1.46m、短軸0.78～1.13mの楕円形を呈する。深さは0.84mである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉底面から人骨、銭貨３枚、環状金具４点、鉄釘３点、漆の被膜が出土した。人骨は頭骨と四肢骨の一部のみが遺存していた。頭部は東を向く。銭貨は重なって出土した。寛永通寶である。環状金具は四肢骨の周辺から、鉄釘は頭部の東側から出土した。漆は木地が腐食し遺存しておらず、赤色の被膜片のみがフルイによる選別で確認できた。

〈棺の有無〉人骨の周辺から環状金具・鉄釘が出土していることから、木棺に入れられていたものと考えられる。

ＳＫＳ1544（第63図、図版23）

〈位置・確認状況〉ＬＡ58グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉２層に分層した。１・２層は人為堆積である。

〈平面形・規模〉径1.34m×1.27mの略円形を呈する。深さ0.75mのところから長軸1.00m、短軸0.96m、深さ0.19mの方形の掘り込みを検出した。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉方形の掘り込み内から人骨、銭貨６枚、銅鏡１点、木製櫛１点、銅製の皿１点、和鋏１点が出土した。人骨の遺存状態は良好で、全身が残る。膝を立て、上半身は左側を下にして出土した。膝を立てて座位で埋葬された（座位屈葬）ものが、埋没過程において上半身が倒れたものと考えられる。銭貨は脚の東側から重なって出土した。寛永通寶である。銅鏡、木製櫛、銅製の皿、和鋏は方形の掘り込みの北東隅から重なった状態で出土した。

〈棺の有無〉埋没過程において上半身が倒れ、下顎骨が眼窩付近まで移動するなど、体の周囲に空間があったものと考えられ、人骨の出土状況と床面の方形の掘り込みから、木棺があったものと推察される。

ＳＫＳ1565（第63図、図版23）

〈位置・確認状況〉ＬＭ46、ＬＮ46グリッド、台地の西端に位置する。Ⅵ層上面から黒褐色土の円形プランとして確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。人為堆積である。

〈平面形・規模〉径1.00m×0.97mの略円形を呈する。深さは0.95mである。断面は漏斗状を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉底面から人骨、銭貨９枚、漆の被膜、木片が出土した。人骨は、四肢骨（下肢骨か）の上に頭骨がのっており、座位で埋葬されたものと考えられる。銭貨は人骨の東側から出土した。寛永通寶である。漆は木地が腐食し遺存しておらず、赤色の被膜片のみがフルイによる選別で確認できた。

〈棺の有無〉棺の痕跡は確認できなかった。

ＳＫＳ1685（第64図、図版24）

〈位置・確認状況〉ＬＢ57グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。

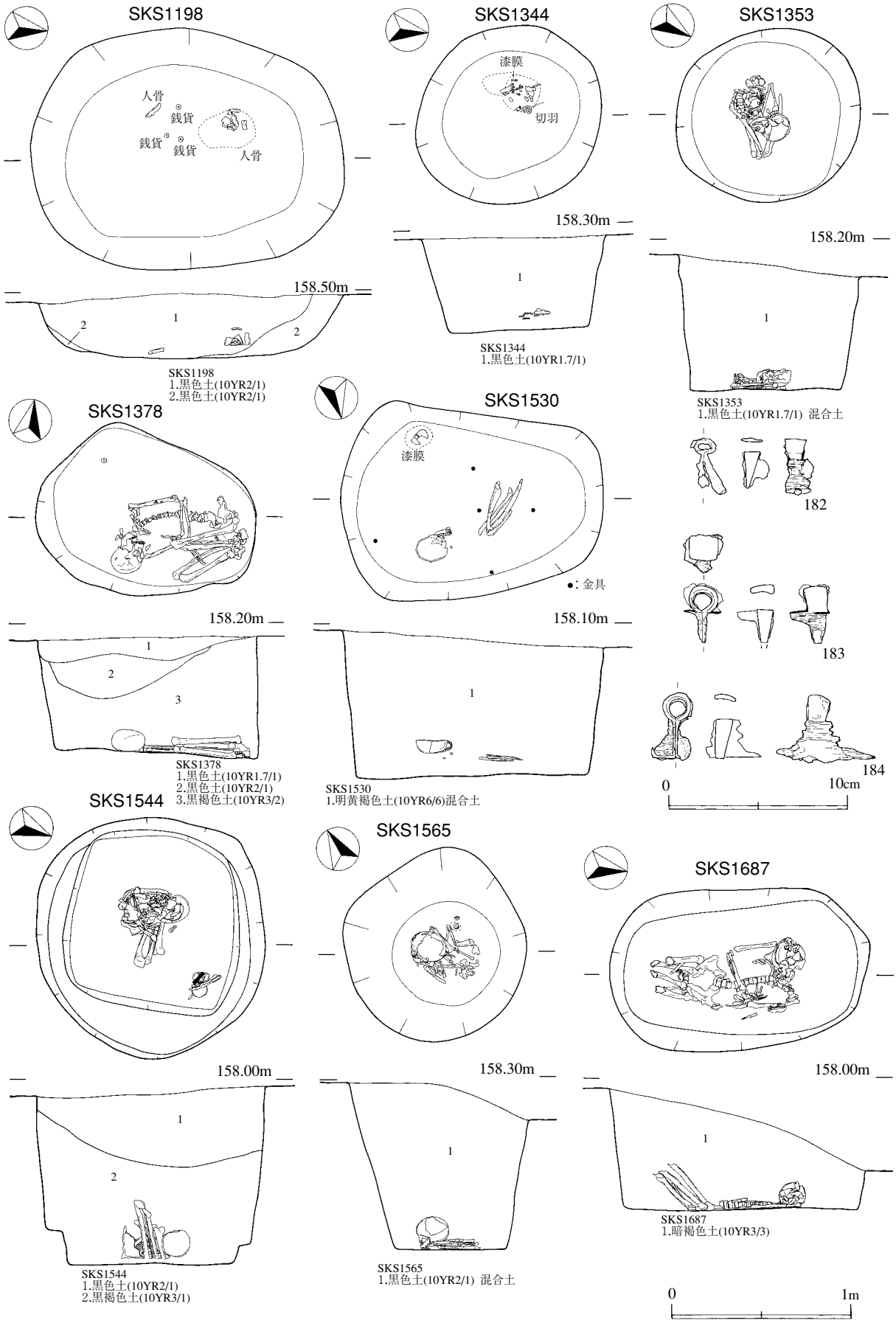
〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉２層に分層した。人為堆積である。

〈平面形・規模〉長軸1.24m、短軸1.21mの略円形を呈する。深さは0.90mである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉ほぼ平坦である。

〈出土遺物〉底面から人骨、銭貨６枚、煙管１点、数珠玉１点、鉄釘29点が出土した。人骨の遺存状態は良好で、左側を下にした横臥屈葬である。頭部は南東を向く。銭貨は膝付近から重なった状態で



第63図　ＳＫＳ1198・1344・1353・1378・1530・1544・1565・1687土坑墓と
ＳＫＳ1530土坑墓出土遺物

出土した。寛永通寶である。煙管は頭骨の南側から出土した。雁首と吸口を別個に製作し、その間の吸管を竹でつなぐ羅宇煙管と推察される。数珠は青色のガラス製で、膝付近から出土した。また、人骨の西側、背骨に沿って長さ0.73mの木材が出土した。南側・北側からも木材の一部が出土し、これらの材に沿って22本の鉄釘が出土したことから、木棺の一部と考えられる。

〈棺の有無〉人骨及び副葬品の出土状況から推察される棺の規模は0.73m×0.52mである。

ＳＫＳ1687(第63図、図版24)

〈位置・確認状況〉ＬＢ57グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。人為堆積である。

〈平面形・規模〉長軸1.43m、短軸0.91mの隅丸方形を呈する。深さは0.67mである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉底面から人骨、銭貨６枚、数珠玉58点、煙管１点、鉄釘１点、漆の被膜が出土した。人骨は膝を立てた仰臥屈葬である。腕は体の前面で交差する。頭部は北を向く。銭貨、数珠玉とも頭部付近から出土した。銭貨は腐食していたが、銘を確認できたものは寛永通寶である。数珠玉は木製が57点、ガラス製が１点である。煙管の雁首部は上腕骨の下から、吸口部は東側から出土した。吸口と雁口をつなぐ竹管(羅宇)も残存していた。雁口部には木質が密着しており、煙草入れあるいは煙管筒が存在したものと思われる。漆は木地が腐食し遺存しておらず、赤色の被膜片のみがフルイによる選別で確認できた。

〈棺の有無〉鉄釘が出土していることから、木棺に入れられていたものと考えられる。

ＳＫＳ1688(第65図、図版24)

〈位置・確認状況〉ＬＡ57グリッドに位置する。Ⅵ層上面から地山を多量に含む方形プランとして確認した。

〈重複関係〉なし。

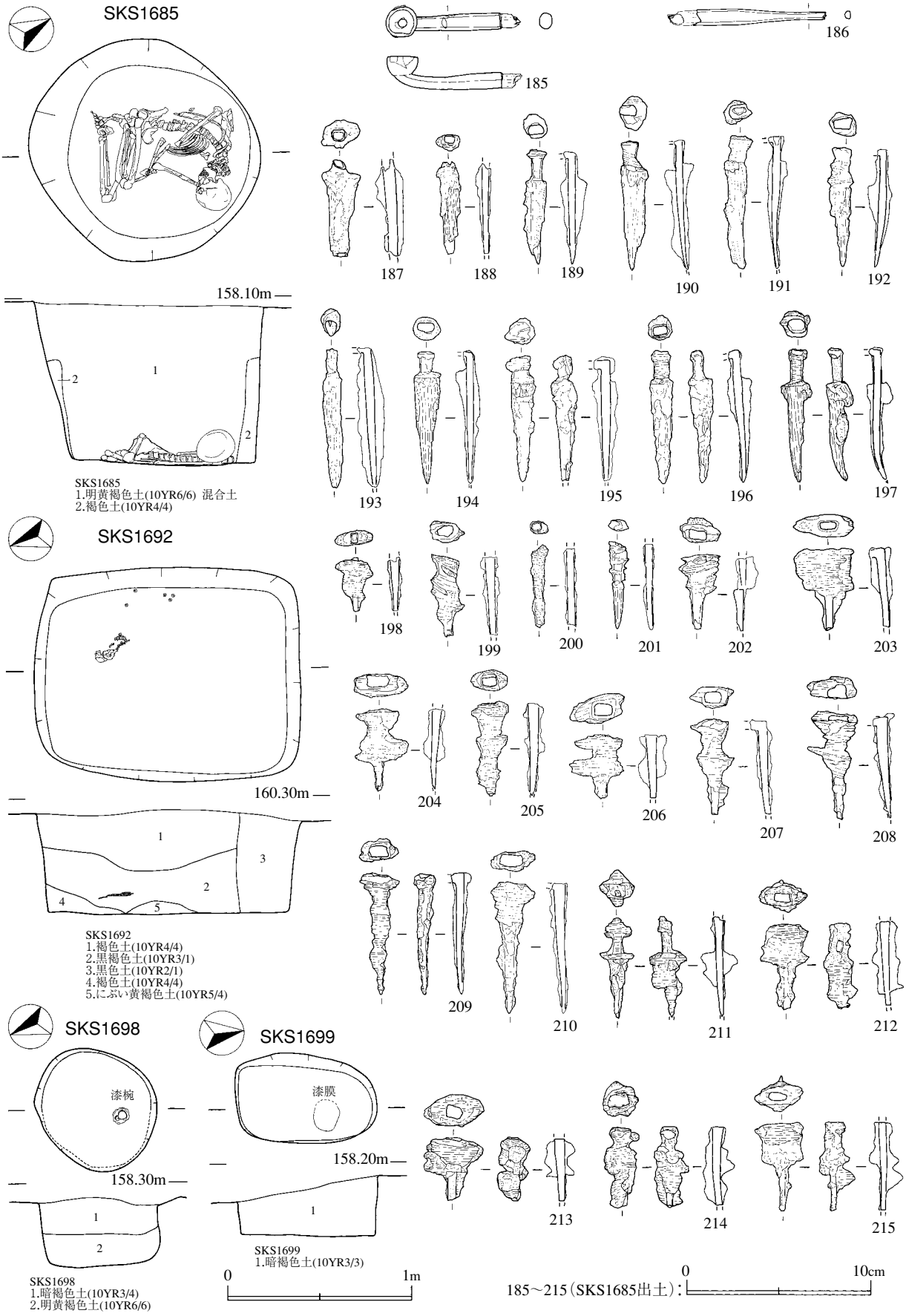
〈堆積土〉３層に分層した。

〈平面形・規模〉長軸1.17m、短軸1.10mの方形を呈する。深さ1.12mのところから径0.56m×0.52m、深さ0.29mの円形の掘り込みを検出した。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦である。

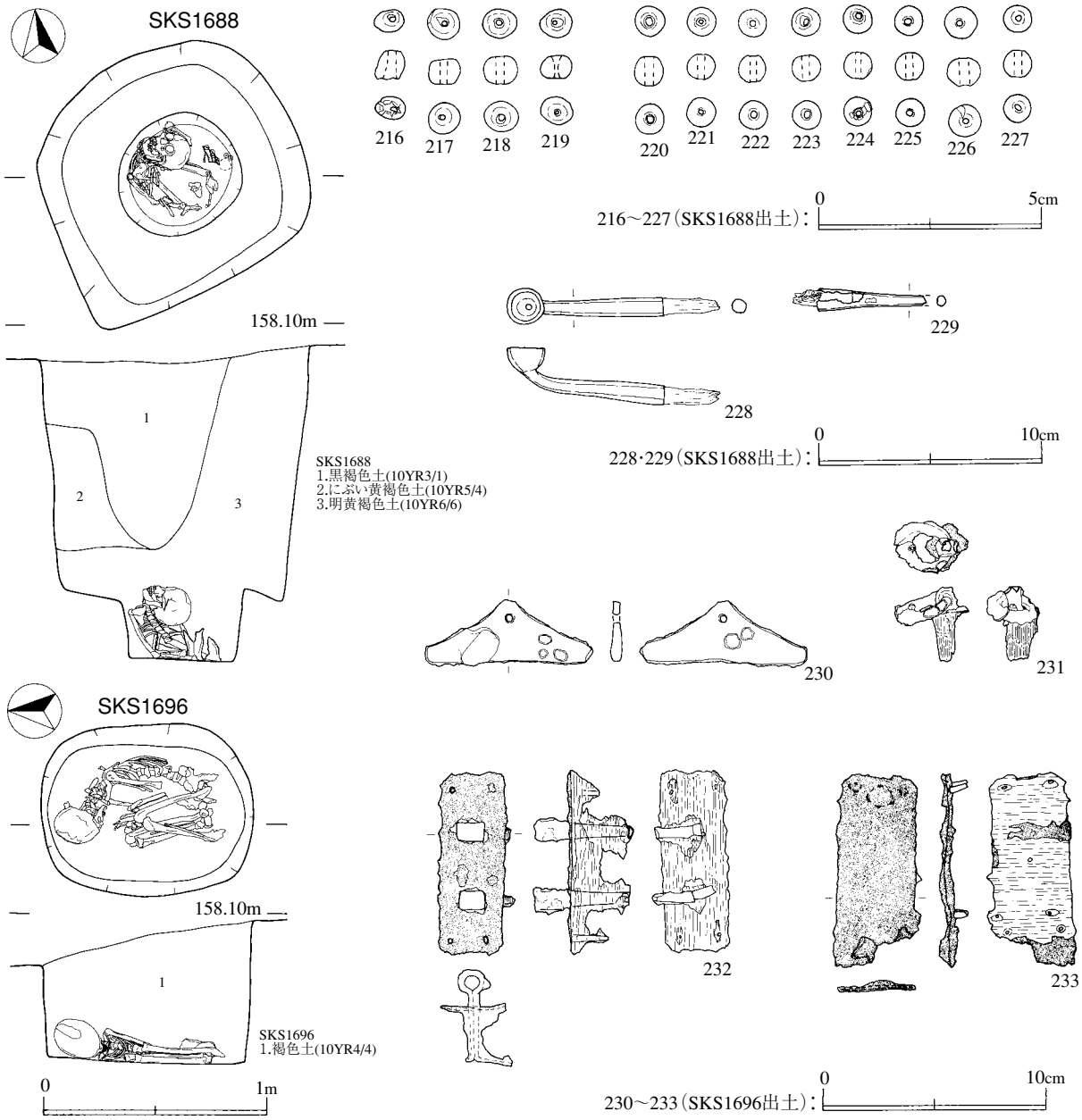
〈出土遺物〉掘り込みの底面から人骨、銭貨６枚、煙管１点、数珠玉12点が出土した。人骨は座位屈葬である。背面を南東に向け、正面は北西を向いていたものが埋没過程において上半身が前面に倒れたものと考えられる。銭貨・煙管・数珠玉は円形の掘り込み内東側から出土した。銭貨は銘が確認できるものは寛永通寶である。数珠玉は木製が４点、ガラス製が８点である。ガラス製のうち１点は青色である。

〈棺の有無〉埋没過程において上半身が倒れ、頭部が上を向くなど、体の周囲に空間があったものと考えられ、人骨の出土状況と床面の円形の掘り込みから、円形の棺があったものと推察される。棺の部材等は出土しなかったため確定はできないが、形態から桶を用いていた可能性が考えられる。



第64図　ＳＫＳ1685・1692・1698・1699土坑墓とＳＫＳ1685土坑墓出土遺物

ＳＫＳ1692(第64図)
〈位置・確認状況〉ＬＮ47グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉５層に分層した。１・３層は人為堆積、２層は棺内の土である。土坑の南側に切り株があったため、３層は若干攪乱されている。
〈平面形・規模〉長軸1.43m、短軸1.15mの方形を呈する。深さは0.56mである。断面は北側はビーカー形を呈するが、南側は漏斗状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦である。
〈出土遺物〉底面の東側から頭骨の一部と銭貨５枚が出土した。１枚に「武」「寳」の銘がみられるが、その他は中央孔の大きさに比べ、径が小さい薄手の無文銭である。
〈棺の有無〉堆積土から、棺に入れられて埋葬されていたものと考えられる。
ＳＫＳ1696(第65図、図版24)
〈位置・確認状況〉ＬＢ57グリッド、台地の北側斜面際に位置する。Ⅵ層上面から地山由来の褐色土のプランとして確認した。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉１層である。人為堆積である。
〈平面形・規模〉長軸0.94m、短軸0.77mの隅丸方形を呈する。深さは0.62mである。断面はビーカー形を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉底面から人骨、銭貨６枚、煙管１点、板状金具５点、鉄釘６点、環状金具１点、火打ち金１点が出土した。人骨は左側を下にし、両腕・両脚を屈曲させた横臥屈葬である。銭貨は眼窩付近から、煙管と火打ち金は膝付近から出土した。煙管は銅製の吸口と雁首を竹管でつなぐ羅宇煙管で、竹管(羅宇)も遺存していた。また、煙管に密着して木質が検出されている。煙草入れと煙管筒であった可能性が考えられる。鉄釘は土坑の北東部と南西部から、板状金具は北西部と南東部から人骨をめぐるように出土した。環状金具は膝付近から出土した。
〈棺の有無〉鉄釘や金具が人骨をめぐるように出土したことから、棺に入れられて埋葬されていたものと考えられる。
ＳＫＳ1698(第64図)
〈位置・確認状況〉ＫＴ57、ＬＡ57グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。人骨は出土しなかったが、出土遺物と覆土の堆積状況や土坑の形態から墓であると考えられる。
〈重複関係〉なし。
〈堆積土〉２層に分層した。人為堆積である。
〈平面形・規模〉径0.67m×0.62mの略円形を呈する。深さは0.17mである。断面はビーカー形を呈する。
〈底面〉平坦である。
〈出土遺物〉底面から銭貨６枚、赤色の漆製品が出土した。漆製品は木地部分が遺存していないが、出土時の形態から椀と考えられる。椀は伏せた状態で埋納されており、その中から銭貨が重なって出



第65図　ＳＫＳ1688・1696土坑墓と出土遺物

土した。

〈棺の有無〉棺の痕跡は確認できなかった。

ＳＫＳ1699(第64図)

〈位置・確認状況〉ＬＡ57グリッドに位置する。Ⅵ層上面で確認した。人骨は出土しなかったが、出土遺物と覆土の堆積状況や土坑の形態から墓であると考えられる。

〈重複関係〉なし。

〈堆積土〉１層である。人為堆積である。

〈平面形・規模〉長軸0.76ｍ、短軸0.49ｍの隅丸方形を呈する。深さは0.33ｍである。断面はビーカー形を呈する。

〈底面〉平坦である。

〈出土遺物〉底面の北側から漆の被膜が出土した。漆は木地が腐食し遺存しておらず、赤色の被膜片

のみの出土である。
〈棺の有無〉棺の痕跡は確認できなかった。

(10)その他の遺構
ＳＸ1710(第58図)
〈位置・確認状況〉ＬＧ47、ＬＨ47グリッドに位置する。Ⅵ層上面から炭化物を含む黒褐色土の楕円形プランとして確認した。
〈重複関係〉ＳＫＴ1712と重複する。本遺構が新しい。
〈堆積土〉２層に分層した。１層には炭化物が含まれ、２層には砂が混じる。
〈平面形・規模〉長軸1.08m、短軸0.65mの楕円形を呈する。深さは0.07mである。断面は緩やかなＵ字状を呈する。
〈底面〉ほぼ平坦であるが、北側が一段低く窪む。
〈出土遺物〉土師器片２点が出土した。

５．Ｅ区について
Ｅ区は重機と人力でのトレンチ掘削によって調査を行った。調査の結果、同地区での遺構・遺物は検出されなかったが、調査区南端の防除組合倉庫前では幅17m、砕石下0.7mの沢状の落ち込みが確認された。この落ち込みには最大厚0.15mの大湯浮石層の純層が堆積しており、その堆積状態から自然地形と判断できた。また、調査区北端では調査区外の西側から続くと見られる沢地形の落ち込みが確認されたが、昭和期に行われた土地改良のために埋めたてられており、当時の地形をそのまま残していないと判断された。これより東へ分岐する道路部分では、トレンチ設定が沢地形に平行しているため、立ち上がりを確認できなかった。

第３節　遺構外出土遺物

１．Ａ区の遺構外出土遺物(第66図～第67図257)
(１)縄文時代の遺物
土器(第66図234～242)：234は縄文時代前期の土器で、深鉢形土器の胴部破片である。不規則な施文であるが、羽状縄文が施されている。胎土には繊維が混入する。235・236は縄文時代後期の土器で、深鉢形土器の胴部(235)と口縁部(236)の破片である。235は磨消縄文手法による文様が施されるもので、ＬＲ縄文とＲＬ縄文を施文後に入組文を描き、区画外を磨消している。236はＬＲ縄文が施されている。外面には煤状炭化物が付着している。237～242は縄文時代晩期の土器で、深鉢形土器の口縁部(237・238)、口縁部から胴部上半(239・240)、胴部(241・242)の破片である。237は三叉文が横位に施されている。口縁は小波状を呈する。238は口唇に指頭圧痕文が施され、口縁部には３条の沈線が横位に施されている。239は３条の沈線が横位に施され、沈線より下位にはＲＬ縄文が縦位に施されている。240はＲＬ縄文が施され、口縁部は折り返している。241はＲＬ縄文が施されている。240・241は同一個体である。242はＬＲ縄文が施されている。

石器(第66図243～248)：243は無茎の石鏃である。両面から丁寧な押圧剥離が施されている。244は縦型の石匙である。背面の周縁と主要剥離面のつまみ部に二次加工が施されている。245・246はスクレーパーである。素材剥片の両側縁と末端に二次加工を施して、刃部が作出されている。247は石剣である。製作時の敲打痕が認められる。また、折れ面は二次加工されている。248は石皿である。扁平な礫を素材とし、敲打により縁辺部にわずかに高い縁をもつ使用面を作出している。使用面の一部に被熱痕が認められる。

(２)平安時代の遺物

土師器(第67図249～251)：甕の口縁部破片である。器面調整は、外面は縦(斜)方向のケズリで口縁部に軽い横ナデが施され、内面は横ナデが施されている。249の屈曲する部位には指頭圧痕が認められる。

須恵器(第67図252・253)：252は壺の頸部破片で、外面に線刻が認められる。253は甕あるいは壺の底部破片である。

(３)中世の遺物

陶磁器(第67図254)：16世紀前半の瀬戸・美濃産の皿の口縁部破片で、内外面に灰釉が施されている。

(４)江戸時代の遺物

銭貨(第67図257)：江戸時代に流通した寛永通寶である。裏面に文字は認められない。

(５)時期不明の遺物

金属製品(第67図255・256)：255は刃部は鉄製、柄は銅製の小柄である。256は皿状の鉄製品である。

２．Ｂ区の遺構外出土遺物(第67図258～261)

(１)縄文時代の遺物

石器(第67図258・260)：258は有茎の石鏃であるが、先端と茎部が欠損している。両面から丁寧な押圧剥離が施されている。260は敲き石である。片面と長軸方向の両端に敲打痕が認められる。

(２)中世の遺物

石器(第67図259)：259は砥石である。両面および側面の一面を使用面としている。そのうち片面は使用が著しく、やや湾曲する。側面はあまり使用されておらず、使用面作出時の加工痕が確認できる。数条の刻みが一部に存在する。また、被熱痕が認められる。平安時代の遺物の可能性もある。

銭貨(第67図261)：中世の渡来銭で、洪武通寶(初鋳年1368年、明)である。裏面にも文字が確認できるが、判読不能である。

３．Ｃ区の遺構外出土遺物（第67図262）

（１）中世の遺物

銭貨（第67図262）：中世の渡来銭で、元豊通寳（初鋳年1078年、北宋）である。上部が欠損している。裏面に文字は認められない。

４．Ｄ区の遺構外出土遺物（第68図）

（１）縄文時代の遺物

土器（第68図263～269）：263・264は縄文時代前期の土器で、深鉢形土器の胴部破片である。263は半截竹管をロッキングさせた刺突列が、横位に多段に施されている。264は撚糸文が施されている。265～268は縄文時代後期の土器で、深鉢形土器の口縁部（265・266）と胴部（267・268）の破片である。265はＲＬ縄文、266～268はＬＲ縄文が施されている。269は縄文時代晩期の土器で、深鉢形土器の口縁部から胴部上半の破片である。屈曲する部位には１条の沈線が横位に施され、沈線より上位は無文で、沈線より下位にはＲＬ縄文が施されている。口縁部は小波状を呈し、口唇部の波頂間には沈線が施されている。

石器（第66図270～273）：270～272はスクレーパーである。270・271は素材剥片の片側縁と末端、272は素材剥片の両側縁に二次加工を施して、刃部が作出されている。273は磨石である。両側面を磨面としている。側面の一面には、磨面を作出した際の敲打痕がわずかに残っている。

（２）平安時代の遺物

須恵器（第68図274）：甕あるいは壺の胴部破片である。

（３）中世の遺物

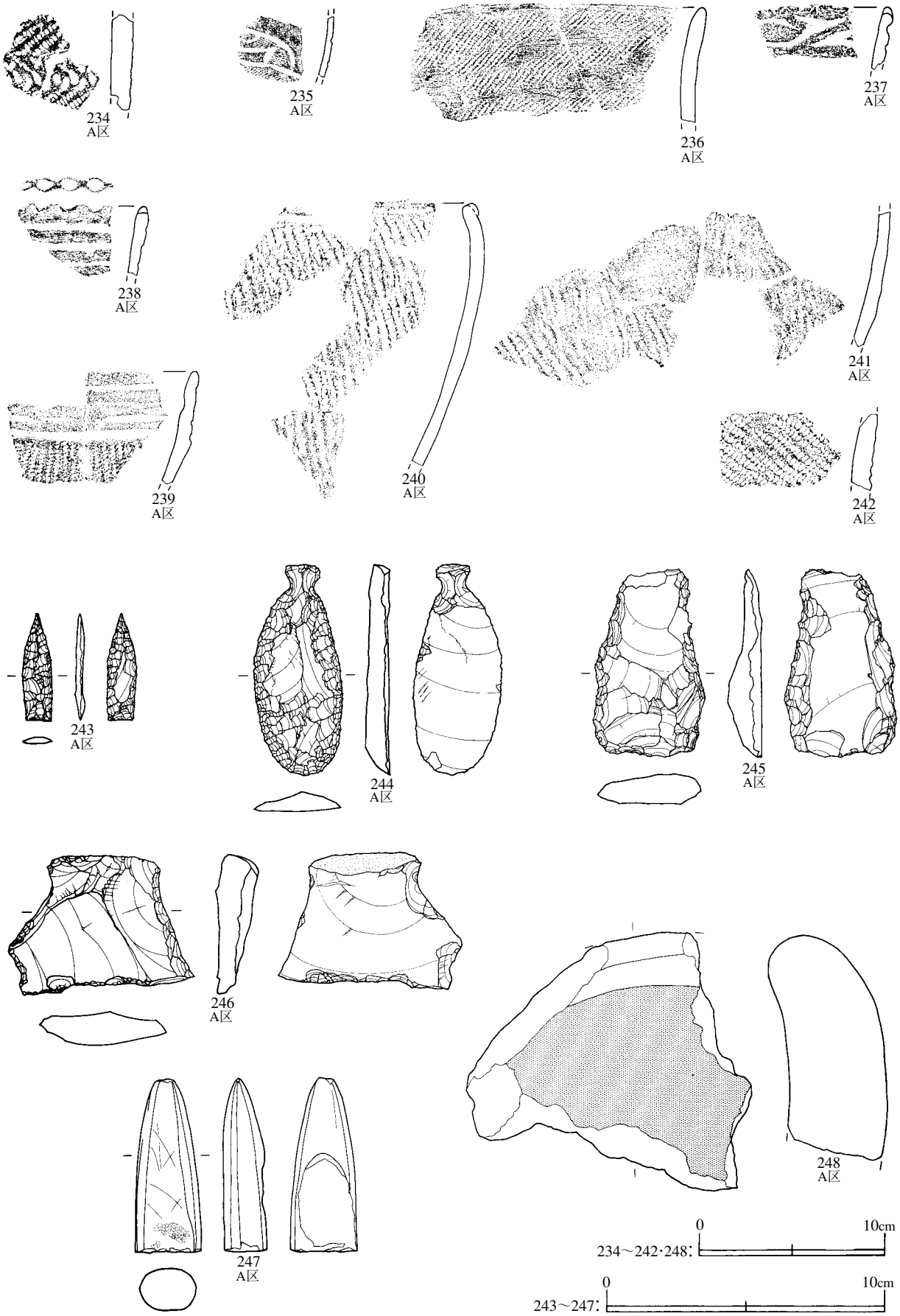
銭貨（第68図275）：中世の渡来銭で、聖宋元寳（初鋳年1101年、北宋）である。裏面に文字は認められない。

（４）江戸時代の遺物

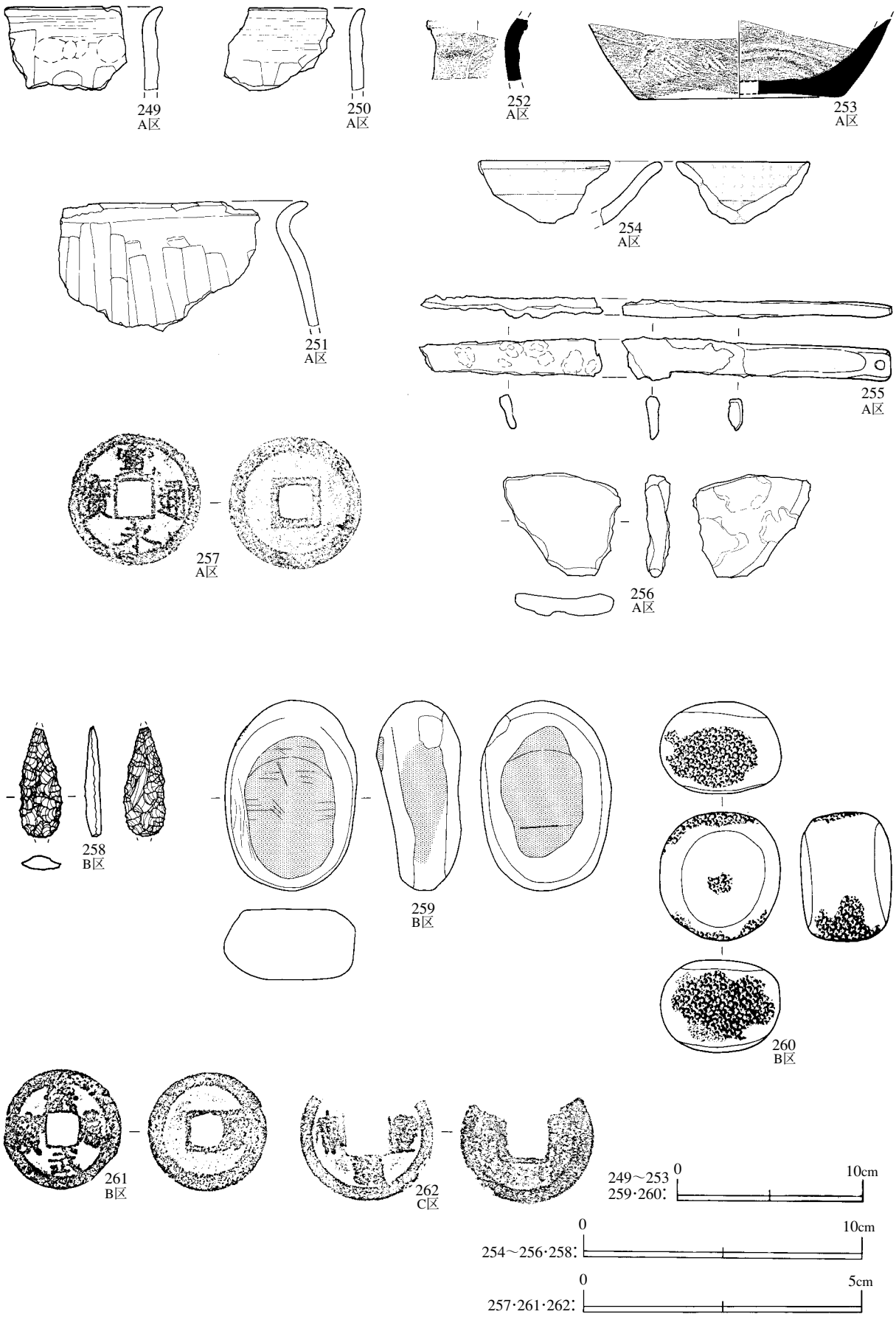
銭貨（第68図276）：江戸時代に流通した、寛永通寳である。裏面に文字は認められない。

引用・参考文献

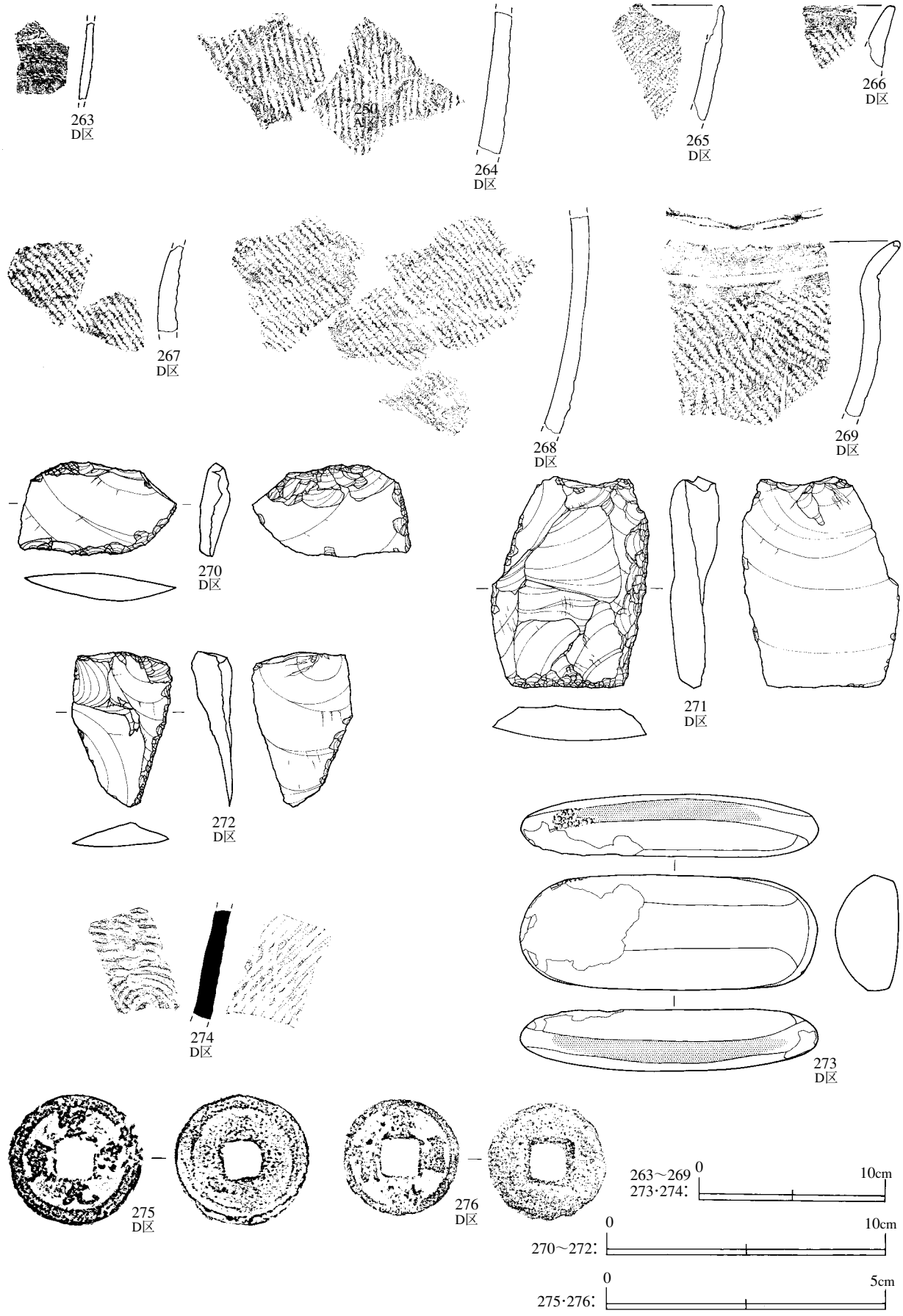
江戸遺跡研究会　『図説　江戸考古学研究事典』　2001（平成13）年　柏書房



第66図　遺構外出土遺物（１）



第67図　遺構外出土遺物（２）



第68図　遺構外出土遺物（３）

第５章　自然科学的分析

第１節　柴内館跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柴内館跡は、米代川右岸の台地上に位置する中世の館跡を主体とする遺跡である。南端部の発掘調査では、平安時代(10世紀)を中心とし、縄文時代、中世、江戸時代の遺構も検出されている。これらの遺構からは、土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器、銭貨等の遺物が出土している。

今回の分析調査では、平安時代の竪穴住居跡から出土した炭化材と、江戸時代の土坑墓から出土した木材について樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

１．試料

試料は、平安時代の住居跡(SI156、450)から出土した炭化材８点(試料番号１～８)と、江戸時代の土坑墓から出土した木材２点(試料番号９、10)である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに第２表に記した。

なお、江戸時代の土坑墓から出土した木材のうち、試料番号９は保存状態が悪く、切片作製は不可能であった。そのため、炭化材と同じ方法で樹種同定を行うこととする。

２．方法

試料番号10は、剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

試料番号１～９は、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

３．結果

樹種同定結果を第２表に記す。平安時代の住居跡から出土した炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、５種類(コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・ヤマグワ・カツラ)に同定された。また、江戸時代の土坑墓から出土した木材は、いずれも針葉樹で、試料番号10はスギに同定されたが、試料番号９は保存が悪く種類の同定には至らなかった。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don)　　スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・針葉樹

試料は、保存状態が悪く、脆い。年輪界および晩材部は観察できなかった。軸方向組織は、観察した範囲では仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は観察できない。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状ではないことは観察できたが、詳細は不明。放射組織は単列、１～15細

第２表　樹種同定結果

番号	遺　　構	遺物番号	用　　途	時　代	試料の質	樹　　種
1	SI156	RC2	住居構築材	平安時代	炭化材	カツラ
2	SI156	RC7	住居構築材	平安時代	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	SI156	RC13	住居構築材	平安時代	炭化材	クリ
4	SI156	RC17	住居構築材	平安時代	炭化材	カツラ
5	SI156	RC18	住居構築材	平安時代	炭化材	ヤマグワ
6	SI156	RC21	住居構築材	平安時代	炭化材	クリ
7	SI156	RC1	住居構築材？	平安時代	炭化材	クリ
8	SI450	RC1	板材？	平安時代	炭化材	ケヤキ
9	SK1685		棺桶？	江戸時代	生木	針葉樹
10	SK1685		棺桶？	江戸時代	生木	スギ

胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*)　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ケヤキ(*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino)　　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ヤマグワ(*Morus australis* Poiret)　　クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は１～５列、孔圏外への移行は緩やかで、境界は不明瞭。小道管は、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、１～６細胞幅、１～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・カツラ(*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.)　　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔は単独または２～３個が複合、分布密度は高い。晩材部へ向かって管径を漸減させる。横断面では多角形、管壁は薄い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～30細胞高。

４．考察

(１)平安時代の用材

竪穴住居のうち、SI156は焼失家屋であり、炭化材は、住居構築材の一部と考えられる。本住居跡は、少なくとも新旧２軒の切り合いが確認されている。試料番号１が旧プランから新プランにかけて一括採取したもの、試料番号７が旧プラン内に分布していたもので、他は全て新プランからの出土である。樹種同定結果をみると、試料番号１と４にカツラ、他の試料にはクリが比較的多く、他にコナラ節とヤマグワが各１点であった。旧プランおよび旧プランの可能性がある炭化材がともにカツラで

あったことは、建築時期による用材の差異を示している可能性がある。しかし、試料が２軒分のものか否か検討中であること、同定試料数が少ないこと等から詳細は不明である。

新プランに比較的多く見られたクリは、重硬で強度が高く、耐朽性にも優れた材質を有する。東北地方では、縄文時代および奈良･平安時代の住居構築材に多数確認されている(嶋倉、1978、1980、1987)。また、払田柵跡でも門の柱材等に多く見られ(パリノ・サーヴェイ株式会社、1991、1993)、柱などの構築材に最もよく利用された樹木の一つと考えられる。コナラ節やヤマグワも比較的強度が高いことから、クリを中心に強度の高い木材を選択・利用していたことが推定される。一方、カツラも青森県黒石市板留遺跡の住居構築材に多数認められており(嶋倉、1980)、利用されていたことがうかがえる。

試料番号８は、竪穴住居跡SI450の壁溝の堀り方プラン内床面とほぼ同レベルから出土し、厚さ約５㎜の板状を呈する。樹種はケヤキであった。出土位置を考慮すると、壁板等の用途が考えられるが、詳細は不明である。県内では、池内遺跡の縄文時代前期の杭にケヤキが認められた例があるが、全体的にケヤキの利用例は少ない。そのため、現時点ではケヤキの利用状況については不明な点が多い。

(２)江戸時代の用材

江戸時代の土坑墓は、いずれも円形のプランで人骨も出土している。木材は、いずれも土坑底部から出土して、板状を呈するようにも見えるが、形状の詳細は不明である。出土状況などを考慮すれば、棺桶の底板等の部位が推定される。樹種は、試料番号９が針葉樹、10がスギであり、いずれも針葉樹材が利用されている。

明治時代に編纂された、「木材ノ工藝的利用」(農商務省山林局、1912)には、葬祭具の用材についても記されている。それによれば、モミが最も多く利用され、スギ、ヒノキ、マツがこれに次ぐ。このうち、最も上等品とされるのはヒノキである。いずれも白木のまま使用し、塗装は施さない。これは、白木が清浄無垢で神聖厳粛な印象を与えることを理由としている。

江戸時代の棺材に利用された木材については、文献史料の記述等から、ヒノキとモミが高級品で、普通はスギとマツが多かったらしいとの指摘がある(満久、1983)。実際に、東京都台東区東叡山寛永寺護国院の調査では、棺の蓋にスギ３点とヒノキ属１点が確認されている(橋本・辻本、1990)。これらの調査例は、「木材ノ工藝的利用」の記述とも一致しており、棺についても葬祭具と同様の用材選択が行われていたことがうかがえる。これらのことから、今回のスギについても選択的に利用された可能性がある。

棺材の用材に関する調査例は、全国的にも少ない。そのため、用材の時期差や地域差等の詳細は不明である。今後さらに類例を蓄積していく必要がある。

引用文献

橋本真紀夫・辻本崇夫(1990)テフラ分析・木製品の樹種・焼物の胎土分析.「東叡山寛永寺護国院Ⅰ　都立上野高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.349-368、都立学校遺跡調査会.

満久崇麿(1983)木のはなし.238p.、思文閣.

農商務省山林局編(1912)木材ノ工藝的利用.1308p.、大日本山林會.

パリノ・サーヴェイ株式会社(1991)樹種鑑定.「秋田県文化財調査報告書第216集・払田柵跡調査事務　所年報1990　払田柵

跡　－第84～87次調査概要－」、p.64-65、秋田県教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社(1993)花粉分析および樹種鑑定.「秋田県文化財調査報告書第238集・払田柵跡調査事務所年報1992　払田柵跡　－第92・93次調査概要－」、p.85-89、秋田県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1978)昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について.「青森県埋蔵文化財調査報告書第39集　源常平遺跡発掘調査報告書」、p.388-389、青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1980)板留(２)遺跡から出土した炭化材の樹種.「青森県埋蔵文化財調査報告書第59集　板留(２)遺跡発掘調査報告書」、p.１-２、青森県教育委員会.

嶋倉巳三郎(1987)山本遺跡の炭化木.「青森県埋蔵文化財調査報告書第105集　山本遺跡　－一般国道７号浪岡バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」、p.203-204、青森県教育委員会.

第２節　秋田県鹿角市柴内館跡出土の近世人骨について

川久保善智・前田朋子・坂上和弘・澤田純明・木村武司・
重田昌吾・中村　敦・細木敬祐・瀧川　渉・百々幸雄
東北大学大学院医学系研究科人体構造学講座

はじめに

秋田県鹿角市柴内館跡における2001年度の調査で、近世の墓が多数検出され、このうち12基から人骨が確認された。本稿ではこれらの人骨について記載報告する。頭蓋および四肢骨の計測はMartin und Sallerの方法(Martin und Saller、1957;馬場、1991)にしたがった。頭蓋および四肢骨の主な計測値をそれぞれ第３表と第４表に示す。四肢骨から身長を推定するにあたって、男性には藤井の式(1960)、女性には佐宗・埴原の式(1998)を使用した。なお、身長推定は成人個体でのみ行った。咬耗度および歯の萌出状況からの年齢推定ではBrothwell(1981)を参考にした。

歯の咬耗度は下記のBrocaの基準にしたがった。

０：全く咬耗がみられない
１：エナメル質に咬耗がみられるが咬頭の形状は明瞭
２：象牙質が所々に露出している
３：咬合面においてエナメル質が全体に摩耗し、象牙質が前面に露出する
４：歯根近くまで摩耗している

年齢区分は下記のMartinの基準にしたがった。なお、成人は壮年以降とした。

幼児：２～７歳頃
少年：～14歳頃
青年：～22歳頃
壮年：～40歳頃
熟年：～60歳頃
老年：60歳以上

歯式に用いた記号の意味は以下の通りである。

○:死後脱落、×:生前脱落・歯槽閉鎖、–:歯槽部破損・歯の欠損により観察不能、():未萌出・未完成(観察可能)、△:未萌出・未完成(観察不能)

SKS1198

保存状態　全体的な保存状態は不良である。断片化が著しく、右の上・下顎骨歯槽の一部、環椎と軸椎の一部、四肢骨破片２点が認められる。歯式は次の通りである。

右	M	M	M	P	P	C	—	—	—	—	—	P	P	M	M	M	左
	M	M	M	P	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	M	M	

年齢推定　第三大臼歯には咬耗がみられないが、歯根がほぼ完成していることから、青年の後半以降と考えられる。大臼歯の咬耗度は０～１と弱く、17～25歳に相当する。以上の所見から、この個体は青年後半から壮年前半と考えられる。

性判定　保存状態不良のため不明。

身長推定　四肢骨の保存状態が不良のため推定不能。

SKS1344

保存状態　全体的な保存状態は不良である。断片化が著しく、右側頭骨の一部、軸椎歯突起と肋骨小片数点、四肢骨片数点が残存する。歯式は次の通りである。

	—	—	(M)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
右				—	—	—	di	—	di	—	—	dm	dm				左
				dm	dm	dc	—	—	—	—	dc	dm	dm				
	—	—	(M)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(M)	—	—	

年齢推定　歯冠・歯根の形成段階から３～４歳の幼児と推定される。

性判定　幼児骨であり、保存状態も不良であるため不明。

SKS1353(図版33)

保存状態　全体的な保存状態はやや不良である。脳頭蓋は頭蓋底を除く右側の大部分が欠損しているが、左半分の保存状態は比較的良好である。顔面部、下顎骨は脳頭蓋と同様、右側の大部分が欠損し、左半分が比較的良く残存する。椎骨は胸椎、腰椎の椎体を中心に残存する。肋骨は断片化が著しい。寛骨は寛骨臼周辺が認められる。四肢骨は骨体を中心に残存する。歯式は次の通りである。

右	—	M	M	P	P	C	—	I	I	—	C	—	—	M	M	—	左
	—	M	M	P	P	—	—	—	I	I	C	P	P	M	M	M	

年齢推定　蝶後頭軟骨結合が完全に癒合し、また矢状縫合、冠状縫合が内外板ともに完全に癒合していることから、十分成人に達していると考えられる。大臼歯の咬耗度は２～３であり、25～35歳に相当する。ただし、高齢者に比較的多く見られるというクモ膜顆粒が多数認められることから、壮年後半から熟年程度とするのが妥当であろう。

性判定　眉弓・眉間の発達が弱く、前頭骨の側面輪郭は女性的である。乳様突起は小さい。寛骨は大坐骨切痕のなす角がほぼ直角に近く、女性的である。以上の所見からこの個体は女性と考えられる。

身長推定　四肢骨の保存状態が不良のため推定不能。

その他　１)上顎の右第二大臼歯、左第一・第二大臼歯、下顎の左第三大臼歯に明瞭な齲蝕が認められる。２)下顎左犬歯、左第一大臼歯に顕著な歯石の付着が認められる。

SKS1378（図版34）

保存状態　全体的な保存状態はやや不良である。脳頭蓋の形状はかろうじて保たれているものの、表面の腐食が著しく非常に脆い。顔面部は眉間の周辺、左頬骨および上顎骨の前面の大部分が欠損している。右頬骨から頬骨弓にかけては比較的良く保存されている。下顎は左右の下顎角付近が欠損しているものの比較的良く残存する。椎骨は一通り認められるものの、保存状態が悪い。肋骨は細片化が著しい。上肢は上腕骨が遠位、橈・尺骨が近位を中心に残存する。下肢はほぼ全体が残存するが、表面の腐食が著しい。寛骨は寛骨臼付近が残存する。歯式は次の通りである。

右	M	M	M	P	P	C	I	○	ー	ー	C	P	P	M	M	M	左
	M	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	M	M	

年齢推定　蝶後頭軟骨結合が完全に癒合しており、また第三大臼歯に若干の咬耗がみられることから成人には達していると考えられる。大臼歯の咬耗度は１～２と非常に弱く、17～25歳に相当する。以上の所見からこの個体は壮年前半と推定される。

性判定　眉弓・眉間の大部分が欠損しているが、前頭骨の側面輪郭は垂直に立ちあがっており、女性的である。乳様突起は小さい。寛骨の大坐骨切痕のなす角はほぼ直角に近く、女性的である。以上の所見からこの個体は女性と考えられる。

身長推定　脛骨最大長より求めた推定身長は145.2㎝となった。

SKS1530

保存状態　全体的な保存状態は不良である。頭蓋は細片化が著しく、頭蓋冠と下顎の歯槽がそれぞれ断片として残存するのみである。その他、大腿骨と脛骨が骨体を中心に残存する。歯式は次の通りである。

右	(M)	ー	M	ー	P	C	ー	I	I	ー	ー	ー	P	ー	ー	ー	左
	(M)	M	M	P	ー	C	I	I	I	I	C	ー	P	M	ー	ー	

年齢推定　歯冠・歯根の形成段階が12～15歳程度に相当することから、この個体は少年後半～青年前半と考えられる。

性判定　成人に達しておらず、保存状態も不良であるため不明。

SKS1544（図版35）

保存状態　全体的な保存状態は良好である。頭蓋は右の頬骨弓の大部分が欠損している他はほぼ完全である。椎骨、肋骨の保存状態は良好である。四肢骨も一部骨端を欠くが、全体的に良く保存される。歯式は次の通りである。

右	(M)	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	M	M	左
	(M)	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	M	M	

年齢推定　上・下顎とも右の第三大臼歯が未萌出だが、左では若干の咬耗が見られ萌出が完了していることから、成人には達していると考えられる。大臼歯の咬耗度は０～２と非常に弱く、17～25歳に相当する。以上の所見からこの個体は壮年前半と推定される。

性判定　頭蓋は眉弓・眉間の発達が弱く、前頭骨の側面輪郭が女性的だが、乳様突起がよく発達している。寛骨は大坐骨切痕のなす角が小さく、男性的である。また全体的に骨体が大きく、頑丈で男性的である。以上の所見からこの個体は男性と考えられる。

身長推定　橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨のそれぞれ最大長より求めた推定身長の平均は149.2㎝、大腿骨最大長のみでは148.0㎝となった。

その他　１)歯には全体的に歯石の付着がみられ、特に上顎の右犬歯から第二小臼歯にかけて顕著である。また、右中切歯の歯槽に歯根嚢胞が認められることから、この個体は特に口腔衛生状態が不良であったと考えられる。２)右仙腸関節付近からは小魚の骨の集積が検出されている。３)眼窩上壁に慢性貧血によって生じるとされるクリブラ・オルビタリアがみられる。４)著しい歯槽性突顎がみられる。

SKS1565(図版36)

保存状態　全体的な保存状態はやや不良である。脳頭蓋は右側半分の保存状態が比較的良いが、頭頂部で著しく歪む。顔面部は両側の頬骨と上顎骨の前面が破損している。椎骨の保存状態は上位では比較的良好だが、胸椎下部からは断片化している。肋骨は細片化が著しい。上肢骨は骨体を中心に残存するが、右尺骨、右鎖骨は認められない。肩甲骨は関節窩付近が残存する。右大腿骨は近位の骨端を欠くが、遠位では未だ癒合していない骨端が残存する。その他の下肢骨は骨端を欠くものの保存状態は比較的良好である。寛骨は左寛骨の大坐骨切痕付近のみが残存する。歯式は次の通りである。

右																		左
	△	(M)	(M)	—	—	(C)	(I)	(I)	(I)	(I)	(C)	—	—	(M)	(M)	△		
				dm	○	dc	—	—	—	—	dc	○	dm					
				dm	dm	dc	di	—	—	—	dc	dm	dm					
	△	(M)	(M)	(P)	(P)	(C)	△	(I)	(I)	(I)	(C)	(P)	(P)	(M)	(M)	△		

年齢推定　歯の萌出状況が７～８歳に相当することからこの個体は幼児または少年と推定される。

性判定　幼児骨ゆえ性別は不明。

SKS1685(図版37)

保存状態　全体的な保存状態は比較的良好である。頭蓋は右頬骨弓、前頭骨左側頭面、右上顎骨前頭突起がそれぞれ若干欠損しているものの、ほぼ完全に保存されている。下顎も両側の関節突起が若干欠けるのみである。椎骨は上位の保存状態が比較的良好である。肋骨は細片化が著しい。上肢は骨体を中心に残存する。鎖骨はほぼ完全に残り、肩甲骨は関節窩付近が残存する。下肢は右大腿骨と右脛骨で骨端の一部が欠損するものの、良好に保存される。寛骨の保存状態も比較的良好である。歯式は次の通りである。

右																		左
	×	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	○	×		
	(M)	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	M	(M)		

年齢推定　下顎では両側の第三大臼歯が未萌出だが、四肢の骨端や蝶後頭軟骨結合が完全に癒合していることから十分成人に達していると考えられる。未萌出の第三大臼歯を除くと大臼歯の咬耗度は２～３であり、25～35歳に相当するが、冠状縫合と矢状縫合が内板でほぼ閉じていることから、それよりもやや上の可能性がある。以上の所見からこの個体は壮年～熟年と推定される。

性判定　眉間・眉弓がやや発達し、前頭骨の側面輪郭はやや男性的である。乳様突起は良く発達している。寛骨の大坐骨切痕のなす角は小さく、男性的である。以上の所見からこの個体は男性と考えられる。

身長推定　橈骨、大腿骨、脛骨、腓骨のそれぞれ最大長より求めた推定身長の平均は152.1㎝、大腿骨

最大長のみでは154.3cmとなる。

その他　１)上顎の右中・側切歯、右第一・第二大臼歯、左中・側切歯、左第一小臼歯、下顎の右第二大臼歯にそれぞれ齲触が認められる。特に上顎右第二大臼歯は齲触により歯冠の大部分が欠損している。２)左寛骨と仙骨が仙腸関節で癒合している。３)歯槽性突顎がみられる。

SKS1687(図版38)

保存状態　全体的な保存状態はやや不良である。脳頭蓋はかろうじて形をなしているが、脆く歪みが大きい。顔面部は両側の頬骨の大半と前頭骨の眼窩上縁が破損している。椎骨は胸椎下部から腰椎が認められる。肋骨は断片化が著しい。上肢は骨体を中心に残存する。肩甲骨は右の関節窩付近が残存する。下肢骨では大腿骨と脛骨は骨端の一部を欠くものの良好に保存され、腓骨は骨体のみが残存する。寛骨は大坐骨切痕付近が残存する。歯式は次の通りである。

右	×	M	×	×	×	C	×	×	ー	×	C	P	×	×	M	ー	左
	×	○	×	×	P	○	×	ー	ー	ー	ー	ー	×	×	M	×	

年齢推定　大腿骨と鎖骨の骨端が完全に癒合していることから、成人段階には達していると考えられる。冠状縫合、矢状縫合は内板がほぼ閉じている。また上・下顎ともに多くの永久歯が脱落し、歯槽が完全に閉鎖していることから、熟年または老年の可能性が高い。

性判定　眉弓・眉間の発達が弱く、前頭骨の側面輪郭がやや女性的である。乳様突起がやや大きいが、典型的な男性に比べると小さい。寛骨の大坐骨切痕のなす角はほぼ直角に近く、女性的である。以上の所見からこの個体は女性と考えられる。

SKS1688(図版39)

保存状態　全体的な保存状態は比較的良好である。頭蓋は顔面部の左半分がやや脆く、左上顎骨と左頬骨の前面、前頭骨の左側頭面が破損するものの、ほぼ完全に保存されている。下顎も左側の下顎角が若干欠損するのみでほぼ完全に保存されている。椎骨の上部と肋骨の保存状態は良好である。上肢は左上腕骨の後面が欠損している他は比較的良好に保存されている。下肢は大腿骨が良好に残存するが、脛骨では遠位、腓骨では両端の骨端を欠損している。寛骨は大坐骨切痕付近が残存する。歯式は次の通りである。

右	×	×	×	P	P	C	I	I	I	I	C	×	×	M	×	×	左
	M	M	×	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	×	M	×	

年齢推定　四肢の骨端や蝶後頭軟骨結合が完全に癒合していることから十分成人に達していると考えられる。大臼歯の咬耗度は２～３であり、33～45歳に相当するが、上顎の左第一大臼歯と下顎の左第二大臼歯の咬合を除くと対向する歯がいずれも欠損しており、やや信頼性が低い。冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合はいずれも内・外板ともにあまり閉じておらず、熟年には達していないと考えられる。以上の所見からこの個体は壮年後半と考えられる。

性判定　眉間・眉弓の発達が弱く、前頭骨の側面輪郭は女性的である。乳様突起はやや大きいが内反している。寛骨の大坐骨切痕のなす角は大きく、女性的である。以上の所見からこの個体は女性と考えられる。

身長推定　橈骨、大腿骨のそれぞれ最大長より求めた推定身長の平均は142.2cm、大腿骨最大長のみでは142.5cmとなる。

その他　１)上顎右中切歯、第一・第二小臼歯、左中・側切歯、下顎右第二・第三大臼歯に齲触が認められる。２)著しい歯槽性突顎がみられる。

SKS1692

保存状態　全体的な保存状態は不良である。頭蓋・四肢骨ともに断片化が著しく、右上・下顎の歯槽がそれぞれ一部認められるのみである。歯式は次の通りである。

右	M	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	M	ー	左
	ー	ー	ー	P	P	ー	ー	I	I	ー	C	ー	ー	M	M	M	

年齢推定　第三大臼歯に若干の咬耗がみられ萌出が完了していることから、成人段階には達していると考えられる。大臼歯の咬耗度は１～２であり、17～25歳に相当する。以上の所見より、この個体は壮年前半と推定される。

性判定　保存状態不良のため不明。

身長推定　四肢骨の保存状態が不良のため推定不能。

SKS1696(図版40)

保存状態　全体的な保存状態はやや良好である。脳頭蓋は左側頭骨の前半から頭頂部にかけて一部を欠損している。顔面部は両側の頬骨の大部分が破損している。下顎は右側の保存状態が比較的良いが、左では下顎枝の後半が破損している。椎骨の保存状態はやや不良である。肋骨は細片化が著しい。右上腕骨はほぼ全体が残存するが、左上腕骨は両骨端が欠損している。尺骨、橈骨は骨体の近位を中心に残存する。鎖骨は骨体を中心に、肩甲骨は関節窩付近が残存する。下肢は左大腿骨で両骨端を欠くが、右大腿骨と脛骨は良好に保存されている。腓骨は骨体を中心に残存する。右寛骨は大坐骨切痕付近のみだが、左寛骨は比較的良く残存する。歯式は次の通りである。

右	M	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	M	M	左
	M	M	M	P	P	C	I	I	I	I	C	P	P	M	M	M	

年齢推定　蝶後頭軟骨縫合が完全に癒合し、第三大臼歯に咬耗がみられることから、十分成人段階に達していると考えられる。大臼歯の咬耗度は１～２と弱く、17～25歳に相当する。以上の所見からこの個体は壮年前半と推定される。

性判定　眉間・眉弓が発達しており、前頭骨の側面輪郭がやや男性的である。乳様突起はあまり発達していないが、典型的な女性に比べるとやや大きい。寛骨の大坐骨切痕のなす角は小さく、男性的である。以上の所見からこの個体は男性と考えられる。

身長推定　上腕骨、大腿骨、脛骨のそれぞれ最大長より求めた推定身長の平均は149.4cm、大腿骨最大長のみでは146.3cmとなる。

その他　１)右第三大臼歯の歯冠の大部分が齲触により失われている。２）著しい歯槽性突顎がみられる。

まとめ

○　秋田県鹿角市柴内館跡より出土した人骨12体について鑑定を行った。

○　年齢構成は幼児１体、幼児～少年１体、少年～青年１体、青年～壮年１体(性不明)、壮年５体(男性２体、女性２体、不明１体)、壮年～熟年２体(男性１体、女性１体)、熟年以降１体(女性１体)である。

第３表

標　　本		SKS1353	SKS1378	SKS1544	SKS1685	SKS1687	SKS1688	SKS1696
性　　別		女性	女性	男性	男性	女性	女性	男性
脳　頭　蓋								
1	脳頭蓋最大長	－	－	192	177	(168)	179	(175)
5	頭蓋底長	－	98	111	102	(98)	100	95
8	脳頭蓋最大幅	－	137	149	142	(136)	146	(144)
8/1	頭蓋長幅示数	－	－	77.6	80.2	81.0	81.6	82.3
9	最小前頭幅	－	－	104	89	－	(98)	94
17	バジオンブレグマ高	－	134	148	135	(133)	136	128
9/8	横前頭頭頂示数	－	－	69.8	62.7	－	67.1	65.3
17/1	頭蓋長高示数	－	－	77.1	76.3	79.2	76.0	73.1
17/8	頭蓋幅高示数	－	97.8	99.3	95.1	97.8	93.2	88.9
顔 面 頭 蓋		－						
40	顔長	－	－	113	100	－	103	(98)
40/5	顎示数	－	－	101.8	98.0	－	103	103.2
45	頬骨弓幅	－	(124)	－	137	－	134	
48	上顔高	－	－	70	72	－	71	(64)
48/45	コルマン上顔示数	－	－	－	52.6	－	53.0	
51	眼窩幅	42	38r	45	38	－	44	45r
52	眼窩高	39	－	31	33	－	33	36r
52/51	眼窩示数	92.9	－	68.9	86.8	－	75	80
54	鼻幅	－	－	29	23	25	27	
55	鼻高	48	(47)	53	53	50	54	
54/55	鼻示数	－	－	54.7	43.4	50	50	
61	上顎歯槽突起幅	－	－	71	(61)	－	－	
下　顎　骨								
65	下顎頭幅	－	(113)	－	128	－	119	－
66	下顎角幅	－	－	106	95	－	97	－
68	下顎長	－	－	73	72	－	69	(70)
69	オトガイ高	－	(30)	34	29	－	32	27
69(3)	下顎体厚	12	(15)	18	14	13	16	13
70	下顎枝高	(57)	－	67	64	54	67	60
71	下顎枝幅	35	－	40	34	30	35	31
79	下顎枝角	133	－	108	126	134	119	127
71/70	下顎枝示数	(61.4)	－	59.7	53.1	55.6	52.2	51.7
顔面平坦度								
	前頭骨弦長	－	－	102.4	94.3	－	(99.4)	99.5
	前頭骨垂線長	－	－	19.4	12.8	－	(13.7)	13.1
	前頭骨平坦示数	－	－	18.94	13.54	－	(13.77)	13.18
	鼻骨最小幅	7.2	－	10.9	6.3	8.1	6.2	6.2
	鼻骨垂線長	0.9	－	2.8	2.4	1.3	1.0	2.7
	鼻骨平坦示数	11.86	－	26.12	37.82	15.91	15.64	43.26
	頬上顎骨弦長	－	－	(105.2)	99.4	－	(92.5)	－
	頬上顎骨垂線長	－	－	(23.9)	26.0	－	(23.3)	－
	頬上顎骨平坦示数	－	－	(22.76)	26.17	－	(25.2)	－

第４表

標　　本		SKS1353		SKS1378		SKS1544		SKS1685		SKS1687		SKS1688		SKS1696	
性　　別		女性		女性		男性		男性		女性		女性		男性	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
鎖　　骨															
1	最大長	—	—	—	—	138	(136)	—	(145)	(111)	—	129	—	—	—
4	中央垂直径	—	—	—	—	11	10	—	11	(10)	—	11	—	—	—
5	中央矢状径	—	—	—	—	13	12	—	14	(10)	—	12	—	—	—
4/5	中央断面示数	—	—	—	—	84.6	83.3	—	78.6	(100.0)	—	91.7	—	—	—
6	中央周	—	—	—	—	37	36	—	40	(34)	—	39	—	—	—
肩　甲　骨															
	肩峰関節窩距離	—	—	—	—	19	19	(21)	—	—	—	12	—	(11)	—
		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
上　腕　骨		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1	最大長	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	全長	—	—	—	—	—	—	—	(300)	—	—	—	—	280	—
4	下端幅	—	—	—	—	(52)	(52)	—	—	—	—	—	—	56	—
5	中央最大径	—	—	—	—	(21)	(21)	—	21	—	—	(23)	—	(22)	—
6	中央最小径	—	—	—	—	(19)	(18)	—	18	—	—	(15)	—	(17)	—
6/5	中央断面示数	—	—	—	—	(90.5)	(85.7)	—	85.7	—	—	(65.2)	—	(77.3)	—
7a	中央周	—	—	—	—	(63)	(64)	—	67	—	—	(65)	—	(63)	—
7	骨体最小周	—	—	—	—	62	63	(61)	—	—	—	55	—	60	60
橈　　骨															
1	最大長	—	—	—	—	—	208	—	—	—	—	192	(187)	—	—
2	機能長	—	—	—	—	—	197	—	—	—	—	181	(175)	—	—
3	骨体最小周	—	—	—	—	40	40	41	40	—	—	39	36	—	—
4	骨体横径	—	—	—	—	16	17	17	16	—	—	15	15	—	—
5	骨体矢状径	—	—	—	—	11	12	12	12	—	—	12	11	—	—
3/2	長厚示数	—	—	—	—	—	20.3	—	—	—	—	21.5	(20.6)	—	—
5/4	骨体断面示数	—	—	—	—	68.8	70.6	70.6	75.0	—	—	80.0	73.3	—	—
尺　　骨															
1	最大長	—	—	—	—	—	(222)	—	—	—	—	—	—	—	—
2	機能長	—	—	—	—	203	(199)	—	—	—	—	182	179	—	—
3	骨体最小周	—	—	—	—	39	36	—	40	—	—	35	34	—	—
3/2	長厚示数	—	—	—	—	19.2	(18.1)	—	—	—	—	19.2	19.0	—	—
6	肘頭幅	—	—	—	—	—	(23)	—	22	—	—	—	—	—	—
11	骨体矢状径	—	—	—	13	14	14	—	14	—	—	12	11	13	13
12	骨体横径	—	—	—	16	18	17	—	17	—	—	14	14	17	16
11/12	骨体断面示数	—	—	—	81.3	77.8	82.4	—	82.4	—	—	85.7	78.6	76.5	81.3
大　腿　骨															
1	最大長	—	—	(391)	—	377	392	—	403	—	—	373	360	370	—
2	自然位全長	—	—	—	—	378	387	—	402	—	—	370	359	366	—
6	骨体中央矢状径	—	—	26	—	24	24	28	28	25	25	23	—	26	26
7	骨体中央横径	—	—	24	—	26	25	26	26	26	25	26	—	25	26
6/7	中央断面示数	—	—	108.3	—	92.3	96.0	107.7	107.7	96.2	100.0	88.5	—	104.0	100.0
8	骨体中央周	—	—	77	—	78	77	83	85	78	77	76	—	79	80
9	骨体上横径	—	33	29	—	33	33	31	32	31	31	—	—	31	33
10	骨体上矢状径	—	20	(23)	—	23	24	23	23	22	23	—	—	23	23
9’	骨体上最大径	—	33	30	—	34	33	31	32	31	31	—	—	31	33
10’	骨体上最小径	—	20	(23)	—	23	23	22	22	22	22	—	—	22	23
18	骨頭垂直径	—	—	43	—	41	43	45	45	—	—	—	—	—	—
19	骨頭矢状径	—	—	42	—	44	43	45	44	43	43	—	—	—	—
10/9	骨体上断面示数	—	60.6	(79.3)	—	69.7	72.7	74.2	71.9	71.0	74.2	—	—	74.2	69.7
10’/9’	骨体上断面示数	—	60.6	(76.7)	—	67.6	69.7	71.0	68.8	71.0	71.0	—	—	71.0	69.7
19/18	骨頭断面示数	—	—	97.7	—	107.3	100.0	100.0	97.8	—	—	—	—	—	—
脛　　骨															
1	全長	—	—	—	306	301	304	(318)	306	—	—	—	—	300	(294)
1 a	最大長	—	—	—	311	308	308	—	311	—	—	—	—	305	302
8	中央最大矢状径	—	—	—	—	25	24	26	26	—	—	—	—	25	25
9	中央横径	—	—	—	—	21	21	19	19	—	—	—	—	21	22
8 a	栄養孔位最大径	—	—	—	—	29	27	30	31	29	28	28	27	28	—
9 a	栄養孔位横径	—	—	—	—	26	22	19	21	19	20	22	20	22	—
10	骨体中央周	—	—	—	—	73	73	71	72	—	—	—	—	70	72
10 a	栄養孔位周	—	—	—	—	88	85	80	81	76	80	79	74	79	—
10b	骨体最小周	—	—	—	—	69	69	64	67	67	70	—	—	67	68
9/8	中央断面示数	—	—	—	—	84.0	87.5	73.1	73.1					84.0	88.0
9 a /8 a	栄養孔位断面示数	—	—	—	—	89.7	81.5	63.3	67.7	65.5	71.4	78.6	74.1	78.6	
10 b /1	長厚示数	—	—	—	—	22.9	22.7	(20.1)	21.9					22.3	23.1
腓　　骨															
1	最大長	—	—	—	—	291	292	308	—	—	—	—	—	—	—
2	中央最大径	—	—	—	—	14	14	12	—	—	—	—	—	—	—
3	中央最小径	—	—	—	—	13	12	12	—	—	—	—	—	—	—
4	中央周	—	—	—	—	45	44	41	—	—	—	—	—	—	—
4a	最小周	—	—	—	—	(37)	37	35	—	33	32	—	—	(33)	—
3/2	中央断面示数	—	—	—	—	92.9	85.7	100.0	—	—	—	—	—	—	—
4/1	長厚示数	—	—	—	—	15.5	15.1	13.3	—	—	—	—	—	—	—

○　平本(1972)によれば、同時代の江戸府内の推定身長は男性が平均157.1cm、女性が平均145.6cmだが、本遺跡で行った推定身長は男性３例、女性２例と数が少ないものの、女性では同時代の江戸府内とあまり差がみられなかった(平均143.7cm)のに対し、男性では一様にかなり低い値が示され(平均150.2cm)。

○　古病理学的所見としては、齲歯や歯周症がやや多くみられることから、口腔衛生状態があまり良好ではなかったことが推測される。

○　全体的な傾向として強い歯槽性突顎が挙げられる。顎示数を求めることができた４例中２例(SKS1688、SKS1696)が突顎(103.0≦)に分類されたが、これらは歯槽性突顎によって比較的高い値を示したと考えられる。

参考文献

佐宗亜衣子・埴原恒彦(1998)日本人女性の新しい身長推定式．人類学雑誌、106(１)、 pp.55-66.

馬場悠男(1991)人骨計測法．人類学講座別巻１－人体計測法、雄山閣、東京.

平本嘉助(1972)縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化．人類学雑誌、75(２)、 pp.94-61.

藤井　明(1960)四肢長骨の長さと身長との関係に就いて．順天堂大学体育学部紀要、３、 pp.49-61.

松下孝幸(1998)土井ヶ浜遺跡第６次発掘調査出土の弥生時代・中世人骨．土井ヶ浜遺跡第６次発掘調査報告書．付編１．土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム.

Brothwell,D.R.(1981)Digging Up Bones(2nd edition).Oxford University Press/British Museum(Natural History),Oxford.

Martin,R.und Saller,K.(1957)Lehrbuch der Anthropologie,３.Aufl.Gustav Fischer,Stuttgart.

第３節　秋田県柴内館跡出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所　汐見　　真
京都造形芸術大学　　岡田　文男

１．試料

試料は秋田県柴内館跡から出土した数珠玉２点である。

２．観察方法

遺構ごとに小破片を採取し、それを各々３ブロックに分割してエポキシ樹脂に包埋して研磨し、木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)方向の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果(広葉樹２種)の表(第５表)と顕微鏡写真(図版32)を示し、以下にそれぞれの主な解剖学的特徴を記す。

１)広葉樹(遺物№１)

木口面では年輪界が見られず、道管の並びは不明である。単独で道管が散在している。道管内にチロースが見られる。また道管に並んでピスフレックも見られる。柾目では道管は単穿孔

を持つ。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなり、異性である。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では１～２列の放射組織が見られる。

２)広葉樹(遺物№２)

木口面に年輪界は見られず、道管の並びは不明である。３個複合した道管が観察される。柾目では道管は単穿孔を持つ。放射組織は平伏細胞のみからなり、同性である。道管放射組織間壁孔の形状は不明。板目では単列の放射組織が見られ、高さは比較的そろう。

第５表　秋田県柴内館跡出土木製品樹種同定表

№	品　　名	出土遺構	樹　　種
1	数　　珠	SK1687	広　葉　樹
2	数　　珠	SK1688	広　葉　樹

参考文献

島地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)

島地謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所(1999)

北村四郎・村田源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)

深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)

使用顕微鏡

Nikon

MICROFLEEX UFX-DX Type115

第６章　まとめ

今回の発掘調査は、主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に伴い遺跡の南東～南西部について実施した。調査の結果、縄文時代、平安時代、中世、江戸時代の遺構と遺物を検出した。検出した遺構および遺物について検討を加え、遺跡の性格を考えてみたい。

遺構について

縄文時代の遺構は、土坑、陥し穴、フラスコ状土坑である。土坑は３基（Ａ区：ＳＫ162、Ｂ区：ＳＫ04、Ｄ区：ＳＫ1694）検出した。時期は出土した遺物からＳＫ04土坑が中期、ＳＫ162・1694土坑が晩期である。土坑の性格については明確にできなかった。陥し穴は、Ｂ・Ｃ・Ｄ区で検出した。全て平面形が溝状を呈するタイプであり、規模（開口部長軸）は最長4.73m～最小1.60mである。また、Ｂ区で検出したＳＫＴ1256陥し穴にのみ、底面に逆茂木を立てたと考えられる小穴が４個穿たれていた。フラスコ状土坑はＤ区の東部で一定の間隔をもち直列する４基（ＳＫＦ863・1243・1260・1651）、南側中央付近に並列する２基（ＳＫＦ1347・1348）、西側に２基（ＳＫＦ1686・1734）を検出した。西側の２基の底面中央部にはピットが１個穿たれていた。このピットは、上部構造を支える柱の穴あるいは梯子を立てた穴と考えられる。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡（Ａ区：ＳＢ375・475・527・540）、柱穴列などである。竪穴住居跡は、Ａ区では調査区全体に分布しており、Ｂ・Ｄ区では調査区西端に検出した。竪穴住居跡は、後世の攪乱や削平で全容が不明な７軒を除いた11軒の平面規模から①一辺が２m台の狭小なもの１軒（Ａ区：ＳＩ1623）、②一辺が３～４m台の小型なもの４軒（Ａ区：ＳＩ1264・1269ｂ、Ｂ区：ＳＩ03、Ｄ区：ＳＩ1713）、③一辺が4.8～６m台の中型のもの３軒（Ａ区：ＳＩ156ａ・157・158）、④一辺が７～９m台の大型のもの３軒（Ａ区：ＳＩ450ａ・ｂ・1200）の４つのグループに分類できる。平面形は方形もしくは長方形や隅丸方形である。住居の規模によって柱穴配置が異なる。基本的に大型のものは四隅と床面に柱穴を有し、中型のものは四隅に配されている。小型のものは大・中型のような規則性がみられず、柱穴がないものがある。極小のＳＩ1623竪穴住居跡では柱穴は確認できなかった。また、極小・小型の住居跡には壁溝が認められないが、中型以上には存在する。ＳＩ1623竪穴住居跡は大湯浮石降下以前の住居であり、カマドの煙道がトンネル状に長いタイプである。これ以外の住居はすべて大湯浮石降下後の住居で、カマドの煙道は短く立ち上がるタイプである。また、大湯浮石降下後の住居に付設されたカマドは南壁中央を境として東寄りのものと西寄りのものとに分けられた。前者は３軒（Ａ区：ＳＩ156ａ・158、Ｄ区：ＳＩ1695）、後者は７軒（Ａ区：ＳＩ157・807・1200・1264・1269ｂ、Ｂ区：ＳＩ03、Ｄ区：ＳＩ1713）である。Ａ区のＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡はカマドの付け替えが行われた住居である。これらの竪穴住居跡の出土遺物から、これらの住居跡群＝集落は、10世紀代に営まれたと考えられる。柱穴列はＡ区のＳＡ479柱穴列１条のみで、ＳＩ158竪穴住居跡に伴うものである。また、Ｂ区から鍛冶炉と思われる焼土遺構（ＳＮ150）と製鉄遺構（ＳＳ09）を各１基検出した。当該期の遺構から鉄製品、鉄滓、フイゴ羽口などが出土したことから、製鉄・鍛冶関係の生産遺跡としての一面も合わせもっていたものと想定される。

中世の遺構は、竪穴状遺構、掘立柱建物跡、柱穴列、溝跡である。検出された竪穴状遺構のうち６

基には出入口と考えられる張り出し部が認められたが、他の竪穴状遺構では検出できなかった。このような竪穴状遺構を検出した城館跡としては、鹿角市妻の神Ⅲ遺跡・乳牛平遺跡・小豆沢館跡・新斗米館跡などがあげられる。復元できた掘立柱建物跡は23棟(Ａ区：ＳＢ238・1152・1629・1648・1649・1650・1719・1726・1736・1744・1746、Ｂ区：ＳＢ18・95・427・499・1602、Ｃ区：ＳＢ1545・1550・1674・1739・1751、Ｄ区：ＳＢ1217・1468)であり、柱穴列は11条(Ａ区：ＳＡ248・1628・1630・1745・1747・1750・1805・2048、Ｃ区：ＳＡ1655・1742・2783)で、建物を遮蔽するか、屋敷割りの区画施設の機能を有するものであろう。溝跡は４条検出された。Ａ区における中世遺構群はＳＤ160溝跡の南側に分布していることから、ＳＤ160溝跡はこれらの遺構群と北側平場を区画するものと捉えられる。なお、同区のＳＤ3039溝跡とＢ区のＳＤ1255溝跡は、ＳＤ160溝跡から続く溝跡の可能性がある。また、Ｄ区西部のＳＤ1709溝跡はその規模から空堀と思われる。これらの時期は周辺で出土した陶磁器から15世紀代から16世紀代の範疇に収まり、館跡の営まれた時期のものと推定される。

江戸時代の遺構は、Ｄ区で検出された14基の土坑墓であり、うち12基から人骨が出土した。比較的良好な状態で人骨が出土した８基の土坑墓の埋葬形態は、座位屈葬(ＳＫＳ1353・1544・1565・1688)、横臥屈葬(ＳＫＳ1378・1530・1685・1696)、仰臥屈葬(ＳＫＳ1687)の３タイプに分けられた。副葬品からみた土坑墓の年代観は、17世紀前半から18世紀後半と考えられる。

遺物ついて

遺物は遺構内外から、縄文時代前期から晩期にかけての土器と石器、弥生時代の土器、平安時代の土師器・須恵器・土製品・砥石・鉄製品(穂摘み具)・鉄滓・炭化した栗、中世の陶磁器・銭貨(聖宋元寳・洪武通寳)・鉄製品(小柄・鎌)、江戸時代の陶磁器・銭貨(寛永通寳)・土坑墓に副葬された銭貨(寛永通寳・無文銭)・切羽・煙管・数珠玉・銅製品(鏡・皿)・鉄製品(和鋏・火打ち金)・木製品(櫛)・漆被膜・棺桶に使われたと考えられる鉄釘などである。

出土遺物で最も多かったのは平安時代のもので、次いで江戸時代、縄文時代、中世の順であり、中世の柴内館に結びつく遺物は僅少であった。平安時代の遺物は土師器甕が多く、土師器坏や須恵器は少なかった。僅かに出土した須恵器の器種は甕・壺であった。

平安時代の土師器甕に「×」の箆書が施されたものが２点(第39図158・159)あった。同様の箆書は歌内遺跡、上葛岡Ⅳ遺跡、太田谷地館(第２次調査)などでも出土している。米代川上・中流域では須恵器生産窯の存在は知られていないが、窯壁片が１点出土していることから、上流域である鹿角地方にも生産窯が存在する可能性もあるが、現在のところ、須恵器壺(第17図116、第67図252)は器形、胎土、調整法から青森県五所川原産の可能性が高い。また、Ａ区のＳＩ157竪穴住居跡から出土した土玉(第８図21～30)は県内では出土例が希である。Ａ区のＳＩ450ｂ竪穴住居跡出土した土師器甕(第11図37)の底部上端(外面)に籾殻痕が認められた。

以上、今回の発掘調査地区は、縄文時代には狩猟場や食料の採取と貯蔵場、平安時代には集落として、中世には館内における居住地区もしくは貯蔵施設の配置場所、江戸時代には墓域として利用されていたことが判明した。

空から見た遺跡全景（東→）

図版一

図版2

空から見たＡ区全景（北→）

1．ＳＩ156ａ・ｂ竪穴住居跡（真上）

2．ＳＩ156ａ・ｂ竪穴住居跡（東→）

3．ＳＩ156ａ竪穴住居跡　カマド（北→）

4．ＳＩ156ａ・ｂ竪穴住居跡（西→）

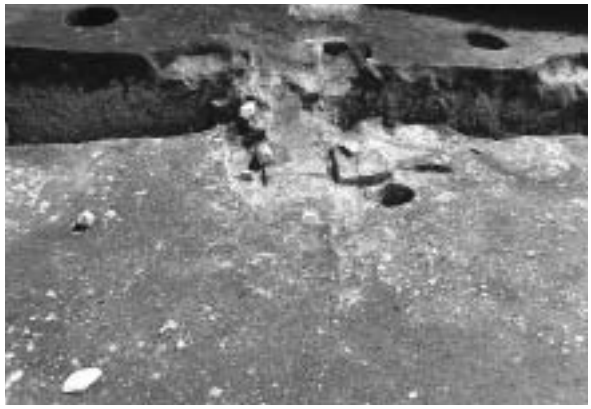
5．ＳＩ156ａ竪穴住居跡　炭化物出土状況（東→）

1．ＳＩ157竪穴住居跡（北→）

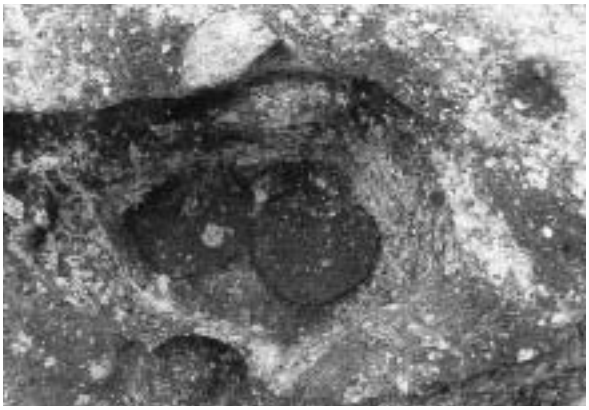
2．ＳＩ158竪穴住居跡（西→）

1．ＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡①（北→）

2．ＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡②（北→）



3．ＳＩ450ｂ竪穴住居跡　カマド（北→）



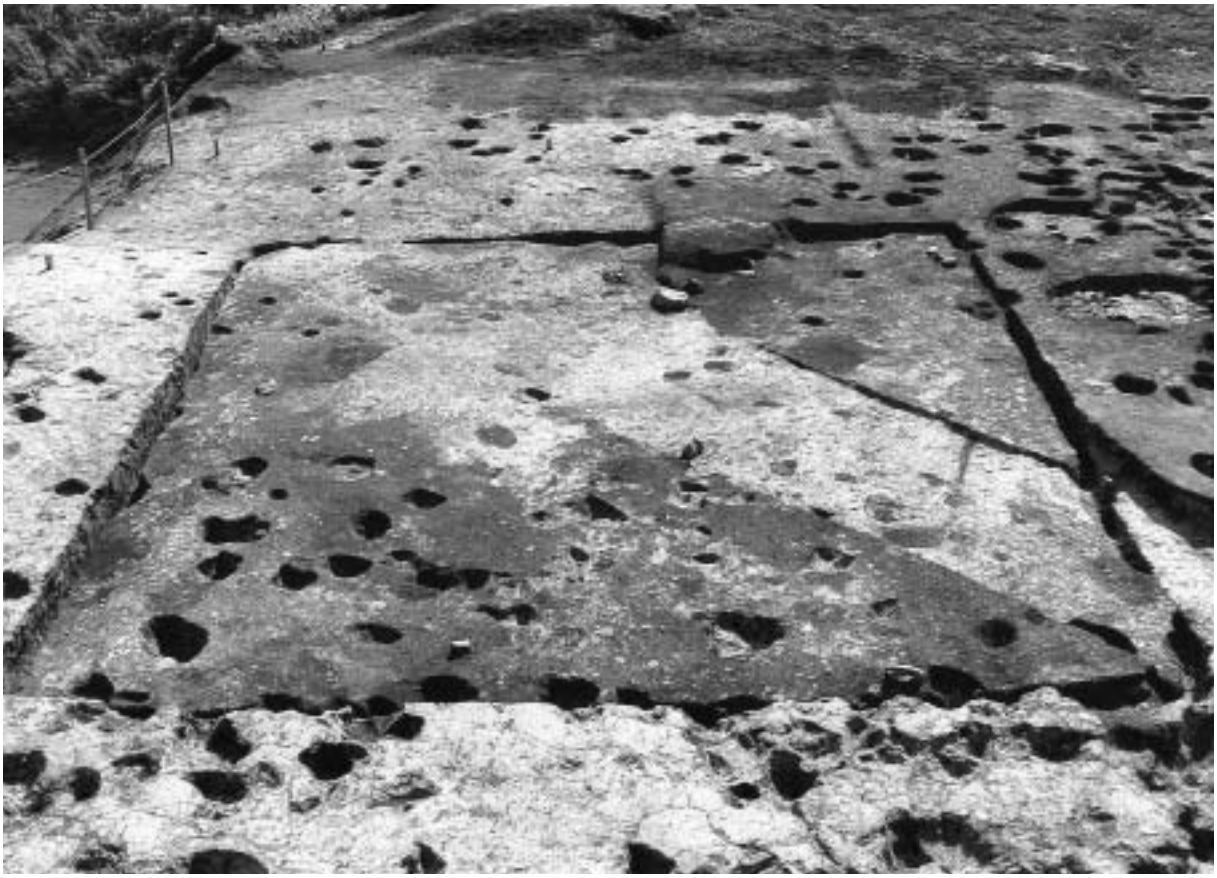
4．ＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡　Ｐ４柱痕（東→）

5．ＳＩ450ａ・ｂ竪穴住居跡　壁溝内の工具痕（東→）

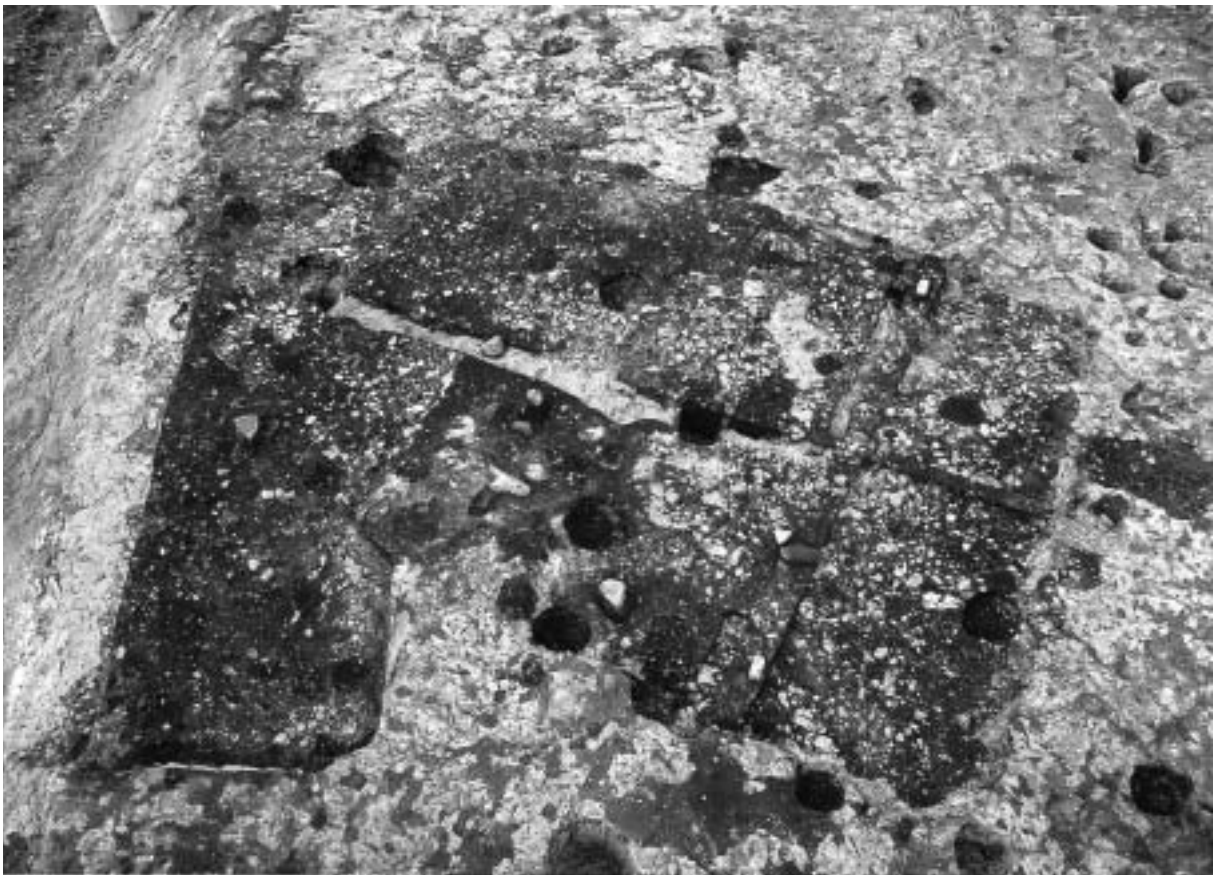
1．ＳＩ807竪穴住居跡①（南→）

2．ＳＩ807竪穴住居跡②（南→）

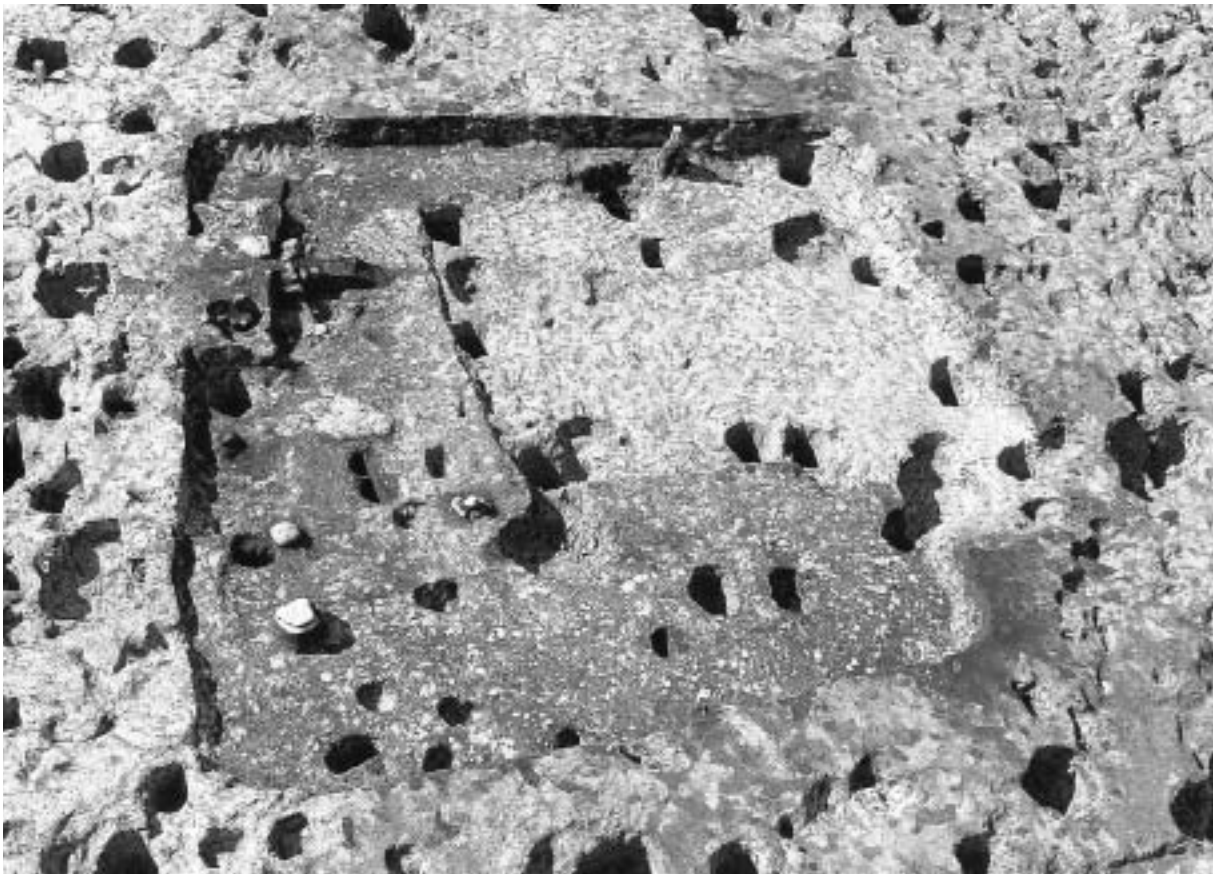
1．ＳＩ1029ａ・ｂ竪穴住居跡（東→）



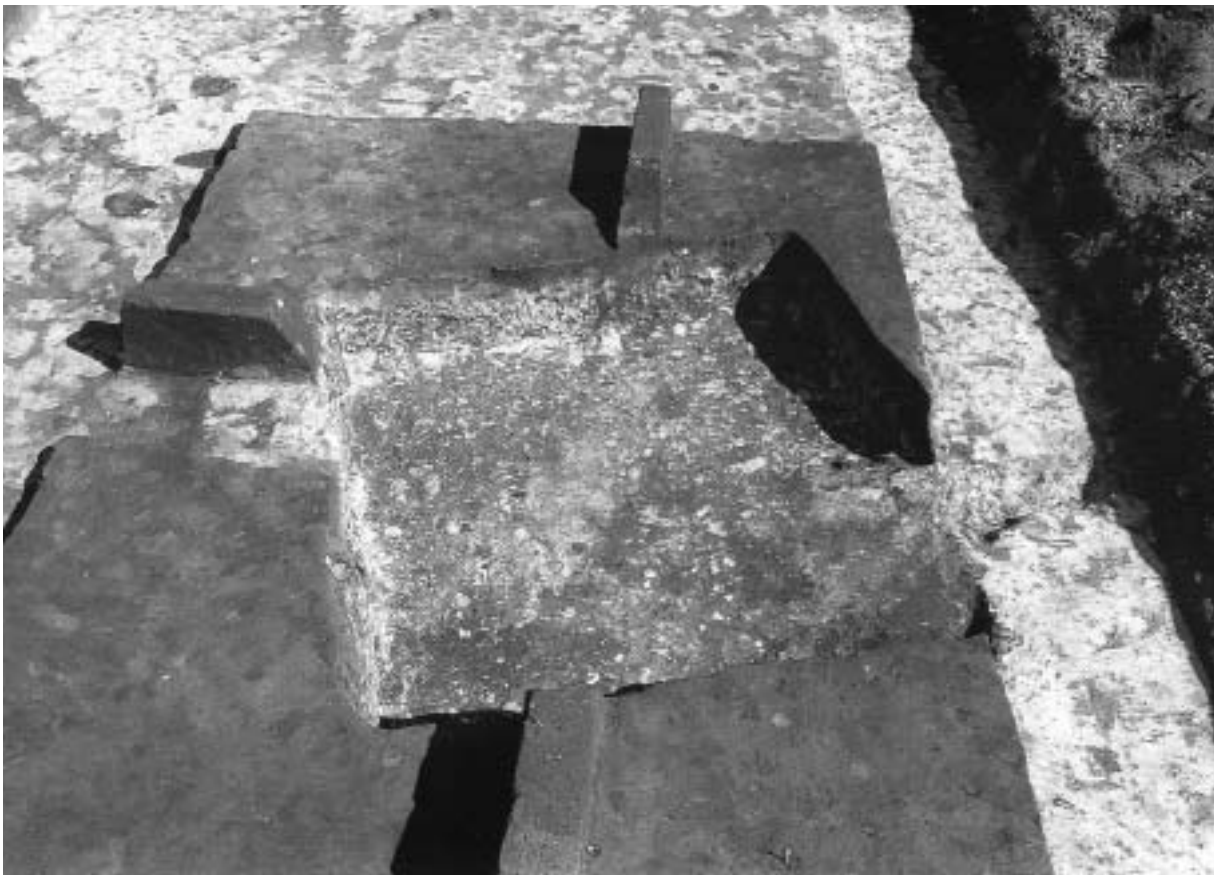
2．ＳＩ1200竪穴住居跡（北→）



1．ＳＩ1264・1265竪穴住居跡（南東→）

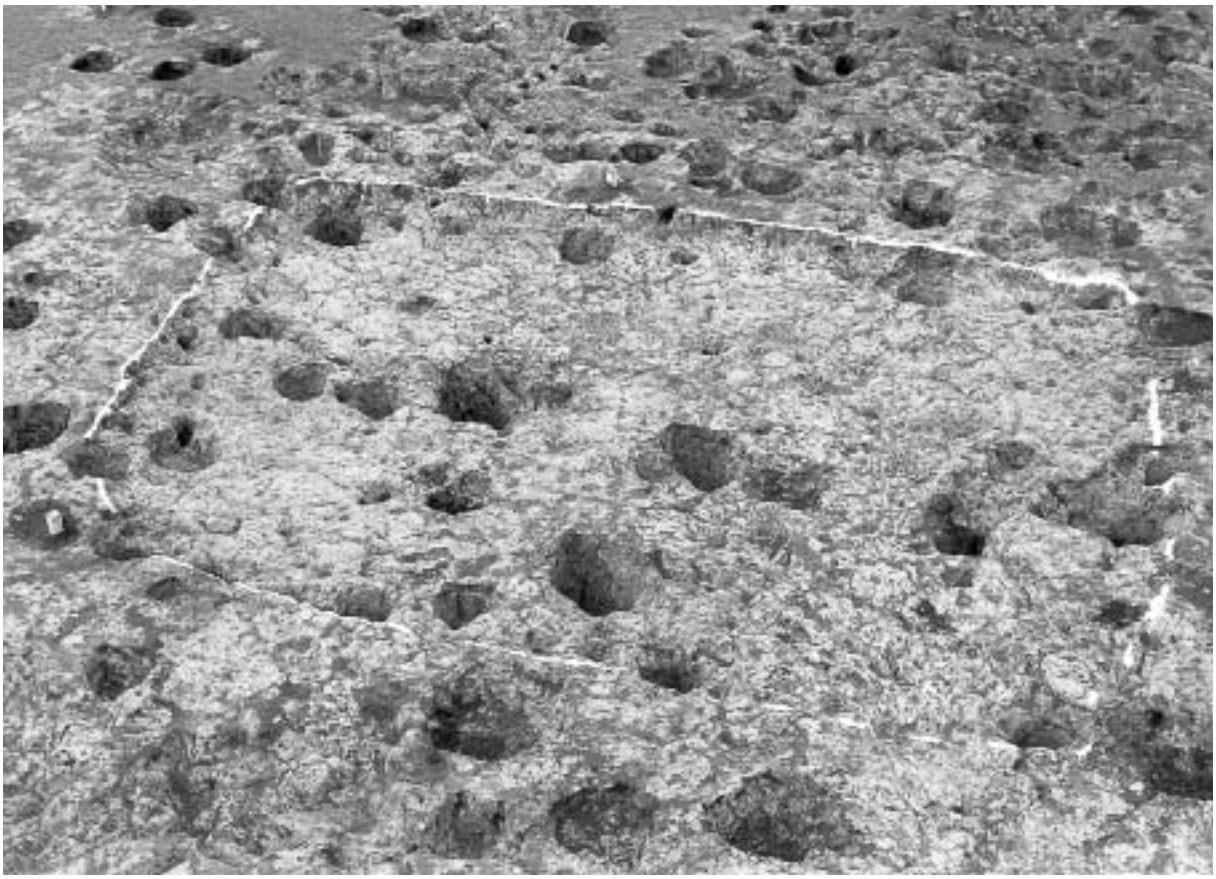


2．ＳＩ1269ｂ竪穴住居跡、ＳＫＩ1269ａ竪穴状遺構（東→）



1．ＳＩ1623竪穴住居跡（西→）

2．ＳＩ1623竪穴住居跡　遺物出土状況（北東→）



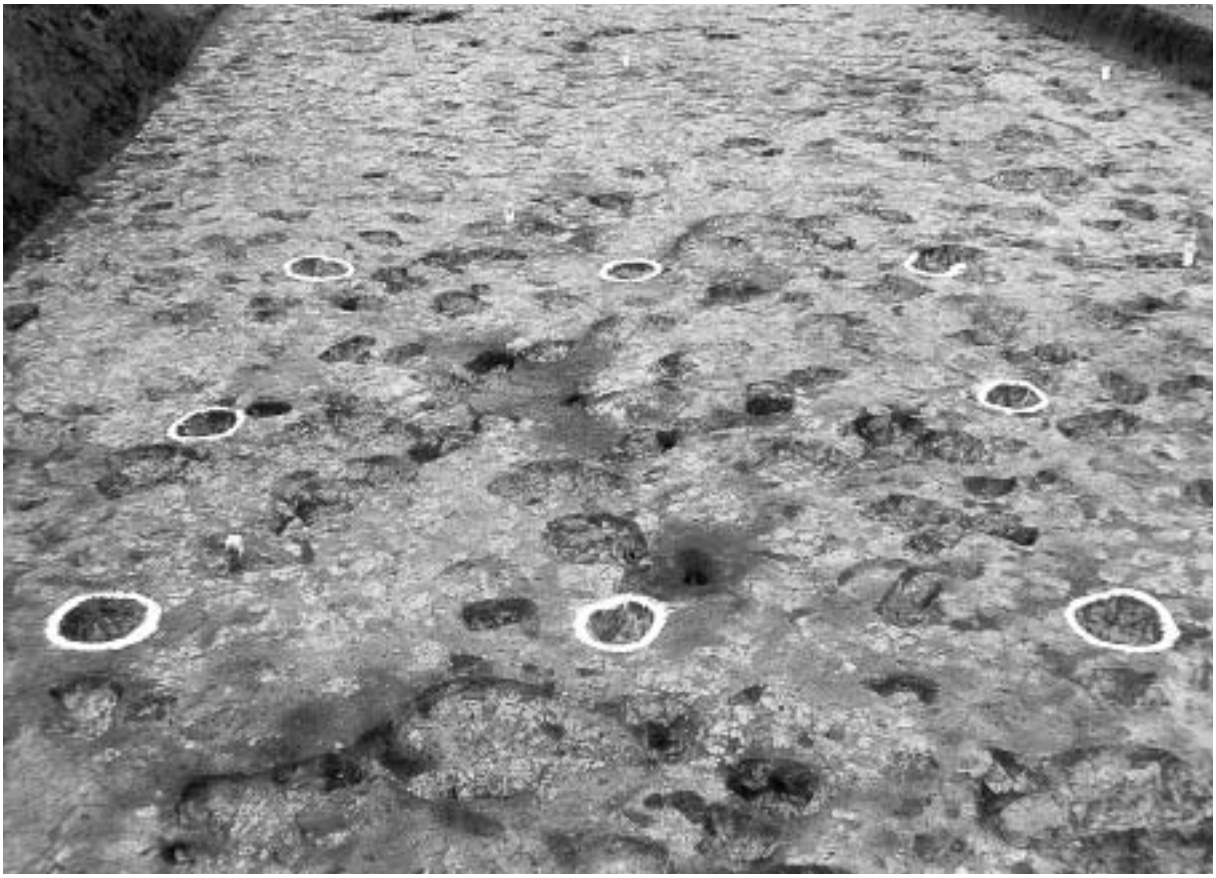
1．ＳＫＩ1266竪穴状遺構（東→）

2．ＳＫＩ1268・1270・1633竪穴状遺構（東→）

1．ＳＢ475掘立柱建物跡①（北→）

2．ＳＢ475掘立柱建物跡②（北→）

1．ＳＢ244掘立柱建物跡（東→）

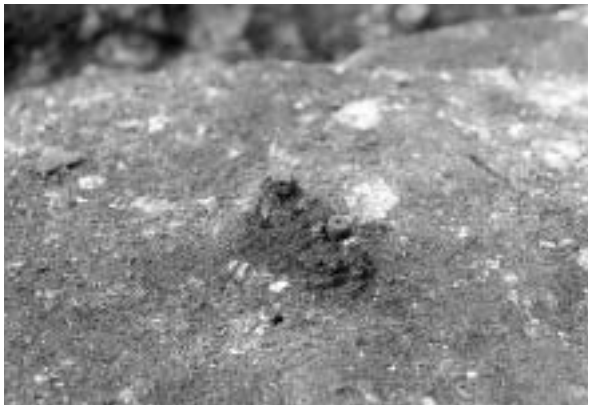


2．ＳＢ527掘立柱建物跡（北→）

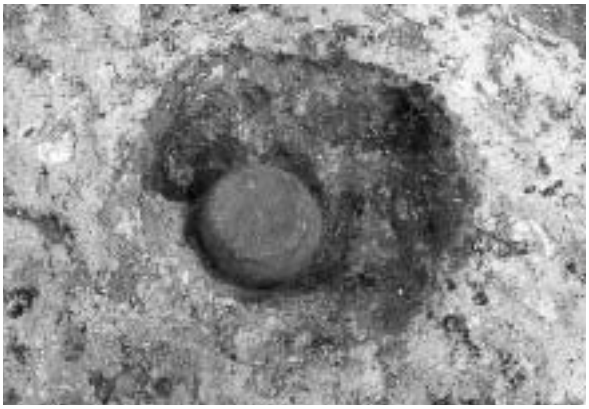
1．Ａ区を南北に区画するＳＤ160溝跡（真上）

2．ＳＤ160溝跡（東→）

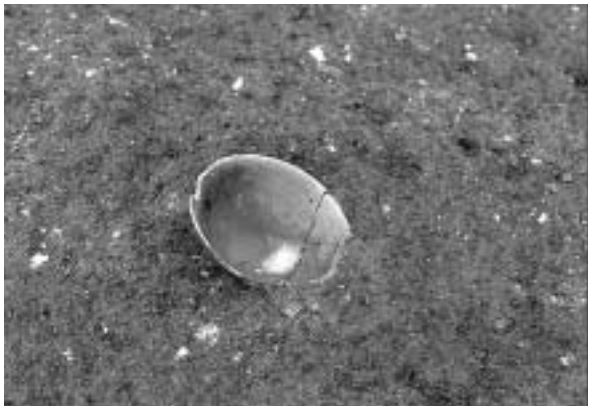
1．ＳＤ159溝跡（西→）



2．ＳＩ157竪穴住居跡　土玉出土状況（南→）



3．ＳＩ807竪穴住居跡Ｐ６　土師器出土状況（北→）

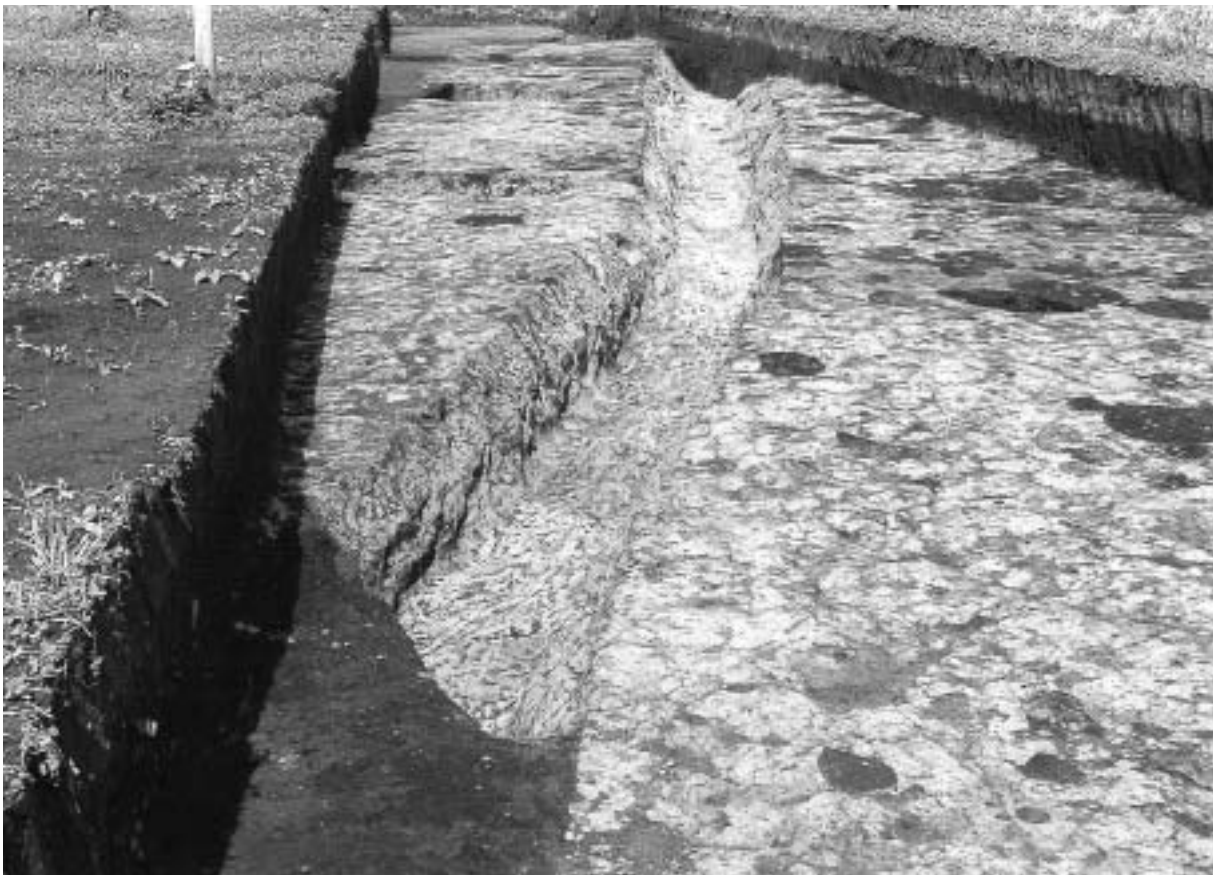


4．ＳＩ1269ｂ竪穴住居跡　土師器出土状況（東→）

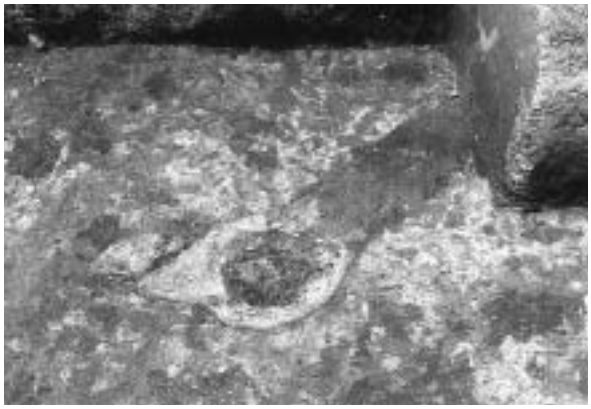
5．ＳＫＰ1642柱穴様ピット　青磁出土状況（北→）

1．ＳＩ03竪穴住居跡（東→）

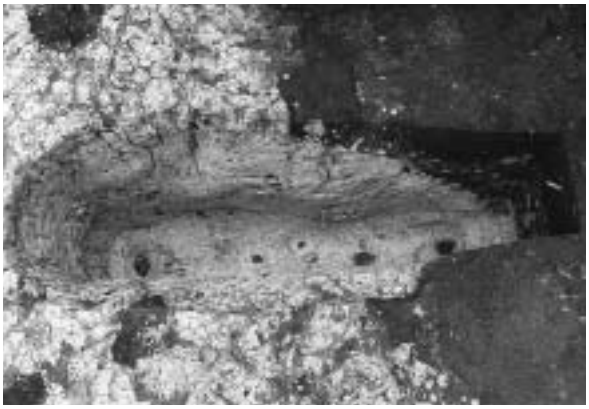
2．ＳＫＩ13竪穴状遺構（北西→）



1．ＳＤ1255溝跡（南西→）



2．ＳＮ150焼土遺構（東→）



3．ＳＫＴ1256陥し穴（北→）

4．ＳＫＴ1257陥し穴（北→）

5．ＳＫＴ1258陥し穴（北→）

1．Ｃ区全景（西→）

2．ＳＫＩ1196竪穴状遺構（北西→）

1．ＳＫＩ1197竪穴状遺構（東→）

2．ＳＫ1168土坑（東→）

3．ＳＫ1169土坑（南西→）

4．ＳＫ1170土坑（南→）

5．ＳＫ1237土坑（東→）

1．ＳＫＴ1171陥し穴(南西→)

2．ＳＫＴ1192陥し穴(西→)

3．ＳＫＴ1194陥し穴(南西→)

4．ＳＫＴ1195陥し穴(西→)

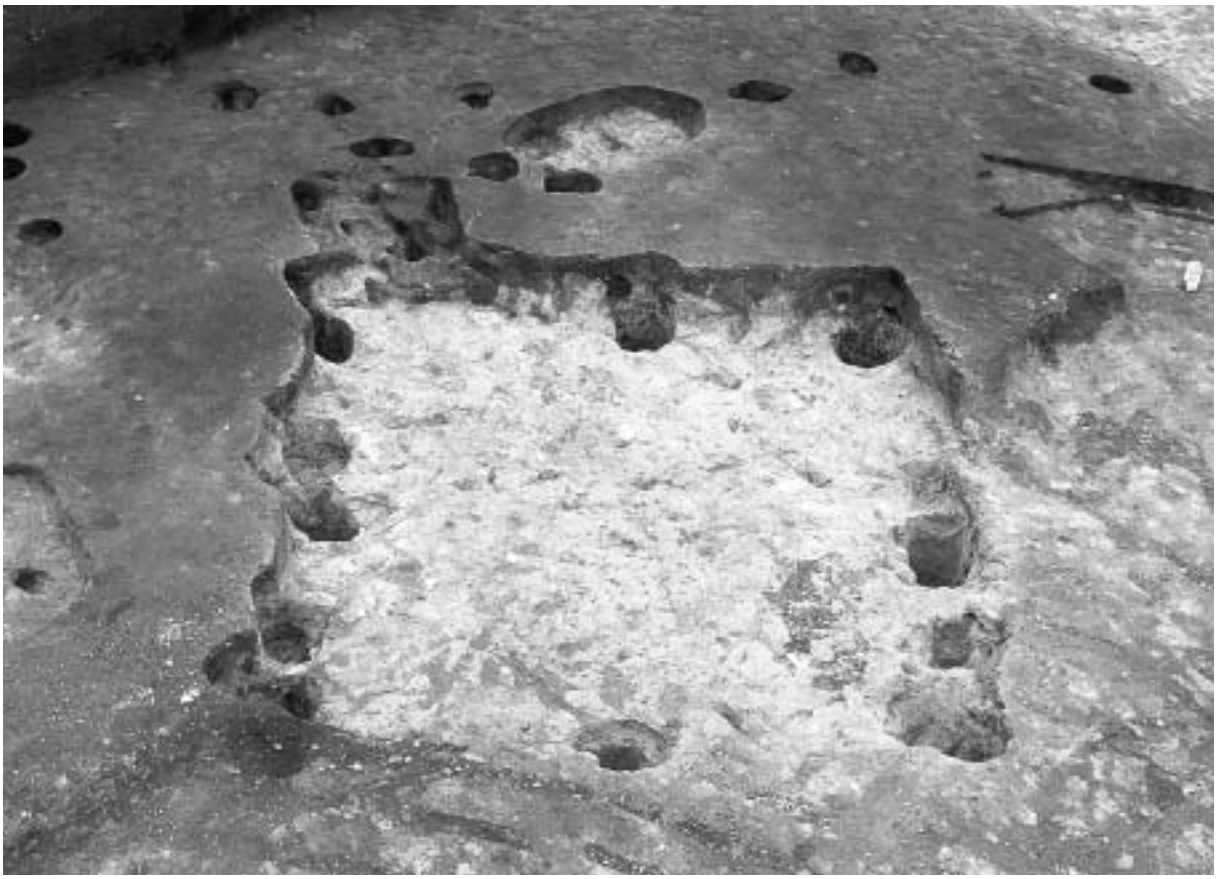
5．ＳＫＴ1252陥し穴(南西→)

6．ＳＫＴ1261陥し穴(南西→)

7．ＳＫＴ1700陥し穴(西→)

1．D区西側全景（北東→）

2．D区東側全景（西→）

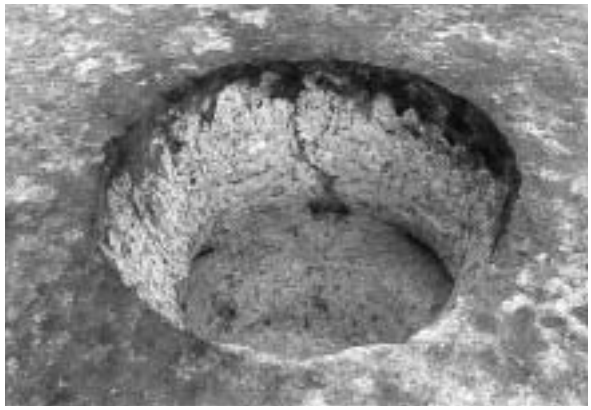


1．ＳＫＩ1254竪穴状遺構（北→）

2．ＳＫＴ1689陥し穴（東→）

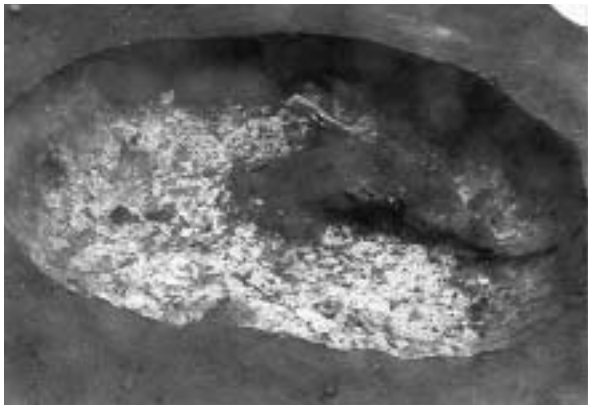
3．ＳＫＴ1708陥し穴（東→）

4．ＳＫＦ1347フラスコ状土坑（南→）

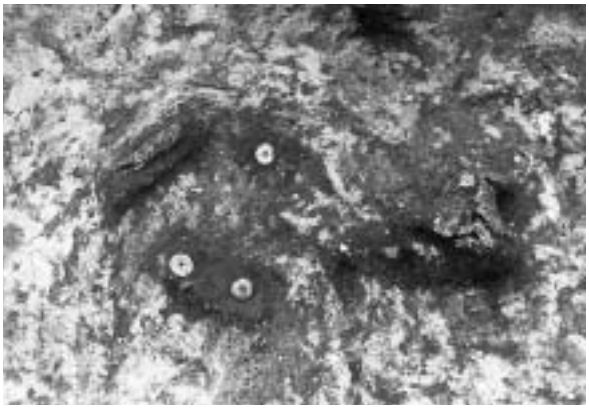


5．ＳＫＦ1348フラスコ状土坑（南→）

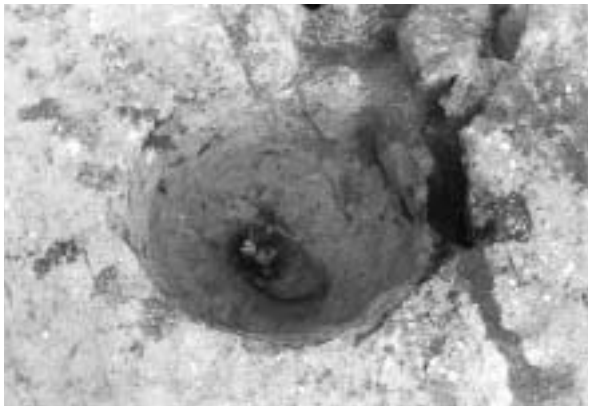
1．Ｄ区土坑墓群（西→）



2．ＳＫＳ1198土坑墓（東→）



3．ＳＫＳ1198土坑墓（アップ）（北→）



4．ＳＫＳ1344土坑墓（東→）

5．ＳＫＳ1353土坑墓（東→）

1．ＳＫＳ1378土坑墓（北→）

2．ＳＫＳ1378土坑墓（アップ）（北→）

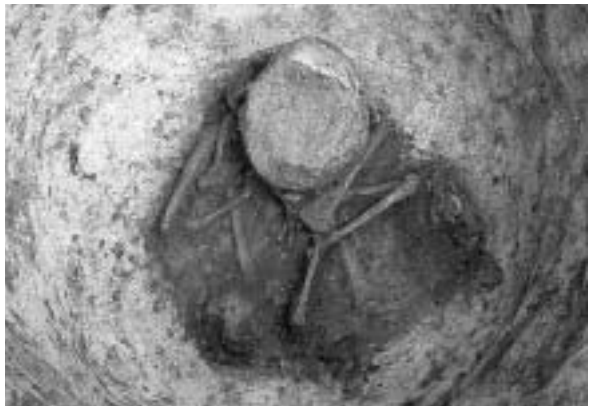
3．ＳＫＳ1530土坑墓（南→）

4．ＳＫＳ1530土坑墓（アップ）（南→）

5．ＳＫＳ1544土坑墓（西→）

6．ＳＫＳ1544土坑墓（アップ）（西→）

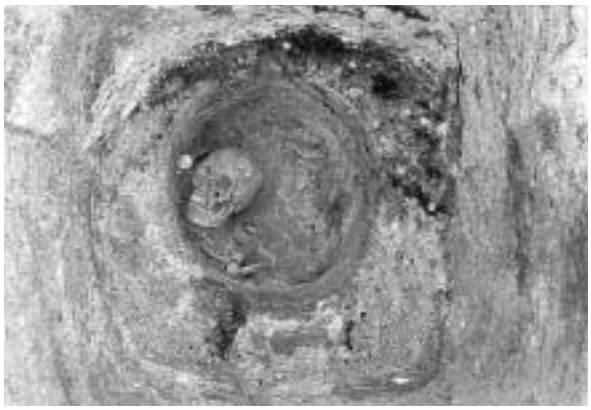
7．ＳＫＳ1565土坑墓（南東→）



8．ＳＫＳ1565土坑墓（アップ）（南東→）

1．ＳＫＳ1685土坑墓（北→）

2．ＳＫＳ1687土坑墓（東→）



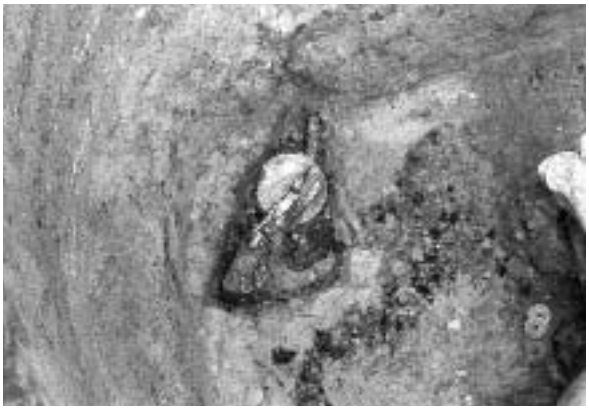
3．ＳＫＳ1530土坑墓（南→）

4．ＳＫＳ1688土坑墓（アップ）（西→）

5．ＳＫＳ1696土坑墓（南→）

6．ＳＫＳ1696土坑墓（アップ）（南→）

7．ＳＫＳ1544土坑墓 銅製の皿出土状況（西→）



8．ＳＫＳ1544土坑墓
銭貨・銅鏡・木製櫛・和鋏出土状況（西→）

1

2

3

4

5

6

7

8

遺構内出土遺物（１）

1～3：SI156a　4･5：SI450b
6･7：SI807　8：SI1200

遺構内出土遺物（２）

1：SI1200カマド　2･3：SI1269b
4～7：SI1263　8：SKP1642

1

2

3

4

5

6

7

8

遺構内出土遺物（３）

1～5：SI03　6：SKI1169
7：SI1695　8：SKS1687(左)･1696(右)

1．ＳＫＳ1544土坑墓出土の銅鏡(表)・和鋏

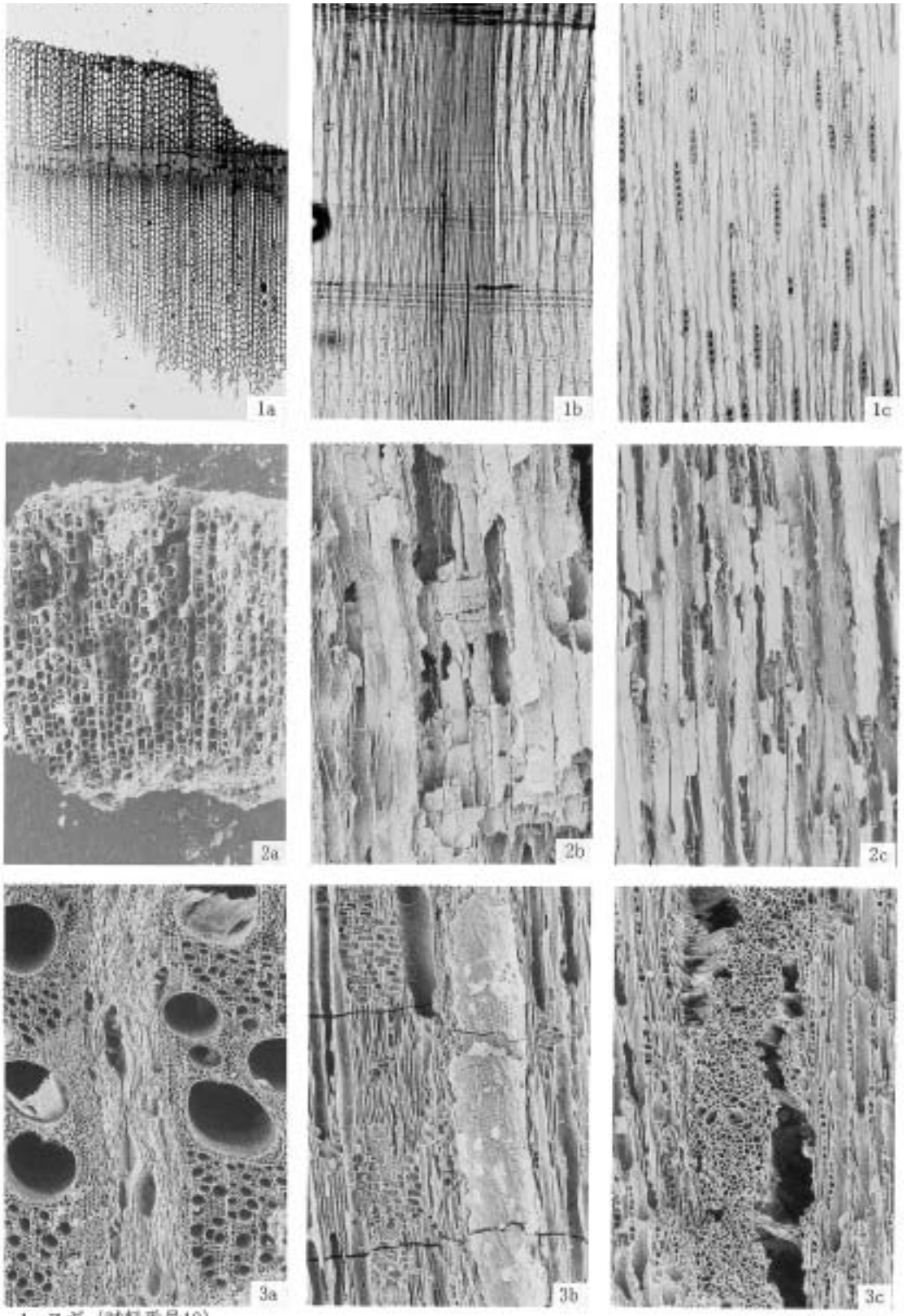
2．ＳＫＳ1544土坑墓出土の銅鏡(裏)・和鋏

1．ＳＫＳ1544土坑墓出土の銅製の皿

2．ＳＫＳ1687土坑墓出土の木製の数珠玉

3．ＳＫＳ1688土坑墓出土のガラス製の数珠玉

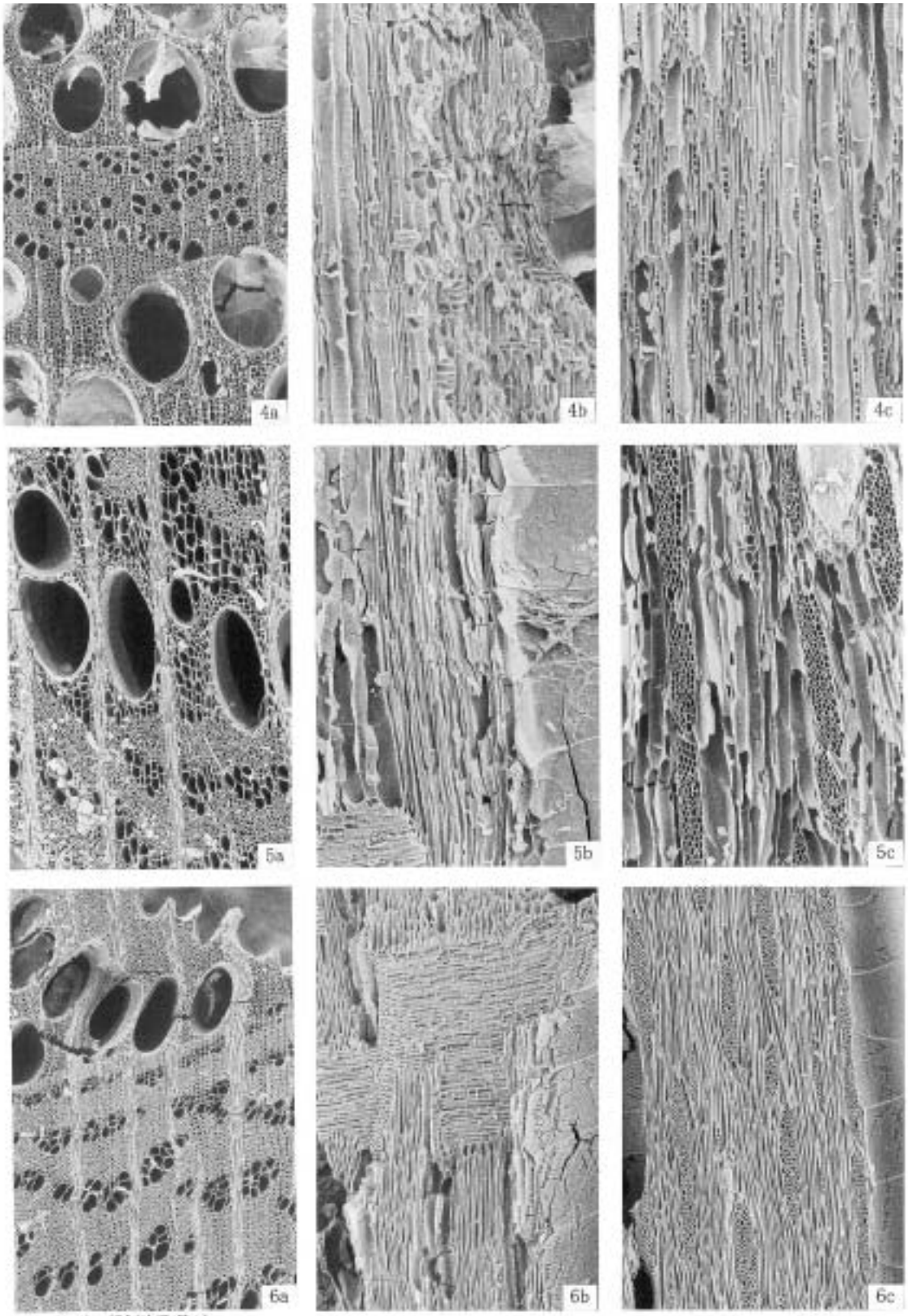
遺構内出土遺物（５）



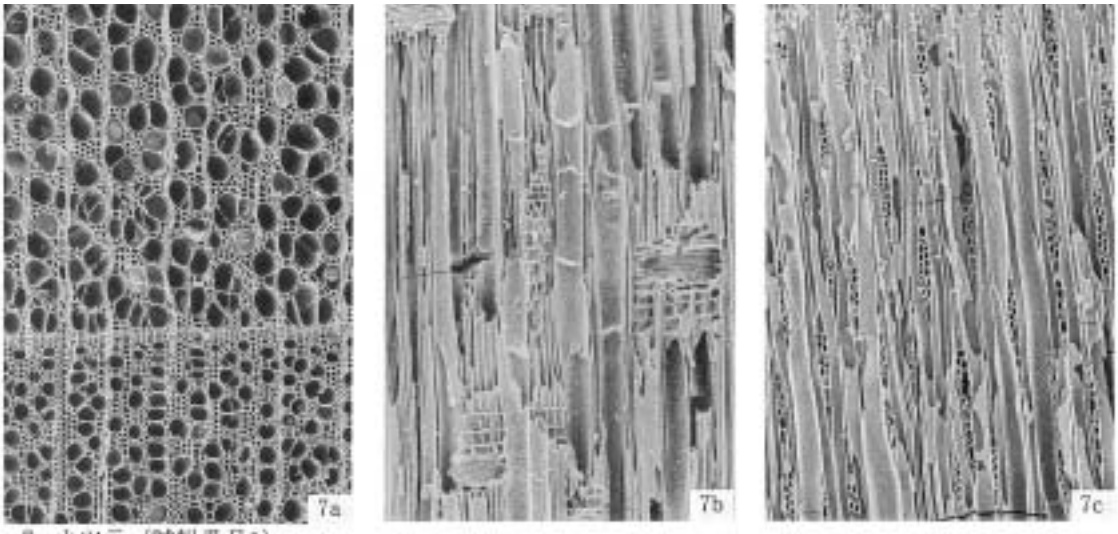
1．スギ（試料番号10）
2．針葉樹（試料番号9）
3．コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号2）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm:1a
200 μm:1b, c
200 μm:2, 3a
200 μm:2, 3b, c

木材・炭化材（1）



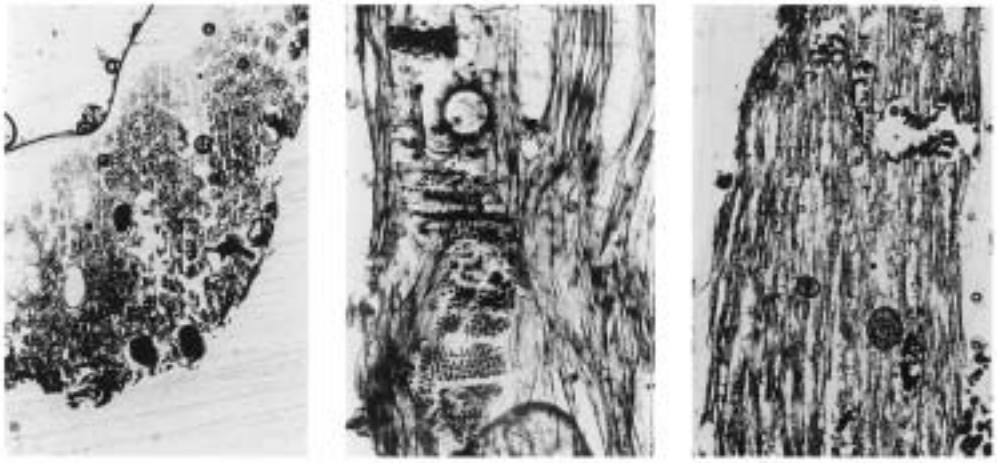
4．クリ（試料番号3）
5．ケヤキ（試料番号8）
6．ヤマグワ（試料番号5）
a：木口，b：柾目，c：板目



7．カツラ（試料番号1）
a：木口，b：柾目，c：板目

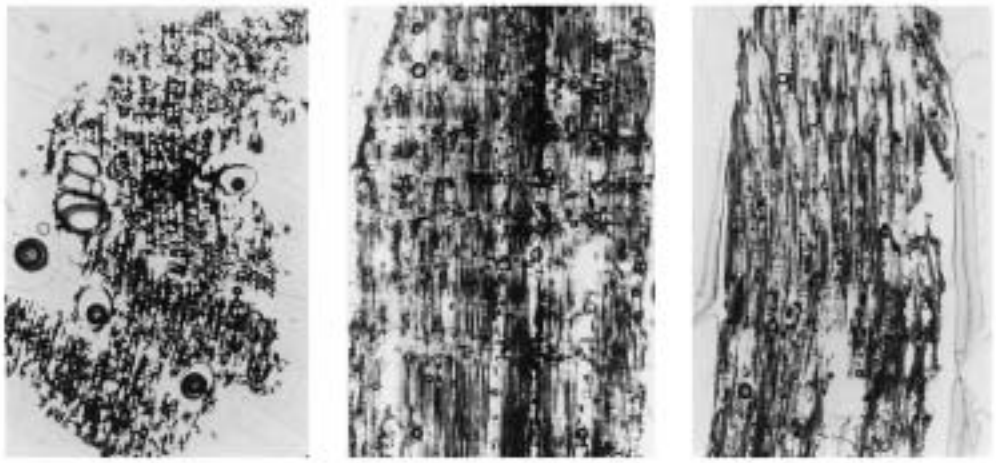
200 μ m:a
200 μ m:b, c

1．木材・炭化材（3）



木口×40　柾目×200　板目×40

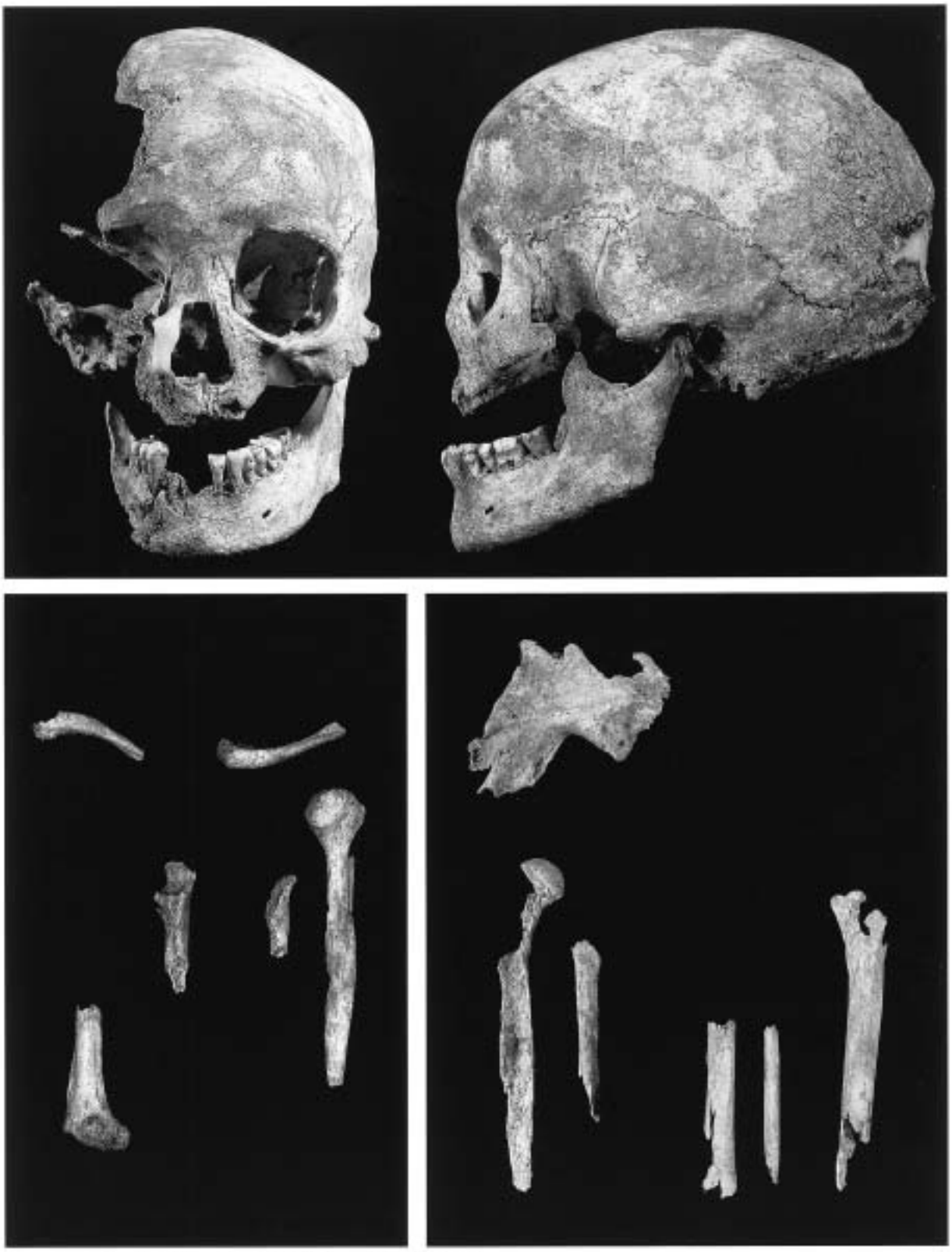
No－1　広葉樹



木口×40　柾目×40　板目×40

No－2　広葉樹

2．数珠玉の顕微鏡写真



ＳＫＳ1353土坑墓（壮一熟年女性）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢

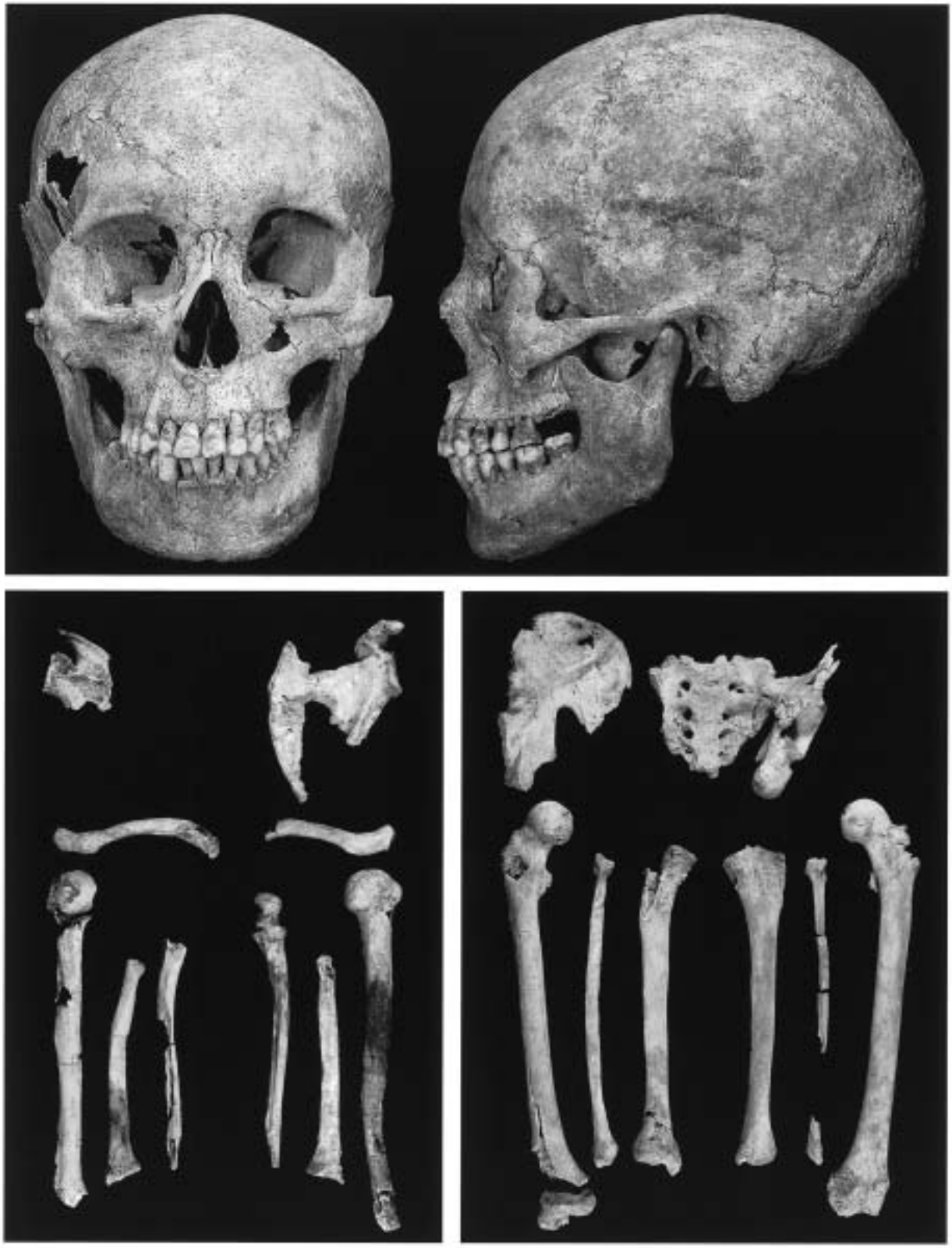
図版34

ＳＫＳ1378土坑墓（壮年女性）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢

ＳＫＳ1544土坑墓（壮年男性）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢

図版36

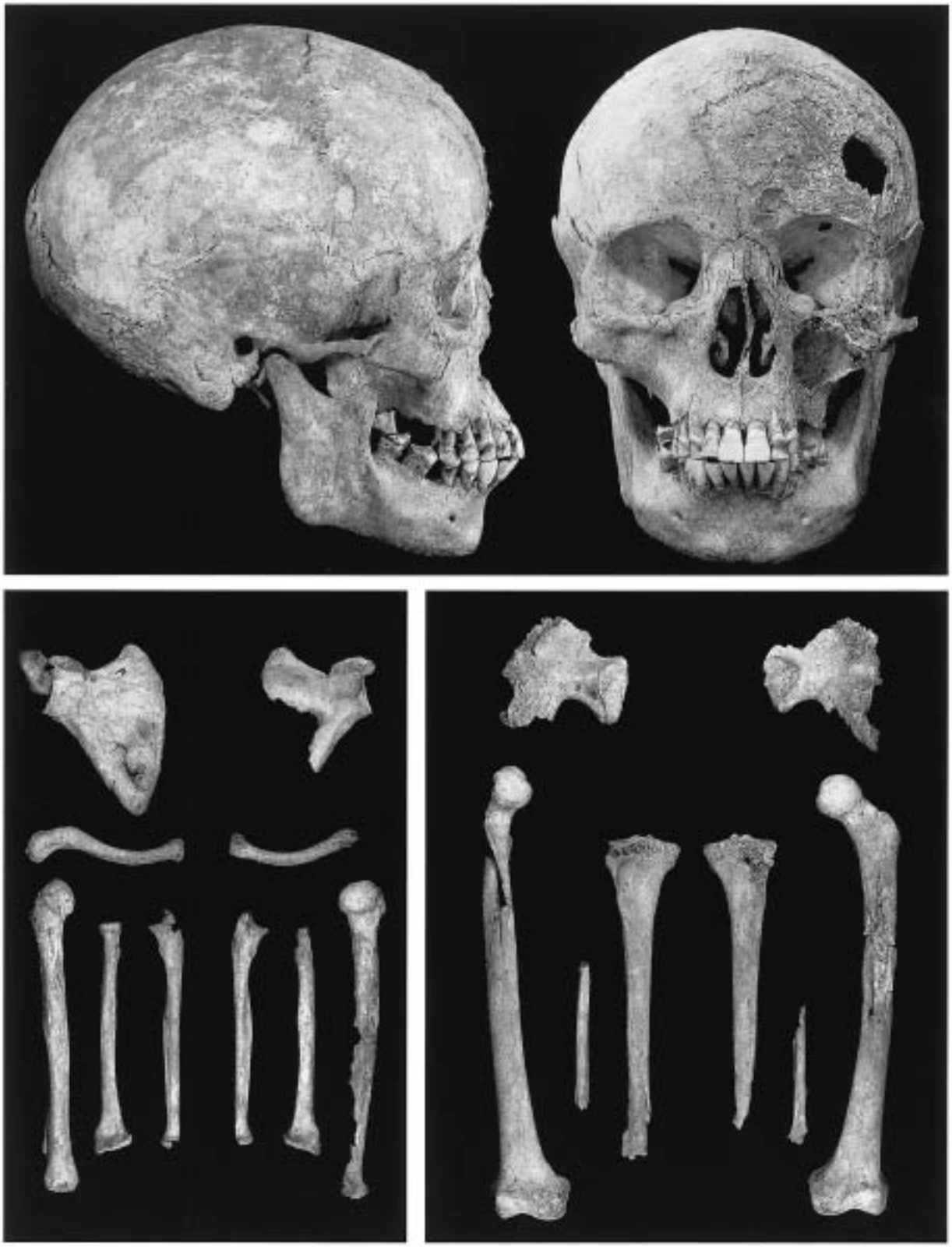
ＳＫＳ1565土坑墓（幼児）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢



ＳＫＳ1685土坑墓（壮一熟年男性）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢

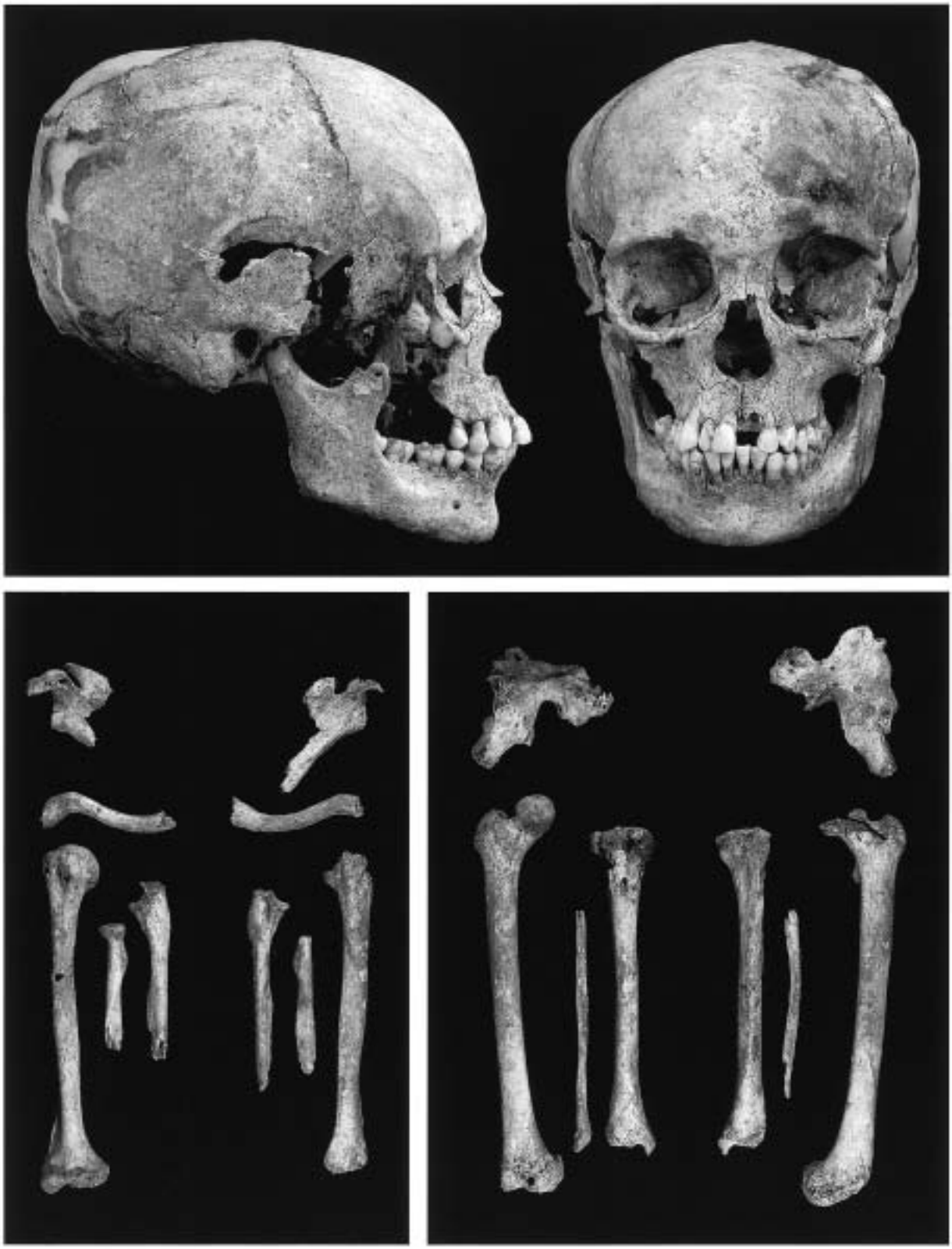
図版38

ＳＫＳ1687土坑墓（熟ー老年女性）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢



ＳＫＳ1688土坑墓（壮年女性）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢

図版40



ＳＫＳ1696土坑墓（壮年男性）　上段：頭蓋　下段左：上肢　下段右：下肢

報 告 書 抄 録

ふりがな	しばないだてあと
書名	柴内館跡
副書名	主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第355集
編著者名	栗澤光男・藤原有希・小島朋夏・伊藤一彦・眞井田宏彰
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　電話0187-69-3331
発行年月日	西暦2003年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 単位 m²	調査原因
柴内館跡 しばないだてあと	秋田県鹿角市花輪字乳牛平100-２外 あきたけんかづのしはなわあざちうしたいほか	05209	－	40° 12’ 45”	140° 48’ 38”	20001025 ～ 20001122 20010517 ～ 20011026	15,000	主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柴内館跡	狩猟場	縄文時代	陥し穴　16基 フラスコ状土坑　８基	縄文土器 石器	
	集落跡	平安時代 中世	竪穴住居跡　18軒 竪穴状遺構　23基 掘立柱建物跡　34棟 柱穴列　12条 柱穴様ピット　2,127基 溝跡　８条 焼土遺構　２基 製鉄遺構　１基 土坑　56基 その他の遺構　2基	土師器・須恵器 陶磁器・土製品 窯壁・砥石 銭貨・鉄製品 鉄滓ほか	
	墓域	近世	土坑墓　14基	陶磁器・銭貨 煙管・人骨ほか	

秋田県文化財調査報告書第355集

柴　内　館　跡

－主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査－

印刷・発行　平成15年3月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話（0187）69-3331　FAX（0187）69-3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王三丁目1番1号
電話（018）860-5193

印　　刷　五十嵐印刷株式会社

秋田県文化財調査報告書第355集

柴　内　館　跡

――主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書――

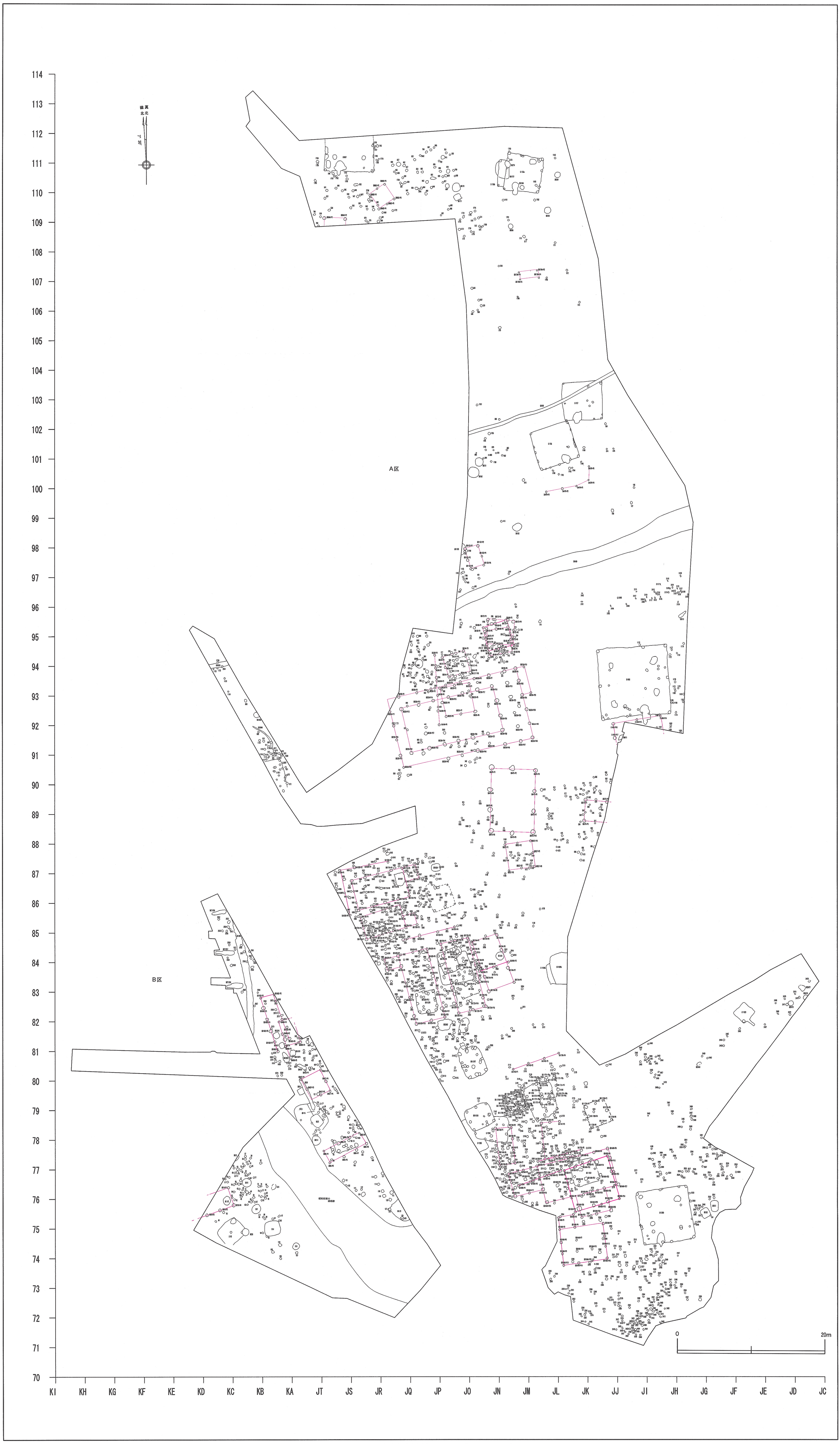
２００３・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

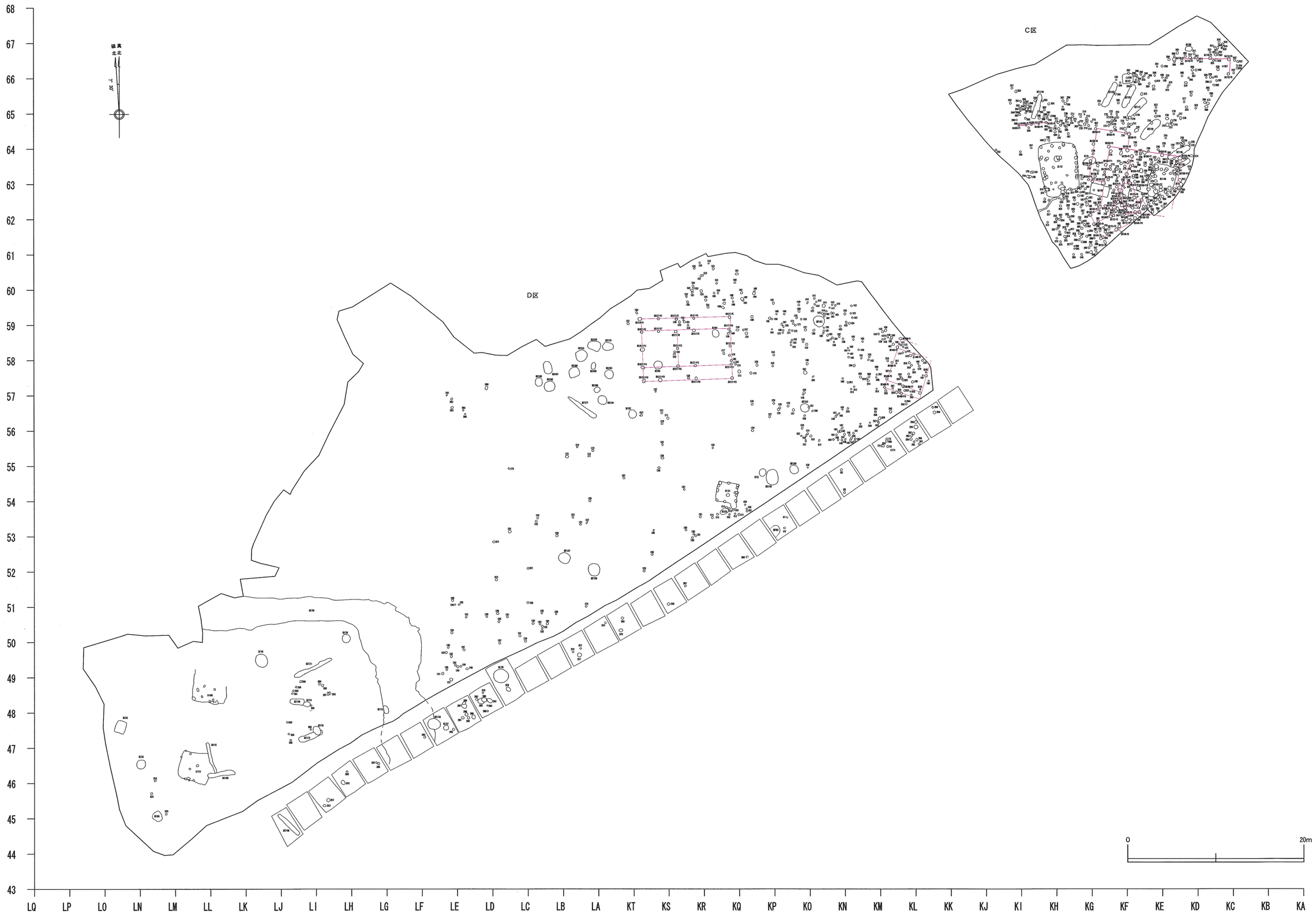
秋田県文化財調査報告書第355集

柴内館跡

２００３・３　秋田県教育委員会



付図１　柴内館跡遺構配置図（Ａ・Ｂ区）



付図２　柴内館跡遺構配置図（C・D区）